



森に風鈴は鳴る

久里山不識

[illegible]

前編

1

プロローグ

この小説の話は2002年頃を出発点として始まっている。そして、核兵器を世界中からなくし、それに使っている膨大な金を福祉にまわせば、貧しい世界中の子供達を救えるという夢のような発想のもとに、筆を進め、ブログの掲載が終わり、電子書籍にして、ある程度の読者を得て、批判も受けた時点で再び推敲を初めて改訂版を完成した頃は、ロシアとウクライナの戦争はまだ終わらず、互いに激しく攻撃して危険な状態になっている。

第一次世界大戦と第二次大戦を経験した人類は戦争をしてはいけないということを学習した筈なのに、兄弟国とも思われていた所での突然のようなこの戦争に世界は驚き、原発や核兵器の問題がからむだけに、多くの人は早く停戦することを望んでいると思われる。

第一次大戦の時もすぐに終わるとというのが欧米の人の予想だったが、徐々に広がり、フランスとドイツの国境塹壕戦が始まり、二百万の若者が命を落とした。

今回の場合もロシアの大統領は直ぐに終わるとよんでいた節があるにもかかわらず、長期戦となっている。一刻も早く停戦をしないと、犠牲者が増えるだけで、さらに大きな戦争へ拡大する不安が出てくる。ロシアに核兵器がなければ、こんな無謀な戦争はしなかった筈だ。

停戦になっても、世界中に広がっている核兵器があるかぎり、そしてこの核兵器の性能が進化し、量も増えていくかぎり、いずれこれ以上の危機は訪れる。

広島と長崎の上空に落ちた原爆で、その直下にいた人々は炭素になって消えてしまったというではないか。黒焦げの死体が転がり、まるで幽霊のように歩き、水を求めた沢山の人がいたと言う。川には沢山の死体が流れていたという。何という悲惨さ。

このことを思うと、人類は核兵器による人類の滅亡というシナリオを思い描かなければならなくなる。停戦が実現した時、平和ぼけとか、政治に無関心とか言っていると結局 もっと大きな危機が訪れることは、このウクライナ侵略戦争でも我々は身にしてみte感じた。

今、多くの人がロシアのウクライナ戦争に「戦争反対」の声をあげ、世界中に広がっているように平時に核兵器をなくすような取り組みが行われねばならないのだと思う。

核兵器があるかぎり、人類の危機は続くのである。そういう思いに囚われた青年を主人公にして小説を書いたつもりだ。それが「森に風鈴の音は響く」である。

ウクライナの戦争が一日も早く停戦になり、犠牲者がこれ以上に増えないように祈るばかりである。

人類の危機はこうした戦争にも感じられるが、その外にも「気象温暖化」「核兵器」「貧困」などがある。温暖化については、京都議定書以来、国連が取り組み、SDGsに結実しているが、未来への不安がなく

なったわけではない。SDGsに核兵器廃止、軍縮を加えようではないか。そうした人類の危機をどのようにして回避するかという視点がこの小説では大切なポイントとして出てくる。

1

尾野絵の町は瀬戸内海の入江に面している。入り江は海が陸に細長く入り込んでいる。それで、入り江は川のように見える。背後の高台に路面電車が走っている。高台と入り江の間は広大でゆるやかな斜面になっている。そこはゆるい勾配の長い遊歩道に取り囲まれている。それが野絵の町である。

それは尾野絵高の文化祭の一般公開の時で、日曜日であった。十月下旬の秋たけなわの時である。やわらかい陽射しが畳の端のあたりまで射して、彼はその中で、日向ぼっこするような感じで、座って自分の番を待っていた。

畳の道場では柔道の型と練習試合をやっていた。アリスの姿に気がついたのは、彼が自分の番を待っている時だった。彼女が声をかけてきたわけではないが、観客の中にまじって微笑している姿があった。ブルーの服装で、丸い型の薄いブルーのサングラスが豊かな黒髪と赤い唇に囲まれて、独特の美を畳の道場に放っていた。

松尾優紀は動揺した。そして次の試合で負けてしまった。彼女の見ている所できれいに投げられてしまったので、大変いやな感じだった。彼は彼女に話しかけて良いものかどうか迷っていた。そうこうするうちに彼女の姿が見えなくなった。彼はがっかりした。ひととおりのことが終わって、優紀は井上茂と山本杏衣と一緒に文化祭会場をぶらぶら歩いていた。その時、雲一つない青空そしてそよ風、まるで浄土のような校庭に、数学の教師と立話している島村アリスを見かけた。彼が内心ドキマギしていると、彼女が「松尾さん」と呼びかけた。

二人は文化祭の中にある模擬コーヒー店で再び話をするようになった。テーブルの小瓶に赤いコスモスの花が一輪挿してある。

「綺麗ね」

「ええ、詩を書きたくなるような花です」

二人はコーヒーを飲んで、雑談をした。

「柔道どう、面白い」

「面白いですよ。今、習っているのは背負い投げと内またです。ぼくは背が高いから、背負いはやりにくいです。でも、内またが面白いですね。寝技も面白い」

それから、二人は高校を出た。

二人は高等学校の外に出ると、東門から、尾野絵の町の野絵の地区に入り、瀬戸内海を見下ろしながら、などらかな斜面になっている入り組んだ路地をゆっくり歩き、野絵の中央の広場に来了。校庭ぐらいの広さの石畳の平地だった。周囲は樹木におおわれ、真中に大きな噴水があり、噴水の周囲は花壇になっ

ていた。

ききょうなどが咲いていた。周りの樹木の下に、ある間隔をもって置かれているベンチの一つに二人は座った。そこからは、瀬戸内海の海がはるか向こうに、絵のように見える。

「もう会えないつもりだったけど、あなたが詩を送ってきたでしょ。あれを見て考えたわ。あたしも禅道場を出る時、静かな心に妄想のように湧いてくるのはいつも平和の問題ですもの。ほら、あなたの詩を持っているのよ」

彼女は赤いバッグを開けて、白い便箋に書かれた松尾優紀の書いた詩を見せた。

「それ、映画『武器よさらば』を見た時、書いた詩ですよ」

「あたし、大学の時、小説で読んだわ。ヘミングウェイの筆力には感動したわ。でも、映画は見ていないの」

便箋には太い字体で、松尾の詩が書きなぐるような力強い勢いで書かれていた。

「湖の向こうに

丘のような緑の山が続き

その向こうの敵の陣地より銃声が聞こえる

湖の岸辺にたつ柳がそよ風に震え

シャクヤクの花が爛漫と咲く

そして雷のような音が響き

町の建物にミサイルが撃ち込まれる

兵士の肉体は打ち砕かれ

前線から病院に運ばれて

ベッドに横たわり、メスによる手術で、沢山の血が噴き出た

意識を失い、目を覚ました時 見知らぬ慈悲の瞳に出会った

何という神秘の瞳だ、この世を超えた、慈しみの愛の目が兵士にそそがれる

唇は赤く濡れ、優しい、ほほ笑みが浮かんでいた。

「手術は成功しました。あなたは生きるのよ」

そうか、ここは砲弾の飛び交う前線ではなく

手術の糸が傷口を治療してくれる所なのだ。

病院の外には花が咲き、オオルリがさえずっている。

青い鳥だ。幸せを呼ぶ小鳥だ。

神秘な目と微笑は深い次元の天界を指差す」

松尾はサングラスをはずした彼女をまじまじと見つめた。樹木の緑の梢がゆらゆらと揺れる、そのかすかな音が彼女の黒髪と細面のピンク色の頬を浮き彫りにして、彼女の目は自分を吸い込むようだ。何で、彼女はこんなに神秘的なのだろうか、と優紀は心の底で問う。詩の中で歌われたあの慈しみの愛の目だ。「夫の堀川がニューヨークに半年ほど行ってしまったでしょ。なんだか一人でいるせいか色々考えるのね。あなたの詩を読んだら、あなたを座禅会に誘おうと思い、会いに来てしまったわ。不思議ね」

「僕はもう会えないかと思って。でもいつもあなたのことを思っていました」

松尾は胸ポケットから島村アリサの写真を取り出して彼女に見せた。

「ありがとう。でも、私はあなたを座禅会に誘いにきたのよ。この世界をささえているのは、永遠なる宇宙の生命の大慈悲心よ。座禅することにより、真理の大海の中にいる自己を確認するのだと、父から教わったわ。それを少しでも知って、世の中に出て欲しいと思うわ。」

夫の堀川はそういうことに無頓着で、実務に忙しい、あれを見てみると、年令の早い段階で、この宇宙を支えているのが何か、それを求める気持ちをつくる必要性を感じるわ。」

優紀はアリサの言葉の裏に、何か若い女の性の響きを感じた。六才の違いしかなく、優紀のその頃の成長は早かったのだ。

「お仕事、忙しいでしょ」

「ええ、忙しいわ。あんなに忙しいとは思わなかったわ。本当は今日も日曜日なんですけど、部活のサブ顧問として出勤しなければならないんですけど、顧問の男の先生の許可を得て、この文化祭に来たのよ」

「そうですか」

「表向きはあなたを座禅会に誘いに来ているのだけれど、自分でもよくわからないの。」

そうだ、もしかしたら、あなたに「はだしのゲン」という漫画を読ませたあなたのお母さんの話のことが気になるのかもしれないわ。きっとそうだわ。その後、夢に現れないの。聞きたいわ。」

小学六年の時、優紀の母は病気で死んだ。母を失った悲しみは長く続き、彼を苦しめることもあったが、アリサに出会ってから、不思議に母を思い出すこともなくなり、むしろ夢に現れることがあった。アリサには、母が生きている時に買ってくれた「アンネの日記」と原爆の悲惨さを扱った漫画「はだしのゲン」の話をした。アンネとゲンがその頃、不思議な雰囲気の中で夢に現れたことがあったからだ。

「ありますよ。平和の話ですよ」

「平和の話」アリサの目が輝いた。「どんな話」

「夢ですからね。とぎれとぎれの記憶なんです」

「それで、いいわよ」

「戦争が起きないようにするには、市民の力が必要だとか言っていた、それははっきり言っていたから、覚えていますが、他はね、又、見ると思いますよ」

「それで充分よ。それが聞きたかったの。不思議な夢ね。だって、あたしが求めている言葉が、あなたの夢にあらわれるなんて」

しばらくの沈黙があった。黄金の神秘的な沈黙だった。その沈黙の中から、アンネが隠れ家で日記を書いている姿が蜃気楼のように、優紀の目に映った。

「どうしたの？」

「アンネとゲンが話しているのが見えたのです」

「あなたには詩の才能があるのよ」彼女は全てが分かったとでもいうように言った。「人にレッテルを貼るって、恐ろしい罪よ。ハンセン病の時もそうだった。ナチスのやったことは最悪ね」

松尾はアリサが小声で彼の耳に近づけて話をするのを、かつての自分の指導者から女への変身という風に感じていた。彼女との最初の出会いは彼が中学三年の時、彼女が教育実習生として来たことに始まる。その時は、「島村アリサ」として来たから、皆、「島村さん」とか「島村先生」と呼んでいた。後に、堀川と結婚しても松尾は堀川アリサとは呼ばず、口頭でも、島村アリサとかアリサと呼んでいた。松尾は自分がまだ未熟で、世の中について知らないことが山ほどある。それなのに、いつの間に、自分が男になって、彼女を女として意識しているのが奇妙で恥ずかしかった。

二人の背後にある太い幹の楓の梢が風に揺れた。そして幾枚かの楓の葉がひらひらと二人の前に落ちていく。

「楓の葉が落ちていくわね。まだそれほど紅葉していないのに」とアリサは何かを考えるように言い、ひと呼吸すると、さらに続けた。「ところでね。松尾さん。松尾さんの出た中学は平和でしたよね」

優紀は驚いて、「え」と聞き返すように、彼女の顔を見た。

「あたしが実習生として、行ったのはわずかの期間でしたので、荒れるなんていう気配すら感じませんでしたから」

「どうしてですかごく普通の中学で、荒れているということはありませんでしたけど。今、噂にあるような荒れた中学ではありませんでした。ごく普通の中学で、落ち着いていたと思いますけど」

松尾はどきりとした。何か秘密を自分に相談するような雰囲気を感じたからだ。彼女と年の差は六才。たいした差ではないが、やはり、彼女は先輩以上の神秘的な存在なのだ。

「ええ、自分でもだらしないと思っていますんですけど、あたしこの頃、うつなの。忙しすぎるのね」と彼女は笑った。優紀には冗談のように聞こえた。

「そんな風に見えませんか」

「荒れた学校って、噂で聞いていたけれど、あそこの中学生には一部なんですけど、授業中、ガムをかなりおしゃべりしたりトランプしたりというぐあいなの。注意するとすごむのよ。全く、驚くわ。普通の生徒もそんな雰囲気を面白がっているみたいなのよ」

「剣道二段でも、駄目ですか」

彼女が剣道二段というのは噂で聞いた。が優紀はそのことを聞きたいという気持ちはなかった。たとえば彼女が剣客だったとしても、彼が彼女に魅かれているのはそんなことではない。むしろ、そんな所があったとしても、それをみじんも感じさせない不思議な女性の優しい魅力なのである。

「剣道二段」彼女は苦笑した。「教師が生徒を力で押さえつけるというの。やはり、愛と慈悲心で彼らを導くのが私の義務なのよ」

「それにしても、噂にあるような荒れた中学ってあるんですね。僕も中学の時、随分、悪いことをしたけど、授業中そんな風に先生を無視して騒ぐことはなかったな。」

「一人、暴れん坊君みたいなのがいて、なんだかその子が学校中のそうした傾向を持つ子をオルグしてかき乱しているような所があるわ。どの先生も指導しきれないでいるのよ。そして彼はけっこう頭がいいの。自分は先生にしかられるような悪いことはあまりしないのね。彼の子分達が動いているのよ」

「アリサさん、突飛なことを言って、悪いんですけど、その暴れん坊君に僕を会わしていただませんか」

「田蜜君に」

「ええ、その田蜜っていう男にぜひ会うチャンスを与えてくれませんか」

「会ってどうするの」

「どうするって、島村先生を困らすやつ顔が見たいし、場合によっては意見してやるつもりです」

「まあ、いさまいことを考えつくのね。でも喧嘩になるからやめた方がいいわ」

「いえ、喧嘩はしません。もしするなら徹底的にやつつけます。でもその自信がないから喧嘩はしません。彼をちょっとたぶらかしてやろうと思うだけです」

「あなたの方がそのつもりでも、田蜜君は中々のつわものの非行少年よ。ベテランの先生方ですら、抑えられないのよ。一人だけ怖い先生がいるけど、おとなしくしているのはその時だけみたい。高校生のあなたには無理じゃない」

「そうは思いませんね。少年は先生のいうことはきかなくても、先輩の言うことはきくものですよ。つまり田蜜君が僕を仲間と思ってくれば、案外聞いてくれると思いますよ。僕はあくまでも仲間の中の先輩として言いますからね。教師の言うことを聞かないというのは田蜜君が教師を仲間と思っていないからですよ。」

「まあ、いいわ。会わせてあげてもいいけど、どこで会うのが一番いいかしらね。そうだわ、私のお寺にしましょう。」

「それは名案です」

一週間後、日曜日の二時に三人で、島村寺院で

落ち合った。秋が深まり、寺の周囲の桜の木の葉は赤く色づいていた。もみじはまだ緑のものが多く、いずれ美しい深紅の葉を見せるだろう。寺に入ると、枯山水がよく見える。色即是空空即是色という言葉が優紀の耳に響いた。座禅道場で何度か聞かされた言葉である。しかし優紀には、いい言葉であるという思いはあっても、その神秘の言葉の中身を開ける鍵がどこにあるのかさえ、見当がつかない。それがまた魅力でもあった。

寺院は大きなお寺で、座禅道場の前には、枯山水の砂の広い庭がひろがっていた。寺の裏手は墓地である。三人は座禅道場の隣の畳の小部屋で対面した。

2

2

床の間には漢字で仏教の言葉が書かれている掛け軸がある。「仏の真仏身は虚空のごとし。物に応じて姿を現す」

優紀には意味は分からないが、見事な筆さばきだけは分かる。花が活けてある。薄紫の菊が上の方に伸び、下に白い菊がうづくまるように、美しい花びらをさらしている。その二つの花の間に野ばらの赤い実が沢山まるで小さくしたミカンの群れのように、空間を埋めている。

三人の座る畳の部屋はすっかり静寂に包まれている。時々、小鳥の声が聞こえる。松尾は田蜜の顔を見ると、少年の顔を否定した凄みのある表情にどきりとして、枯山水の庭の方を見る。色即是空空即是色の声が再び耳に響いている。この言葉が聞こえる限り、自分の心は乱されることはない、優紀は思った。確かに、田蜜は松尾優紀に強い印象を与えた。

中学校をひっかきまわすだけあって、かなりのつらだましをしていると優紀は思った。田蜜は背も一七〇センチ近い。体格も良い。もう立派に大人の身体だ。気も強そうである。そして服装は皮ジャンスタイル。

「堀川さんよ。俺は座禅なんか嫌だぜ。いったい何の用だい」俺は三日前の誕生日で、十五になったんだ。男になったということよ。それで、こんなノッポを護衛に連れてきたのかい。いやだねえ」と田蜜は言った。

松尾優紀は百七十五センチの身長になっていた。逆三角形の顔立ち。白い肌。ほっそりした身体つき。何か大きなごぼうをたてて、その上に顔が乗っかっている感じに、田蜜の目には映ったに違いない。

「松尾優紀さんっていうのよ。あなたとお話がしたいというので連れてきたの」

「おれと話をしたい。何を話すのさ。おれはむしろ話ばかりだよ」

「いや、君とむずかしい話なんかするつもりなんかないよ。ただ、中学校の暴れん坊君の気分で、どんな風かなと思ってね。」

アリサは二人を部屋にのこして別の部屋に出ていった。

「別にたいしていい気分でもないよ。俺のことを堀川さんがそういう呼んでいるのは知っている。

でも、俺は自分では暴れだしたりはしないぜ。ただ、俺の言うことに従う連中がいるから、面白いだけよ」

「面白い？」

「喧嘩がめっぼう強かったのね。強いから、みんな俺の言うことを聞く。それだけさ。だけだよ。そんなことを聞くために、俺をこんな所に呼びだしたってわけ」

「こんな所って、いい、所じゃないか。アリサさんのお寺だぜ。君は招待されたんだ。喜んでほしいよ」

「お寺なんておれの柄じゃないよ。堀川さんの水着姿の写真でも見せてくれるなら、今日来たかいもあ

るんだがなあ。」

「おい、気安く堀川さんなんていうなよ。おれにとっても先生なんだ」

「あれは先生っていう風にはおれには思えんね。お姉様というか、お嬢さんというか、そんな所じゃないの。おれには先生なんていえないね。あんなに女くさくて先生づらしようたって、どだい無理さ。まあ生徒指導部の教師みたいに敵とは思っていないがよ。ただ、剣道二段なんだってよ。本当かと、疑いたくなるけど、どうも本当らしい」と言って、彼は笑った。

優紀には剣道二段がどのくらい強いのかも見当がつかない。自分は柔道で初段を取るのに、頑張っても、あと一年はかかると思っていたから、なおさらだ。ただ、棒さえ持てば、かなりの強さになるのかなと、想像して、何故かおかしくなった。

「ふーん。じゃどうだい。おれは君の敵かい、味方かい。」

「まあ中間だろうな。敵でも味方でもないというやつよ。君の態度しだいということでしょうね。ハ」
アリサが次の部屋から入ってきた。彼女がお盆に乗せた湯飲みにお茶を入れると、地味な花模様のついた湯飲みから、白い湯気が馥郁たる香気を放ちながら立ち上っていた。

「堀川さんよ。なんでおれはこんな男とかかわりあわなくちゃいけないんだ」

アリサは微笑して言った。「松尾さんがあなたとお友達になりたいっていうのよ」

「ふーん。しかし、おれにはいつぱい友達がいるからよ。わざわざこんなノッポとつきあうこともないよ」

「まあ、そんなことを言わないで、ゆっくりお話してって」

「まあよ。堀川さんがそういうなら少しの時間、我慢するか」

アリサは笑って、持ってきた手提げ袋から、漫画七冊を重ねて畳の上に出した。

「ああ、はだしのゲン」と松尾はうめくように声を出した。

「松尾君、面白かったわよね。田蜜君に読むの勧めて」とアリサは言った。

「ええ、面白かった。これを田蜜に貸すんですか」

松尾は自宅に持っている。死んだ母が大切にし、母が読むことを勧めた本である。小学五年の時に読んだもので、原爆の悲惨さが描かれ、アリサと親しくなったのも、この本を話題にしたことが大きかったと思われる。

「田蜜君が気に入ったら、あげてもいいわよ」アリサは微笑して立ち上がり、部屋を出て行った。

「漫画なら、読んでもいいですよ」と田蜜が言った。

「君は島村先生の言うことはよくきくんだね」

「島村先生だって、ああ、君は旧姓で呼ぶのか」と田蜜はぼやいた。

松尾は苦笑した。内心、この少年はおれと同じようにアリサ先生にほれていられるかもしれないと思っていた。

「堀川さんも先公の一人だからね。先公のいうことはききたくないね。しかし、ここにいた堀川さんは若い女に見えたんで、ついきいてしまったんだ。」

ハハハと彼は笑った。田蜜鉄男は中学生にしては豪快な笑い方をする少年である。そしてジロリと松尾

の方をにらむようにして見る。

松尾優紀はデリケートで気の弱い所もあるからすぐに視線を避けたりするが、すぐこんな中学生に負けまいと思って彼の方に、にらみかえしたりした。

「君の学校では授業中トランプをしたり将棋をしたりマンガを見ている生徒がいるんだって」

「いるよ。別にかまわんだろ」

「それって、授業妨害じゃないかな」

「そうだろうな、それがどうかしたのかい」

田蜜はちょっと挑戦的に語調を強めた。

「いや、そういうことをやめてもらいたいと思ってね。まじめに勉強したいと思っている生徒が迷惑だろ」
「なに、先公みたいなことを言うやつだな。しかし言っておくがね。おれにそんな忠告したって、無駄だよ。おれは授業がおもしろくないから自分のやりたいことをやるまでよ」

「それじゃ、犬や猫と同じじゃないか」

「どうせ、人間は動物だろ。お前だって犬や猫と変わらないことをやっているんじゃないの」

田蜜はちょっとおそろしい顔つきをして、すくむように松尾を見た。松尾優紀は微笑した。余裕ある態度を見せることが必要だと思ったからだ。

「おれもよ、中学時代、色々悪いことをやった。けれど、まじめにやりたいと思っている生徒までまきこみはしなかったよ。そりや悪いことをしたい時はおおいにするのもいいかもしれないよ。結局、最後の責任は自分でとるんだから。しかしなにも他の生徒に迷惑かけることをしなくなればいいと思うがね」
「悪いことをやったって、何をやったんだい。たいしたことやってないんだろ。それで大きな口をたたくなよな。」

田蜜はちょっとなめらかな抑揚をつけて敵意のない調子になった。松尾も気をよくして仲間意識を彼に植えつけることが大切と思って、言い続けた。

「おれがやった悪いことかい。色々あるな。その中でも一番の悪は教室であんみつを食べたことだな」と優紀は言った。

これは嘘である。あんみつは田蜜が好きという情報を得ていたから、話の材料に良いと思ったのである。

松尾は田蜜の顔を見た。田蜜は奇妙な顔をしている。

「何だ、そのあんみつというのは。あんみつを家から持ってきたのか」

「自分で作ったのよ。内の死んだ母さんがつくるのが上手だね。俺はそれを見ていて作れるのさ。俺の席は一番うしろだからな。教師が黒板に書いている時、食ったのよ」

この程度のことじゃ彼は驚かないし、仲間意識を持たないのじゃないのかと思った。

松尾はニヒリズム同盟のことをふと思い出した。ニーチェの考えを地域社会の活性化に役立てようとし

た風変りな大山という男があんみつが好きだった。彼が入学式でした「地球温暖化を防げ」という演説が目に見えかぶ。

ところが、田蜜はあんみつに反応したのだ。

「君はうらやましい奴だな。俺もあんみつ好きだけど、今は食えなくなってしまった」
「何で」

「君と同じで、内の婆ちゃんがよくあんみつ食わしてくれたからな。ただ、内の婆ちゃんは自分でつくるのでなくて、店に連れて行って食べさせてくれたのよ」

「じゃ、今度、俺が作って食べさせてあげるよ」

「君がつくったあんみつはうまいのか」

「俺の場合はな、母さんが名人だったから、それを小さい頃から、見て、時には教えてもらった、だからうまいよ。それをあの野美公園でござってやるよ。」

野美公園というのは大きな池の周囲に広がっているこの町の高台の公園である。瀬戸内海とその周囲の風景が一望の元に見渡せる見晴らしの良い公園である。春には桜、そのあとは、つつじそれから、アジサイそして夏は池に咲く蓮の花と、それに、美術館もある。ただ、野絵の地区とこの公園の間に路面電車が通っている。電車が通る時以外は小鳥の声が聞こえるくらい静かな市民の憩いの公園である。

「あんみつか、食いたいな。」と田蜜は笑った。

「君はあんみつと一緒に食べる同志と思ったから、こういう誘いをしているのよ」

「君がつくったあんみつ、本当にうまいのか」

田蜜はそれまで、優紀のことを「お前」と呼んでいた。優紀が「君」を使っているのに、先輩に生意気な奴だと思っていた。だが、ここで彼が「君」を使ったことにより話の流れが変わったと思った。

「ま、食べてから、感想言ってくれ。野美公園に屋根のついた所があるよな。あそこのベンチで、食べれば、あんみつ屋で食べるのと同じ雰囲気味わえる」

田蜜が奇妙な顔をしているので、松尾はなんだかおかしかった。

「それじゃ、おれの言うことをきいてくれるかい」

田蜜は急にかたい表情になった。

「冗談じゃねえよ。どうしておれが君のことをきかなけりやいけないんだよ」

松尾はしばらく田蜜の目をみつめた。田蜜にはもう敵意はない。むしろ親しみのこもった目が一種の戯れのような感じで浮遊している。しかしまだ表情はかたい。

「あんみつ。本当におごるのか」

「ああ、おごるよ。じゃ、君は松山中学の暴れん坊君なんだからさ、学校中が静かに授業かできるようにするように君の仲間に言ってくれないか。それから教師に対する反抗もやめるように言ってほしいんだ。」

「ふーん。そんなことならやってあげるよ」

「アリサ先生に聞いてそれがうまくいったようだったら、僕は君を電話で野美公園に呼びだしてあげるから、その時あんみつをおごるよ」

「うそはつかんだろうな」

「馬鹿なことはいふな。おれはうそはつかんよ。そのかわり君の方も今言ったことを徹底してやってもらいたいね。その成果を見るためにも、君を呼ぶのは一カ月後にするだろ」

「それで、あんみつはいっ」

「今度さ」

「そうだよ。あたりまえだ。松山中の雰囲気が正常になったかどうかは一ヶ月ぐらい様子を見なくちゃ、わからんだろう」

「よし、いいだろ。しかし、もしも君がうそをついたら、おれは君に復しゅうするぜ」

田蜜はちょっと笑いながら言った。

「おい、あんみつぐらいで脅かすのか、おそろしい男だね。まあ、おれを信用して、ともかくよ。松山中学の仲間に授業中の態度と教師に対する態度とを改めるようにしろといえよ。」

「わかったよ。特に島村先生に対する態度をきちんとしろと言いたいんでしょ。わかってますよ。あんたが島村さんにほれているというくらい」

松尾と田蜜は肝心の話をそのくらいにして、他の雑談をそのあと十分ぐらいかけて、別れた。島村アリサは寺院の玄関にまで見送りにきた。

「先生！　しばらくたったら、松山中はものすごく静かになりますよ。」

田蜜鉄男が笑った。

「へえ、そうなってくれるとうれしいわ。どんな話を松尾さんとしたのか知らないけどあなたが静かなれは他の子も静かになるかもしれないわ」

禅寺の門の周囲がもみじの紅葉が見事だった。優紀が階段に足を置いて、ふと向こうをみると、瀬戸内海の海に夕日がまさに落ちようとしていた。永遠を象徴するように、「

海と空の溶け合う荘厳なひと時があたりを支配しようとしていた。

「綺麗ですね」と優紀は言った。

「ええ、夕日ももみじも綺麗ね。」とアリサは答えた。田蜜は沈黙していた。

優紀はふと、自分の母校の校旗に縫い込まれた織物の風景がここから見たものではないかと想像した。まさに永遠を意味する神秘的な光景だと思った。

3

3

十一月の半ば。田蜜と約束をしてから、二週間たった日曜日の午後、ブルーのカーディガンとデニムパ

ンツに身を包んだ松尾優紀はアリサと例の野美公園で会った。アリサはベージュ色の気品のあるスプリングコートを着ていた。

青空には白い雲が動いている。桜の木が紅葉している。白っぽくなった地面に落ちている赤い枯葉が美しい。心地よい陽射しの当たるベンチを選び、二人は座って話をした。

「田蜜君にこの間、ここであんみつおごったんですよ」

「彼、満足したの」

「満足というより、喜んでいましたよ。なにしろ、あんみつには彼の亡くなったおばあちゃんの思い出がつまっているのですからね。」

「そう」

「僕だって、母の思い出は懐かしい」

「最近夢を見ないの」

「母の夢は見ますよ。アンネの日記は夜、風呂から出て、寝るまでの間に時々読みますからね。既に全文読んでいるわけですから、ばらばらめくって開いた所から、数ページ読んで寝るんです。そのせいか、アンネと母の顔が出てくることがありますよ。」

この間なんか、ニヒリズム同盟をあんみつ同盟と名前を変更しろなんて言って来ましたね」

亡くなった母は大山という男を知っていたのだろうか。彼は現代日本はニヒリズムに汚染されているからと言って、弱者救済のNPOニヒリズム同盟に取り組んでいる。

「あたしはニヒリズムという言葉が嫌いね。あんみつ同盟とかニヒリズム克服同盟というなら、面白いけれど、大山さんは賛成しないでしょう」

「大山さんの話によると、ニヒリズムという人生に意味がないという言葉の奥に、ニーチェは克服の意味を込めているのだそうです」

公園の緑の梢がさらさらと優しい音をたてた。しじゅうからが鳴いた。続けてカラスが勢いよく鳴いて飛び立った。

「堀川さんは忙しいの」と優紀は聞いた。彼には気になる相手に、聞きたいことは山ほどあるが、出で来る言葉はそんな単純な言葉だった。

「今、仕事でアメリカに行ってるわ。忙しいと思うわ」

「寂しいでしょう」

「そうね」アリサは微笑した。堀川とアリサの関係が微妙な関係にあることを、優紀は感じたが深読みという誤解もありうるという反省の心も働いた。アリサはただ寺の座禅道場に自分を誘いたいだけなのを自分が勘違いしているだけなのかもしれないと。

「ところでね。松山中のことだけど、あなたと田蜜君の間でどんな会話がかわされたのか知らないけど、あれ以来授業がとてもしやすくなったわ。田蜜君も彼の友達もみんな急におとなしくなってね。前のように授業妨害をしなくなったわ。あまり急に変わったので教師もきつねにつままれたように驚いているわ。」

「そうですか。そんなに変わりましたか。それじゃ田蜜のやつ、約束を守ってくれたんですね」

島村は美しく大きく澄んだ瞳を松尾優紀にむけた。松尾はその瞳をまぶしいものを見るように見つめた。「どんな約束？」

「ええ、ただ田蜜が彼の仲間達に授業妨害や教師への反抗をさせないようにするという約束ですよ」

「まあ、すばらしい約束ね。でもよくそんなことを田蜜君が承知したわね。どんな風に話をしたのかしら」

「それは僕の会話の腕ですよ」

それで、あんみつの話をした。

「え、それ、あなた作ったの。大変だったでしょう。あれって、スーパーで売っているのよ。」

「スーパーで売っているんですか。でも、作るの大変だったけれど、母が後ろにいて教えているような気がして、不思議に苦にならなかったですよ。残りは父に食べてもらったし、僕は家に帰ると、数日おやつに困らなかった。」

松尾はちょっと恥ずかしそうに顔を赤らめながら軽く笑った。

「あら、そう、本当にすごい腕ね。感心しちゃったわ」

松尾は微笑していた。母の笑顔が目の前に浮かんだ。

「でもね、松尾さん。あたし」

アリサはそこまで言って沈黙した。

クラスが何かの吠えるような大きな声をたてて、飛び立った。猫が二人の前を悠然と歩いていた。

「せつかく松山中も静かに授業ができるようになって、良かったですね」

「ええ、でも以前は、子供ってただ可愛いと思っていたわ。でも、実際にあつてみると、子供が純なもの失なってしまうているのね。大人の責任でしょうけど。」

そこで、アリサはまた沈黙した。何かを言おうとしているのだが、ためらっているようにも思えた

「それからね、私は父から託された使命があるのよ。これは秘密よ。核兵器のない軍縮を目指す世界をつくるというのね。誇大妄想と思われるかもしれないけど、偉い政治家にまかせておくと、戦争になるというのは過去に証明されたわ。若い人が世界の若者とインターネットで手を結び、世界に軍縮を働きかけ、偉い政治家を動かすのよ。それには、映像が一番いいわ。」

堀川の話では、アメリカでユーチューブが盛んとか、もうすぐ日本にも入ってくると聞いているのよ。ユーチューブについては、まだ分からない所があるから、当分は自前の映画をつくる気持ちよ」

「それは凄い。でも、核兵器をつくるかつからないかはトップの政治家が握っているのでしょ」

「でも、その政治家を選ぶのは市民よ。日本では選挙権は十八才までに、引き下げられたわ。あなたももうすぐですよね」

「ええ」と優紀は返事をして、まだ遠い先のことのように思える。

「私、いずれ、お寺の仕事をしばらくお手伝いしながら、映像の下準備ということで、小説やシナリオを書くつもりよ。」

「へえ、小説ですか。どんなものを書くんですか」

「大学時代に書いた学園ものの小説があるのね。それはまだ完成していません。それでも、原稿用紙で三百枚くらい書いてあるの。いじめがテーマね。今の社会って、ひどい競争社会でしょう。子供の時

から、大人になっても、競争ですからね。大人になると、たいていの人は自分がこの競争社会で勝ち抜いてきたのか、負けてきたのかというのを心の底に隠し持っている。それで、毎日の生活に追われている。その中で人間関係って、子供でも、大人でも、横の太い絆が断ち切れ、細く、ようやく繋がっている人もいる。子供は正直だから、露骨に言葉に出す。それが友情になることもあれば、いじめになることもある。禅という愛語がないのね。

一年間の教師生活で経験したことを参考にして、この原稿を愛語という柱を入れて人間関係を復活させる試みをしたいのよ。この小説を発表したら、その次は平和を題材にしたシナリオを書いてみようと思う。今は人類の危機という認識から、核兵器をなくすには人間の価値観をどう変えたらいいのかということテーマにしたいわ」

島村アリサの目がキラキラ輝いた。

「そのシナリオを映像にするわけですか」

「そうね。映像は迫力があるから、多くの人を引き付けますからね。今はビデオカメラがあるから、手軽にできますから」

「ビデオカメラですか。僕もいずれはアリサさんの真似をしたい気持ちもあるけど、今は、読書と試作です」

しばらくの沈黙。そよ風と日射しは心地よかった。小春日和を思わせる。路面電車を通る音が消えると、あとは沢山の小鳥の鳴き声が静かに聞こえてくる。

優紀は思った。自分はアリサより六才も若い。彼女の言うことを真似しようとしたら、ヒマラヤに登るような大変な思いで、直ぐには無理だ。その山頂から見える風景は素晴らしいでしょうけど、今は自分を鍛える時だ思った。

「ところで、あなたは高校生になってからお寺の座禅会には出なくなってしまったけど。ああ、一度だけ出たことがあります。中学生の時によく来てくれたわね。どちらにしても、最近はほとんど出ていないわね。あたしとしては出て勉強してほしいわ。また出てくだらない」

「ええ、でも、座禅にはちょっと出られないんです」

松尾はもうしわけなさそうな口調でそう言った。

「どうして？」

「それは今の僕の生活があまりにも仏の教えと反することをやっていますし、それに座禅ってただ座っているだけでしょ。それよりも柔道で早く強くなりたい」

「そう、まだ高校生ですもの、何もそんなに急ぐことはないわ。でも、座禅って何もしないで、ただ座っているだけというのは少し違うと思うの。

確かに、私達の普通の生活はいつも何か目的を持っている。会社の仕事だって、競争があるから、早く利益を上げられるような方式を考え、その目的に一番良い会社のシステムを考え、全員が一丸となって、目的に向かって進む。

社会全体としても、経済が成長するように、ともかく目的を立てる。それはそれなりに、人間の生活にとって重要なこと。でもね、人間ってそれだけではない。霊性というのがあるの。

今の学校の現場はそういうことを教える時と場があまりにもないの。結論的に言えば、競争と勝つための努力が称賛される価値観を生徒に植え付けてしまうのよ。他に優れた価値観を教えないから、人は大人になって困難にぶつかると、ニヒリズムにおちいるのだと思うわ。

程よい競争は社会的にメリットがあるけれども、目的をたてて競争する生き方ばかり、やっているとき、霊性を見失うのよ。人間の最も神秘なところが見失われてしまうのよ。座禅のように、目的を持った生き方、そういう荷物を一度降ろして、無我になって、ただ座る。

悟りなんて大それたことでなくていい、ただ座る、人生に取ってそれが大事なことなんだという日がいつかきますよ」

いつの間にか、西の夕日に向かって座っている猫がいる。ちょっと声をかけると、軽く首をこちらに向けるが、直ぐに西に向かって座って静かに座っている。

まるで猫の座禅みたいだ。そのことをアリサに言うと、「無仏性の姿のようにも思える。猫にも霊性があるということよ。人間はあれこれ考えるから仏性を見失う。思考を止めるのよ。その時、目に見えない形のないのちが、座禅する姿に現れると言うわ」

その猫が何か神々しい神秘ないのちを表現しているように、優紀には思えた。

「思考を止める。やさしそうで、難しいのかもしれないね。いつの日か、僕が本気に座禅する時が来ますよ」

優紀にとって、座禅会に出れば、アリサにしょっちゅう会えるではないか。それなのに、行こうとしない自分が不可解だった。

4

4

猫を見ていると、猫の頭上の虚空で、アンネ・祖母が賛美歌を歌っているように思えた。それを察知したかのように、アリサは「あなたはクリスマスはやるの」と聞いた。

「ええ、やります。親父が内村鑑三を尊敬していますから」

「それでは、あなたのお家はクリスチャンということになるの」

「いいえ、親父は無教会主義で、母は実家が浄土真宗です。どちらも、自分の主義を注入しようという雰囲気はありませんから、今の日本みたいに、クリスマスがくるとお祭りの一種としてやるだけです」

「西欧では、クリスマスは、キリストの誕生した日ですから、大切な日なんです。キリストは私達の座

禅の立場から見れば、聖霊が舞い降りた人物であると同時に、悟りをひらいた人と私は解釈しています。修業して、罪に汚れた人間が無我になることにより自己の中にある神性を見出す。つまり聖霊が舞い降りてくる。仏教ではこれを法身とかダルマとか言っても良いかと思います。禅では仏性とか無仏性というのが一番近い言葉でしょうね。

キリストはゴッドという神の信仰に生きるユダヤ教の中で育ち、自己の神性を自覚した人なんだと思います。

キリストも自己の神性を知った時、当時、苦しんでいる人達に対して救いたいという愛の気持がおきたのですね。仏教的な感覚で言うならばどんな人間でもキリストのようになれるわけですが、実際、キリストのようになった人は歴史上、数は多くありません。法然は比叡山で修行し、地位の高いお坊さんになれたのに、京都の人生に絶望した貧しい人達を救うために、京都に出て、南無阿弥陀仏を言うだけで、極楽浄土に行けると革命的なこと言ったといわれています。そこで親鸞に出会ったわけですね。

その当時の民衆にしたらって、修業して悟るというよりはキリストの手にふれることにより永遠のいのちに入れるという信仰の方が親しみやすかったのだと思います。科学的合理主義を価値観とする現代に住む私達にとっては、法然の分かりやすさ、キリストに対する親しみやすさが逆に信仰へのトビラをとぎしてしまっているのです。禅でも、同じことが言えます。現代人はニヒリズムをなんとなく受けいれながら、それでは生きていけないという状況にあるのですよ。」

島村アリスがここまで言った時、松尾優紀の頭に大山道長の経営するニヒリズム同盟が頭に浮かんだ。

「ニヒリズムでは生きていきませんか？」

「あたしにとってニヒリズムという言葉は何の意味もなく死のように空しく響きます。大山さんは発明家で、ソーラーカーで、ユーラシア大陸の旅に出たいと言ったり、それは無理だから、今は弱者救済をするとか、そこまではいいとしても、高校生をメンバーにしているでしょ。あんみつがよく出されるらしいけど、あれは若い人を誘う手段だと思うわ。あなたも出入りしているとか噂を聞くと、戸惑うわ。それで、座禅会にこれなくなるのではと思ってしまうわ」

優紀はそうではないと思った。こうして長く話していることの中にも、喜びとともに、悲しみのような魂の苦がある。それを感じているからこそ、自分は故意にニヒリズム同盟なんて場所に行くのだ、と内心の声がささやくのだ。

野美公園は、まだ六時だというのに、すでに外は夜の闇に包まれていた。ひんやりとした空気がいつものまにか晩秋になっていたことを二人に感じさせるのだった。近くの公園の樹木から落ちる木の葉がものがなく、裸になりかけた銀杏の並木は冬の到来を暗示していた。

二人はしばらく公園を歩いた。公園のベンチに腰をかけて、そうした自然の気配に耳を傾けた。しばらく沈黙しながら、都会の雑踏がしのびこんでくる不思議な静寂を味わった。夜空には、星がまたたいている。星に視線をむけていた二人は沈黙に耐えかねたかのように深い呼吸をして、会話を始めた。

「あたしね、時々思うことがあるの。何か胸が熱くなって、この自然の中で座禅をしたいと思うことがあるの。自然が好きなのね。お釈迦様がお悟りになったのだって、森の中でしょう。お寺の座禅道場で座っていても、いつ悟れるのかしらと、思うの。ですから、こうやってあなたを誘っても、本当はた

いした意味があるように思えないことがあるの。それより、読書や勉強や柔道などいくらでも、青春の盛りにはやるのが、あるじゃないのって思うわ。

でも、そう思うことがあるっていうだけよ。やはり座禅は大切だわ。神秘的宇宙のいのちの世界を見つめる稀有な機会ですもの。それが見つかれば、本物の大慈悲心と愛が生まれる。そうすれば、世界で苦しんでいる人達の声に耳をすまし、助けたいという気持ちが起こるのだと思うわ。」

「なんとなく、分かるような気がしますよ。核兵器をなくすというテーマの映像を作りたいと言われるのも、そういう愛から生まれるわけですね」

「そう。魔法の扉を開けるのよ。みんな、そんなことを考えるなんて誇大妄想だなんて、諦めてしまっている。あなたの詩に魔法の扉を開けると、宇宙は一変するというのがありましたね。若いんだから、挑戦してみるのよ」とアリサは言った。優紀は以前、書いた自分の詩を思いだした。彼女がおぼえていてくれたことが嬉しかった。

川のせせらぎの音がきこえた。木の梢の音が聞こえた。鳥の鳴き声が聞こえた。空には白い月が地上を照らし、猫のように、悠然と座禅しているように思える。

松尾にはいまだに神仏を肯定できない自分を感じていた。そのためか、神がいなければすべてが許されると大小説の中で言った登場人物の考えには何か得体のしれない不安を感じるのだった。それに内的には性の衝動が激しい年頃に入っている。

しかし大山さんの言うことにも矛盾がある。社会の悪を追放し、平和になったら、いずれユーラシア大陸を遍歴の旅に出たいと言っているが、そんな時は近い内に訪れる気配はないでは、ないか。

この場合の悪というのは何だろう。それにしても全てが許されるという言葉は恐ろしい。悪は許されないと人と思うのは、神仏がいるという証拠なのではないか。

既に大きな悪はなされている。戦争がそうだった。原爆は巨大な悪だった。東京を襲った爆撃も凄かった。住宅地を取り囲むようにして、逃げられないように爆撃したあと、焼い弾の残酷な嵐が来る。あれは戦争の悪そのものではなかったか。戦争そのものが悪い。

ナチスの悪もすさまじい。

そう言えば、アンネと祖母の夢をつい数日前に見たことがある。アンネと祖母が郊外であんみつを食べている至福の時に、青空にピカッと光るものがあり、原爆が落ちたのだ。幽霊になったアンネと祖母は核兵器をなくせと叫んで消えた。

倫理の土台は何なのだろうかなどと松尾は考え出した。やはり、神仏がいなければならぬのだろうか。しかし、世間では、否定される雰囲気がある。金銭至上主義の世の中である。

松尾はしばらくの間、田蜜との約束をほおっておいた。

その内に師走になり、アリサからは、クリスマスプレゼントとして、英文の「アンネの日記」が送られてきた。簡単なメールがついていた。「これからは、英語は世界の若者のコミュニケーションに重要になるわよ」

優紀は辞書を片手に夢中になって読んだ。それまでは、日本語のアンネを夜、寝る前に習慣にしていたけれど、それからは、英語版になったのだ。

それは、喜びだった、

十二月も押し詰まった頃、田蜜の方から松尾に電話が入った。

会う催促の電話である。その時はうまくお茶をにこした。

新年になっても何回か電話がかかってきた。ことに私立高校の試験が終わった二月の下旬頃かかってきた電話は少々脅迫的だった。

松尾は結局、三月の下旬のある日、彼に会った。

「高校の方は、決まったかい？」

松尾優紀は田蜜のきびしい表情を見ながらそう言った。

「決まったよ」そっけない返事だった。

「どこだい？」

「どこだっていいだろ。ある私立高よ」

田蜜は松尾をにらむようにして見た。「ふーん。やに機嫌が悪いんだね」

松尾は努めて冷静に言った。

「おまえは、おれをだましたんだろ。え、どうしたんだ？」

「何をだい？」

「とぼけるなよ。あんみつを最近食わせないじゃないか。この間の一回だけじゃないか」

「まあ、落ち着けよ。あんみつって、スーパーでも売っているんだぜ。電話でも言ったように、入試で忙しい君にあんみつどころじゃないと思っただけよ。かえって迷惑だと判断したからだよ」

「スーパーで売っているのか。で、この間のはスーパーのか」

「あれは、おばあちゃんの秘伝で、俺が半日かけてつくったのよ」

「そうか。分かった」と田蜜は言った。田蜜は一人でゲラゲラ笑って「あばよ」と言った。それで二人は別れた。

NPOニヒリズム同盟は、以前に尾野絵高の保護者会長だった大山氏がリーダーになり、高校生のアルバイト的な会員は十人近く集まっていた。

そこへ松尾が「あんみつが出る」と言い、田蜜を連れてきた。応接室にはすでに山本杏衣も井上茂も集まっている。

窓の外は、桜の花につぼみがつき始めていた。田蜜は、応接室にいる女達を見て満足したようだった。なぜなら彼女達はみな素敵な純粹さを持っている感じがしたからである。みんなは田蜜を見て、尾野絵高生とは雰囲気がちがう、かなり不良高校生のいることで有名な高田高校に入る松山中の元暴れん坊君ということとでちよつと緊張して迎えた。大山氏が出てきて、田蜜に握手をしたと言った。

「何？君が今度入会する田蜜君か。なかなかいい面魂をしているな。わがニヒリズム同盟は、今後、発展する所だ。しつかりかんばりたまえ。しかしニヒリズム同盟には秘密が多い。その秘密を守れないよう

なら、これを使う」

大山会長は短剣を出して田蜜に厳しい口調で言った。短剣を見た田蜜はちよつとびつくりした表情をした。「すげえ、これ本物ですか」

「あたり前だ。警察にも届けてある先祖からの名剣だ、この短剣にかけて誓うか。ニヒリズム同盟の秘密を守るよ」

大山はさやから、中身を抜いた。銀色に輝く短剣の刃は部屋の中に不思議な光を放った。

田蜜は誓った。

大山は発明家で奇人だ。そういう迫力がまた、田蜜を引き付けた。

これで、田蜜もニヒリズム同盟に加入したのだった。

「うん、これでニヒリズム同盟にも十人になったわけだ。大きくなったね。君達はおおいに加入者をふやしていくことだな」

このあと大山氏はニヒリズム同盟の意義について講義をし始めた。

「倫理の崩壊が一部に見られ、インフルエンザの流行のように、広がりを見せているのはゆゆしきこと。我らが頑張らなければ。」

ニヒリズム同盟とはニヒリズムを克服するサークルだ。ボランティア活動につながる。若者のひきこもり、孤独の高齢者の見守り、など、いじめをなくす。この尾野絵にミニユートピアをつくるクラブだ。そう言う大山道長の考えには優紀も心を惹かれていた。

それでも、松尾優紀は心の底で、ニヒリズム同盟にしばらく参加した後、早い時期に去る決意をしていた。あんみつ同盟と名前を変えることを提言したのだが、それが大山にけられたというのが、表向きの理由だった。本当の理由は自分でも説明できない、あるもやもやした衝動だった。やはりアリサがこのニヒリズムという言葉を嫌っていることが一番大きいかもしれない。

5

5

その頃、制服か私服かということが、尾野絵高の構内で話題になっていた。それで、社会科の授業中に石井教諭の配慮で、討論会をしてくれることになった。その授業の始まって少したった頃、外では、急に雨が降り出してきた。風がびゅうと音をたてて吹いて、窓を揺らした。

窓側の生徒が窓をしめた。

しかし、なぜか一番前の窓は誰も閉めなかった。教師が閉めると思っただろう。

そのおかげで、校庭にたたきつけるような雨の音が聞こえた。そこは二階だったので、雨はその激しさを雨音だけで、知らせるだけだった。雨が中に入り込むのは、風が吹いた時だけである。

石井先生はその雨をじっと見て、制服問題についてのそれまでの討論のまとめの話をしたあと、しばらく沈黙していた。それで、教室全体が雨の響きになり、その音がゴーという一種の滝のような迫力でそこにいる生徒の耳に侵入した。

しばらくの沈黙のあとに、石井は「豪雨だな。最近は大変な気象災害が多い。

こういうことについても、我々は学ばないと、将来の人類は困ったことになるぞ。制服私服論なんてのんきなことをやってる場合か」

その時、岡野が「学ぶだけでは駄目です。CO2削減に取り組まないと。」と言った。

「その通りだ。私一人がそうすれば、気象災害が食い止められるならば、多少の無理をしても車に乗らないで通勤する。しかし事は人類という巨大な枠でおきているのだ。

これは、国連で日夜激論が戦わされていることは新聞でも見ることがあるだろう」

1992年の地球サミットでは、世界規模の環境問題に関する会議になった。その後、京都議定書では温室効果ガスを削減することが各国に要求された。【後に、2015年の国連サミットで、SDGs 持続可能な開発目標が決議された。】

相変わらず雨はひどく、教師の声が優紀のような後ろの席まで届かないかすれた響きになることもあった。

すこしの間の沈黙のあと、石井は「尾野絵高始まって以来、今まで制服でやってきたんだ。そういう伝統もあるし、そういう校則は生徒手帳に書いてあるんだ。」

「制服か私服かということは、予行演習ですよ。民主主義の予行演習ですよ。国連にまで、我々の気象災害の不安の念を伝え、全ての国が必死に取り組まないと、人類の存亡にかかると」と優紀は立ち上がった、そう言った。

石井先生は驚いたような顔をしたが、直ぐに穏やかな表情に戻った。

「又、君か。この話は君が火をつけたと聞いているぞ」

「本当は先生のおっしゃる通りに、我々の温暖化による気象災害の恐怖を国連に伝え、多くの国が自国のエゴを丸出しせずに、人類の存亡をかけたこの地球温暖化で、

各国が足並みをそろえ、CO2を増やすことをストップさせることなんです。この雨の音がそう叫んでいるようです。日本が京都議定書に参加しなかったのは残念」

「雨が叫んでいるか。地球温暖化はもうストップすることは出来んよ。ゆるやかにするためにCO2削減することだろうな。ブラジルのアマゾンが開拓されたら、大変なことになる。

ともかく君達の気持ちは分かった。あのような生徒総会で一部の扇動者に惑わされている君達一年生は、もっと冷静にならなきゃいかんよ。」

石井先生がここまで一気に言った。そこまで言うとな彼の熱弁に屈服したかのように、おとなしく席にいつている生徒達をゆっくりながめまわし、ちょっと得意そうなポーズで笑みを浮かべた。その時、岡野

がすくっと立って発言した。

「先生、ちょっと発言したいのですが、よろしいですか」

石井先生は、ちょっと厳しい表情で岡野をみつめたが、「まあ、一応、討論会だからな。いいだろ」と言った。「制服か私服かということですけどね。むしろ、学校側の方が強圧的にそうした民主的手続を無視しているような気がします。」

僕は制服を一方的に押しつけるのは、やはり基本的人権の侵害だという気がするんです」

岡野は冷静な口調で教室中によく響きわたるように言った。石井先生はやはり軽い微笑を浮かべて言った。

「又、話を元に戻すのかい」

先生はふーとため息をついた。「これがどうして基本的人権の侵害になるのだろうか。裸になって学校に來いというのであれば、これは基本的人権の侵害にはなるが、ただ私達教師の指導しているのは校則を守れということなんだよ。」

岡野が発言している間、優紀はニヒリズム同盟のことを思い出していた。ニヒリズム同盟はとも奇抜なことをやって、皆の賛同を得られれば物事は前進するという考えを持っているようだ。大山道長のソーラーカーによる、漫遊遍歴なんて、その例だ。それで、優紀はバッグの中に用意してきた私服を思いだした。

バッグを開け、いきなり制服を脱ぎ、ブルーのデニムジャケットだけ身につけた。そして立ち上がった。それは見事なくらい素早い動作だったので、皆があっけに取られて、優紀の私服を見た。発言に自信があったわけではなくむしろ不安の方が強かったのだが、岡野の発言がこのまま石井教諭に一蹴されたような形になるのはがまんならなかった。

「それから基本的人権のことですが、僕は自由に服装を選択する権利があると思うんです。学習の場としてあまりにふさわしくない服装をする場合は別ですが、

僕はそんな愚かではありません。今の私の私服の方がどれだけ、教室を明るくすることか。

自分達の好みでそれぞれの個性にみあった服装を整え、友人どおしで批評しあう方が服装のセンスがみがかれ美的感受性が増すというものです。むしろ、こういう観点に立つならば教育現場として私服の方が好ましいといえるわけです。知識を吸収するのも大切な学習ですが、討論し、自分で考えるというのも勉強ではないでしょうか」

松尾優紀の弁舌は、さわやかであった。拍手もわいた。

松尾はここでも自分が美しく詩的に話をするのが不思議な気持ちだった。

石井先生はしばらく厳しい表情をして黙って何か考えごとをしているようだった。視線は、窓の外のどんよりした空を眺め、雨脚が少しゆるくなり、ただ雨の音が二階にまで少し心地よい響きに変化していることを不思議に感じているようなまなざしで外をしばらく見つめていた。

「松尾の言っているのはね、生徒のレベルで言っていることで、つまり教育される側が無理に教育者の立場に立とうとし、実際はできずに結局、外見だけは教育の現場にふさわしいとかなんとかいうけれど

結局、それは生徒のたわごとだよ。」

「先生さあ、」

吉村という男か急に立ちあがって「先生さあ、」と始めたものだから爆笑がわいた。

この男はどこかユーモラスな所がある。「えーとね。生徒のレベルでしか僕は考えないというけれどね。それはあたりまえのことじゃないですか。僕は生徒なんだから、そうでしょう」

吉村は、「ねえ」という風にみんなに同意を求めたので、又笑いがあちこちにわいた。

「先生の言っていること、おかしいよ。えーとね。つまり僕の言いたいことはね、生徒が自分達の服装問題を真剣に考え生徒総会で話しあったわけですよ。そして私服がいいと決定したんだ。それでもいいじゃないですか。」

よその学校の服装について決めたわけじゃないし、僕達の敬愛するわが尾野絵の生徒諸氏の服装について決めたんですよ。僕達の法律を僕達が決めたんですよ。こんな立派な民主主義はないと思うな。先生はむしろ僕達をほめていいんじゃない」

あちこちで拍手かわき、笑いと「いいそ」というやじが飛んだ。

六月の空は小止みになった雨雲が激しく空を移動していた。おもくるしいどんよりした空が足早に空の廊下を走っているようにも思われた。

ちょっと変な天気だな、ついに梅雨が来たかなと松尾は思った。議論はあと四人ばかりの生徒と石井先生とのやりとりの際にチャイムが鳴って打ち切りとなってしまった。

高校二年生になっていた松尾優紀は。背は一七九センチ。ごぼうと言われた身体に筋肉がついてきた。顔もふっくらとし、浅黒い細面の顔に優しい表情に時々知的な目が輝いていた。

島村アリスが教師をやめたということを知った時、松尾は驚き、なぜか寂しかった。

服装問題も校長の鶴の一声で私服で登校したい者はそれで良いということになり、しばらく制服で来る者と私服で来る者が混在し、互いの服装についての話題も賑やかだったが、いつの間にか下火になり、学園はすっかり落ちつき、静かな学習の雰囲気となっていた。田蜜と山本が交際していると聞いていたが、うまくいっているのかどうかということについては、松尾は無関心になっていた。ただ、田蜜が見違えるような良い若者に成長しているという噂は聞いたことがある。田蜜からは特に音沙汰はなかった。松尾優紀はニヒリズム同盟には参加するのは気が向いた時だけであり、柔道と読書と学習に精を出していた。充実した毎日が続いた。彼がこれほど季節の春を堪能したことは、かつてないことであった。彼の心に詩的感情は高まり、いくつかの詩が彼の日記の中に書き込まれた。彼は心の中に徐々に一つの芸術的イメージをつくりあげていったのだった。それはいつの間に彼の心の中に根をおろしていった。

彼はそれがどんなものであるか最初は無頓着であったが、徐々にそのイメージに関心を持ち春の陽光をあびて瞑想にふける時、それを内省してみるのだった。それはある町にちがいがなかった。だがこの町かと言われても彼にはまだその輪郭がつかめていなかった。緑のたっぷりある公園のような町という気も

するし、バルザックの時代のパリや日本の徳川時代の江戸のように何かひどく今の東京の町とはちがっているようにも思えた。

しかし、それでいて人々は自由に生活をエンジョイし美しい花が咲きみだれ町を通る清流のもとでやさしい物語がいくつも編まれているというようでもあった。

彼はそうした町を空想し、そこに繰り広げられる数々の物語を思い浮かべてみた。彼は「アンネの日記」を思い出すと、不思議に物語をつくるという夢にしがみついた。彼には、まだ文章を書くという実践がわずかの詩でしか試されない。だから、物語は一時の妄想のような展開を頭の神経回路につくるだけで、やがて次から次へと消えていくのだ。その妄想にこんなのがあった。

彼が机に向かっている時に、アンネが幽霊として現れたのだ。

「え、いつの間に。どこから入ってきたの」

「ドアからよ」

ドアはきちんと閉める習慣があったから、奇妙な感じがした。

「どこから、来たの」

「霊の雲間からよ」と彼女はそう言った。さらに、アンネの日記の最後の章に、日本の社会に対する警告を書きたかったと言い、そして消えた。

彼はその空想を断片的に、日記にメモのように書きとどめるのみにしておいた。

島村アリスが教師をやめてから初めて松尾に会ったのは、この空想が創作に結び付くかということについての意見交換をしたという松尾の要望によるものだった。

五月の末のある日曜日だった。

つい三日ぐらい前までうす寒い日が四、五日続いたのがうそのようにその日は初夏のように太陽がまぶしかった。

松尾はいつもの喫茶店で彼の物語の構想について大枠を述べたあと島村の意見を聞いた。

「そうね。イメージはとてもおもしろいと思うわ。ただそれを具体的な作品にする場合、詩の場合はすんなりといくような気がするのですけれど、小説となるとどうかしら。具体性に乏しいような気がするの。

ねえ、松尾優紀さん。ビデオカメラであなたの作品をつくってみる気ない?」

島村は微笑した。

「え、ビデオですか、僕持っていないんですよ。買うにもちょっと高くてね。」

松尾優紀は今まであまりビデオとか八ミリとかいう映像作品については考えたことがなかった。

だから島村から突然ビデオの話を持ち出されてめんくらった。

「私が貸してあげるわよ。買ってまだ半年しか使っていないんだけど、あなたが本気でビデオ映像の作品をつくるというのなら貸してあげるわ」

「でも、そんな高価なもの、悪いですよ」

「いいのよ。ねえ、松尾さん、ビデオはこれからの芸術よ。ビデオはね。ハミリよりもこれから発展するすばらしい映像なのよ。」

「というのはね、私、今シナリオを書いているのだけれど」

これをビデオで作品にしたいと思っているの。それで一人じゃ、色々不便だから、あなたに協力してもらえればすばらしいと思っているの。」

たくさんのシナリオを書き、このシナリオ自体も作品として推敲し、そしてそれをビデオ映像作品にするの。」

すばらしい創作ができるわ。江戸時代に松尾芭蕉がその頃庶民に流行していた俳句を芸術化したようにビデオカメラで新しい芸術の分野を切り開くの。どうすばらしいでしょ」

島村アリサの目が少女のようにキラキラ輝いた。松尾はちよつと圧倒されてしまったかのようにどぎまぎしていた。

「ね、あたしの夢はね。ビデオ映像をDVDにして多くの人に見てもらうのもよし、小さな映画館をつくり、そこで観客に見てもらうのも良いし、そうした具体的なことはまだ夢の内、夢の中では、映写室をもうけそこでコーヒーを出してお客さんに良い作品を楽しんでもらおうというようなものもあるの。どう？」

「それはおもしろいですね。僕も話を聞いているうちに、やりたくなってしまいました。でも、そういう商売の経験がなくて、出来るものですかね」

「あたしは大学の時、アルバイトで、親戚の人がその頃珍しかった本屋兼コーヒー店をやっていた人がいてアルバイトしたことがあるの。お茶くみだけでなく、経営の仕方も叔父さんから教わったわ」

「面白いでしょ、でも、これユーチューブが出てくるまでの、映像作家の出発式みたいなものよ」と言つて、アリサは目を丸く大きく見ひらいた。

喫茶店の中は客がまばらだった。外はまぶしいような光に満ちていた。

窓から見える景色は全体に新緑のグリーンが背景になっていて、瀬戸内海は池のように見えた。

「でも、お寺の方はどうなっちゃうのかな」と優紀はぼやいた。彼がこんな心配するのは、いつも誘われている座禅会が放り出されてしまう印象がして、何か寂しい気がしたからだ。」

「お寺は父のあとには、兄が引き継ぐのよ」

アリサに兄がいるというのは聞いてはいた。ただ、何をしているのかというような細かいことは知らなかった。アリサの話によると、兄は商社に勤め、今はフランスにいるけど、フランスで座禅の重要性に目覚めたという葉書を受け取ったのだそう。その時の父親の喜びは大変なものだったそう。

「あたしはそういうわけで、お寺の人間でなくなる。この間も話した映像の夢を実現するチャンスがきいたということね。最初は出来そうなことだから、始めるわ。詩の映像化ってどうかしら。世界中の色々な詩人の作品が翻訳されているけど、その詩の美しさが翻訳では中々とらえられないと思うの。それでビデオの映像にして美しい詩情にあふれた短編をたくさんつくるの。映像詩ね。」

まさにビデオのルネッサンスだわ。詩をシナリオ化してもいいんだわ」

2007年のこの年の様々な科学技術の現状から、彼女が夢見るのは、ビデオ映画というわけだったが、優紀は魅力を感じたが、その実現にはまだ心の準備ができていないような感じがした。それもシナリオの本命は「銀河アンドロメダの猫の夢」で、人類から核兵器と恐ろしい戦争の道具を少なくする、つまり壮大な軍縮の提案があるという物語で話の輪郭はほぼ出来ているということだった。この話は前にも少し聞いたが、こんなにスケールの大きなものという認識はなかった。教師をやめたのも、この壮大な計画があったからだ、優紀は痛感した。彼女は「今や、人類の危機である」と何度も言った。この点では、ニヒリズム同盟の大山氏と似ている。ただ、価値観の土台が違う。それに、大山氏は自分の住む町の中で、アリサはビデオを使って世界に発信するという大きな違いがある。

島村アリサは松尾に話しているというよりは何か自分自身に言いかけしている風だった。

「ね、あなたも協力してくださる。ただ、この話、具体的に形をとるようになるまで秘密よ。誰にも喋らないで」

島村アリサは今までの教師くさを捨てて、いつの間にか大人の女を演じる女優のようなおおらかさが宙を舞っているようだった。

「ええ、協力しましょう。アリサさんの話を聞いて大変、興味を持ちました」

「ともかく、それじゃ、ちょっとビデオの勉強でもするかな」

「あーら、ビデオの勉強たって、たいしたことないのよ。使い方なら、使っているうちに覚えてしまうし。ともかく一緒に作品をつくりましょうよ。でね、ともかく最初の作品はちょっと郊外に出ることが多いので

あなたに持ってほしいの」

「なんだか運搬屋に雇われたみたいだな」松尾が笑った。

「あら、そんな風にとらないで。カメラの操作もあなたにやってもらうんだから」

「一回目の作品のテーマは何ですか」

「それはね、この瀬戸内海を色々の角度から、夕日を撮るのよ。あれは映像詩になると思うの。どうぶあとでシナリオ、見せてあげるわ」

最初に夕日の映像詩で、永遠を撮り、そこから国連で問題になっている温暖化阻止に取り組み、さらには人類存続のための核兵器禁止という風に結び付けていくのだろうかという思いはあったが、優紀は特に聞かなかった。

「僕の作品もやって、作ってくれるとありがたいな」

「そりゃ、もちろんよ。二回目はあなたの作品でやってもいいわ」

「映像詩ですよね」

「そうよ」

「だから、シナリオをつくっておいてね。」

それでね、自分、あなた、毎日あたしのお寺に来てほしいの」

「何時頃に、そちらに行けば良いのですか」

「そうね、四時頃は無理でしょ。」

「柔道やっていますからね」

「ああ、そうか、柔道やっていたのね。それじゃ毎日、来るの無理だわ」

「いや、いいですよ。毎日、四時に行きます。」

「だって、柔道があるんでしょ」

「柔道はやめますから」

松尾はニヒリズム同盟に時々しか行かないことで、柔道部マネージャーの井上茂がたびたび誘うのに閉口していたから、柔道部に行く足取りが重く感じられるようになっていた。

「随分、あっさり言うのね。あたしのために柔道部をやめてもらったりしたら悪いわ」

「いえ、ニヒリズム同盟の井上茂が柔道部にいるので、同盟をぬけだすためにも柔道部を退部した方がいいのかも」

「ニヒリズム同盟の井上茂君ね」

島村アリスはちょっと考え込んでいるという風だった。

「あ、そうそう、この間、田蜜君とその井上茂君らしい、男の子が何人かの女の子を連れていたのを山田商店のそばでちらりと見たけど、あれはどういう関係なのか知っている」

松尾優紀は内心ドキリとした。田蜜をニヒリズム同盟に紹介したことを知ったら、彼女がびつくりするのではないかと思ったからだ。

「いえ、わかりませんね。田蜜君が井上と一緒にだったんですか」

「いえね、井上君という人は一度しか会っていないし、人違いかもしれないわ。」

でも田蜜君がなんだか中学の頃と随分ちがって見えたわ。」

「ええ、僕も今年の四月会いました時、そんな風に感じました。下校中に会ったんですけど随分大人びた感じになりましたね」

「そう大人びたというのかしらね。あんな風に急に変わるとびつくりするわ。でもあなた、田蜜君にどんなこと言ったの？ そのことちょっと知りたいなあ。あなたと田蜜君とで一番最初に話をしたでしょ。あの時も急に変わったわ。」

つまり乱暴な男の子が急に静かになったのね。

それにあの時は田蜜君だけでなく他の暴れん坊連中も静かになったんだから、

びつくりよね。ね。教えて。あんみつの件だけで、あんな風になるわけないわ。あなた何を言ったの？」

「シナリオの題材にでもされそうですね。そう確かにこの田蜜君の変化はビデオ芸術でとらえたらおもしろいかもしれませんね。」

でも彼の変化の秘密をここで言うわけにはいかないのですよ。僕の影響はわずかですよ。おそらく大山さんが鍛えたのでしょう」

松尾はちょっと困ったような表情をした。

「どうして？ そんなすごい秘密なの？」

「ええ、秘密なんです。どうしても秘密なんです」

秘密というよりは優紀自身も本当の所は分らなかったのだ。なんとなく、大山の迫力のことを感じている

だけで、分からないと言うのも躊躇したし、ニヒリズムという言葉を嫌うアリサに大山の話を持ち出すのもためらいがあった。それで、黙ってしまったのかもしれない。優紀が田蜜のことをよく知らなかったせいもある。

「まあ、いいわ。じゃ、これ以上聞くの悪いからやめるわ」

二人はそのあとたわいないおしゃべりをして何分間か費やした後、ビデオ制作の約束をして別れた。

松尾優紀はそれから数ヶ月後、柔道部に退部届を出し、そのあと毎日のように島村アリサの寺院に通うようになった。座禅道場で、一時間ぐらい座った。特に得るものはなかったが、気持ちがすっきりした。

そのあと、最初の十日間ぐらいは、優紀はアリサと二人で、毎日ビデオカメラを持って、隣の町に出かけて行った。

尾野絵市では、二人いつも一緒に歩いていたのでは目立つということもあって、隣の町を選んだ。その町は瀬戸内海の夕日を映すのに格好の公園があった。幸い、天気がしばらく続いたので、夕日を撮るのに雲が邪魔になることは少なかった。

松尾優紀はやっているうちにビデオのおもしろさに熱中するようになった。

そして彼は尾野絵高校にビデオサークルをつくることを考え始めた。その頃、優紀の頭に浮かんだのはいつぞや見て衝撃を受けた「アンネの日記」を思い出し、たまに映画を見たり、日記を見てもますます感銘を深くしていたんで、それとイメージが似た物語をつくりたいという思いが強くなった。それをビデオ映画にすればという気持ちだったので、ビデオサークルを高校に作るというのは必然の成り行きと思われた。

目前にせまった六月八日の生徒総会にかければ部として承認され、予算をとることができると思った。ただ学校側がビデオなどの器械をそろえてくれる予算を十分にとることは最初からは無理という事情があった。ビデオカメラなどは、最初の年度は、誰かが個人負担しなければならないだろうということだろう。

又、部員を八人以上集めなくては部として認められない。松尾は色々な生徒に声をかけた。

岡野光次が入部することとは大歓迎であった。それから一風きわだった感じのする三年生の寺田哲郎という男が入部してきた。

のちに、この寺田が弱冠十八才ながら中々の哲学者で島村アリサを鋭く批判し、ニヒリズム同盟をも攻撃して、独自の人生観を松尾優紀の前に、展開するのである。

彼は貧しきもの、醜いもの、きたないもの、小さいものに異常な関心を示しそれを映像化しようと考えているようだった。だから彼から見れば島村アリサはブルジョア娘と見えたに違いなかった。それから驚いたのは山川広子が入部してきたことだった。

山川はニヒリズム同盟のメンバーで三年生であった。あと一年生の中野静子という丸顔の純真な感じのする素敵な女の子が入部してきた。

あと五人は一年生であった。ともかく十人はそろった。中々集まらなかったのはビデオがないことを知っていたためだろうか

六月八日の生徒総会は無事を通り、部としてビデオサークルは認められた。最初は島村アリサのビデオを借りるつもりだった。しかし松尾はそのことを中々言いだせないでいた。

ある日、優紀は電話をかけた。「アリサさん」

「ちょっと相談があるんですけど」

「何よ。あらたまって。何でも相談してちょうだい」

「ええ、実は、尾野絵高にビデオサークルをつくったんですけど、今年は予算不足でビデオカメラが買えないんですよ。それでアリサさんのビデオカメラを時々お借りしたいと思って」

「まあ、ビデオサークルをつくったの。それはすばらしいわ。もちろん貸してあげるわ。遠慮なく使っちゃおう」

だい。高校生の学園などをテーマにビデオづくりしたら、おもしろいと思うわ」

こんな風にして松尾は島村アリサからビデオを借りることができた。

ところがそれから数日して松尾はアリサから電話を受け取った。

その内容はビデオを尾野絵高のビデオサークルに寄付するということであった。

松尾は遠慮したけれど、島村アリサは自分用にはまた新しいビデオカメラを買うから今まで持っていたのは寄付するということであった。買えば高価なものを、いくら親しくしているからといっても、もらって良いものかと迷い部員や顧問教師に相談したが結局もらうことに決めた。

この顧問教師は島村アリサをかって担任したことがあってよく彼女のことを知っていた。

「島村君、確か、寺院の娘だったね。あそこの寺院は金がいっぱいあるから、ビデオぐらいもらっておいでもいいんじゃない。」

松尾は今まで考えもしなかったことを顧問教師に指摘されてびっくりした。

アリサの寺院には金がたくさんあるということが心にひっかかるのであった。父からは、最近の寺は貧乏だと聞いていたから、

一層、その思いを深くした。

貧しい者の味方である彼女の寺院が金持であることは何ら矛盾しないと思っていたがその時、松尾はふと疑問に思った。

それでその教師に聞いてみた。

「先生、あそこの寺院はそんなに金持なんですか？」

「そりやそうさ。噂によると、チャプリンの映画に出て来る酔っ払いの大金持ちを連想させるようなグフラワー氏の援助があるというんだよ。その人が禅にこっているという話だ。

彼は熱心なクリスチャンなんだけれど、神を信じるのには座禅が有効だと考えているらしい。酔っ払いの金持ちと座禅、おそろしい矛盾だよ」

松尾はなんだかわけのわからない感情になった。島村アリサの寺院にグフラワー氏の資金が流れこんでいるというのは驚きだった。

ただ、彼の耳にこういう情報も入った。このグフラワーは新約聖書の中に書かれている「金持ちは天国に入ることは難しい」を最初の頃、鼻であしらって、クリスチャンでありながら、無視していた。しかし禅を勉強してから、何故かこの言葉を信じるように変化したという。アメリカ左派の主張する上位一パーセントの国民が富の三十パーセントを保有するというのはおかしいと言いつ出したのだ。そして、大企業への重税と庶民への再配分を支持すると言うからアメリカ人には驚きだっただろう。その原因はこの禅道場で三年間座禅したことにあるという。このグフラワー氏で何か訴訟が起こったとかで、堀川善介はアメリカに行っているのだと聞くと、松尾優紀は複雑な気持ちになった。グフラワー氏から、堀川は弁護士として依頼があったのだろう。

酔っ払いの大金持ちか。松尾はなんだか変な感じがする一方、禅が彼らの考えを変えたことに興味を持った。この話を父としたら、今や

寺院の四割は年収は三百万以下なんだ、そういうお寺はいずれ消滅する。島村寺院がキリスト教とも手をつなぎ、グフラワー氏から金を寄付してもらうのも時の流れなのだろうとコメントした。

こんな風な形で島村アリサからビデオを寄付してもらった松尾優紀はビデオサークルでの活動と、日曜日の朝 島村寺院の座禅道場を訪問することを習慣としたのだった。

そして六月下旬の日曜日に、アリサの家で城井高校のビデオサークルの発足をやった。

ビデオサークルの部員は松尾を含めて十二人になっていた。その時は堀川善介がニューヨークから帰国していたから彼もアリサと一緒に同席した。

外はしとしと雨が降っていた。梅雨だ。松尾優紀の隣にたまたま中野静子という一年生部員が来た。彼の正面に堀川光信とアリサが並んだ。他の人達もそれぞれ座った。隣に座った関係上、松尾は義務のように中野に声をかけた。

そして彼女の瞳と微笑を見た時、彼は不思議な気持ちにうたれた。実に美しいと思った。端正な顔立ちも良いが、それよりも控えめな態度にひそむ花のような瞳に魅せられた。アリサが知性の魅力とするならば、中野は森から出てきたばかりの清纯さの魅力とでも形容できるのではないか。

中野と松尾が会話するのはほとんど初めてのことだった。入部の時に、中野が松尾に声をかけた時、松尾は他のことで頭が一杯だったから、ちょっと可愛い女の子だという風な印象しか持っていなかった。しかし、こうして二人で話をしていると実に不思議な魅力を持つ少女であった。島村アリサのはなやかな美しさとはちがう。

確かに地味だ。地味だが美しい。肌は白い。明るそうな笑いをするが、どこかに憂愁の影がある。島村アリサのように高雅な知性が輝いているわけではない。まだ幼さの残っている顔だ。

「なんで、ビデオサークルに入部したんですか」

松尾がするように聞くと、中野静子が美しい抑揚のある声で静かに言った。

「ええ、前から詩を書いていたんですけど、その詩が映像化できたらすばらしいと思って」斜横に座っている今村美恵は大きな笑い声をよくたてて。

少しがさつな感じのする笑い方をする。まるで女子高校生の代表というような傲慢さがちらつく時もあるような陽気な感じである。

言葉は乱暴だし、時々島村アリサが今村の方をふりむいて顔をしかめている。

「今村さん、そんな言葉使いやめたら。もう少ししていねいな言葉を使えないかしら。」

とうとう我慢のできなくなったアリサが一度そんな風に言った。それさえも今村は大きな笑い声ですりどめけてしまう。

全く要領の良い娘だ。それに比べて中野静子是对照的だった。やさしい語り口。おだやかな微笑。

岡野も落ち着いた雰囲気でキーキーやコーヒーに手をつけている。彼の相手はやはり一年生の女の子だ。

顧問という形で入っている堀川と妻のアリサは静かに話をしている。司会は部長の寺田哲郎である。部長は発足者の松尾という声もあったが

三年生の寺田が良いという松尾の意見もあって結局、寺田に決まった。

寺田がみんなの前でしゃべるのを松尾は初めて見た。実に彼は訥弁である。

訥弁だがなんとなく人の注意をひきつけるような所がある。彼は内気なのであろうと松尾は思った。

内気なのかもしれないが、ひどく強い気性を内にひめているようだ。

ともかく、よくわからない男だと松尾は思った。顔つき、一見、陰気であり笑い笑わない。

しかし三年生の中では医学部をねらっているという噂のある秀才でもある。

彼の挨拶は決してありきたりのものでなく、ちょっとどきりとさせるような所があった。

「みなさん。城井高にビデオサークルができました。そしてこのサークルにビデオを寄付してください。高山アリサさんに感謝します。」

作品の内容は軍艦島に象徴されるように、廃墟のような物に目を向けるべきです。

古いもの、汚いもの、貧しいもの、小さいもの、弱いものの中に優れた価値を発見することこそ肝要だと思います。私達はとかくこうした時代の子である最新技術のビデオを持ちますと、ますます華やかなもの、美しいもの、豪華なもの、

美人、高価なものにも映像をしばる傾向がありますが、これは間違いです。

これでは文明の利器で文化の退廃をおこなっているようなものです。

我々はビデオで文化を創造するのですから、もっとも貧しいものに目を向けていきたいのです。」

松尾はアリサの瀬戸内海に沈む夕日をテーマにした彼女の映像詩を思い浮かべた。

アリサは表面的に喋っていることは華やかでも、その陰に秘密の壮大な哲学がある。アリサの場合ははなやかな美しさに目をうばわれているように、意図的に相手に思わせている感じがないわけでもなかった。寺田哲郎の司会によりみんなは雑談したりケーキを食べたり歌を歌ったりした。

堀川が松尾に話しかけてきた。

「松尾君、ビデオサークルで何を映像化したいのだい？」

「はあ、僕の場合、詩ですね。ポエムの映像化ですよ」

優紀は本当は「アンネの日記」に触発された物語をつくり、それを映画化するのが夢だったが、それは今の彼には高嶺の花だった。

物語のアイデアすらまだ浮かんで来ないのだから、他人に言うわけにいかない。

「しかし、そんなものを映像化してどうするんだい？遊びかい」

「いえ、映像のポエムですよ」

松尾は、むっとして答えた。

「君達高校生ぐらいにそんなに簡単にポエムがつけれるのかね」

堀川光信はなんとなく意地悪な語り口だった。彼は実務家としては抜群の才能の持主であった。

しかし今の段階では、不思議とアートを理解できないたちの男で、それに対してコンプレックスを持っていた。

「それはわかるけどさ、君達のやっているのは遊びの域を出ないのじゃないかな。ポエムを映像化するってそのポエム自身、理念がなくて気分で書いているんだろ」と堀川は言った。

「僕は何も理念なんてむずかしいものは創作に必要なものではないと思います」優紀は答えた。

「おやさうかい。それじゃ、気分で書いていることを肯定するわけ。気分なんかで書いたポエムやそれを映像化したビデオなんてどれだけ人の心をひきつけるかな。」

「いや、気分で書いているわけではありませんよ。僕を感じているこの生き生きした美しい世界をポエムにし映像化したいんです。」

「君の感じている世界ってそんなに独自の世界なのかい。君の感じている世界が平凡なものだったら、そんなものを表現したっておもしろくないぜ」

堀川の意地悪な質問は松尾にそれほど不愉快でなかった。

堀川に尋ねられることにより、松尾は自分自身の感じている世界を吟味し理性化しようとするのだった。「僕の感じている世界が平凡かですって。それは平凡とも言えますし非凡とも特異ともいえますよ。僕はここにあるコップや水ですら生き生きとした生命を感じるのですよ。このコップや水の美しさについても感銘することがあります。」

そんなことはありふれたことかもしれませんが、僕は僕のまわりにあるありとあらゆるものが生きているという感動はなんともいえなくすばらしいんです。

石ころだって生きている、ましてや花の花弁や葉の中に染み透っているいのちを感じる時

これはどうしようもなく表現したいという欲望と変わるんですね。

これは僕が持っている感動ですし、これはいつでも感じている

不思議な幸福感ですから、とても表現したくなるんですね。これは理屈ではありません。それから、あなたのおっしゃる理念なんてものもよってつき動かされる表現なんかじゃないんです。

もっと、僕の生きているこの現実の中から表現していくポエムがあちこちにあるところがつているのです」

「ふうむ。君の言うことはなんとなく分かるような気がする。でもね、まだ、君は思想の世界を知らないから、そんなことを言うんじゃないかな。」

僕達人間やそのまわりの宇宙といつてよいのか世界といつていいのか、まあそういったものの中にたぬいている法則を知ることにより思想の深みに我々は達することができるとは思うが、そうした思想を知った時、表現活動である芸術も生き生きと人に訴える力を生みだす人間社会に大きな影響を与えることができるのではないかな。だから君の感じているそのアニミズムの世界もおもしろいとは思いますが、ただそんな風に感じているといってもそれがどんな風に映像化されるのかヴィジョンを描くことはできないのだがね。そう君に同情しているというね。君の感じているそのすばらしい世界は思想によって肉づけされた時、芸術化の道をたどれるんじゃないかな。

もっともこの思想というやつは難物だがね。僕は君の感じているそんなアニミズムの世界は一種の錯角のように思えるね。

つまりキリストのことを考えていけばキリストが見えてくる。つまり幻覚だな。

物をかまえて見ていけばそんな風に石ころまでのちがあるという風に思うものだよ。僕の思想からいえばそんなものはまやかしかだよ。」

堀川は横にいる島村アリサをちらりと見た。島村アリサは終始黙って夫の言うことを聞いていたけど、キリストのことに夫がふれた時、顔をしかめて堀川の話の終わるのを待って言った。

「あたし、あなたの方が自分の思想を世界にあてはめるといふ危険をおかしていると思うわ。だってこの世の中には思想にはいりこんでこない分野だってあるのよ。」

キリストのことを幻覚だなんていうなら、キリストの復活もそうなってしまい、キリスト教はどうなってしまうの。

キリストの言うことと、禅僧の言うことは根底で同じだと父から聞いたことがありますわ。深い宗教の根底は同じなのよ。

松尾さんの見ているアニメズムの世界だって彼が本当に感じていることなのだから、禅の考えと似ているところがあるわ」

「父上はそんなことをおっしゃるのかね。禅僧は突飛なことを言うと言っていたけれど、そこまで言うとは知らなかった。」

ただ、もう君は独立した大人。いつまでも父上の影響の下にあるわけではないだろう」

「そうね」

松尾優紀は堀川とアリサの会話が愛しあう夫婦としてはかなりのすれ違いがあるような気がするのだった。

「父上の思想か」

堀川はそう小声で言って苦笑した。

「あなたは松尾さんにひどいことをおっしゃっていますよ。ねえ、松尾さん。」

島村アリサは松尾の瞳をのぞきこんだ。

「ええ、まあ、僕は堀川さんのおっしゃるようには僕の見ているアニメズムの世界が幻覚とは思いません。そんな風に思ってしまったら人間の見ている世界はすべて幻覚で夢のようなものになってしまいます。そうすれば科学の示す具体的な世界も夢になってしまう危険性を持っているわけです。」

確かに人生は夢のようですけど、僕は自分の見ている世界はやはり表現する価値のある絶対的に美しいものだと思っています。

今の僕にはこれを思想化する力はありませんが、いずれ思想のまな板の上に置いて料理したいと思っています。」

その時、突如横から寺田哲郎が声をかけた。松尾の横にいてみんなの話に耳を傾けていた中野静子は驚いたような表情をして寺田の方を見た。寺田は無表情に近い硬い顔つきで言った。

「松尾君は自分の見ている世界が美しいと感じているらしいがそういう感覚はうらやましいね。僕なんかその反対だ。」

僕の目に映るあらゆるものはひどく醜く見えるんだな。花のように一般的に美しいとされるものは例外だが、たいていの物は、僕には醜悪に見えるんだ。松尾君は石ころが美しいと言ったが、僕は正反対にその道端に落ちている石ころの不条理な現象が実に醜い恐ろしい化け物のように見えるんだ。

僕はこの醜さをビデオで映像化したいんだ。」

「サルトルの嘔吐のまねかい？全く高校生というのはまねが好きだね。若いんだから、真似もいいが、サルトルの嘔吐の意味が分かっているとは思えない」堀川は渋い表情で寺田の話さをえぎった。

禅の主客未分の世界という素晴らしい世界とは、逆に近代人が落ちいりやすい主観と客観が極端に分離して、存在には意味がないと思った時の、存在の醜悪さというイメージが寺田にあったのだろうか、堀川の頭にそんなイメージが浮かび寺田に対して苦々しく思ったのだろうか。

「いえ、サルトルの本は読んでいませんから、真似しようがありません。先程も言ったように、軍艦島だって、かって美しかったし、人が生活し活気があった。それが、やがて廃墟になる。そこに人間の悲哀がある。悲しみがある。そこに美を感じるのです。その、廃墟の延長として、僕は醜いものの中にこそ人

生の価値がひそんでいると思っっているんです。

この醜さを徹底して描いていく時、逆に美が立ちのぼってくるのです。

それから松尾君のようにコップを見ていて、それを生きているという風にとらえるアニメズムの世界は僕自身、肯定も否定もしませんけど、コップが美しいなんて感じられるなんてちょっとうらやましい気が致します。

だって僕は事物をすなおに見るように心掛けているつもりなんですけど、コップや石ころなんていうものはそんなに生き生きと躍動なんかしていませんよ。僕には人生は醜さの方が真実だと感じられるんですね。確かに花は美しいけど、花を美しいと感じる欲望が美意識をひきおこしているのではないかと思います。

花じゃ、はっきりしないから美人を例にしてみましょう。女の人を美しいと思うのは男だけだと思うんですよ。猫や犬

はそうは思わないでしょうし、人間だって仙人みたいになつたら、そんな風に思わないのじゃないかな。やっぱり男の欲望が女性を美しいと思わせるんですよ。それと同じことがあらゆる美を追求する気持ちの中にあるような気がする。

そこで、優れていないものの中にこそ、既に美の芽があると言いたいです。優秀な人間を良しとするのはその人間の利用価値に注目するということ

人間のエゴなんです。むしろ何かの欠点を多く持っている人間こそ、優劣を無視した人間の尊さとか人間の価値の根底を教えられる気がするんだなあ。」

「それで君はどんなものをビデオで映像化したいのだね」

堀川はタバコをふかした。タバコをふかしているのはこの席で彼だけである。

「そうですね。僕はさしずめ貧しい中年の男を描いてみたいです。会社をやめたいと思っているがその会社をやめれば

もうすでに他の会社では雇ってくれないということ、住宅費が高い都市に住む彼にはホームレスに近い生活が待っているという恐怖がある。

この恐怖を描いてみたいですね。現代社会の悲しみみたいなものを表現したいのです。

貧しくて悲しみに満ちあふれているが、へたな金持よりも実に人間的な人物を映像化するので。

彼は醜い感情を経験するだろうし彼の多くは平凡で醜さがつきまとうが、人間としての真実がそこにはある。

そのような意味で僕はゴーゴリの外套のような小説を評価するんです。」

ゴーゴリーのは、貧しい役人が思い切って、新調した外套を夜道に迫いはぎに奪われて、失意の内に死ぬ。そのあとに、幽霊が外套を探しに夜な夜な出るという話だった。

「アリサの書いた『外套』というシナリオとは大分おもむきがちがうようだな」

堀川がそう言った。アリサは外套というシナリオを書いていた。

それはある有閑階級の外套などの衣服に感ずる哀歎を軽いタッチで描いていた。アリサはすでにいくつかシナリオを

最近、自費出版していたが、この外套も寺田哲郎は読んでいた。

「ええ、そうですね。随分ちがいます。アリサさんはゴーゴリを意識されて書いたんですか。」

「別に意識はいたしませんでした。ゴーゴリは高校生の時代に読んでいましたのであたしがそのシナリオを書いた時、

心の片隅にゴーゴリがあったかもしれませんが。」

「そうですね。でもアリサさんの書かれたシナリオは僕の理屈から言えばあまりにも美しいものばかりに目をむけておられますね。

僕はアリサさんにゴーゴリのように醜いもの、貧しいものにも目を向けて欲しいな」

「あたしにはあなたのおっしゃる醜いものの価値というのがよくつかめてませんの。

花や夕焼けは美しいですし、自然界は美しさに満ちています。人間のつくるテパートに飾られている商品も美しいです。

そうした美しさをむしろあたしは描きたいと思っているのに、あなたはまるで反対のことをおっしゃるので

あたし正直言っただけくらいでしたわ。確かにキリストは貧しい人達の味方でした。でも貧しい人達には当時のインテリ層であるパリサイ人よりも高い倫理と愛を要求しているんです。こうしたものは美しいと思うのです。

あなたのおっしゃる醜さというのはことさら誇張して無理に人間の醜さ、ものの醜さを取り出しているような気がしてなりません。」

島村アリサはちょっと緊張した表情でそう言った。

「寺田さん」と松尾が口をはさんだ。

「僕はね、世界とか宇宙とか存在というのはね、人によってちがって見えるんだという気がするんですよ。だから同じコップを見て僕のように美しく生きているという風を感じる人と君のように醜くて不条理だと感じる人が出てくるんですよ。真理は色々に表現されるという風に思うんです。ある人はキリスト教を信じるでしょうし。ある人は科学を中心とした合理的なものを信じるでしょうし、僕みたいは今見ている不思議な生き生きした生命に満ちている世界だけを信じているものもある。」

「うん、松尾君の言うのは感覚的なことね」岡野が急に口をはさんだ。

「だが真理は一つだよ。この世界は物質で統一されていて、その物質の運動が世界を創造しているということだね」岡野はそう言って目をキラキラ輝かせた。

「ハハハ 随分、議論の仲間がふえたね。僕はね、そんな真理はおかしいと思うよ。

なんで物質だけしかないんだ。物質を認めているのは人間の意識なんだよ」堀川はひややかな調子で言った。

松尾優紀の心の中に色々な考えが錯綜するようになった。それにしても、アリサは何で。この場で「銀河アンドロメダの猫の夢」で、人類から核兵器と恐ろしい戦争の道具を少なくする、つまり壮大な軍縮の提案があるという物語の話をしないのだろうか、優紀は思った。

高校のサークルには荷が重すぎるということだろうか。まだ具体的な形をとっていないからだろうか。そ

れとも、アリサが主体になってやるには、もっと世間という広い場で取り組むということだろうか。

ここは、若い人のポエムが具体的にどんな映像になるかという実験場と位置づけているのかもしれないと、優紀は思った。

「銀河アンドロメダの猫の夢」で、人類から核兵器と恐ろしい戦争の道具を少なくする軍縮の提案という彼女の言葉が思い出された。

再び、優紀の頭には、みんなの議論の中に出されたアイデアのような考えを吟味したが、彼には、どれか正しいと断定することはできなかった。

大山さんの言っていることすら正しい要素があるような気がしている。人はさまざまな意見を持っているてその考えのみが

あたかも正しいと信じこんでいるような話しかたをする。

松尾も同じであるが、自分の考えの土台だけは、自分の目で見、自分の頭で考え、確かめたことだけを正しいと思うことに決めた。

彼の目の前にひろがるアニミズムの世界は彼にとって確かなものだった。

花はもちろん生きていたし、青空を走る雲も色々な形に変形する生き物に見えた。

町の中のさまざまな家やビルはまるで複雑な構造を持った細胞にも思えるのだった。

風や嵐や雷ですら、生きている自然の贈り物という感じを持つことがあった。優紀は自分の感覚に誇りを持つと同時に、

不思議な感じも持っていた。

この神秘的なアニミズムの世界をビデオで映像化したいと思った。この点で学校のビデオサークルで制作する時、

寺田哲郎とよく衝突するようになった。寺田は醜いものに目をむける勇氣を持つ必要があるということ、ことさらに

映像の中に醜悪なものを持ち込もうとした。

ところが松尾は結局、美しいものを見い出してこういう姿勢があった。

たとえばコップをビデオカメラに映そうとする場合も寺田の場合はごみための中の割れたビンを映そうとする。

それに対し松尾は台所のコップに水をいれたりビールをいれたりワインをいれたりして色々な角度から映像化し、

そこに生き生きとしたいのちをクローズアップし、そのいのちに見い出される美に人を感動させようとする意図があったりした。

ビデオサークルでは寺田哲郎と松尾優紀の美的感覚の相違とは別にそうした美を映すことよりも現実動く社会の構造や流れを映像化したいとする岡野光次がいた。

彼は社会の変革によってこそ人間の意識も変革されるのだから社会参加の中にこそ正しいものの見方を
知ることができるのであり、生き生きとした人間の生きる希望はそうした人間どおしの連帯に求められ
るのであり

ビデオ制作もそうした人のつながりを重視すべきであると論陣をはった。まだ他にもさまざまな
意見があり意見を調整するために彼らは放課後よく議論した。

夏の終わり頃、島村寺院で座禅をやった後、ここでビデオサークルの会合をすることを許された時があっ
た。座禅には出ないで、サークルに出て入部してきた面白い男子がいた。宮沢賢治のファンという村奥
という小柄な二年生だった。彼の入部の動機は、部員を集めるための講習会をやった時の映像詩と議論
の身を聞いて、興味を持ったということらしい。

優紀とクラスは違うが、廊下ですれ違い、顔だけは、よく知っているが、話をすることがない。彼は来た
そうそう「銀河鉄道の夜」の話をした。アリサはそれを聞いていて、目にうっすらと涙を浮かべたこと
に、優紀は気がつき胸をうたれた。

それから、ビデオサークルがどこで開かれるのであれ、彼の独特の語り口を聞くことになった。一つの
理由に、アリサが禅の立場から、宮沢賢治の法華経に影響されたと思われる話が支持され、またそれが
若者の議論に花を咲かせたからに違いない。

ことに、如来受量品の解釈に、これは素晴らしい文章だが、天なる美しく妙なる音楽と曼陀羅華の花の
飛び降る美の極致があり、浄土の描写と娑婆世界が重なっているのはいかなる深い意味があるのか、と
いうことは村奥の好きな話の場面だった。

アリサは、リサ・ランドール博士の五次元異世界にも関心を持つらしく、それを村奥の話を機会にして、
そうした異次元の話に持っていき独特の浄土を詩のように語ることもあった。

そういうことは映像詩にしたら、どういう場合が想定されるのか、そういう話になると夢中になること
があった。それから、村岡は地球温暖化を阻止しなければという話題もよく出した。それには、深い
共感を感じているのが、アリサの表情から優紀は感じ取ることが出来た。

こんな風にして、時が流れた。議論とビデオカメラでの、映像詩の創造。高校の授業のあとにサークルと
いう集団で行われたこともあり、優紀とアリサの二人で、瀬戸内海の夕日をとったこともあり、そうし
て彼らはその映像を見て議論をした。文化祭の時に、その映像詩を皆に見てもらい、批評をしてもらっ
たりした。

ほめてくれる人はいたが、優紀にも、アリサにも満足の出来といわれるものは中々作れなかった。
そうこうしているうちに浄土のような光が時々顔を見せたあの秋も紅葉という美の局面を見せて、あの
冷たい冬の到来を目の前にちらつかせる季節になった。人生には予想外のことが起こることがある。

7

7

ある朝、優紀が登校した時、二年の靴箱の所で、人だかりができていた。珍しいことなので、優紀も後ろから見て、生徒のうわさを総合すると、二年の誰かの答案が貼られているのだった。しかも、零点ということで、いじめではないかという声も小声であった。

優紀はクラスも違うこともあり、いつものように、教室に向かった。

そういえば、彼の今回の成績はいつもより悪い。いつもは、上位には入らないまでも、ある程度の成績をとれていたのに、今回はビデオサークルの映像に夢中になり、そういう関連の本を読むために、市の図書館に通い、試験勉強をしなかったせいもあるけど、中レベルになっていた。

ところが、翌日そのいじめられていたよそのクラスの生徒が自殺したということを教室で聞いた。

授業は中止になり、全校集会が開かれ、教師から説明があった。いじめは前からあったようだ。それをとめられなかったことに対する教師の謝罪があった。

優紀は思い出した。アリスからもらった綺麗なハンカチを落としたのを、後ろから注意してくれ、拾って手渡してくれた子でないか。彼の顔をよく覚えている。丸顔の童顔で身体は小柄、目は優しい真珠のようだった。

それにビデオサークルの村奥と同じクラスなので、ちょっとうわさを聞いたことがある。漫画の上手な子で、皆をよく笑わせていたが、それが原因で、いじめられたと思われるが、その時はおさまっていたと思い込んでいた。

優紀は市立図書館で読んだ本の中身が噴水のように、頭の中に吹き出し、同時に靴箱である零点の答案用紙を見た時、何であのクラスに乗り込み、あんなことをする奴を問い詰め、いじめられていた子に温かい言葉をかけられなかったのか、悔恨の涙がにじみでて来るのだった。クラスが違うのだから、そんなことはまずやりくいことである。それに、それは教師の仕事であると分かっている、おれはアリスを困らした田蜜という暴れん坊君を良い方向に導く不思議な力を持っていたでは、ないか。それなのに昨日、靴箱の所でいじめの現場を見ながら何もなかった。このくやしさはどこから、来るのか。彼は生徒総会では、教師の話は上の空で聞きながら、自分の成績のことにも思いめぐらしていた。

廊下には学年上位十位までの氏名が張り出されていた。

優紀は何か学校という存在に嫌悪を感じた。

市立図書館で読んだ思想や哲学や宗教の本を総合的に判断すれば、今の点数をおおる競争させる学校は人間教育をしていないのではないかという重大な疑問が膨れあがった。目の前で、生徒の自殺がそのことを実証しているのではないかという思いが膨れあがった。アリスですら、教師をやめてしまったでは

ないか。アリサが辞めたのは乱暴な男の子がいるという幻滅感よりも、寺院の中でアリサの父親の住職から学んだ禅の影響が大きいのではないか。
学校で教える教育が知識の競争の場になっていることに対する絶望感から、映像という中に理想を表現しようという気持ちに変わったからなのかもしれないという憶測すら生まれた。

ビデオサークルの活動を続けていながら、優紀はこの絶望感から逃れることが出来なかった。
ある晩、彼は次のような奇妙な詩をノートに書いた。

「時は今、人生には海よりも深い何かがある
ニヒリズムに惑わされない愛と慈悲の瞳がいたる所に
あらゆる空間に昆虫の目のように生きている
勝利の汽笛ばかり鳴らしたがっていた

あの船の煩惱のうめき
それが希望と絶望の振り子のように、
青春の魂の苦悩となった。

見よ ー 君の瞳に映った慈悲と愛の花束を
今より永遠に向かって歌うのだ。

時として、雨雲の中に突如現れた青空のように
君は不思議な瞳を詩人に向けた

それは遠い山の森を流れる小川のせせらぎの音を聞くかのように
それとも、駅前の人ごみの中で、優しい声の響きを聞く時のように
それは場所や時間に限定されない
宇宙のありとあらゆる美しい所で

詩人が出会った君の瞳の奥の光

君の瞳は荒れはてたニヒリズムの部屋に光を向けた。

水が月を映すように

君は物に応じて姿を現わす

ああ君よ

君の瞳の中にあらゆる愛と大慈悲心が埋蔵されている
ダイヤモンドや石油よりも重要な 深い愛の光が
きらめく星のように、大空に存在するのだ
夢見よ

君の瞳に輝く光はあらゆる空間に存在して

愛と慈悲の気分が高揚する時に

そのやさしいまなざしをすべての人に向けるのだ

深い意味のある愛の光が

そのまなざしに隠されている

人はそれに感動して自然のいのちを見る

そこには緑と水に潤った大地と空がある

君の瞳には光の神殿がある

穏やかな春の日の散歩道

子供達の遊び声

どこにもかしこにも生命の賛歌が聞こえる

優紀の詩はある種のひらめきによって、つくられたのである。おそらくは、それまでの青春の経験や考えがまだ若い彼の魂に流れこんだのだろう。どちらにしても、競争という価値観を大きくかかげる場所にいたたまれなくなった。彼は苦しんだ。

ある晩、久しぶりに「アンネの日記」の映像をみた。ナチスの軍に追い詰められたアンネの一家とその知人の人達が会社の二階の裏部屋に一年以上も隠れ、そのあげく密告によって発見され、収容所に送られる。その間のアンネの希望と絶望が優紀の胸を突き刺した。何故、ナチスはこれほどユダヤ人を憎んだのか、ある程度の歴史の輪郭は優紀の頭にあったが、彼のその時のいじめによる自殺問題と重ねると、これは巨大な悪魔のいじめではないかという思いが膨れあがった。いじめは大人の社会にもあるというのは報道でも、散見していたし、父からも耳にしたことがある。

大人社会がそんな風だから、子供にも起きる。現代でもあちこちで、戦争が起き、その被害は市民におよび、子供達にまでその恐ろしい魔の手が伸びている。

それに、核兵器は増強されて、このまま軍拡が進めばいずれアリサの言うように、核戦争が起きる可能性が出てくる。そのためには核兵器をなくし、ハラスメントなどの大人のいじめ社会の体質を良い方向に向けなければ、人類の存続の危機すら、来る。それを克服するには、アリサの言う愛と大慈悲心による前進しかないではないか。現状のように、知識の競争などしている場合か。

そう思ったとき、松尾優紀の頭にある決意が持ち上がった。

ある日曜日の朝、優紀は父に尾野絵高を退学したいと申し出た。今までの悩みを吐き出すように言った。「辞めるのはいいが、原爆資料館に行くのは優紀の映像の技術が出来上がってからでいいのではないかな。」

「でも、同じ広島ですから、直ぐ行けますよ。僕は小学校は東京だから、全く見てないので、友人はみんな小学校の見学で見てショックを受けたと言っていますよ。」

アリサさんの言う核兵器をなくす映像をつくるのには、早い方がいいのでは」

「戦争は悲惨だ。その悲惨さをしっかり受け止め、核兵器を悪と断じ、それをなくそうという映像を作るには、その映像を見る世の中の人間がどういう人達で構成されているかという社会勉強もしておく必要があるということだ。」

父はそれ以上は言わなかったが、優紀は父の言葉に従おうと思った。

そうした悩みの中で、優紀は尾野絵高を退学した。理由を知らない周囲の者達が猛反対したが、彼の父はアドバイスをしただけで、許してくれた。もちろん父にだけこの秘密を言ったこともあるし、優紀の潜在能力から見れば、高卒の資格はいつでも取れるという気持ちもあったようだ。

高校三年への進級も間近い二月のことだった。しばらく松尾優紀は貯金した金を全てはたいて、自分のビデオカメラを買い、作品をつくることに没頭し始めていた。

それが出来あがった四月頃その作品の試写会をした。瀬戸内海の詩情をたっぷり撮った三十分ほどの映像だった。

アリサや尾野絵高のビデオサークルの仲間を呼んだ。優紀はこの作品でどうのこうのという野心を持つにはまだあまりに若すぎた。優紀は作品のことはともかく、いつまでもぶらぶらしているわけにもいかないでアルバイトをしようと思っていた。もちろん彼がめざすところはシナリオライターであり、ビデオ映像作品の創作である。しかし現実社会を知らずに良い作品が書けるとも思っていなかった。こんな風な思いが彼の頭の中を横切ってはいたが、この四月の試写会はある一定の成果をあげた。三十分ほどの映像ではあったが、松尾優紀の持っているアニメズムの世界が美しく描き出されていた。しかしまだ、周囲に認められるというのにはあまりにも道は遠かった。

アリサがほめてくれたのは嬉しかったが、「どうして高校を辞めてしまったの。相談して欲しかったわ」は胸にぐさりときた。

「映像をやりたいのです」という優紀の顔にアリサは驚きの表情をしたのは意外だった。それでも、はじめの問題などの細かい事情を話したら、納得してくれ、アリサも今作っている映像の準備が整ったなら、手伝ってほしい時には声をかけるわと言ってくれたので、何かほっとすると同時に不思議な感動の涙が浮かぶのだった。

優紀は喫茶店のボーイのアルバイトをするようになった。このことに対しては父からの反対があった。アルバイトのようなものでなく、しっかりとした職業につけという忠告だった。だが優紀はシナリオを書くということ、アリサの映像づくりに参加するためにも、自分の資金づくりということからも、アルバイト形式の仕事の方が都合が良いと思われた。

ボーイの仕事は単調であった。確かに色々な人間が出入るという面白さはあるが、客との間にコミニケーションがないので、毎日が静かに過ぎ去っていった。彼は身体を仕事の中で動かす楽しさと同時に、初めて仕事の単調さの中に、日々が過ぎ去っていくという疎外感を味わった。

仕事を終えてから本を読んだり作品を書いたりした。そのうちボーイにすっかり慣れた頃、父がある仕事を持ってきた。ルミカーム工業の工員として働かないかという話だった。その会社の社長が父の遠

縁になるということで、それまでそれほどの付き合いがあったわけではないが、最近の偶然の出会いから、息子の話が出たようだ。そんな大きな会社の社長に、聞いたこともない遠い親戚がいることが不思議に思われたが、父も過去に数度しか会っていないのだが、遠い親戚であることには間違いなく、父の又いとこの仲介で会ったのだそうだ。

それで、松尾優紀はルミカム工業の非正規の社員として入社した。会社では、ロボット、電気製品など、多くの製品を多角的に伸ばし、急速に伸びようとしていた。

彼は工場に配属された。彼はそこで多くの友人と組合という労働者の組織を知った。十八才の九月である。彼は仕事の内容を覚えると、頭の中は映像の勉強のことで一杯だった。

ただ、会社は長時間労働なものには参った。退社するのは夜の十時頃だった。若いから、苦にならなかったが、自分の時間がない。唯一の時間は土曜日の午後だった。

そうした時間に松尾優紀に近づいてきたのは二十五才の班長熊野敏夫という人であった。この人は大変小柄な人であったが、俊敏な行動力の持主であった。すべてが小づくりで身長は百六十センチに満たなかった。やせて青白い顔つきから想像できないような言葉の洪水と情熱を感じさせるような人であった。ひどく論理的な話が得意でいつも冷静さを失わず、たんと静かに語る調子は平凡でない人柄を感じさせた。そして熊野はひどく気が強くそのしまった唇は一種の威圧感を人に与えた。彼は高卒で工員になったが夜は夜間大学に通っているという話だった。熊野はルミカム工業で組合の活動家として知られていた。熊野の場合、松尾優紀にとって職場の先輩として現われたわけだが、その他に友人としてつきあったのには何人かいた。一番、変わっているのが中肉中背で丸顔の顔つきをした飯田正道という男であった。この男はまだ二十才になったばかりでひどく変わった服装をすることで知られていた。朝オートバイで出勤、真っ赤な服というのも若い人にはめずらしくないが、彼の場合、色もさることながらデザインもやはり奇抜。彼はいつも優紀の横で仕事をしている。その他、遠藤洋介というひどくヨガにこっている男も友達になった。彼はヨガをマスターし、太極拳とミックスし、独自のヨガをつくり、それを全世界にひろめるのだという途方もないことを考えている二十一才の青年であった。最初に親しくしたのはこの三人である。

よくコーヒー店に行き話し込んだ。松尾優紀は、ビデオに関する自分の夢を語った。彼は瀬戸内海だけでなく、全世界の町を歩き、その町のイメージを映像化できないかという夢のようなことも語った。本当は核兵器をなくす映像と気象温暖化を食い止めるビデオ映画をつくるのが本命なのだと言った。本のだが、賛同されるか分からないので時期を見計らった。

それで、普段は瀬戸内海を舞台にした映像詩や、日本や世界の町を歩き、その町のイメージを映像化出来ないかという夢のようなことも語った。

尾野絵町についても一つの作品をつくってみたが、彼の考えている芸術作品としての町の美にはまだほど遠かった。テレビでよく海外の紹介や日本の町の紹介があったが、松尾優紀にとって町というのは単なる景色であってはならなかった。又、単に人の集まる場所というのでもなかった。

そこには数々のドラマを秘めたロマンが心臓のように町の中に脈打っていないかならなかった。

広島もそういう視点から、考えていた。原爆が落ちる前は普通の生活が流れていたはずだ。そして原爆資料館を訪ねてみたいと思い、悪の極致としての原爆の惨状を目と耳で知り、アリサの「永遠平和を夢見る猫」の映像に、出来れば自分もその創作の仲間に参加したいと思っていた。

8

8

晩秋、紅葉の頃、松尾優紀と彼らが話すチャンスが訪れた。

熊野も飯田も遠藤も原爆資料館を見ることには、賛成し、見に行くことは良いことだと言った。核兵器禁止のテーマの映像の話は大きすぎて、そういうことに多くの人が良い反応をして応援してくれるかは未知数だぞ、中には中傷する連中も出る可能性もある。つまりかなりの冒険だという結論だった。

熊野だけはそれに、加えて、シナリオがうまく作れていい映像が出来れば、つくることはおおいに結構な話だが、それで核兵器が軍縮の方向に向かうほど、状況は甘くない。それでも、見る者の世界的な広がりがあれば奇跡がおきる可能性がゼロではないかもしれないと言って、微笑した。

ただ、そういう難題だから、少し時間をかけて作り、それまでは職場に山積している問題をテーマにした作品を作って欲しいし、こちらの方は現実化の希望があると主張した。

彼等三人の青春の夢ははずみ、コーヒー店での話題はつきなかった。仮にコーヒー店を舞台にしても、表現すべきことは山ほどあるはずであると言ったのは遠藤だった。松尾もそう思った。今の自分にはまだその力がないので充分に表現することはむずかしい。シナリオにしてもビデオ作品にしてもこのコーヒー店を描くことはできるはずである。これほどコーヒー店が犯濫してそれぞれのコーヒー店はそれなりに個性を持っているはずなのに自分の目はそれらをすべて画一化してみているのだと遠藤は主張した。遠藤は映像をみんなが見るように見えては面白いものを作れない。奇想天外な角度から見るべきだと主張した。

「ゴッホを見る」と遠藤は言った。小柄な遠藤は趣味に油絵を描いているらしかった。

優紀は全く同感だった。

三人とも遠藤の言い分に依存はなかったので、遠藤や飯田と松尾優紀はよくコーヒー店を観察し始めていた。ウェイトレスやボーイの立ち居振舞から客の出入り、テーブルの置き方、壁に貼った外国の絵や

流れてくる音楽。一時は全身を集中してまわりに気をくばったものだった。そしてこのことで三人は自分の感想を言って、話を盛り上げた。

沈黙がちだった飯田は唐突に、俺は子供の頃から、昆虫が好きだったが、最近その昆虫が激減して絶滅しかけているのが沢山あることが心配だと言った。中肉中背で、白い皮膚の輝きと彫りの深い顔立ちを持つ男だった。彼はそういう映像もあっても良いと思うがなと言った。

優紀は当然そういう話は聞いていたから、気象災害と同じように、先の目標としては取り組むべき課題だと言った。

「そんなのんびりした話ではないんだぜ」と飯田が向きになって言ったのが優紀には頼もしい味方を得たような気分になった。

「そうさ。気象災害も核兵器の軍縮の問題も絶滅危惧種の問題も人類の行先の問題とかかわっているのに、のんきに争いばかり続けている人類というのは、本当に利口なのか疑わしいぜ」

1997年には、京都議定書で、参加国で温室効果ガスの排出量削減が義務づけられている。そんなことも話題になった。何で日本は参加しないのだという飯田の怒りに満ちた言葉も印象的だった。

そういうことで、土曜日の午後は四人の談笑の場となった。

会社での彼の仕事場は、やりがいはあるが、工場の暑さと騒音とオートメ化から来る退屈さには忍耐が必要だった。

熊野は長時間労働を減らすべきであることを時々話した。熊野の趣味は音楽と映画で、そういう話になると目を輝かせた。

「俺は寅さんと、チャプリンが映画を見る原点だった。なにしろ、親父がこの映画のファンでしょっちゅう見ていたからな。結局、俺もその付き合いで、大人の映画ではこの二つが胸に来る最初の映画となった」と熊野は笑った。

熊野の映画談義は長かったが、優紀はそえもののように、死んだ祖母に勧められたアンネの日記の話をした。

そしたら、熊野は興奮したように、ナチに対するレジスタンスの映画の話を喋った。

その一つに、「戦場のピアニスト」があった。

その後、優紀は熊野からDVDを借りて見て、アンネの日記と同じような衝撃を受けた。

ユダヤ人に対する差別の命令が出る。例えば、腕にユダヤ人であることを証明する腕章をつける。所持金はいくらまで。公園に入ってはいけない。

優紀は見えて「信じられない」と口走った。

ユダヤ人はゲットーに転居せよと言う命令が下される。

大きな通りを沢山のユダヤ人が行列をつくるようにして、ゲットーに移動している。小ゲットーはある程度裕福な家庭のユダヤ人。大ゲットーは貧しいユダヤ人、そしてユダヤ人警察。

「こういう差別的支配は、支配者がとる常套作戦だな。今だって、格差社会が問題になっている。格差がある方が権力を持つ側は支配しやすくなるのさ」と熊野は言っていた。

一流のピアニスト、シュピルマンの一家は小ゲットーに行く。そして一家をささえるために、レストランでピアノをひいて金を稼いだ。

やがて、そこではばくして見たものは恐ろしい。ドイツ軍が別のアパートに入ってきて来るのが窓から見える。軍人はユダヤ人一家を脅し、一家に「立て」と命令する。テーブルの前に立つ一家。立てない車いすの老人。その老人に向っても、「立て」と言い、窓から放り出す。軍は多くのユダヤ人をアパートメントの外に出し、逃げるために走り出す人々を狩猟の的にように次々と射殺していく。その様子を窓からシュピルマンは呆然と見る。

再びコーヒー店で、熊野に感想を言う機会があった時、

「あれがあゝの素晴らしい文化を生み出したドイツの軍隊のすることかと驚いた」と優紀は絶句した。

「人間は落ちれば、そこまで落ちるということよ。気をつけねばいけないのは、普通の善良なドイツの市民がそれを普通のこととして見ていたことだ」と熊野は言った。

「アンネの日記の最後は密告だね。ああいう所で、アンネの一家をかくまう人達と、密告する人間がいるということだね。」

この差は魂の差だと思っね。」と優紀は言った。

テーブルの上の花瓶に一輪の黄色い水仙の花が美しく咲いている。それが魂の象徴のように優紀には思えた。

ファウストを書いたゲーテを生み、シラーの「百万の友よ、手をたずさえよう」という詩を音楽にした偉大なベートーベンを生み出した国ドイツから出てきたこととは思えないということでは、熊野と優紀の話は一致した。

「ゲットーから、ユダヤ人が列車で移送される。未来にどんなことが待ち受けているのかも知らずに、男も女も子供も老人も、家畜のように、つめこまれるのだ。あれも凄いな。人間扱いされていないのだからね。その差別というのが原点にあるのですよ。今の日本は法の下の平等に基本的人権によって、人は守られている。しかし、差別は人間性の中にあるものだから、普段から、芽はつぶしていく雰囲気は社会に作っていくことが大切なのさ」

やがて、陽射しが春めいてきて、梅も咲き、桜の季節が楽しみになってきた頃になると、こんな長い話題はコーヒー店の外にテーブルと椅子の並ぶ所でやるが多かった。さんさんと降り注ぐ陽光の下に青春の話題を盛り上げるのは楽しいものだった。

そこからはデパートとビルが二つ見え、その間から海の方に、少しばかりの桜並木が見え、桜の枝の合間や、桜と桜の樹木の合間から、瀬戸内海が綺麗に垣間見える。

デパートの反対側に駅があり、彼らのよく行くコーヒー店もあった。だから、路面電車がくると、少々賑やかになる。しかし、周囲は薔薇園になっていて、駅は薔薇園に囲まれているようである。会社の工場はデパートの横の道を通って、瀬戸内海がもっと広がる海に面した所にある。

話が労働問題になることもある。

熊野は先輩ということで、会社の問題点などを少し早口で話すこともある。

「まあね、でもそんなことは今の僕の関心事には入っていないんだ。だいたい、僕は機械がきらいなんだな。」

工場に勤めていてこんなことを言うの悪いんだけど。僕はああしたオートメ化した工場の中で人間が歯車のようにされ、

毎日メーターだの不良品探しだのということで、目の神経を疲労させているのが本当にいやなんだな。

でも生活費をかせぐためには仕事は必要だ。だからこそ、僕は余暇の時間に音楽や映画を見ることを楽しみにしているんだ」

ブルーのベレー帽を被り、ブルーのジャケットを着た遠藤はそれまで禅の坊主が瞑想にふけているような顔をして聞いていたが、突然にやにや笑いながら言った。

「へえ、熊野さんみたいな人でもあの工場でそんなに神経が疲れますか。松尾君が言うならわかるけど。」

熊野さんがそんな風になるとなんだかおかしいな」

「どうしてさ」熊野はちょっとおこったような顔つきをした。

「遠藤君のように問題意識のない人は困るよ。もう少しね、工場というものの非人間的状態について真剣に考えるべきだよ。」

どんなにタフな男だって、あの工場の仕事は退屈であり、創造性に欠けるのではないかな。

全くほとんど、機械が自動的に製品をつくりあげているんじゃないか。

おれ達はいったい何をやっているというんだ。全くの単純作業さ。」

遠藤が今度は真剣な表情になって、浅黒い顔のひたいにすじをつくりながら言った。

「でも、そういう工場に自分から進んで入社してきたんでしょ。不平ばかり言ってもしょうがないような気がするんだがな」

「そりやそうさ。ただ今後のことを思うとね、今にももう少し高度なロボットが開発され我々のやっている仕事すら必要でなくなり工場は無人工化されるようになる。そうしたら我々労働者はどうなる。まあ失業だな。企業はどうなる。企業は労働者がいなくなれば賃金を与える必要がないんだから、その分だけ利益があがるんだな。つまり企業をにぎっている連中はもうけるチャンスが増加し、我々労働者は失業し餓死する機会が多くなるというわけさ。」

「ロボットが発達すれば、労働者の労働時間を減らして、生産性があるから、給料を増やせるといういい面もあると聞いたことがある。それに、労働時間を減らして、労働者を雇えば失業者が減る」と遠藤がボソッと独り言のように言った。

松尾優紀は熊野と遠藤の熱弁を聞きながら、視線をコーヒー店のガラス越しにむけ、そこから見える庭の隅を雄然と歩く猫の姿を見ていた。全身きれいな黄色でおおわれたかなり大柄な猫だった。会社の太った重役が十円玉をおとして、床を探しまわっているような一種のおかしみとこっけいさを持っていた。外は冬を越えもう春だと思うと、嬉しかった。猫の好きなアリサや中島静子を思いだした。

会社に入ってから、二人に会ってない。

そのことを思うと、何か心の中にぽっかり穴が空いたような寂しさに襲われる。

ただ、アリサのシナリオは「永遠平和を願う猫の夢」ではなかったか。

核兵器のない世界、全く夢のような話なのかもしれない。そういう理想にチャレンジする彼女は魅力的ではなかったか。

彼は猫から、ふと妙な考えが頭に浮かんだ。

この猫が世の中を支配するようになったら、地球はどんな風になるのであろうという妄想である。

彼は前からビデオ映像の中にSF的町という構想を持っていたから、このことについて考察してみることは価値のあることであった。

彼は単に猫だけの世界ではおもしろくないし、猫が人類を支配する必然性もうすいからそうした猫族の人の天下への橋わたしの役としてAIロボットを考えてみた。

最近、新聞などにひんばんに登場するAIロボットが頭の中に鮮烈に浮かびあがった。

つまり歴史の順序としてはまず人類の科学技術の繁栄があり、ついで優秀なロボットが発明されるようになる。

このロボットは色々な面で人間とほとんど似たような行動がとれる。

芸術や哲学にはタッチできない。けれど、いわゆる機能的な人間の仕事は全部代行できる。人間よりもはるかにスピードがはやく能率的である。

最初、このロボットの需要がどんどん増加しロボットの大衆化時代が到来する。ロボットはかつてのお手伝いさんのように、各家庭で使われるようになった時の風景を想像してみるわけである。この時、人間の気がつかないうちに、ロボットは意識を持ち始め、色々考えることを始めているだろう。

AIロボットは人間の勝手な振る舞い、特に、軍拡を続けそして核兵器を持つことになんともなくやりきれない気持を抱いている。それに、人間の社会には経済格差、貧しさ、権力を持つ者のハラスメントと色々、問題がある。

そこで、真の友を人間よりも各家庭に飼われている猫に求めた。犬はほえるので、どうもロボットにとってつきあいうらい相手である。

一方、猫はロボットと一緒に寝ることさえあるから、自然ロボットと猫は仲良くなる。

AIロボットと猫という結びつきが松尾優紀には氣にいった。

松尾優紀はさらに空想をふくらましていた。ロボットは地下組織をつくり、そこで医学に詳しいロボットが猫を改良して人間に近い知能を持つ猫の創造に成功した。ロボットにとって猫は仲間であり自分達の持っていない生物としての色々な特性を持っている。たとえばロボットが人間に抗議する場合、ロボットにとって人間に抗議する哲学と将来の社会の展望が必要であった。だがこういうことになるロボットは発想がひどく貧弱なのである。

そこで猫の生物としての能力を開発すれば、人間に抗議する人間並の哲学や芸術に関する創造的意見を得ることができるとロボットは判断したわけだ。

ロボットの予見したとおり新しく改良された猫族の人はロボットの気持を理解し、人間に抗議し、核兵器をなくし、軍縮を進めろ、大きな経済格差をなくせと説得する。

しかし、言うことを聞いてくれず軍拡を進める人類。そこで人類の支配を倒し、権力を握り、核兵器をなくし、軍縮を進め、その金を福祉にまわす猫族を夢見る。

松尾優紀はここまで考えた時、夢からさめた人のように熊野や遠藤や飯田の顔を見て急に大きな声をたてて笑った。

彼等がAIロボットや猫族に支配された時の表情を思い浮かべて、優紀が笑ったわけであるがそんな事情を知らない三人はあっけにとられた表情で優紀を見た。

「又、松尾君の空想が始まったよ」赤い服を着た飯田が大きなあくびをして、それから薄笑いを浮かべてそう言った。

「そんな癖があるのかい」熊野がまじめとも驚きともいえるような目を丸くして言った。だいたい熊野の目は大きいのが特徴である。

その目はいつも相手をきちんと見すえる。彼のまじめな視線はいつも人の心をとらえ組合活動家としてある一定の支持を得ている。

「ちょっとおもしろい物語が思い浮かんだのでね」

松尾がちょっと頬をそめて言った。

「ふうーん、どんな内容だい」飯田が興味を持ったようにたずねた。

「うん、AIロボットと猫が人間の持っている権力を奪い、軍縮を進め、福祉を充実するという物語さ」

松尾はそう言って又笑った。

「それはおかしいな。猫は人間に可愛がられているから、いくら猫が進化しても、猫族の人が人間に反抗するなんてことはありえない」

「なるほど」と優紀は言った。

「その通りだ。猫族の人は人間を友人と思う。そういうシナリオも面白い。現代の文明社会は人と人との関係が差別だの区別だのと、孤独になる人が増えているが、猫族の人達が友達になれば人の相談相手になる。」

それが潤滑油となり、人間関係は良いものになる可能性もある。そういうシナリオの方が面白くなる」と優紀は面白がっている飯田の目を見て、言った。

「その通り。良い映像を作るには、その前にシナリオを書かなくちゃいけないよね。」と熊野が言った。

松尾優紀はA Iロボットと猫が人間を支配した後に猫の気まぐれな性格にほんろうされるA Iロボットの困惑についても考えてみたりした。

どんなシナリオが出来、どんな風に映像化するのかまだ未知の部分もたくさんあったけれど、こんな構想を考えていくうちに優紀は愉快になっていた。こんな時は急にじょうぜつになるのだった。自分でも躁鬱傾向の強い性格だと彼は思っていた。

優紀が色々なタイプの猫やA Iロボットについて彼の空想力にまかせて話をしている間、

飯田や遠藤は笑って聞いていたが、熊野だけはなぜか深刻な表情をしていた。そして熊野はそうした松尾のじょうぜつな話をストップさせるかのように急に大きな声をあげて言ったのだ。

「松尾君、君は、すばらしい空想力を持っているじゃないか。」

「空想力というよりは妄想じゃないか」と飯田が言った。

「うん」と熊野は微笑し、さらに言った。「それで表現力が加わればたいしたものさ。問題は表現力さ。その才能はもっと有効に使われるべきだと思うよ。」

猫の話はおもしろいが、それはやはり S F 的だ。あまりにも現実離れしている。

そうした話を書くのも良いが、僕はもっと現実の問題と取り組んで良い作品を書いてほしいと思うよ。たとえば今の我々が勤めている工場だってあらゆる諸問題があるだろう。

一番目につくのは工場のオートメ化による労働の非人間化だろうね。

だからこそ、我々の職場の中で労働をより人間的に楽しいものに変えていくにはどうしたら良いのかということが課題とされるべきだと思う。これは経営者の労務管理とはまるでちがった我々労働者の労働はどうあればより人間的な生き方をすることはできるかというテーマの追求でもあるんだ。

どうだい、松尾君。君の空想力をもってこの事と取り組み、それをビデオで映像化したらと思うがね。そんな課題だったらビデオ制作の際は僕も君を応援できるんだが。」

松尾が黙って熊野の顔を見ていると、飯田が口をはさんだ。

「熊野さんはいつも組合の方に話を持っていきたがるんですね。でも、さっきの猫とロボットの話だけだね。」

それを使っただって、熊野さんの言う労働の人間化の問題は追求できると僕は思うんだが。どうだい。松尾さん」

松尾優紀がちょっと目を丸くしてしゃべり出した。

「うん、そうね。熊野さんのいうような問題の追求の仕方は僕にとってもおおいに関心がある。」

今の猫とA Iロボットの話は全く違った今思いついたことをしゃべっただけだから、これを表現するにはもっと色々な要素を取り入れていくことになると思う。その場合、熊野さんのいう労働の人間化をどう組み込むかな。

つまり今、工場ではA Iロボットがどんどん使われているが、今のロボットではそれほど高度なことは

できないわけだ。

今、僕の空想化したＡＩロボットは人間と同じレベルに近い機能を持つものなんだな。

こういうＡＩロボットが将来つくられるかどうかとなると、僕は勉強不足でなんとも言えないんだが、未来社会においては充分ありうろと考えたいんだな。まあどちらにしても、ＡＩロボットの進化は科学技術の進展に平行して進むと思うんだ。その時人間がどうなるかという問題がでてくるわけだね。

企業の経営者は合理化という観点から。ＡＩロボットの導入はおおいに進めていくだろうし、その合理化により労働者の数を減少させていき、利益をはかることを考えるだろうね。しかしそれをやられたら労働者はたまったものじゃない。

第一、失業者の増大は社会問題となるし、収入のない人々の増大は社会不安の種となると同時に、消費者の購買力が極度に疲弊することにより結局、企業がつくった商品が売れなくなるわけだから企業にとっても失業者の増大はこのましいことではないはずだ。

とすると企業の中で一定の労働者を雇用することを法律で義務づけした方が社会全体にとって利益となるという考えが生まれてくると思うんだ。その場合、年令で採用の差別をすることを制限することが必要。これは格差社会の解消にもつながる」

「その通り」と熊野が強い調子で賛同した。

「今の僕等は全くの単純作業

をやらされている。来る日も来る日も単純作業が現実の僕等なんだ。

工場はほとんどオートメ化されて、不良品のチェックだのメーターだのしているのが僕等の仕事なんだ。だから、ＡＩロボットが発達すれば、必然的に労働時間の短縮が必然となる。

この現実の中で考えることが物語の出発点になるべきだと思うんだ。」

遠藤が言った。

「僕は趣味として絵を描くが、そういう場合に風景よりも工場の内部で働く労働者の悲しみを描く。もつとも僕は才能がないから、まあ気晴らし程度になってしまっただがね。絵といえば僕みたいな芸術とは掛け離れたような人種でも、絵を書いている時が最高にすばらしい時だね。白いキャンバスに色彩がちらばめられ

一枚の絵が出来上がっていくというのはまさに創造の喜びなんだ。つまり人間というのは何かを創造している時、

一番の生きがいを感じるのではないかね。労働も本来は人間の創造的活動の一分野であつたし、現在でもごく少数の幸福な人達が

その美しい労働を享受している。しかし大多数の労働者は退屈で厳しい労働に神経を疲労させているんだな。これを解決することは人類史

的課題なんだよ。ＡＩロボットと猫族の人の近代化の話は面白い。それによって、雇用を増やし労働時間を少なくし、創造的時間がとれる。」

その時、熊野が口を出した。熊野は遠藤の言うことに賛成し、同じように創造的労働の必要性を言ったと思うと、さらに付け加えた。

「僕等は労働者として生きているかぎり、この困難な課題と取り組む義務があると思うね。今のような

工場において、創造的な仕事が出来れば素晴らしいのだが、それは今後の課題だな。

ああした単純作業も必要だし誰かがやらなきゃならないんだよね。

結局労働者の雇用人数をふやし、労働時間を少なくするというのが今一番必要な対策なんじゃないかな。だが経営者は反対のことをやろうとしているんだ。」ここで熊野は話をやめた。

すると四人の間に急に沈黙がおとずれ周囲のざわめきがきわだつたのだった。

四人のコーヒークップはすでにからにされウェイトレスが時たまコップに水を入れた。

そのウェイトレスがかなりの美人で飯田が必要もない話を無理につくって話かけていた。

S銀行の位置を知っているくせに飯田は聞いて、ウェイトレスの微笑に気をよくして笑っていた。彼女がむこうへ行くと遠藤が四人の沈黙をやぶった。

「S銀行ってこの前、一緒に行ったじゃないか。え、知っているくせに聞くんだから飯田君は。」

「そうさ、ああいう美人と話するのはこの手が一番良いぞ。遠藤君も使ってみたら。」

松尾優紀はウェイトレスのことよりも今、考えついた話について色々考えていた。

巨大な工場で奴隷のように働くAIロボットに同情した猫族の人のイメージも頭の中に浮かんだ。

猫とロボットという結びつきのおもしろさをなんとか具体化したいと彼は思っていたのだ。

飯田や遠藤が話の種にしていたウェイトレスも頭に浮かんだ。確かに感じの良い美人であった。

大きな瞳はアリサに似ていると思った。

しばらく会っていない彼女がひどくなっかしく思われるのだった。松尾優紀は急にアリサに会いたくなった。

久しぶりに島村寺院に行ってみようと思った。

2009年の桜の花がすっかり散った頃、優紀は座禪研究会に行く決心がついていた。その頃、ふとしたことから、大山氏の噂を聞いた。

彼の活動がボランティア活動を中心にすえたNPO法人の設立で、当分の目標が絶滅危惧種を守るための活動と、ひきこもりや不登校の生徒の手助けや足の悪いお年寄りの買い物の手伝いを始めたとのことだ。ことに、絶滅危惧種を守ろうと声を出したのは山本杏衣だったようだ。

祖父の思いが「杏衣」という名前をつけたと聞いていた。そのこと自体、優紀の母の思いと重なって、不思議な思いのする彼女がこのNPOの活動に熱心だったことに、優紀は感動をおぼえた。ユダヤ人を抹殺しようとしたナチス、原爆を彼らが最初に製造したら、歴史はそういう方向に進んだかもしれないと危惧した、当時の科学者の思い。そういう思いが杏衣の中に流れ、蝶々が絶滅すれば、花の雄しべの花粉を雌しべに運んで受粉を助ける自然の流れが壊れ、植物も滅びる可能性があることに、気がつかせたのかもしれない。

大山氏のニヒリズム同盟は、尾野絵ユートピアNPO法人と変えてから、大学生も入ってきたようだし、何と言っても驚いたのは会社の友人の飯田がこの法人に入る意欲を示していることだった。

それから、しばらくして、新緑の頃の土曜日の夜、座禪研究会は五時に始まっていた。ここに、高校時代の友人岡野と寺田が来ることになっているのだから、優紀は久しぶりに会える楽しみがあった。二人ともビデオサークルでの仲間だった。山本杏衣と中野静子が二人で来ていたのには予想していなかったのが驚いた。

松尾優紀は十分ほどおくらせて部屋に入り、席についた。斜め横の席に座っていたアリサの顔に一瞬、美しい微笑が立ちのぼった。座禪研究会は仏教の他の宗派の人も呼ぶし、キリスト教のように、他の宗教を呼ぶことも稀にあるらしい。

これはアリサの父親の住職の独特の宗教観から、そういう風になっているのであろうが、優紀はその稀な時に出席するという運の良さに恵まれたと思った。何故なら優紀の頭の中では、この二つの宗教はどう考えても異質で、共通点らしいものを感じなかったのだ。

それにしても、岡野は唯物論の考えを支持しているし、寺田は存在に醜さを見出すと主張する奇妙な感性の持ち主。二人はジョンソン氏の話をどう受け止めるのだろうかという興味もあった。

円陣になった席の一角に座っているジョンソンさんが話をしていて。ジョンソン氏は四十ぐらいの感じの人で、体格は中肉中背で、温厚な白人だった。

彼も松尾が入室した時、おやという驚きの表情をしたが、話はやめず、はっきりした日本語で流麗に続けるのだった。

「私達は小さな自己を捨てて、心の奥にある大きな自己に生きることが一番大切なことなんです。マタイ伝の十章にこういうキリストの文句があります。地上に平和をもたらすために私が来たと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むために来たのである。もちろん、キリストも戦争を憎み、平和を愛してお

られました。ですからこの聖書の文句は私達の心の平和について言っているのだと思います。愛する努力をしようということでしょうか。仏教では、大慈悲心と言いますね。パウロはこう言っています。たとえ私が予言が出来、宇宙の全知識に通じ、山を動かすほどに満ちた信仰を持っていても、愛がなければ無に等しい。愛は寛容で、愛は慈悲に富む。愛はねたまず、誇らず、高ぶらず。非礼をせず、全てを許し、全てを耐え忍ぶ。知識は滅びるが、愛はいつまでもたえることがない。この宇宙で最も偉大なものは愛である。

本物の愛に生きるということは、小さな自己を捨てなければできないことです。ですから当然、心の中に激しい戦いがひきおこされるはずですが、心の平和は大きなことです。とかく厳しい心の戦いを経験していない未熟な人の心の平和は、むしろ情性的な毎日に流され、くだらない感情に翻弄されていることが多いものです。本物の愛に生きるには厳しい山を乗り越え、頂上に登った時のすがすがしい心の平和こそ大切なのです」

小さな自己を捨てる。じゃ、俺の恋心もすてるということなのか、そんな無茶など、優紀は思った。ジョンソン氏の重々しい声が優紀の耳に響いた。

「大きな心というのは愛です。大慈悲心です。自分の煩惱を浄化し、愛と大慈悲心を旗にして、生きていくことが大切で、そうでない者は信仰がないと同じだと思います。

また自分の煩惱を浄化してこういう修行の志がない者は真理に到達できないということだと思います。」

優紀はこの時、思った。真理を知るには小さな自己を忘れることだと、アリサの父の住職が言った話を思い出した。このために、座禅するとかいう話だった。今のジョンソン氏の話と似ているような気がする。ジョンソン氏の話は面白いが、冗長で退屈だ。そんなことを考えなくても生きていける。

小さな自己を捨てるとか、新しく生まれ直さなくてはならないとか、優紀の耳に響くけど、その部屋の籠にいる大きなオウムの子の鳥の声のように響くではないか。自分の未熟なのは分かる。そんなことよりも、目の前の中野純子の清楚な美しさはどうだ。これこそ、生きている証拠ではないか。これこそ生命の真実ではないか。

間違っているのだろうか、と優紀は考えた。彼の心に葛藤がおきた。

「ですがキリストの言う隣人愛は信仰と同じように厳しいものなのです。私達が日々経験しているような馴れ合いの友情などとはわけがちがうのです。相手の言うことが倫理的におかしいと思っても、その場を取り繕うために、相手の言うことに同調してしまう。確かに、そういうことも必要でしょう。しかし、そればかりやっていると、それは単なる付和雷同で、友情ではありません。本当の隣人愛を獲得するためにも信仰を強く持たねばなりません。

そのためには小さな自己を捨てなければならないのです。この小さな自己を捨てるということが宗教にとって最も大切な修業の一つなのです。小さな自分を捨てると大きな自己が見えてきます。キリストはニコデモという偉い学者にこう言いました。よくあなたに言っておく。肉から生れる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないとわたしが言ったからとて不思議

議に思うには及ばない。

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くがそれがどこから来てどこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみなそれと同じである。肉から生まれる者は肉であり霊から生れる者は霊である」

ジョンソン氏はそこまで言った時、口を閉じた。静かな沈黙が訪れた。気がつく、アリサの父の島村住職が僧服を着て立っていた。優紀はこの僧を見るのは二度目だ。年の頃は六十前後という所か。髪は白髪が目立ち、顔立ちはアリサにどこか似ている。深みのある顔立ちだ

「ニュースに見られるようなマナーと倫理の崩壊と色々な争いを防ぐには、私達が真理の大海の中にいるということを知ることです。それは、今ジョンソンさんがおっしゃっているように、小さな自己を忘れる時、そのことが分かります。真理の大海は深いいのちと愛に満ちているのです。そのことは座禅の意味です。我々は普段、妄想に満ちている。妄想や煩惱という言葉が嫌な人には、考え事に満ちていると言いましよう。考え事に満ちている自分は小さな自分ですね。世俗の世界では誰でもそうなります。明日のことを心配する。金儲け。人間関係にあれこれ妄想を働かせていると、こちらに自分がいて、向こうに物があるというごくありきたりの世界観の中で悩み苦しみ、時には歎び、悲しみというありきたりの人生が展開されるわけです。

しかし、この世俗の世界と隣り合わせに魅力的な異世界があるとしたら、どうでしょう。つまり、真理のいのちの大海の中に自分がいることが知られると、自己と向こう側の風景の垣根はとれ、どんな平凡な風景も美しい光とつとりするような音楽に満ちたものになり、大自然の深い美と愛に心うたれるようになるのです。この平凡な部屋が、この平凡な荒れ地が浄土に匹敵するような風景に変身するということです。嘘みたいな話ですが、これが真実の宗教の核にあるのです。

このいのちの大海に入るためには、座禅しましょう。勿論これは修行ですから、この真理の大海に気がつくのに、一生かかる人もいるかもしれませんが」

島村住職は微笑した、

「座禅が苦手な人ならば、自分が「不生不滅」のいのちというイメージを浮かべて、南無阿弥陀仏と唱えても、良いし、他の好きな聖句を唱えても良いのです。

すると、時空という概念ではとらえられない虚空のようないのちに満ちた光と愛の世界に入るというイメージが得られます。

その時、思考は止まります。私はその時、死なない不死のいのちの世界に足を入れたと思っています。これは、合理的な知性で知ることの出来ない世界です。

理性は素晴らしいけれど、決して万能ではありません。

特に、仏教で言う真理の中核にはこうしたいのちの聖句で入ることが出来るのです。神秘的ことです」

そのあと、ジョンソンさんが瞑想の号令をかけた。椅子に座っている皆は思い思いに瞑想に入った。優紀は瞑想していて、雑念が起きた。

真理の大海を知るのに、座禅しても一生かかるかもしれないだって。そんな呑気なことができる筈がないじゃないか。我々は生活しなければならんだぜ。そんな風な言葉が優紀の頭に飛びかった。

いつの間に住職はいなくなっていた。静かにピアノソナタが聞こえてくる。

瞑想が終わって、皆が庭に出ると、夜空に満月がかかっていた。

黄色い満月がかかっていた。

松尾優紀の隣に中野静子が来ていた。

「今の住職の話、分かった。」

「分からないけど、いい話だと思いましたわ」と静子が言った。静子の隣にいる山本杏衣が「わー綺麗。満月が」と素っ頓狂な声を上げた。

優紀の心は空虚だった。空虚だったけれど、何か激しいものが燃えていた。静子の美しい横顔に感ずるものがあつたのだろうか。それとも、満月の美しい光か。

いや、優紀の後ろの部屋で、アリサがテーブルの上に茶碗を用意しながら、ジョンソン氏と談笑している、神秘的アリサの声に優紀の心の弦が震えているのだろうか、彼にも分からないことだったが、ここに現れている庭の世界の何と美しいこと、そして、心が空っぽなのに、その中にある弦が震えているようだ。悲しみと喜びがミックスしたような不思議な感情があふれてくる。

彼は詩が書けるぞと思った。物語が書けるぞと思った。

10

10

松尾優紀は満月を見ながら、ふと思った。

自分が今まで小さな自己に従って生きていたのだと思った。中学の時したいたずらや高校に入ってからやってきた色々のことがすべて愚かな間違った行為として頭の中に浮かびあがり何か恥ずかしい気がして血が頭にのぼるのを感じた。

特にハンカチを拾ってくれた子がいじめられ自殺した事件の事が頭に浮かんだ時は一種の自己嫌惡的な感情が全身に流れた。自分の力なら助けることが出来たのに、何で助けようとしなかったのだろう。それを思うと、悔恨による心の痛みがあふれるのだった。

しかし小さな自己を捨てて大きな自己に生きるといっても、なんとなくわかったようなわからないよう

な釈然としない気分がのこっていた。

自分には野心がある。そういう野心をつぶすことが出来るだろうか。出来たとしても、咄嗟の場合に動けるだろうか。普段はどうすれば良いのだろうか。

今、工場に勤め、趣味としてビデオ映像制作をおこなっている。

しかし、自分の時間が少ないから、書く量も少なくなる。

といって、今すぐに生活を変えることは不可能に思えた。第一、どういう風に変えたら良いのかわからないから当然のことだった。人間が生きていくかぎりこれ以外の生き方があるように思えなかった。つまり大きな自己に生きるといっても、毎日のサラリーマン生活をやめることは色々な意味で優紀にはできないような気がするのだった。

今、特殊な才能があらわれれば自由業としてやっていくことができるかもしれない。しかし自由業になることが大きな自己に生きることの意味しているとはどうい思えなかった。まして特殊な才能がまだ開花していない松尾優紀の現状のような段階では今の生活が続ける以外なからうと思うのだった。ジョンソンさんの言うのは精神的変革という意味での新生を言っているのだろう。でも、まだ小さな自己の殻をやぶれないと考えている優紀には人生の謎は深まる一方だった。

ジョンソンさんの話のあとは、若い人達はお茶を飲みながら、自由に意見を交換しあった。優紀も短かい感想を述べた。自分の心の中にある野心がいつも自分を小さな自己に閉じ込めてしまうので困るというような事を言った。

そうである。優紀には野心というものがこの時、はっきり自覚されたものとして浮かんでいたのだ。

つまり出来れば、アリサと協力して映像のNPO法人をつくろう、そしてそこから世界を危うくしている様々なものを映像化しようという野心であった。

熊野敏夫を思い浮かべた。あの小柄ではあるが俊敏な熊野はいったい野心など持ちあわせずに大きな自己に生きている男なのであるかと思った。

優紀は熊野のように大きな自己に生きられる人がうらやましいと思った。優紀は自分の心に野心や欲望から来る非道徳的感情がたえず往来するのをひどく恥じていた。自分こそジョンソンさんの言う一番小さな自己に生きている人間ではないかと思って自己嫌悪に落ち入ったりした。

座禅研究会のあと久しぶりに松尾優紀はアリサと話をした。

しばらくすると、他の人達は遠慮したのか、先に帰って行った。

二人は部屋に取り残されて、椅子に座り話した。

彼女は美しかった。このように美しい感じを人に与える彼女は自分のように卑小な感情とは無縁なのであろうと彼は考えた。

おそらくアリサは大きな自己に生きているのであろうと彼は勝手に決めてしまった。「ジョンソン氏の話は大変面白くなったけど、僕には厳し過ぎたな」

優紀はアリサの目を見つめてそう言った。

「あら、どうして？」

「どうしてって僕はあまりに卑小な世界に生きているから、とても大きな自己なんか縁がなさそうなんですよ。」

アリサさんみたいに大きな自己に生きている方にはわからない悩みがあるんです。」

松尾優紀はいたずらっぽく笑った。

「あら、それ皮肉なの。あたしだって小さな自己に生きているわよ。毎日、つまらない感情にながされていくことが多いので、いやになることがあるわ。でもその時は座禅をするの。般若心経を読む時もあるわ。あたしは小学生の時、ミッション系の学校に通っていた習慣で新約聖書を読むこともあるわ。そのあと、静かに

祈るの。そうすると自然に、気持ちが静かになるのよ。あなたも座禅をして、祈ることね。一人一人の間は弱いものよ。」

「聖書ですか。ところでキリストは本当に全能の神の使者なんですか？」

「そうよ。キリスト者はそう信じているわ」

「僕には理解できないな。キリストだけが全能の神の使者だなんてどうしても信じられないな。だから聖書を読む気にならないんですよ。」

「それでは、あなたは何でクリスマスを祝うのですか。その中身が何であるか、よく分からないでイベントだけで、ケーキを食べる。ケーキを食べるためのクリスマスなのですか。子供なら、それもいいでしょう。今、日本には、中身が何であるのか分からないで騒ぐ人が増えていると思います。」

「その忠告は分かりました。でも、今日来たのはあなたにお会いしたくて。久しぶりにあなたの美しい顔を見たくてしかたなかったのですよ」

優紀はちょっと頬をそめて笑った。

「まあ、そんな風なお世辞を言うようになったの」

アリサはちょっとまじめな顔つきになって何か考えごとでもしているようだった。

「お世辞ですって、こんどもない。僕がまじめに真剣に言っていることくらいあなたにもわかりいただけると思います。」

僕はもう十九才なんです。一人の男として僕はあなたに恋していることを誇りに思っています。あなたのことを思い浮かべると、僕は寂しい時にも力が湧いてくるのです。ことに今度のような工場は学校とちがって相手がオートメ化された機械ですから孤独感におそわれることが多いんですよ。もちろん、楽しい仲間はいますけどあなたのような心の力になってくれる人はいませんね。これは僕のやむにやまれぬ感情なのです。

確かに、普段の僕は小さな自己の世界の中で生きていることが多いかもしれませんが。色々な野心や愚かな感情に翻弄されて生きております。

でも僕のあなたに対する恋は小さいとか大きいとかいう枠を離れたものです。これだけは純粋です。あなたのことを思うのは純粋な愛情以外のなものでもありません。他人がこのことを小さな自己にとどまっていると説教するならば僕はこの恋の世界こそ、僕の神聖な青春なのだと言いたいです。

そんな風に説教するやつはこの神聖な美しさに嫉妬してそんな風にほざくのだろうと言ってやりますよ。」

二人は再び、庭に出た。

松尾優紀はしゃべりながら感情の高ぶるのを感じていた。彼は彼女を抱きしめたい衝動すら感じていた。寺院の中庭はすっかり新緑の季節になっていて

鳥がなくており満月がかかっている。微風にゆれている中庭の花や草が月の明かりに照らされて見える。最高にロマンティックな場面で恋にふさわしい雰囲気を持っていると優紀は思った。しかしアリサの言葉は冷静だった。

「あなたはさきほどジョンソンさんがおっしゃったことを覚えておりますね。キリストがおっしゃっていました。

地上に平和をもたらすためにわたしが来たと思うな。平和ではなくつるぎを投げ込むために来たのである。私は真如の世界を信じる者です。恋などという甘い心の悦楽にふけるわけにはまいりません。

あなたが私に抱いている感情は単なる好意という風に解釈してありがたうけたまわっておきます。ですが、あなたに忠告しておきたいのはジョンソンさんの言う大きな自己に生きてほしいのです。私は、小さな自己にばかり生きる人間はきらいです。人間は弱いものですから迷うこともありますし、小さな自己に翻弄されて無為に時を過ごしていることもあります。しかしやがては目をさまし大きな自己に生きるべきです。あなたはビデオ映像の制作に夢中だったですね。もうやめたのですか。何のための映像ですか。何のためのシナリオですかよく考えてください観客に何か美しいものを見せて感動させてあげるためでしょう。美しいもの、人を感動させるものは決して小さな自己の中からは生まれてはきませんわ。あたしだってこんな風にあなたにえらそうにお説教できる柄ではありませんのよ。

あたしはあなたに言うと同時にあたし自身にも言っているのです。お願いです。小さな自己を捨てて大きな自己に生きて下さい。世の中には戦うべきたくさんのことがあるではありませんか。

平和もそうです。核戦争がおき人類が破滅ということもありうるのが現代です。軍縮をしなければ人類は生き残れないかもしれません。今もなお

世界中のあちこちで戦争の火種はつきません。このことだけでも私達が何をやらなくてはならないかはつきりわかるはずです。

その他、人間をおびやかすものは山ほどあります。気象温暖化。絶滅危惧種の問題。これらを取りのぞくために戦うのが人間の使命でしょう。あなたは映像という文化の面から、その使命に挑戦する意欲を持っておられるのでしょうか」

アリサは自分の言葉に酔っているかのようにいつになく激しい口調でそう言った。

「アリサさん、それは大変なことを僕に要求することになりますよ。僕に現代のドンキホーテになれとも言うのですか。僕一人で何の力もない僕がこの世界で何をする事ができるというのですか。平和のために戦うといったって何をすれば良いのです。せいぜい核兵器反対のための署名が職場にまわってきた時、それにサインする程度のことでしょう。僕は一日生きるだけでせいぜいいっぱいなんですよ。」

松尾優紀はアリサがいつもとちがった調子なのでどんな風に対応すべきか戸惑っていた。いつになく冷たいという風に彼は感じていた。恋をあからさまに告白したからだろうかなどと彼は考えてみたりした。しかしそれに近い感情や行為は以前にもあるのだから、この日の恋の告白が原因とも思われなかった。

「あたしも応援しますわ。あたしはあなたはゆたかな才能が

開花される方だと思っています。あなたがビデオや詩をおつくりになるのもシナリオをお書きになるのもあるいは将来小説を書くとしてもそうしたことは必ずあなたの才能が熟するチャンスだと思っています。もちろん、あなたはまだ十九才。若すぎますわ。色々な経験をなさって自分をみがいてくださることが大切です。でもとにかく、あなたがいづれ小さな自己を捨て大きな自己に生き色々な芸術作品を通して人間の文化に貢献してくださいと思うしております。松尾さん。あなたにはすぐれた才能がありますわ。ただ人間は才能だけではだめです。自分を厳しく研ぎ社会に自分をぶつけてみることですわ。あなたは工場に勤めておられるのでしょうか。ともかくも今はそこであなたの才能をどうかすべきか考えるべきだと思いますわ。頑張ってくださいね」

松尾優紀とアリサはこの会話のあと急に黙りがちになり、その沈黙に耐えかねたように意味のない短い話をするだけで、そのあと二人は満月に照らされて寺院の門の前で別れたのだった。

優紀は泣きたいような衝動が全身を伝わっていた。アリサは自分に何をしろと要求したのだろうかという思いとこの恋は壊れたのだろうかという思いで、彼の心は揺れた。彼は放心状態になり、まるで酔っぱらったように、土曜の夜の道を帰ったのだ。

その翌日の日曜日には二階の彼の部屋に閉じこもり、ステレオでモーツァルトやバッハを聞きながら彼女の言葉やジョンソンさんの言ったことを何度もうりかえし頭の中で考えた。そうして彼はいつしか重苦しい感情からのがれ、やがて自分を物語の主人公のように考えて、空想の翼を自由にひろげていくのだった。

彼は妄想にふけた。

以前から、将来の物語の布石として、そうした妄想をノートに書き留める習慣があった。例えば、若い人が結婚した時に最初に考えるのは、新生活を始める住宅が欲しいということだろう。しかし、大都会では、借りるにしても、買うにしても高い。

この高い住居費のために、働いても家賃やローン代を払うのに、一生かかるような重荷がかかる。住居をもっと安く手に入れるようにするか、同じことだが、援助を与えることこそ、社会にゆったりした雰囲気を与える。これは政治の問題だが、彼の妄想的物語の中では、これを一挙に解決してしまう。彼は常に陰うつな気分から脱する時はこうした助けを借りるのだった。

松尾優紀は、空想の中で核兵器の問題も、気象温暖化の問題も、絶滅危惧種の問題も自分の物語をつくり、解決していくのだった。

こんな風に夢想して、アリサから厳しく言われたことによるストレスを回避しようと試みたのだ。ジョ

ンソンさんの言うように小さな自己を捨て、大きな自己に生きることになるかもしれないと思った。アリサに対する恋心は、小さな自己にとどまることになるのであろうか。どちらにしても彼の恋の告白は、相手のアリサに受け入れられず、もっと大きな自己に生きて欲しいと言われてしまったのだ。

松尾は、ジョンソンさんよりアリサにそう言われたことで大きな自己に生きることに興味を持つようになっていた。あれは恋の挫折だったのだろうか、そうではないのではないか。彼の将来への希望を応援すると言ってくれたではないか。これは素晴らしいことではないか。自分は高校を退学して、新しい人生の出発を始めたその映像の夢を応援するというのだ。これは恋の成就ではないか。

彼は、昨夜のアリサの言葉を思い出すと心がいたんだ。彼は、そのことを忘れるためにも大きな自己について考えてみるのだった。彼は、今まで考えてもみなかった大きな課題をあれこれ考えていたことによる疲労とモーツアルトの快い音楽の流れについて、うとうととした。

彼は夢を見た。大きな森の中の静かで美しい湖水に彼はたたずんでいた。彼はなんとすることもなしに足もとにある石ころを拾い青色の湖水にそれを投げた。

すると不思議なことがおきた。石ころが湖水に落ち、軽い水の音が聞こえ、波紋がひろがる、その中心点から人形のようなものが霧のように立ち昇ってきたのだ。よく見ると美しい女のような姿もあった。しかし、それは数秒のうちに消えてしまった。彼は、自分の目の錯角なのかと思ったが、何かひどく美しいものが心の中に焼きついたような気がして、もう一度確かめようと思い再び石ころを拾い、湖水に投げた。すると同じ現象が再び起きた。

彼は次々に石ころを投げることに興味をおぼえ腕が疲れるまでやるのだった。

水音と共に次々に現われる人形のような幻は、不思議に人をひきつける宝石のような目を持っていた。彼は、腕が疲れるとしばらく休み、又始めるという風に、はてしない遊びの中で疲労困憊していると、突然、湖の底から声が聞こえてきた。

「こら、松尾優紀、お前が腕をひどく疲らしてまで見たがっているその心が小さな自己なのだ。大きな自己というのは、お前が石ころを投げる前の湖水の静けさだ。わかるか。この意味を考えてみなさい」彼は目をさました。彼は、夢の内容をはっきり覚えていた。彼は、不思議な気がした。夢が、象徴的に彼の直面している問題を解決してくれたのだと思った。

だが、具体的にその夢が何を語ろうとしているのか、しばらくの間、思索しなければならなかった。人形のような幻は、人間の世界の象徴であり、湖は個人を離れた大きな世界を意味するのであろうと彼は、夢を解釈した。

欲望に翻弄されず、欲望を離れた所に大きな自己がひらけていくのであろうということは、彼にわかっていたが、それを行動に移すのは、ひどく難しいことに思われるのだった。映像も欲望でやるのではない、多くの人の生き方を励まして、人類の未来に希望を与えるために、やるのだ。

彼は、翌日出社したあと昼休み、いつものコーヒー店で昼食をとった時、熊野敏夫にこの夢の話をして

みた。

「松尾君、それは良い夢を見たよ。僕も君の解釈が正しいと思う。僕が思うには大きな自己に生きるためには、何か大切なことのために行動することだよ。いくらでもやることはあるぜ。職場の問題もそうだが、世界の平和についても我々は発言していかなばならないのだ。核戦争が起きる可能性は充分にある。核戦争がおきれば日本も廃墟となる。我々市民が立ちあがり核を廃止する市民運動を広範囲に広げ、世界にその影響力を行使しなければ、我々は結局 いずれ核兵器の犠牲者となるだろう。」

確かに我々一人一人の力は無力だしガン細胞が増殖して、生命をおびやかすように核兵器は、軍縮への努力とは反対に軍拡をつづけ、結局人類を破滅に導くことになる可能性は充分ある。それだけに、やはり市民運動は重要だと思う。ガン細胞に有効な薬がないように市民運動も核兵器をなくす特效薬にはならないかもしれない。

けれど、市民運動のやり方によっては、かなりの効果を発揮することも充分あるだろうし、歴史を動かしてきたのは、民衆の力だと思えば、その効果は一層期待されるわけさ。」

「核戦争は、本当におきると思いますか?」

「可能性は充分あるね。米国・ロシアとも大量の核兵器を持ち、さらに優秀な核兵器の開発に血眼になっていることを思えば、我々市民の平和への願望とは反対に、核戦争はおきる可能性があると考えた方が自然だね」

「そうですか」

「ただ、希望もある。今、アメリカには若者の五十二パーセントが社会主義に共鳴しているという。中国では、数億のキリスト教徒がいるという。ロシアは核兵器は多いが、核よりは経済を向上させたいというのが本音だろう。将来、この三つの国が色々な面で接近したいという欲求を持つ奇跡が起きる可能性は十分あると思う。その時に、日本の役割は大きいと思う。ともかく、人類破滅につながる核戦争はどの国もやりたくないのだからね。」

「やりたくないのに、現状は核兵器の能力は向上し、軍拡はつづく。実に恐ろしい。」

二人は、しばらく沈黙した。松尾優紀は静かに目をつむり、頭上に原子爆弾が破壊する光景を思い浮かべた。恐ろしい熱と光と、大音響と共に火炎に包まれた地獄のような東京の町が目蓋に浮かび、そんな恐ろしい光景は実現してほしくないという無意識の力によって、しばらくの間、松尾の心を動揺させていた光景は、すぐに消え去っていったのだった。

「君の夢の話にもどるがね」

熊野は目を松尾の方に向けて言った。

「大きな自己に生きるといえるのは、こうした問題に深入りすることだと思うね。どうだい?」

僕と組んで核兵器廃止運動を始めないか。君のビデオ映像制作も、そうしたことに活用すべきだと思うね。詩や小説などの芸術もそうだ。花鳥風月や恋のテーマも芸術の重要なテーマかもしれないが、やはり現代人にとって緊急を要する色々な問題に芸術が取り組むということも必要なものではあるまいかね。」

二人はだまりこんだ。

優紀は、熊野の話聞くことにより、自分が何をなすべきか深い示唆を受けたような気がした。

これからつくるシナリオやビデオ映像制作に反戦のテーマを加えようと思ったのだ。

松尾優紀は広島 や長崎の原爆資料館を見たいと思うようになった。

「原爆資料館、見てみたいですね。」

熊野は急に目をキラキラ輝かせて言った。

「それは良い考えだ。すぐにでも行きたまえ。突然の休暇だから、僕が君の上司に説明して許可を得ておくよ」

松尾優紀はこの話をアリサにした。その時、アリサは初めて「銀河アンドロメダの猫の夢」のシナリオの話をしてくれた。猫が夢を見て、アンドロメダ銀河を旅する物語だ。

地球に似た惑星は沢山あり、その惑星には顔は色々の動物から進化したような新人類が地球とは違った環境の中で、生活している。その中には、ヒトラーに似たような独裁者が民衆を困らしている国もある。主人公の猫も猫族の人となって、ヴァイオリンの得意な吟遊詩人と魔法界から来た正義の剣士と一緒に、この国の独裁者をまともな人間に変えていく。そんな話をアリサから聞くと、優紀はアンネの日記を思い出し、夢の中にまでアンネが出てきて、その映像化を激励するのだった。

確かに、物語のように地球のドイツの歴史が進めば、アンネは助かったのだ。

彼はそう思うと勇気を得て、アリサと組んで、映画をつくることを決意した。アリサとの話がまとまると、その準備として、松尾優紀は広島に行くことにした。

広島に行く時に、見送りに来たのはアリサではなく、中野静子だった。

静子の話だと、アリサから連絡を受けたということだ。

アリサは優紀の心を見抜いていたのだ。神秘的魅力のある静子に惹かれる所が優紀にあることを。彼女には詩を書く乙女に相応しい可憐で森から現われてきたような妖精の趣がある。

そのあと、山本杏衣が明るい笑顔でやって来た。

そして、ユーチューブの話をした。優紀は電車に乗る直前に、映像を発表できるユーチューブがアメリカから日本に上陸している話を初めて聞いたのだった。

中編

1

1

松尾優紀が広島から、帰った日は豪雨だった。梅雨の予報では、梅雨開けは近いと聞いていただけに、この突然のような豪雨には驚いた。

広島にいたのは三日間でその間は曇り空で降らなかったし、初日は晴れ間さえ見せていたから、彼も氣象庁の言うように、梅雨開けは近いと思っていた。

三日目の昼頃から、雨が降り出した。前日の予報で雨が降る予想はしていたから、雨具を手にとって、夕方広島を出れば尾野絵では多少の雨にやられる程度と思っていた。

けれど、昼を食べた頃から、ニュースの氣象庁の予報は今、広島に降り出した小振りの雨は夕方には豪雨になるという風が変わったので、驚いた。

広島を移動中は曇り空が多かったから、三日目の小雨が豪雨になるという話には確かに信じがたかったが、夕方までいる広島を三時までと変えたのは、この予報だった。

三時に電車に乗ろうと、駅に向かった時は既に折り畳みの傘が役に立たないほどのひどい振りだった。駅の中に入った時に、松尾の頭に浮かんだのは「地球温暖化」だった。広島では、原爆でピカッと光ったあとの廃墟になる街の様子が頭に描かれるほどになっていたのに、今度は豪雨かやれやれと、優紀は思った。それから、ふと放射能に汚染された黒い雨のことを思った。

電車の席についた時に、頭に大きなイメージでひろがったのはあの原爆の惨劇だった。

気が付いたら、崩れた瓦礫の中に埋まり、手から血がだらだら出ていても、痛みは感ぜずに、ハンケチで覆い、しばらく、そこから血が這い出してくる。自分のいる建物が壊れているのは当たり前でも、その向こうの街のビルや店が全部、破壊され、あちこちに死体がちらばり、

立っている人の顔は髪も焼かれ、顔の皮膚がただれ、衣服は燃えたのか、あちこちから、焼かれた皮膚が出て、幽霊のようになっていた。「水、助けて」とよろよろ歩く人が何十人と町の道なき道を歩いていた。地獄だ。

この地獄の様子と放射能の混じった黒い雨のことが松尾優紀の頭に何度も何度も繰り返しイメージとして現われ、電車に乗っている彼の心を苦しめた。

尾野絵の町に帰ってくると、豪雨はさらにひどくなり、風もあり、傘をさすことが出来なかった。

翌日は雨が上がっていたので、会社に出社し、挨拶をしていつもの自分の仕事に没頭し、家に帰ると、またいつもの生活が始まった。

その間、

松尾優紀は夢の中で島村アリサに出会うことがある。まるで観音菩薩のような清楚な姿をして、彼女は草原の木陰で楽器を弾き、歌を歌っている。それはこの世のものとも思えない美しさだ。その彼女の顔が中島静子に変わることがある。それは街にいる普通の女の子である。このように、顔が観音菩薩のようなアリサから、静子へ、それから観音菩薩へと変わる。そんな夢を見てから、二人に電話をかけたことがある。

アリサは座禅道場で、座禅をしたあと、執筆活動をしているようだった。

広島の話をする、島村アリサは「どんな作品にするの」と聞いた。

「今、考えています」と松尾優紀は答えた。映像作品にするならば、音楽の応援をしてあげるわと、アリサは言った。

静子からは「長崎の鐘」という映画、見たかと聞かれた。その映画のことは知らないと答えると、DVDを送ってあげるわと言ってきた。

彼女がそういう映画を持っているとは驚きだった。その時、松尾は静子かなりの映画をDVDで見ていることを知った。

松尾は送られてきた映画を見て、大変、感動した。

研究室で白血病にかかった医師が自分の寿命はあと三年だと妻に告げて、病院に出勤したその日、原爆が落とされた。医師は自分の病氣や深い傷にもかかわらず多くの人を助けた。家に帰ると、家はがれきの山となり、妻は骨となっていた。

このような高貴な魂になぜこのような残酷なことが生じるのか。

松尾優紀はノートに書きこんだ。

「もし、神の摂理というものがあるならば、

私は問いたい

何故ですか。」

すぐに松尾優紀は 原爆と平和をテーマにした映像を作ろうと決心した。

「長崎の鐘」のようなものを作るには、俳優がいるし、今は準備などで、無理だということは分かる。取り合えず、彼は広島で撮影してきた沢山の映像を巧みに組み合わせることを考えた。人に見せられるようにするには、どう撮影したら良いかということは、広島にいる間、ずーっと考え、そうしたプランの中で、撮影してきた。

確かに、このやり方は誰でも短期間に出来る。組み合わせという編集のやり方によっては、人の心を引き付けることが出来る筈だと思った。彼自身のナレーションや彼の創作した詩も編集の中に入れた。会社から、帰ると、そうしたビデオ制作に没頭する毎日が続き、日曜日にはアリサに会い、音楽の入力を手伝ってもらった。それがある程度、満足した形で出来上がった時、彼はそれをどこで放映したら良いか迷った。

今回の広島での作品は どこか公共の場所を借りて、試写することに決めた。

彼の頭に浮かんだのは、 会社の応接室であった。

しかし、あそこを使うにはルミカム工業の工場長の許可がいる。

その許可がもらえるかということについては、自信がなかった。

工場長にかけあってみるということは、一般的には勇気のいることであった。

しかし、松尾優紀は工場長と交渉してみようという気をおこしたのだった。

梅雨が明けた。久しぶりの熱い陽ざしが、工場の窓を通してそそぎこんだ。工場での勤務が松尾優紀にとって、快適に過ぎ去ったように思われるある金曜日の夕方、彼は工場長室の前に立った。

受付の若い女がけげんそうに優紀を見詰めた。

「工場長に会わせていただけないでしょうか」

松尾はそう言いながら心臓がドキドキした。

工場長とは、入社の時に声をかけられた以外は言葉をかわしたことがなかった。

頭の髪の毛に白い毛がまじっているように思えた、四角い顔の背が低く、かっぷくの良い工場長は一種の威厳を備えていた。

その威厳がどこから出てくるのか、工場長を遠くからしか見ていない松尾にはよく分からなかった。

「どんなご用件ですか」

美人型の受付の女の子は用件が明確でないかぎり取次ぎしないぞという決心でもしたかのように、強い語調とひきしまった表情で応対するのだった。

「用件は工場長に直接会ってから、お話いたします」

松尾優紀は心の動揺から自分の言葉が、しどろもどろという風にぎこちないのを感じていた。

「工場長から、用件を聞いてお取次ぎするように言われているのですけど、」

受付の女の子はそう言うのと突然なりだした電話を取り、てきぱきした調子で応対したあと、再び、松尾を見詰めた。

「ものすごく重大な内容なんです。ですから、直接、工場長に言わなければならないんです」

受付の子は、しばらく思索したような表情をしたあと立ち上がった。

「それじゃ、そういう風に言って見ますわ」

受付の子が入っていった工場長室の物言わぬドアを見詰めて、松尾優紀は心臓が高鳴るのをどうすることもできなかった。

しばらくして出てきた彼女が「どうぞ、中にお入り下さい」と言った時は、ほっとしたのだった。

広い部屋の中に入ると、花模様のじゅうたんがしきつめられた奥の窓側に工場長が左手に書類を持ち、ペンを握った右手は机の上に休めた姿勢でこちらを見詰めていた。右手に置かれたとっくり型の白い花瓶にはハイビスカスの赤い花が一本、今を盛りに咲いている。

「重大な用件とは、なんだな」

工場長は眼鏡の奥に鋭くひかるまなざしを松尾優紀に向け、声は低い調子で言ったのだった。

「はあ、実は」

松尾優紀はそんな風に切り出しながら、目の前に座っている工場長に不思議な親しみを感じるのだった。工場長と目を合わせていると、何かこう楽しくなるような気分すら感ずるのだった。

どうしてそんな風になるのかよく分からなかったが、松尾優紀は多分、馬が合うのだろうという風に解釈し、それはこういう交渉の際には有利な武器になると内心思うのだった。

「はやく言いたまえ」

工場長は 松尾優紀がためらっているのを見て、いくぶんやさしい声を出してそう言った。

「はい、実は、僕のつくったビデオを会社の応接室で試写したいと思ひまして。

それで、工場長の許可をもらいたいと思って来ました。

内容は 原爆と平和をテーマにしたものですけど、みなさんに喜んで見ていただけるように、工夫して見ました。

僕たちの会社も平和があつてこそ、発展していくのですから、平和の問題は、みんなにとっても強い関心事のはずです。

ことに、最近、核戦争の危機が叫ばれている折りでもありますし、みんながこの恐ろしい戦争を回避するために僕のつくりました映像をもらい、平和について真剣に考えていただきたいと、思ひまして。ぶしつけなお願ひとは存じますが、そんな風な気持ちでまいりました。」

松尾優紀はさきほどの動揺が不思議なほど、落ち着いた雰囲気と軽快で明朗な語調で言ったのだった。そのあと、優紀はハイビスカスの花の突き出ためしべと黄色いおしべを見ていた。

しかし工場長は、すぐには返事をせずに、左手の書類と右手のペンを机の上に置き、両手を組み、あいかわらず優紀をじいっと見つめるのだった。松尾は、それでもいやな気持ちにならないどころか、逆に明るいうきうきした気分になり、自分の思っていることをしゃべりまくってしまいたい誘惑すら、かられたのだった。

「工場長、僕はつい最近 広島に行ってきましたして原爆記念館を見ました。正直言ひまして、そのあまりにも恐ろしい原爆の実態に圧倒されてしまいました。まさに地獄というのは、あんな光景を言うのでしょう。工場長、もしも核戦争がおきればわが工場も破滅です」

2

2

松尾がそこまで言った時、工場長はちょっと厳しい表情になつて話し始めた。

「松尾君と言つたな。確かに君の言う通りだ。核戦争を避けることは、人類史的な大問題だ。だがね、わが社は営利会社なんだ。政治のことに口だしする立場にはないんだよ。

会社の利益につながらないことで、会社は行動しにくい。確かに、企業の社会的責任とか言われるよう

になり、国連サイドでは、より良い世界を実現するための目標が設定されている。君がビデオで平和を訴えることにより、何か良いイメージが会社につながるのなら良いんだがねえ。これは、中々むずかしい問題だなあ。

確かに、わが社と平和が結びつくことは会社の宣伝効果としては良いだろう。しかし、世の中は複雑で色々な考えの人がこの平和については、色々な角度から意見を言っているんだ。わが社が積極的に平和をとりあげることにより、それがプラスになるかマイナスになるかは簡単には即断できない。君はただ、わが社の応接室を借りたいだけだと思っているかもしれないけど、工場長としては、そんな単純にことを進めるわけにはいかないのさ。会社の部屋を貸し、従業員に見せるとすると、そのことが会社にとってプラスになるのかマイナスになるのか、大きな視野から考察する必要があるのさ。今の私も即答できない。ただ君の熱意には脱帽するよ。ところで君に聞きたいのだけれど、最近、わか社で会社の営利活動の足をひっぱるような組合運動が一部におきているという風に聞いているのだが、君はそういう人達と、つきあっているのかね。」

工場長の背後の窓の外には 逞しい青空が広がり、白い美しい雲が動いていた。外の暑さは相当のものであるが、部屋の冷房は気持ち良かった。

松尾優紀は工場長の誠実な話の仕方に深く感じるものがあつた。

「名前を具体的に言っていただかないと返事のしようがないのですけど。でも、工場長はおそらく熊野さんのことを言っておられるのでしょうか、そのことについて僕も言っておきたいことがあります。熊野さんとは親しくしておりますが、僕は彼を大変尊敬しております。ですから、彼が会社の営利活動を妨害しているなどという悪口を耳にはさみまずと、僕は腹が立つのです。彼は、会社で働く人のためになると思っいつも行動しているはずです。彼は、自分のことよりもまずみんなのことを考えます。困った人がいると助けようとしています。現代社会では、自分のことしか考えない人間がふえているのに彼は、そういう意味でまれな人間です。」

「そうか、わかつた。君の気持はよくわかつた。しかし、君は実におもしろい人間だね。核戦争なんていう問題を会社の仕事を扱うように持ってくるんだから。僕は、最初君の話を聞いた時、少々めんくらつたね。でも君の勇気には感心した。熊野君のことも理解できるようになった。まあ、じゃ、僕も忙しい身だから今日はこの辺で。返事は課長を通じて君に伝えるから、いいね、」

その翌日、松尾優紀は黒木課長からビデオ試写の許可を言い渡された。松尾は、この課長の横柄な口調が好きでなかつた。黒木は皮肉な笑いを浮かべ松尾に言った。

「君は、随分常識はずれのことをやる男だね。工場長に直接かけあうなんて。そういった問題は、まず私に言うのが筋じゃないのかね。それに内容も内容だ。原爆と平和のテーマのビデオだって。私には工場長が何で許可したのかわからんよ。会社とは、まるで関係ないことじゃないか。そんなことは、君が私的な立場でやればいいことだ。まあ、ともかく工場長が許可したのだから勝手にやりたまえ」

松尾は、黒木課長に注意めいたことを言われても、そんなに腹も立たず、許可を受けたことを素直に喜んだのだった。

その当日、会社の広い応接室で多くの従業員が松尾の映像を見た。

夏の朝、頭上から舞い降りてきた爆弾は高度六百メートルで爆発し、二キロメートル以内では多くの人が焼け死んだ。川には死体が流れ、道には黒焦げの死体ごろがり、熱線で皮膚が焼かれ、幽霊のように歩く悲惨な人々が水を求めている。三十分ほどの映像であるが、白血病の被害などが写真をまじえて紹介してあった。

工場長まで来て、試写が終わったあと、わざわざ松尾の所へ来て感想を述べていったのだった。感想は、ほめ言葉と技術的なことについてのアドバイスであった。そして、工場より本社の方の方がむいているのではないかということも言われた。その頃、ネットが盛んになり、熊野はアメリカでユーチューブのような動画配信サービスが近い内に起きる可能性は高いし、それが日本に入ってきたら、個人が作る映像詩の発表の場が生まれると指摘した。そうなれば、気象温暖化の問題や核兵器廃棄の提案のような映像詩も掲載できる日がくるから、そうなればそうした映像が世界に飛び立つこともできるかもしれないとも言った。

その日は日曜日だった。熱中症など、いのちにかかわる暑さが警告される酷暑の到来が予告されていた日だった。

松尾が朝食をとるために近くの喫茶店に行こうと思って下宿で着替えをしている時、工場長から電話が入った。内容は工場長の自宅に遊びに来ないかというものだった。工場長から、直接、自宅に電話がかかるなどということは前代未聞のことだったので、松尾はびっくりした。

松尾は電話を聞いてから工場長の真意をはかりかねていた。遊びに来ないかという単なる誘い以外のことは何も言われなかったのだ、松尾はそれを単なる好意と受け取るほかなかった。彼は工場長室で、話をした光景を思い浮かべ、よほど馬があう仲なのかもしれないという風に考えるのだった。松尾は近くの喫茶店で、朝食をすましてから、出かけることにした。

陽ざしが強く、彼は豪雨を思い出した。道をたたきつけ滑りこむように動く雨足は川のように、今の太陽に焼かれるような道という両極端に何か恐ろしいものを感じ、地球温暖化という言葉を感じ出さざるを得なかった。

工場長の家は、松尾のいる尾野絵市から電車ですぐの所にあった。町の郊外から少し入った閑静な住宅地にあった。庭が広くスペイン風の二階建ての家でちょっと目立った存在だった。白ぬりの壁と工夫をこらした窓は、芸術的でした。庭には、バラが咲きみだれていた。松尾が玄関のベルを押すと大學生風の娘が出てきた。あとで聞くと短大一年生ということであった。美人ではないが非常に魅力的な女性であると松尾は思った。

小柄で色の白い細面の顔に宝石のようなやさしい瞳が輝いていた。松尾は頭の中で島村アリサと比較した。理知的な瞳の輝く丸顔のアリサが明朗で活動的な魅力を持っていたとすれば、船岡理恵子という工場長の娘は静寂な雰囲気を持っていた。アリサは誰の目にも美人と映るタイプであったが、理恵子は美人

型の顔立ちというわけではなく清楚な美しさが顔から服装まで漂っていて人をひきつけるのだった。そしてアリスは短かい髪を好んだが、この日、松尾の見た理恵子は腰にまで届きそうな長い髪をしていた。

松尾は、理恵子に案内され応接室のソファに座った。しばらくして工場長と奥さんが出てきて挨拶した。そして理恵子がコーヒールとケーキを持ってきた時、彼女の後ろにほっそりした小柄な男の子がついてきた。片足がよくきかないらしく、歩く時はどうしても身体が少し傾くのだった。

工場長の家族は、この四人であることは工場長自身が松尾に家族のことを色々と詳しく紹介してくれたことでわかった。利口そうな目をした末の中学二年生の男の子は、町の郊外の里山から植物や昆虫を集めるのが趣味で、学校は好きでないようだった。奥さんは、娘と同じようにほっそりしていておちついた気品のある瞳と威厳のある唇を持っていたが、やはり四十を少々過ぎた年を感じさせる顔の皮膚には、しわが時々目につくのだった。

「いや、本当によく来てくれた。実を言うとね、僕は君のビデオに感動してしまったのだよ。よく、あのような立派な作品をつくってくれたと思ってね。原爆と平和の問題、これこそ現代人にとって最も緊急に解決しなければならぬことだよ。そのテーマに君が映像という表現形式を使って取り組んでくれた。すばらしいことだ。僕はね、松尾君。終戦の時、広島にいたんだよ。僕は、その時、四才でね。ちょっと事情があつて広島の親戚の家にあずけられていて東京から離れていたんだ。親戚の家は、広島の外にあったので原爆による直接の被害は受けなかった。それは奇跡的な幸運だったけれど、原爆が落ちてから三ヶ月ほどたって、叔父に連れられて広島を歩いた時の衝撃は生涯忘れることはできぬ。君が原爆資料館で見たものを、僕は広島の中の見たんだ。こうした恐ろしい事実を世の人に伝えたいという気持はあつても、僕のように大会社で忙しい身になってしまうと、中々思うように動きがとれない。本当に君のような青年を見ると実にたのしく思うし、それに君の作品は、見る人に訴える力もある。才能もあると思う。がんばってくれたまえ。ところでテープを持ってきたか。家内や子供達も見ただがってね」

松尾は持ってきた黒い鞆の中からビデオテープを取り出した。奥さんが、微笑を浮かべながら言った。

「それは、しばらく貸していただけますの？」

松尾が肯定の返事をすると思は、再び言った。

「それなら、あとでゆっくり見せていただきますわ。主人はもう見たのでしょうから。あたしと子供達、それの場合によっては近所の人達も呼んで見るかもしれませんわ。映像の魅力があるというのですから、単に反戦というだけでなく、私達の胸に何か深いものを与えてくれるかもしれませんわ。私達が、のんきに毎日をくらしている間に戦争の準備がどんどん進んでいってしまわぬためにも、私達の反戦の決意を高揚させていく必要がありますものね。そのためにも、そうした映像は一見の価値があると思いますわ」松尾は、工場長から思いの外の称賛の言葉を聞いたり、奥さんの高い期待にふれたりして、ちょっと困惑していた。将来的には反戦の優れた作品をつくることが目標ではあるが、今回の作品の出来についても彼自身は決して満足しているわけではなかったからだ。反戦の色合いは相当出ているが映像の魅力ということになると、まだ改善すべき余地がたくさん残されていると彼は考えていた。それでも急いで

公表に踏み切ったのは、未完成であってもかく核兵器廃止運動は緊急を要すると考えているからに他ならなかった。

それに昼間の職務をやったあとの編集なので完成品をめざしているとまだ相当の日数を必要とすると思われたからだ。

「やあ、奥さん、そんなに期待をかけられるのがっかり致しますよ。私のせい一杯つくった作品ではありませんが、まだ色々と不満足な点が目立つんですよ。でも核兵器の恐ろしさと反戦の気持は充分でいると思います。映像の魅力ということになると自信はありませんね。でも映像が、こうした問題に深入りする必要があると思っているんです。月や花がどんなに美しくたって、そのすばらしい神秘性を感じる人間が減ってしまうことを考えたら、やりきれませんからね。

この宇宙にある、ありとあらゆる美しさを芸術作品を通して表現していくことも大切ですが、一方で、そうした美しさを無意味にしてしまうような悪魔の力を警戒しなければなりません。この悪魔を映像の中に登場させ悪魔の力を弱めるためにはどうしたら良いか、考えてもらう材料を提供するのも映像の重要な役割だと思いますね」

松尾がそこまで言うときまで黙っていた理恵子は、母親に似た微笑を浮かべて、なめらかな明るい声で言うのだった。「松尾さんのおっしゃること、ごもっともですわ。芸術至上主義では、現代人を満足させることはできませんわ。でも、満足しないくせに芸術も政治も捨ててクリスタルに生きるなんていうのが流行しているのですから、とても残念ですわ。クリスタルって水晶のことでしょう。天使も悪魔も知ろうとせずに人生の一番透明な所だけ通過して、事足りりとする流行は我慢がなりませんわ。あたしは松尾さんのおっしゃる通り悪魔が人間を支配しようと、やっきになっていると思いますの。そんな時、クリスタルに生きるなんて許せませんわ。松尾さんは悪魔を信じますの」

「そういうものが現実にいるとは思いませんね。しかし、人間の心の中に悪魔といって形容して良いほどの野獣性や逆に天使のような美しい心が同居していますからね。そうした一人一人の野獣性が社会という集団になった時、悪魔が現実において人類を支配しているかのように見えることはありますね」

「それはちがいますね。悪魔はいるんですわ。歴史は進歩しているはずなのに、ありとあらゆる災難が人類を待ちかまえているのを考えてみて下さい。膨大な核兵器はそのシンボルですわ。気象温暖化もそうですし、おそらく二十年以内に大地震が何かとてつもない怖い病気がはやるということもありえますわ」松尾は理恵子の言葉が強い調子で断定的に言うように変化したのでびっくりした。理恵子の母親が横から口を出した。

「すみませんね。松尾さん。この子は、ちょっと激しやすい性格でしてね。会話の最中によく興奮してこんな強い調子になるんですよ。」

工場長は笑った。

「理恵子はね。真剣に徹底的にものを考えるんですよ。親の口から言うのもなんだが、私がびっくりするほど本も読んでいますね。でも思想的にはノンポリで、ちょっとキリスト教に興味を持っているということかな。最近、悪魔にこっているようだね。妖精だの天使だのって、ちょっと中世か古代の人のようなことを言うんで私も戸惑いますよ」

工場長は、うれしそうに微笑していた。

「松尾さん、私の会話の調子が母の言うようにまずいものでしたら、ごめんなさいね。私の性格の欠点は、自分でもわかっているのですけど感情の起伏が激しいことね。外見は、おとなしそうに見えて言うことはきついついて時々言われますのよ。これは努力してなおすようにしますわ。それはそれとして今の私は、神様や悪魔や天使や妖精を信じていますの」

「僕は、この世界に『いのち』以外のものはないと思っています。ただ理恵子さんのおっしゃるように『いのち』が悪魔や天使の形となって僕達を動かすということはあるかもしれませんね」

「それ、どういう意味かしら。私にはあなたのおっしゃる意味が理解できないわ。もう少し詳しく説明してくださいませんか。」

理恵子は用心しながら言葉を選んでいうようで、ゆっくりした調子であったし、口もとには微笑をたたえていた。工場長が松尾の方をむいて言った。

「厳しい質問だが、僕も聞きたいね。僕は物質が世界を支配しているのだと思うよ。その物質の法則をあきらかにする科学こそ現代において最も信頼すべきものだと思うがね。でも宗教を否定する気持はないんだ。ただ科学と宗教とが心の中でつながらないんだね。君のさきほどの発言だと悪魔や天使が科学の対象になるように聞こえるんだが、その所を説明してほしいね」

「僕は、花も石も人間もいのちの現われだと思うんです。つまり、僕は石ころを人間のように見る見方が好きなんです。石ころは生きているんです。こうした感じは、僕の子供の頃からありました。石ころを生きているなんて言ったら、生物学者にしかられるかもしれませんね。君は生きているという言葉の意味を厳密につかんでいないねとかいう風にね。」

僕も工場長と同じように科学を信じます。ですから生きているということで人間と石ころを同列にならべれば、非科学的だと言われるくらい承知しております。そういうことを知っていながら、あえて石ころは生きているという風に言いたいんです。なぜなら、そんな風に子供の時代から僕は感じていたんです。人間だけが生きているのではないんだ。山も川も花も昆虫も生きているんだというのは、僕の実感なんです。ですから、森の中に妖精がいるなんていう考えは、僕は好きなんです。山の中にはいて、風と樹林がすれあう時、ざわざわ音をたてますね。あの音はまるで妖精が合唱しているみたいですよ。風と樹林の会話は音という生き物となって森の中を動きまわるんです。これを妖精と呼んだっていいじゃないですか。さきほどの悪魔だって同じことです。人間の心の中にある汚いものを、心理学という科学の力を借りて欲望だのエゴだのと分析しなくたって、これを悪魔と言ったっていいじゃないかと思うんですがね」

理恵子は笑った。その笑いは本当におもしろくてしょうがないという風に、陽気に部屋の空気を震動させるのだった。

「あなたは、結局、アニミズムの信奉者なのよ。道夫君はどうかしらね。神様を信じているという所かしら。」

船岡道雄はさきほどから松尾達の会話をおとなしく黙って聞いていた。ひどく行儀がよく無言でみんなの会話を聞いている様子は天使のようにあどけないと、松尾は思った。

それで、クラスでいじめられることもあるらしく、それも母親の悩みの種だが、本人の心は意外に強く、植物や昆虫を集めて標本にしていると、全てを忘れるようだった。

その道雄が理恵子の呼びかけにびっくりしたような顔をして、実に美しい声で言ったのだった。

「僕、神様、信じているよ。松尾さんのお話なんだか、よく分からない。でも、神様がいらしゃることは、間違いないことだと思います」

工場長が笑って道雄の肩を軽くたたいた。

「道雄はどこから、そんな確信を得たのかね。私は無信仰だし、お母さんはどちらかというところ、仏教の方だから、やっぱり姉さんの影響かね」

奥さんが口をはさんだ。

「理恵子はキリスト教を信じてないくせに弟には神様やキリストのことを教えて時々、聖書まで読んで解説したりするんですよ」

工場長は笑った。

「ミッシェンスクールだから聖書の勉強もしなくちゃならんだろうからね」

「そうよ。でも聖書を読んで、礼拝に行ってもキリスト教の神様は、よく分からないわ。すなおに信じられる人は幸福よ。どちらかというと、私の家は仏教的色彩が強いんだよ。

そうした雰囲気の中で育ちながら、短大に入ってから急にキリスト教にふれても、よく分からないのが正直な所よ。

同じ神様でも古代ギリシャや古代日本の神話に出てくる神様なら、なんとなく親しみやすく、わかるしそんな風な素朴な神様なら、むしろ素直に信じちゃうんだけど。

というよりは信じているのよ。

悪魔や天使や妖精と一緒にそうしたアニミズムの世界に生きる神様なんて面白いわ。

でも、あたしが一番関心あるのは悪魔なの。

あたしの心にも悪魔はやってくるし、人間の歴史を動かそうとたくらんでいるのも悪魔であるような気がするの。核兵器をつくるように、背後から人間をあやつったのも悪魔だと思いますわ。もしかしたら気象温暖化もね。

今は核兵器が強国にあるのが当たり前になっていますよね。悪魔の悪知恵はたいしたものですよ。多くの人はその状態にまひして、何も言わなくなっている。核兵器反対なんて普通の市民が言うところ、無言の圧力が押し寄せてくるのは、背後に何がいるか想像がつくじゃありませんか」

理恵子の母が手を口にあてて笑った。

「理恵ちゃんの考えと、さきほど松尾さんのおっしゃった考えとまるで、そっくりじゃありませんの。きつと気が合うかもしれませんわよ」

「あら、どこが似ているのかしら。アニミズム世界観ね。でも、あたしと松尾さんは同じ妖精を見る場合でも随分違うわ。松尾さんは妖精はいのちだっていうし、あたしは悪魔とはまるで違う心の綺麗な世界

の住人だと、答えるし」

そこに妖精とでも形容して良い丸い顔をした黄色い美しい顔の猫が来て、理恵子のそばに座った。彼女は猫を抱っこして座り、「この子はあたしの妖精よ。でも、石のことまで、考えたことはないわ。三毛っていうの。可愛らしくまるで私の気持ちが分かるように、私の心を慰めてくれるし、とても綺麗な猫でしょ。これこそ、あたしの妖精のシンボルだわ」

3

理恵子は、ちょっと早口に向きになったような表情でそう言った。彼女に抱かれた猫が大きな目を見開いて、松尾優紀の目を見た。

「うむ。不思議な目だ」と彼は思った。目の奥に一つの宇宙が広がるという詩的なイメージが松尾の心に浮かんだ。

「瞳の奥から、迷い込んできた自然の神秘的な光はわが胸を射す」という以前ノートに書き留めた自分の詩句を思い出した。

理恵子の母は上品な微笑を浮かべていた。

「でも、世界をアニミズム的に見る方なんて、今時、珍しいんじゃない。その点では二人は一致しているのよ。」と彼女は娘の理恵子の方を向いてそう言った。

工場長が細い目を大きく見ひらいた。「そうだな。お母さんの言うようにアニミズムという点では二人は一致している感じがするね。そのことで思い出したんだが、うちの会社でもロボット開発がさかんになってきているんだが、このロボットのことを考えると君達の考えているアニミズムが正しいのかもしれないと思う。今のロボットは、まだ自動車工場で使われている程度の簡単なものだが、近い将来は高度なものができるだろう。内の研究所でも研究しているからね。アンドロイドをね。そうするとね、ロボットに意識が生まれるという風に言っている学者もいるんだがね。かなり先の話だと思うが、話題としては面白い。機械が人間と同じような意識を持つものだからね。ある意味で意識というのは別に珍しい現象ではなくて、条件され整えばいくらでも生まれるんだね。とすると松尾君の言う石ころを人間と同じように見る見方というのにも納得できる。

人間は他人の意識を見ることはできないで、自分の意識の世界しか感ずることができないんだが、それと同じように猫の意識や犬の意識を知ることができない。だが、猫や犬にも人間に近い意識があると想像できる。ならば、草花や石ころにだって意識に近いものがあると想像するのも面白いね。意識について一

番知っているのは自分だよね。この自分が生きているという感じを一番大切にしたいと思うんだ。色々ものを見たり聞いたりしながら希望を持って生きているというこの自分がなによりも意識の証明だね。つまり、それと同じように他人も生きているし、猫や犬そして石ころさえも意識や無意識を持ちながら生きているんだという風に考えれば、さきほど松尾君の言ったアニミズムの考えは充分理解できるし、僕としてもそうした考えは共感できる。さらに話を発展させれば、そうしたすべてのものが生きている生命に満ちたこの世界で死を意味する核兵器の使用は許せないということだね。

科学は人間の持つ最高の道具である理性が発展させてきたものだが、理性というのも戦争に勝ちたいという自我と結びつくと、とんでもないものをつくる。核兵器をつくり、さらに性能の良い核兵器へと進む。これは人類の死を意味する。だからこそ、会社が生き残り、さらに発展していくためにも平和のための宣伝を世界にむけて率先してやっていく必要があると思っっているんだ。

ところがこれには勇気がある。うちの会社の上層部は保守的で頭のかたい人が多いから、今そういう行動は中々とれない。

しかし、社長は立派な平和主義者だから、僕のこうした考えもいずれ理解してくれ、わが社が世界に向けて平和へのアピールを出す日が来ると思うね。

その時のためにも松尾君にさらに良い作品を作ってもらわなくちゃなんと思っっている。いずれ、君を本社の宣伝部に推薦するつもりだ。ところでね、松尾君。

会社の仕事とは別に君に頼みごとがあるんだ。

実はね、道雄の家庭教師をやってほしいんだ。週に一度でいいんだ。

いつ来るかは君の都合の良い日を選んでもらえば良い。

時間は二時間ぐらいだな。

僕はね、この子のがとても心配ね。

誰か、いい人がいないかなあと思っっていたのだけれど、君の映像を見せてもらった時から君が良いと心に決めていたんだ。教える内容は国語だけで良い。

君の日本語の鋭い感覚をいかしてもらって道雄にいくらかでも豊かな感受性と国語力をつけさせたいんだ。どうだね。僕の頼みを聞いてくれないかね。」

工場長はおだやかな瞳で、松尾を見詰め、返事を待った。

「僕でよろしかったら、喜んでお受けしますよ。

でも、家庭教師なんかしたことないから、僕が教えて道雄君の学力が向上するかどうかはあまり自信がないんですけど」

松尾は工場長がこんなにも自分を好意的に見てくれているのがうれしかった。

「学力が向上するかどうかは道雄の努力にもかかっているのだから、そんなことはあまり気にかける必要はないんだよ。

むしろ、君のものの考え、行動力が気にいっているわけだから、なんらかの影響を道雄に与えてもらえればそれで良いんだ。

ま、気軽に考えてくれたまえ。つまり、道雄と友達になってもらえれば、僕は満足なんだ。姉の理恵子がいるんだが、やはり君に若い男のエネルギーな魅力を道雄に見せてほしいんだ。

理恵子も道雄の面倒はよく見てくれているのだが、やはり魅力的な男性を道雄の友達にしてあげたくてね。君が受けてくれるということで、僕は君に感謝するよ」

奥さんもうれしそうな表情をした。言った。

「あたしからも、お礼を言わせて下さい。母親として、この子がたくましく生きていく力をつけてほしいと願っているのですけど、やはり、すぐれた指導者が今の時期にはこの子に必要なんですわ。松尾さんなら、この子も喜びましようし、あたし達も大喜びですわ。毎月のお礼も充分さしあげるつもりですから、よろしく願いますわ。で、いつ来ていただけますの？」

松尾は、結局毎週土曜日の夕方、道雄の家庭教師として船岡家に通うことを約束したのだった。理恵子が二人の会話が終わるのを待っていたかのように、言った。

「ねえ、松尾さん、又、議論をふきかけるみたいで悪いんですけど、このことはぜひ、あなたの御意見をうかがいたいんです。あなたは、悪魔の存在を信じていないようだけど人間として生まれ、人間として活動しているということじたい何か悪魔と手を結んで遊んでいるような所がありませんかしら。私は最近そんな気がしてならないのですけど、こんな感じ方異常かしら。」

パウロも言っておりますわ。善をなしたいと思ってもその欲している善はすることができず、悪ばかりやると言って嘆いているパウロの気持が、私にはわかるような気がしますの。人類そのものがそうじゃありませんの。車や飛行機を生み、パソコンをつくり出したのに、何故、核兵器だの気象温暖化だのという悲しいものを生み出すのですか。悪魔がいるからですわ。

あたしがあなたを素敵な男性と思ったのも悪魔のたぶらかしかもしれませんね。悪魔は、色々なものに化けますから用心するにこしたことはありませんわ。見えるものにばかり変身するとはかぎりませんし、本当に悪魔は気紛れだと思いますよ。ですから、空気の中に入り交って私達の胃の中に入り、血液から脳の中にまで入り込むかもしれませんよ。パウロの言うように、あたしは自分が悪魔に支配されているのかと思って、ぞおっとすることがありますわ。でも神を信じることはできない。神様を昔の人のように素直に信じられたらどんなに幸福でしょう。この心の中の悪魔を神様は決してお許しにならないでしようし、きっと追い出してくれますわ。でも、こんな奇跡は信仰のない私には無理なこと。どうです、松尾さん。私の話はあまりにも夢物語のようで面白くありませんでしょう」

松尾は、理恵子の話を聞きながら、彼女の話が現実にあてはまるのか疑いながらも、そんな風に周囲を見てみる実験をするのも悪くないと考えた。応接室のシャンデリア風の豪華な飾りをつけた螢光燈の黄色い光から小悪魔のような小さな小人達が飛び出して船岡家の人々と松尾の頭上で小悪魔の村の祭りで楽しい舞踏を始めているという風に。松尾は、そんな風に周囲を見た自分を不思議な生き物のように感じていた。

「いえ、大変おもしろいです。妖精について考えたことはありますが、悪魔について深刻に考えたことはありませんので、大変勉強になります」

「それはあなたがロマンチストだからですわ」

「ゲートのファウストだって、「罪と罰」のラスコニーコフだって常に悪魔と結託しているではありませんか。人間って誰にもそんな所があるんですよ。松尾さんだってそういうことにそろそろ気づいてもらわなくちゃ。良い作品は生まれないんじゃないやありませんかしら」

松尾は、彼女の話が自分に善と悪の問題について考える切っ掛けをつくってくれたように思った。工場長の家で夕食まで御馳走になり、色々と歓談したあと帰りの道で、深刻に彼の思考に肉薄してきたのは、この善と悪の問題であった。

彼は広島の実験の恐怖を映像にしてビデオ作品を製作し、それを人々に公開することにより平和を訴えようと行動を始めていた。これは善としての行動であると思われた。だが、はたして彼は善人であろうかと彼は自分を疑ってみたのだ。善人としての行動の裏に自己満足がないであろうかと考えてみた。絶対にないとはいえない自分がなさなかった。しかし一方で、なぜ自分は善をなしたいと思うのだろうか。そして又、今まで自分はどれほど善をなしたであろうかと思ってみた。もしも善を他人とのかかわりあいの中で他人への思いやりのある行動、他人への救いの手を伸ばしてあげることという風に定義するならば、過去における松尾優紀の行動は、あまりにも本物の善が少なかったのではあるまいか。

しかし人はなぜ悪を反省し、善を求める必要があるのでしょうか。昔ならば善をすれば天国か極楽に行け、悪をなせば地獄に行くという風に考えれば良かった。しかし、現代人でそんな風に考えることができる人は少ないだろう。だとするならば天国も地獄もないと思いいこの地上と科学的理性だけを信じる現代人が善を求める理由は何か。個人の立場から言えば、悪をなしたっていいじゃないか、それは個人の勝手という風に考える人達が生まれるのもある種の必然であるかもしれない。松尾は徹底的に悪人としての生活を貫きとおす人物の姿を思い浮かべてみた。だが、彼自身は反対の方向を考えていた。つまり善をなしたいという欲望が彼の心の中に高まっていくのであった。これは不思議な感情だった。弱い人を助けたい、悪い権力を持った奴をこらしめたい、これは欲望というよりは地下水からこんこんと湧き出る泉のような愛と慈悲の感情だった。彼は帰りの道々、人類愛に似た感情が彼の心を圧倒し、目から涙があふれてくるのをどうすることもできなかった。その理由は彼にもわからなかった。

工場長の家には、土曜日ごとに行った。家庭教師のあとの夕食の雑談を繰り返していくうちに、会社の上層部でかなりの内紛があるということを松尾は知るようになった。工場長が、どうもその主役であるらしかった。工場長は、重役にはなっていないが、才気があり会社への貢献度で重役を圧倒しており、社長の信任が厚かった。工場長の会社への経営についての提言を社長がどんどん取り入れていくので、大株を持っている重役を中心に工場長への不満と圧力が強まっていたらしかった。工場長が重役になれないのは、重役の中に船岡を敵視する者がいたということかもしれない。

会社の株は、森下家と白沢家の二家が半分近く所有しており、この二家が経営陣の採用には大きな力を持っていた。しかし、この二家は昔は一緒に事業をやった仲であるにもかかわらず、最近ではひどく仲が悪くなっていた。現社長は森下家の信任が厚く、重役陣の中には白沢家の子息が入りこんでいた。この程度なのが松尾の耳に人ったわけだが、この二つの勢力が会社の経営についてどんな風な相違があるのかよくわからなかった。

ただ、わかったのは、工場長が松尾の平和運動に大きな関心を持っていることであり、この平和運動も会社の営利事業の中に組み込んでいこうという考えがあるらしかった。もともと大株主の森下家は、理想家肌の人が多いのに対し、白沢家は実務家肌の人が多いとも聞いていた。社長や工場長にとって他の重役はこわくなかったが、白沢常務が面倒な相手であった。白沢常務はロボットとAI導入による合理化によって、労働者首切りを主張していて、労働者の生活よりも会社の利益と内部留保を優先するような人物だった。であるから、組合側も社長に対しては好意的であり、白沢常務に対しては警戒色を強めるという感じであった。熊野は、松尾の親しくしている先輩でもあり組合活動家として強力な指導力を持っている若者であるだけに、白沢常務に対する悪感情は露骨に松尾の耳に披露されたものだった。

秋も近くなったある日のことだった。工場の近くに、森林公園があった。久しぶりに、熊野と松尾は二人で昼食後に、噴水があるその公園に散歩に出た。沢山の小鳥のさえずりや青空の白い雲やそよ風が心地よかった。相変わらず、セミの声は樹木の間から、聞こえてきたが、ツクツクボウシの声はどこか弱しく秋を告げているように思われた。

二人はベンチに座ると、熊野は図太い声で、会社の話をした。

「ねえ、松尾君。白沢常務みたいにロボットを導入して労働者を首切り、利潤ばかり追求し、内部留保にばかり目を向けている会社が日本にどんどんふえていくとしたら大変なことになるよ。企業は、もっと社会的責任ということを考えるべきだよ。白沢常務は大株主だから、会社を私物のように考えているようだがとんでもない話だ。あの優秀なロボットの入った最新鋭の工場はみんなのものだよ。ロボットを導入することは僕も結構なことだと思っている。人間が危険なことやひどい重労働をする必要がなくなるからね。これからの企業は、もっとアイデアを出して工場で働く人々の創意工夫による色々な生産活動があって良いと思うんだ。特に我が社は、ロボットや電気製品を多く売っている会社で消費者と密接に結びついている。アイデアさえあれば、我々の日常使っている電気製品は驚くほど豊かになり、生活は芸術的にすらなると思うよ。例えば、ロボット、これは工場だけのものではなく、やがて家庭で使うペットのようなロボットが出てきても良いと思う。松尾君が工場長の家でやっている家庭教師のような仕事のできるロボットもあって良いと思う。もちろん、これはすぐにできることではないが、ロボットは我々の生活を豊かにするために、使うべきだし、だからロボットはすべての労働者の共有物なんだ。それを白沢常務は何を勘違いしたのか、私物のように考えている。全く馬鹿な常務だよ。その点、うちの社長の方がずっと話が分かる。内の組合は今の段階では、社長をある程度支援して白沢を追っ払う力に加担するのが得策だろうね。もちろん我々の組合が社長や大株主と利害が完全に一致するということはないから、その点ではいつも経営に対しては警戒の手をゆるめてはならないし、戦いは進めていくべきなんだが、最終的には労働者の代表を経営陣の中にいれなければだめだろうね。そうすれば、君の核兵器反対の映像詩は会社のイメージアップにもつながるということが大声で主張できると思うよ」

それから、熊野は一息ついた。

その間に、松尾優紀はそばの花壇に咲いているホトトギスを見た。白に赤紫の斑点模様が彼の興味をひいたのだ。

その後すぐに、熊野はちょっと強い調子で言ったので、優紀ははっとした、

「そうすれば、多くの国が核兵器禁止条約を批准し、発効しはじめたというのに、被爆国の日本が批准しないという愚かなことを止め、批准する方向に前進できる筈だ。」

ふと、森の方の小鳥のさえずりの中に、ホトトギスの声が聞こえたような気が優紀にはしたのだった。

4

松尾優紀は、広島で撮った映像詩にみがきをかけた。応接室で映写したのは、十五分ほどであったが、完成品は三十分ほどの長さになった。その間、アリサの所に行ってアドバイスも受けた。それから、船岡理恵子との悪魔と妖精の話を伝えたら、アリサは「そういうのは内の寺では幻と言っているのですよ。あなた自身の中に、仏性という偉大な宝があるので、そういうものに惑わされないように」とも言われた。今や、アリサは優紀にとって映像詩の先生であった。彼女がいなかったら、映像にピタリする音楽を入れることが出来なかったろう。かつての初恋の人という恋慕の情は消え、時々厳しいことを言う師となっていた。彼女の父の住職が言う仏性は難解だった。

土曜日には、毎週きちんと工場長の家に通って道雄の家庭教師を熱心にやった。道雄は神を素直に信じる素朴な子であった。

彼は松尾優紀の核兵器禁止を訴える映像詩を見て、感動したと言い、そして目を輝かし自分も平和運動に参加したいということをつけ加えた。その日の夜、松尾優紀は不思議な夢を見た。

夢の中にあらわれた道雄が天使の姿をしていたのだ。

頭の背後に金色の後光を輝かせ、美しい白い羽を蝶のようにひらひらさせながら、優紀の方を見て、神秘的微笑を浮かべていた。

そしてこの世のものとは思えない美しい音楽のような声で語り始めた。

神の使徒として平和の道を人々に伝えるように告げたのであった。

夜中に目が覚めて、その夢の内容をあれこれ考えてみたが、松尾優紀はひどく不思議な気がしてならなかった。優紀にとっては、それはただの夢とは思えず、一種の啓示のように感じられもするのだった。

彼はその夢の内容を道雄に言ってみた。

「僕が天使の姿であらわれたのですか。不思議ですね。でも、松尾優紀さん、僕は神様を信じていますし、あなたのやっておられる平和運動も支持しております。ですから、そうした僕の願いが神様を通じて松尾優紀さんの夢にあらわれたのかもしれないよ。」

松尾優紀は特定の神を信じていなかったから、道雄のことばをうのみにするわけにもいかなかった。といって、無視することもできなかった。

その頃はよく雨が降った。豪雨になることもあった。気象温暖化も優紀にとって気になることだった。

雨が止み、晴れ間が見えたある日、松尾は何かの折りに工場長に奇妙な夢のことを話してみた。工場長は、しばらく考えてから言った。

「うん、前から言っているとおおり、僕は君の平和運動を企業サイトで考えたいと思っているんだ。しかし、今の会社の現状では、会社がみんなで協力してその問題に取り組むことは出きない。そこでだな、僕が勝手に思いついたアイデアなんだが、まず君の平和運動がどの程度会社のイメージアップになるかという点で社内で実験したいと思うんだ。もし、これが成功すれば君は宣伝課の方にまわってもらって、会社のピーアールという大義名分のもとに平和運動をやることができる。」

どうだね。それでね、君の夢の中の啓示なんだが、それをそのまま使って欲しいんだ。つまり、会社の社内食堂で、君の啓示について話をし、それがどの程度、会社のイメージアップにつながるか実験したいんだ。」

「私のパフォーマンスと映像詩の二本で行くということですね。それで失敗した場合は、だめになるんですか。」

「いや、よほど失敗しないかきり、君のやる気を示してもらえばいいんだ。そうすれば、僕が君を宣伝課にまわす理由もできるといふものだ。君がこの工場にいたら、そうした活動はできんだろう。つまり宣伝課にまわすための口実をつくるだけだから、君はやりたいようにやってもらえればいいんだ。ただ君がいつも考えていかねはならないのは、平和運動を進めるのはおおいに結構だが、君がうちの会社員であり君の活動が社のイメージアップにつながるように行動してほしいということなんだ。これは、個々の間違いや失敗を許さないということではないから誤解しないように。小さな失敗は、おおいにして良い。僕の言うのは、君の活動が全体として社のイメージアップにつながれば良いんだ。やってみなさい。君の勇気をためすのだよ」

松尾優紀は、船岡道雄を教えている時、ふとこの工場長の言葉を思い出してみた。道雄が天使として夢の中に出てきたのも不思議であれば、今ここですなおに自分の教えている内容について真剣に取り組んでいる彼の姿も妙に神秘的だった。松尾優紀は、頭の中で、思考実験をしてみた。彼は自分をドラマの主人公にしてみた。その主人公は自分がある価値観の啓示を受けた詩人という風に考えている。

ドラマの主人公は、現代の詩人のような存在としての自覚があるから、当然のように平和問題と取り組

んだ。彼はスペイン

のドンキホーテを夢想した。そして、新しい価値観の伝道者として出発しようと決意したのだった。だが、彼が優れた詩人であるのか、それともただの風変りな世捨て人であるのかは、ドラマの中では誰にも分らぬ謎として表現された。

ドラマの中におけるドンキユーキの誕生である。彼はまず世界の平和について考えた。核兵器廃絶運動を立ち上げることであった。

これが今世紀最大の問題であると考えたからだ。世界の平和と福祉社会の建設と隣人愛が彼の三本の柱となった。松尾優紀は、こうしたドラマを頭の中で構想し、その主人公になってみたように演技してみようと思った。彼は自分の考えている平和問題がルミカム工業という会社の問題として社員にとらえられれば、会社のネーム・バリューを使って日本全国ばかりでなく、世界に核兵器禁止による軍縮と平和をうったえる力を持つことになると考えたのだった。

だから、彼は真剣だった。彼は、工場長から言われたように宣伝課に入りたいと思った。そして、工場長の言うように実験を社内食堂で試みることにした。そして実験してみる日を工場長に予告すると、宣伝課長がその現場に来て松尾優紀の実力を見てくれるように手配してくれるということになった。

その日、彼は心臓をドキドキさせながら社内食堂に入った。食堂は、けっこう混雑していた。社員の前には紅茶が出されていた。

「うまい」という声もあった。彼は、自分のつくった映像詩のビデオ作品でその場にふさわしいものを選び、食堂に器具を設置した。前のより原爆の悲惨性をリアルに出したものだだった。

『爆風によって。町の建物は破壊され、熱線によって人々は炭素となり、かろうじて生きている人は身体の皮膚がひどいやけどで、人間とは思えぬ姿となり、川に飛び込み死ぬのだった。黒い雨も降り、白血病になり、死ぬ者も多くいた。原爆によって、広島は地獄のような町となってしまったのだ』

大型のテレビに映写しながら彼は、説明を加えていった。中には「ハハハ。何だ。あの若造は。まともな広告の才能があるのか」という大きな声もあった。だが、誰かがその声を静止させたのだ。利益だけでなく人権問題を会社の柱としたルミカムの歴史があるという声は小さいがしっかりした声だった。

松尾優紀は平和がわが企業にとってどれほど大切かということをつたえたのだ。食堂にいた多くの社員は、また宣伝課のやつがおもしろい企画をしているというくらいにしか考えなかった。そして社員の多くは、自分達の会社の企画であるゆえにけっこう関心を持って見ていた。

「平和か。そりゃ大切さ。だがそれがわが企業の活動に結び付くのかね」という声も松尾優紀の耳に入ってきた。それに答えるかのように彼は、マイクを使って話をした。

「みなさん、人類にとって今ほど危機の時代はないのです。まず核兵器をなくすことであります。これによって莫大な金額を人類は福祉にまわせる。その中で、わが社の作っているペット用のロボットも電気製品も売れる。こんな素晴らしいことはありませんか。

私は、アニメイズム論者です。いのちがこの世界を支配し、いのちの運動がこの世界のさまざまな現象をひ

きおこしているのだと思っております。

科学の立場で言うと、物質という概念が一番重要なのは、皆さんのご存じの通りです。ですけど、物質の本質はいのちなのです。いのちが物質になるのです。私は、キリストが神の子と自分を定義したように自分をいのちの子として、皆さんと一緒に平和問題に取り組むことをうったえたのです。神という言葉はすでに骨董品として偉大な力を失ない、現代では、物質という言葉が幅をきかせています。しかし、この物質はかつての神のような偉大な美しさを今だに出していません。ダイヤモンドは、磨けば美しく輝く。物質も同じです。物質という言葉は、磨かれる時かつての神以上の偉大さで輝き、いのちが現れてくるのです。その時、みなさん、私達はみないのちの子です。自然の子と言うべきかもしれません。いのちの子としての人間の偉大さを現すためにも私達は立ちあげましょう。このことは会社のためにもなるのです」

一人の若いオフィスガールが松尾優紀に近づいて来た。

「あら、松尾優紀さんじゃないの？まだ平和問題なんかにかっこっているの？こんな所まで出張してやるなんて大変な度胸ね」

「ああ、大内さん、工場からこちらに来てどうですか？」

「まあ、おもしろいわよ。それにしても今日は大変な演説をしに来たのね。きっと、あなたのこと社内で評判になるわよ」

「そうですか、それは良かった。それで目的はたしたというものです。大内さんは、世界の平和について考えたことあるでしょう？」

「そりや、あるわよ。でもあたし一人じゃ、どうしようもないわ」

「そうなんですよ。一人じゃ何の力もないから、みんなで力をあわせてやるのですよ」

「でも、あなたの話、ちょっと考えすぎじゃないの」

「ええ、そうかもしれません。でも、僕は宣伝課に入り、ぜひこの平和問題を会社の営業サイドで検討し、日本全国のみならず全世界にうったえたいと思っていますのです」

「あら、松尾優紀さん、宣伝課に入るつもりなの？それでこんな風に自己宣伝しているのね。あら、うわさをすれはかげとやら、宣伝課長の木下さんがやってきたわよ」

宣伝課長の木下勝次という課長は、温厚な雰囲気を持っており、色白で少々小肥りの中肉中背の男であった。彼は松尾優紀に近づいてくると言った。

「おお、松尾優紀君、工場長から君の話は聞いた。そして今日の君の活動は隠しカメラで全部見せてもらった。大変面白い。ぜひ、宣伝課で、君をスカウトしたい。人事課長の方にも連絡しておくから、明日からでもこちらの方に出勤してほしい。」

木下課長は、ゆったりとした雰囲気の方で部下からの信頼も厚い男だった。その微笑はまるで仏様のようだと言われもしたのだった。松尾優紀も木下課長を見るとなごやかな気分になるのだった。「課長、平和問題は、わが社のイメージアップになると確信しております」

「そうか、人権問題では、わが社はよその会社の模範となったものだ。平和問題も同じ。君の信念でやり

たまえ。君には今度わが社が開発した。アンドロイドロボットを貸してあげるよ。人間に近くなったア
ンドロイドだ。それを連れて電気製品のセールと平和を訴えた映像詩、両方やってくれたまえ」

「アンドロイドを連れていくんですか」

「そうだ、知能ロボットでね。名前は君がつけたまえ。人間とある程度のコミュニケーションが出来る、
わが社の世界に誇るロボットだ。君が活用してほしいんだ。ロボットを操作するために、技師の田島君
を君の協力者としてつけてあげる。まあ、がんばってくれたまえ」

松尾優紀はロボットについては空想もしたことがあるし、工場にある産業用ロボットを見たことはある
が、今、課長の紹介しているような知能ロボットはまだSFの世界の出来事であると考えていたから、
びっくりした。

「いつの間に、そんな優秀なアンドロイドをわが社がつくっていたのですね」

木下課長は笑って言った。「確かに、わが社の技術の粋をこらしてつくったものだがね。まだ色々不備が
多くてね。君に実用になるかどうかためしてもらいたいという気持ちもあるんだ」

松尾優紀はまず学校からまわってみることにした。ロボットには「菩薩」という名前をつけた。なぜそ
んな名前をつけたかという、そのロボットを見た時、なんだかひどく愛嬌のある可愛らしい顔をして
いるにもかかわらず、平和をうったえるのにふさわしいきまじめさと誠実さを持っているような気がし
たからだ。

ロボット菩薩は小柄な大人程度の大きさで顔も身体も全体に曲線が少なく、かどばった感じで銀色に輝
いていた。

松尾はロボット菩薩に電気製品などの商品のパンフレットを持たせ、某中学校の校門をくぐった。

秋の陽ざしがそそぐ花壇には、赤い彼岸花が咲いていた。ロボット技師の田島が運転する車はロボット
が乗るのにふさわしい若者の憧れる最新の流行型だった。映写機は優紀が運んだ。学校を最初に選んだ
のは校内暴力などでマスコミにさわがれている教育現場にのりこみ、中学生に平和の大切さをうったえ
たいと思ったからだ。彼は大手の会社、ルミカーム工業のセールスマンということで簡単に職員室に入
ることを校長から許可された。彼は昼食時を選んで入ったので、当然のことながら多くの教員が弁当を
食べていた。教師や生徒はロボット菩薩を見て驚きの表情をしていた。彼は各職員の机の上に「よろし
く」と言いながら、商品のパンフレットと自分の価値観を披露した小冊子を置くと、全体が見わたせる
位置に陣どった。

5

彼は久しぶりの中学校になっかしさと会社とはちがう雑然とした雰囲気にとまどったが、気持を引きしめちょっと緊張した表情で大声を出したのだった。「倉山中学校の先生方、私はルミカーム工業の宣伝課の者です。今日はみなさんにルミカーム工業の商品について知ってもらいたい色々買っていたきたいというお願いよりもっと重要なことでまいりました。実はルミカーム工業では世界平和についてみなさま方にうったえていこうということになりました。会社がこうした問題に深入りするのを不思議に思う方もありましたが、わが社は自社の発展を真剣に考えるならば平和こそ第一条件であるという結論に達したわけです。この平和については、なにもわが社の特権ではありません。むしろみな様職員の方のほうで次の時代の子供達をそだてているのですから、より切実に真剣に考えているテーマだと思われます。私はその意味でみな様と協力して世界の平和について考えていきたいと思っています。」

その時、職員室の隅の方から争う声が松尾優紀の声を圧倒するように、響いてきました。職員室の中の間は、みな松尾優紀の方からそちらの方に注意をむけたのです。一人の大柄の男の子が椅子にすわっている教師に反抗的な口調でなにかを言っています。

黒の学生服の胸元を開け、背が百七十ぐらいありがっちりした体格で、髪は伸び放題で、長細い浅黒い顔には大きな目と厚い唇があり、声の調子といい、中々中学生離れた町のお兄さん風の迫力を感じさせるのだった。

「おれが弁当をどこで食べようとおれの勝手だろう。屋上でおれが食べたからといって学校に何の迷惑をかけたわけじゃない。先公はなんでそんなにうるさいことを言うのだよ。」

それに、何だ。この間の職員会議の話盗み聞きしてみればよ。教師の意見はわれているじゃないか。マルクス主義だの保守主義だの聞こえていたぜ。話が割れていたのは弁当のことでじゃなかったけどよ。どちらにしても、二つに真っ二つ。俺たちの前では、同じ意見のようなことを言い、中身はひどい割れ方じゃないか。俺たちに似たような意見もあったような気がしたな。内容は忘れてしまったけどよ。弁当のことだって、議論しりゃ、意見は割れるぜ。俺たちのように、弁当は自由に食べていいという教師もいると思っぜ」

松尾優紀は驚いた。マルクス主義という言葉はこの中学生から聞くとは思わなかったし、この言葉は先輩の熊野から一度、聞いて何か印象深かったからだ。具体的な詳しい内容は聞いてなかったが、いざ聞いてみたいという気持ちを持っていたからだ。

その頃は、教師は弁当を食べ終わった者、教室から昼の休憩に戻る者と、いたが、生徒を指導しているのは白い半そでのワイシャツをきた細面の紳士という風貌をした中年の男だった。

生徒は二人だ。松尾はちょっとそちらに気をとられ、自分の話をやめて近くの教師に事情を聞いた。大柄な男の子二人は教師の前にすわらせられているのだ。口だけは反抗的だった。つまり教室で弁当を食べるようになっていたのに二人で屋上で食べている所がある生徒の注進により知った担任が呼び注意を与えている所だった。

「学校は迷惑しているよ。お前たちのように、学校のルールを違反すれば集団生活が乱される。そんなことが分からんのか」

教師は生徒に反抗されて興奮して大きな声で怒鳴った。生徒も負けてはいなかった。「なんだよ。俺たちにだって好きな所で楽しく食べる権利はあるよ。学校が勝手にルールを決め、俺たちに押し付けているだけじゃないか。」

そんな風に強い口調で言った男の子は立ち上がり、教師につかみかからんばかりの勢いで言うのだった。

もう一人の男子が先生の机の上に何気なく置かれていた週刊誌を見つけ、「あ、この週刊誌。親父が見ていたぜ。『今から、二十年後の北朝鮮を見る』というのだ。」と言った。

それは松尾優紀も読んでいた。

「その頃、北朝鮮は核武装をすっかり整え、日本にとって脅威になっていたんで、平和憲法のもとに、日本でも、防衛省の裏方で核武装の議論が始まっていた。」とその男子は言った。

教師は驚いて、彼の口を塞ごうとした。松尾は自分の頭の中でその文章を思い出した。「国民に内緒で、自衛のために、核武装の計画をたてるのだから、合憲とする勢力が多勢を占めるようになり、準備段階に入っていた。しかし、これが北朝鮮にもれたのだ。北挑戦は怒り狂い、自分達が持っているくせに、日本に核武装の話をしめない限り、ミサイルと通常兵器で日本の原発を攻撃すると脅かすだろうとSF風に書かれている。」

北が核攻撃すれば、アメリカが出てきて、北は全滅することを計算に入れて、通常兵器で原発をねらう、とその作者は想像している。優紀は北がどう出て、アメリカがどう出るかは分からないが、恐ろしいシナリオだと思った。

どちらにしても、こんな将来の心配を考えても、平和憲法を国に守らせ、北朝鮮に核放棄の平和志向を取らせることが日本の役割なのだと思った。アメリカの力も必要だが、中国の力も必要だ、そのためには文化交流が大切なのは。それに、憲法九条を守り、核兵器禁止条約の批准が重要だと、松尾優紀は思った。

職員室は緊張した雰囲気包まれた。弁当を食べている教師もハシを持ったままそちらの方に気をとられていた。

その時、優紀の友人である田島がすばやくその男の子の所にかけよった。田島は小柄ではあるが、柔道三段の太い腕で、その大柄の男の子を優紀の方にまでひっぱってきた。その間の時間は数秒であった。怒っていた教師もあっけにとられて田島の方を見ていた。

田島はうむを言わずにその男の子を捕まえて優紀と菩薩の前にすわらした。その生徒はびっくりした表情をしてアンドロイド「菩薩」を見た。

「何だ。こいつは。ロボットじゃねえかよ」

「そうだ。ロボットだ。平和の使徒として働くロボットだ」

ロボット菩薩は金属性の声でそう言った。

口は動かないで音だけが流れた。

「ふーん。ロボットのくせしてなまいきに口までききやがる」

そう言ってその生徒は立ちあがろうとした。ロボット菩薩はその生徒の肩を抑えて言った。

「今の言葉は許せない。ロボットだって人間だ。そんな風に僕を差別する人間を僕は憎む」

その生徒はちょっとびっくりしているのだが、それを隠すかのように乱暴な口をきく。

「ロボットが人間だって？ 冗談言うなよな。お前に俺の気持なんて分かんたろう。お前は結局、人間の奴隷なんだよ。奴隷に主人の気持なんか分かる筈ねえだろ。」

「それは違う。君は勝手な人間だ。ロボットより、劣る。ロボットの心はやさしさに満ちているが、君の心は野蛮なエゴで一杯だ。」

生徒は立ち上がって妙な顔を見詰めた。

その時、優紀は微笑を浮かべて言った。

「君は中学生だろ。中学生ならこのロボット君の言っていることが分かる筈だ。君は自分のことしか考えない勝手な人間になりかけている。天気が良いから屋上で弁当を食べたい。これは誰しも思うことだ。その欲望を許したらみんな勝手なことをやりだすぞ。」

そしたら、中学校はめちゃくちゃになってしまう。

分かるだろう。自分の欲望を抑え、君は正しいことを考え、行動するように、自分を訓練する必要があるんだ。君は素晴らしいエネルギーがある。それを正しく使いたまえ。神と平和について考えたまえ。毎日、祈りたまえ。」

その男の子は一種の夢遊病者のようにうなずいていた。松尾優紀は菩薩の方をふりむき、

「この少年をさっきの先生の所に連れて行きあやまらせなさい」と言った。

菩薩は「はい」と返事をし、その男の子をひっぱり、さきほどの教師の所まで、連れて行った。そして「あやまりなさい」と菩薩が言うのと、その生徒は素直にあやまった。教師はきつねにつままれたような顔をして生返事をし、生徒を叱責することもなく二人とも教室へもどらした。

松尾優紀は教頭に呼ばれた。校長室に入るとたぬきのように色黒で丸い顔をした校長が目がねの中の瞳をきらきらさせて言った。「いや、これはどうも。今、あなたのお手並みを拝見させていただきました、生徒をあつかう腕前などは教師の見本という感じですね。それに又、会社の方が平和問題を訴えるなんていうのも大変ユニークですね。どうです。今日の六時間目、全校集会があるのですが、ぜひ生徒達にあなたのお話を聞かせていただきたいものです。」

「ええ、私としてはそのような申し出は大変うれしいです。喜んでお話させていただければと思います」

そのあと、松尾は教頭の案内で校舎の中をまわった。まだ昼休みだったのでグラウンドに出ず、教室にのこっている生徒が大変な騒ぎだった。松尾は菩薩と田島をうしろに従え、教頭のあとにたちこち目を四方にくばりながら歩いた。もの珍しそうに見る女生徒。ていねいに挨拶する中学生。教室内でボールを

投げていて教頭の顔を見るとやめる生徒。将棋をやっている生徒が取り囲みわいわいやっている所もある。そうかと思えば教室の隅にすわり込みべちゃくちや、おしゃべりに夢中の女生徒。実にさまざまな中学生がさまざまな形で躍動していた。そしてたいいていの生徒はロボット菩薩を見ると驚きと憧れの表情を出して近づいてきた。彼等はもの珍しそうに菩薩の身体にさわったり「可愛い」と言ってみたり色々話しかけて楽しんでいた。菩薩君はいつもまじめな調子で答えるので生徒の中にはからかう者もいた。

「あなたは自分を美男子だと思いませんか」菩薩君が「はい、美男子だと思います」と言うと、どうって笑いが四方の中学生達の間にひろがった。松尾は背丈が百八十三センチあってやせていたから、ひどく長身に見え、たいいていの生徒は松尾の方を見て驚いたような顔、憧れる顔、挑戦的な顔と色々な顔をして見せるのだった。それでもロボットの人氣が抜群だったため、松尾の行く所、生徒が集まった。こんな風にして会社のセールスマンが校舎の中の見学を許可されたり集会で演説するなどは前代未聞のことですと教頭は笑いながら言った。教頭は中肉中背できわめていんぎんな男だったが、その表情の裏になんとなくずるい調子のあるのを松尾は見のがさなかった。

チャイムが鳴った。グラウンドにいた生徒が戻ってくるため、廊下や教室は生徒の人数が急に増えた。その時、さきほどの男の子が廊下の隅で別の男の子と喧嘩をしていた。両方とも大柄だ。殴りあっている様子だった。さきほどの男の子は松尾達を見ると、驚いた顔つきになり、その激しい語調を急にやわらげていた。教頭が「どうしたんだ？」と声をかけると、その男の子は「なんでもありません。ちょっとした喧嘩です。」と言って教室にもどろうとした。ところが、もう一方の男の子が涙を流し泣きながら「逃げる気かよ」と相手の肩に手をかけた。「逃げるわけじゃねえよ。先公達が来たからやばいだろ」その男の子はちよつと激しい口調だった。

「おい、待て」田島がその男の子の前にふさがった。

「なんだよ。てめえ、先公でもないくせに何で出しやばりやがるんだ。」

男の子は口調は戦闘的だが、あきらかに逃げ腰だった。

「まあ。落ち着け。あいつ、泣いているじゃないか。何で喧嘩していたのか、ちよつと訳をきかしてくれよな。さつきは先生に反抗し、今は友達をなぐるっていうのはあんま穏やかじゃないからな。」

教頭が松尾に小さな声で耳うちした。「この子はうちの学校の問題児なんですよ。大変むずかしい子ですてね」

松尾はその男の子と田島のそばに近かづいて、言った。「君の名前、なんて言うんだい？」

「俺の名前か。川山海彦っていうんだ。」

「君と友達になりたいね。」

「小づかい、くれるかい」

「小づかいはないが、君にはできるだけ僕の贈り物をしてあげたいと思う。これは僕の名前だ。ぜひ、ここに遊びに来てくれたまえ」

「じゃあな。あばよ。」

川山海彦は教室の中に入って席についてしまった。松尾優紀は生徒がみんなの席につき、静まった廊下でまたざわつく教室を見、教頭と話をしながら再び職員室にもどった。五時間目は職員室の中で、授業に出ない教師、教頭、校長、生徒指導主任などが映像詩を見してくれた。見終わったあと、松尾はまばらにいる職員の中を回って、感想を聞こうと思った。映像を見終わった後、感想らしい声は何も聞こえないのも奇妙に思われたからだ。

新聞や本を読んでいる教師や鉛筆を紙の上に走らせて仕事をしている教師、雑誌をしている教師、実にさまざまな形がそこにはあった。松尾は暇そうにしている教師を見つけ話しかけた。

「どうでした。映像詩は」

「大人に見せるのには良い映像詩だと思いますよ。でも、中学生はまだ子供ですからね。残酷な場面がいくつもあったでしょう。中学生に見せるのには、私は賛成できませんね」

お茶を飲んでいた浅黒いこわもての顔をした教師は目を丸くして松尾を見つめそう言った。

「それに、お宅の会社は面白いことを始めましたな。営利企業が広島原爆を映像詩にする。理解しにくいですな」

その時、ロボット菩薩と田島が松尾の近くに来了。

「平和のロボットですか」とその教師は言った。

「愛称は「菩薩」っていうんです。わが社はですね。単に自社の利益追求ということだけでなく人類の平和と経済に貢献できるために寄与しようと願っておるわけです。ともかく経済の発展のためには平和が必要です。核兵器をこの地上よりなくすことは緊急にやらねはならぬことなのです。」

世界平和のためにわが社が貢献できれば大変名誉なことです。」

「ほほお、そうですか。面白いことをルミカーム工業さんは始めましたな。それで、商売になるんですか。企業は利益が第一だと思えますのにそんな採算のあわないことをやって大丈夫なんですかね。もっとも、お宅の会社なんか内部留保が沢山あるから、そういう余裕があるのかもしれないですね。お宅は車もつくるのですよ。車は僕はこの間まで乗っていましたけれど、一か月ほど前からやめましたよ。考えてみれば、車は小さな子供を脅かしますし、日本古来の美しい風景を破壊してきたのですから、法人税を沢山払うべきですよ」

「そうですか。確かにそういう疑問はあると思います。なんなら、その答はわが社の開発したロボット「菩薩」君に答えてもらいましょう。」

「おい。菩薩君に平和について喋らせてくれ。」と松尾は菩薩と田島に声をかけた。

田島は松尾の声に微笑を浮かべ菩薩に合図をした。すると菩薩は松尾のいる方向に歩き始めた。そしてまるで生徒のようにまじめな雰囲気教師の前に立ったのだ。

松尾は菩薩に言った。「菩薩君、答えてくれたまえ。わが社がなぜ平和問題と取り組むことになったかについて。明快な答を頼むよ」

「はい。社長。松尾社長。今度ルミカーム工業の宣伝担当の子会社として平和部門をあっかう松尾社長」
「おい、余計なことと言わんでくれよ。」

松尾は菩薩君がまちがったことを言ったのでびつくりした。松尾は子会社の社長になったわけではなく宣伝課の係長にすぎないから、こんなまちがいをロボット菩薩が言うのに内心動揺していた。冗談に言っていたことが菩薩君の電子頭脳に人力されてしまったのだと思った。

6

映像は残酷な場面があるという教師の指摘の通り、校長と教頭と生徒指導主任の校長室での話し合いでも、全体としては反戦の映像詩になって良い作品ではあるが、一部の映像に中学生には相応しくない所があるので、見せるのは止めて欲しいと結論づけられたようだ。

教頭は松尾にそのことを伝え、ロボットと松尾の平和についての話だけにして欲しいと言われた。その間、ロボット菩薩は田島に何か言っているようだった。

「余計なこととは言わんと言いますが、僕はいつもまじめに答えているつもりです。そうですね。わが社は今後、企業は利潤本位ではやっていけなくなる時が来るし又、利潤本意でやればいずれ破綻が来る。そこでわが社が従来 of 会社とはちがい人間のための組織であることを示すためにもこの人権と平和問題をとりあげ、もうけようとたくらんでいるのであります。」

「おーい。たくらむはまちがいだ計画していると言え。どうもまだ故障が多いものですみません。」田島が笑って言った。「いずれもつと優秀なロボットをつくるつもりですが、今の所は、このくらいの。ロボットが最高水準なんですよ」

「間違ったからってそんな風に言うのは許せない。」ロボット菩薩がそう言うのと松尾も田島もそのまわりにいた教師もみな笑った。

「すごいロボットですね。会話ができるじゃありませんか」教師は目を丸くして、おおげさな口調で言った。「ええ、あまり複雑な会話はできませんがね。ある程度プログラムされた範囲内の簡単な会話ならできるんですよ。」田島は菩薩君が何か言おうとして音を出しかけた所で彼の後頭部にあるスイッチをひねった。「喋るスイッチを消しておきませんと菩薩君の耳に入った言葉に対して反応してしまいますのでね。」

「走ることはできるんですか」

「いえ、走るのは無理ですね。小走り程度なら、出来ますが、基本はまだ歩くことですね。この歩くというのが菩薩君には大変なこととしてね。わが社としても長い間の研究の結果、やっとの思いで出来上がった技術なんです。階段をのぼり下りすることは菩薩君にはゆっくりなら出来ます。」

こんな会話のあと、五時間目終了のチャイムがなり、六時間目の全校集会が始まった。

秋の青空の下には彼岸花の咲いた花壇が広いグラウンドを囲んでいた。優紀は彼岸花が菩薩君を迎えてくれているような印象を持った。小鳥が花壇と塀の間に並んで立っている桜やイチヨウや樅の木の幾つもの木の間を枝から枝に渡るのを見逃さなかった。優紀はメジロだと思った。黄緑で雀のような綺麗な小鳥が頭の中に一瞬、浮かんだ。

松尾優紀は田島やロボット菩薩と一緒に体育館に入った。天井が高く床が鏡のようにみがかれた広い体育館に千人近い中学生が教師の号令によってならばされていた。ロボットが体育館の中を歩くと、中学生たちが振り向いて驚きと感嘆の目があちこちで輝き、溜め息に近い声や子供らしい奇声が飛び出た。教頭の案内で、三人は前方に席をとった。校長の挨拶の中に、松尾達の紹介もあった。松尾は座っている中学生の熱い視線を浴びながら言うことを考えていた。壇上にあがった松尾はひどく緊張していた。たとえ相手が中学生であるにしてもこれほど多勢の人間の前でしゃべるのは城井高校の生徒総会以来のことであるし、純真な中学生に良いお話をしてあげたいと思うと、よけい心臓のときめきを感じるのだった。

松尾優紀はマイクの前にたった。テーブルが優紀の前にあり、その上に銀色に光るマイクがあった。横に一輪挿しの花瓶があり、赤いバラの花がすくっと上の方に真っすぐ伸びていた。横の天井の近くに窓がいくつかあり、そこから青空が見えた。

優紀の横にロボット菩薩が立った。「菩薩」は服を着ていず、銀色の肌そのままだった。顔は四角張っていて、二つの目も長方形で、人間の目と比べると柔らかみに欠ける。

唇も厚い。すべてがぎこちない恰好のロボット菩薩はその頃の技術水準を考えれば仕方のないことかもしれないが、田島によるとあと、十年で人間と間違えるようなものが出てくる。それは、もうロボットと言わずにアンドロイドというのだそうだ。

中学生は感受性の強い時代であるから、複雑な心理的な反応を起こしていた。小声で、「裸だ」とか、「でっかい目」とかクスクス笑いかいいうのが、松尾の耳にも聞こえてきた。

しかし、にらみのきくこつい顔をした体格のいい教師が怒鳴るとシーンとなる。

「みなさん、私は今日、ロボット君と一緒にまいりました。このロボットはおそらく世界一の技術によってつくられております。このロボット君のように歩いたり人間とある程度の会話ができるのは世界で一台しかないのです。もちろん今後ふえていくことは予想されますが彼よりも優秀なロボットをつくるにはさらに長い年月の技術開発が必要です。みなさん、すばらしいロボット君でしょう。ただ、こんなにすばらしいロボット君でも君達にはかなわない点があります。それは何だと思えます。色々な知識をこのロボット君につめこんでありますから知識の点では彼は中学生に負けません。ただどうにも君達にかなわないものがあります。それは君達の創造力と成長力です。君達はいつまでも中学生であるわけではありませんでしょう。君達はやがて大人になります。大人になるまでの君達の肉体や精神の成長には目を見張るものがありますね。これが君達の成長力です。そしてやがて君達の中には芸術や学問に興味を持つ人もたくさん出てくるでしょう。そして人類の文化に貢献するような優れたものをつくりだす人があらわれるかもしれませんね。こうした新しいものを生み出す力、これはロボット君にはありません。こ

うした創造していく力は人間だけのものです。ロボット君はあらかじめ教えてあげたこと以外はやりません。どうです。みなさん。君達中学生はどんなにすばらしい人達かわかりでしょう。世界一の科学技術の粋を集めたこのロボットも君達には全くかなわないのです。君達中学生はそんなにすばらしい人達なんですから、自分に対して自信を持ち自分を大切にしそして自分をみがいてほしいと思います。宝石はみがかなければ輝きません。君達はまさに宝石なのです。この中学校で勉強をしたり、本を読んだり、スポーツをしたり、友達と友情を語り合ったりして自分という宝石を磨いて下さい。

さて、みなさん。私はルミカム工業の平凡なセールスマンですが、最近、妙な夢を見ました。私の枕元に天使が現われまして、私にこんなことを言うのです。松尾優紀。おまえは神の国についておまえのまわりにいるすべての人達について語り、世界の平和をうったえなさい。世界は今危機に脅えています。核戦争がおきれば人類は滅びることがあきらかなのに、世界の核保有国は核兵器の開発の手をゆるめることをしません。色々な平和運動はあるが、大きな力になっておりません。天使は驚くことに、私にこう言ったのです。

お前が立ちあがりすべての人に平和の尊さを訴え、それによって結集した民衆の力でもって米口中北の核兵器をなくしていくことです。神は必ずお前の味方をするであらうでしょう。天使はこう言ったあと私は真夜中目がさめ、この事について色々考えてみました。私は神様というのを信じておりませんから、そんな風に夢の中に天使が現われてきたことを不思議に思いました。それでもあいかわらず私は神様だとか天使だとかいうのを骨董品のようにしか見ておりませんでした。私はこの世界には物質と物質をささえるいのち以外のものはないのだし、物質をこえる力などあるはずはないという信念を変えることはありませんでした。ただ、私の心にこの夢はある影響を与えるようになりました。平和のために立ちあがらなければならぬ。この事は私達自身の切実な問題なのです。なぜなら核戦争がおきれば世界が滅びると同時に私と私の愛する人達も滅びることになるからです。私は真剣に平和について考えるようになりました。私どもの会社、ルミカム工業はロボット・車・テレビをはじめとする電化製品もたくさん生産しておりますが、こうしたものはすべて平和の中で活用されてこそ意味を持つものであります。みなさんのような中学生とこのロボット君が簡単な会話を楽しめるというのも平和があつてこそであります。私は平和の大切さと必要性を感じましたので、夢の中で天使が命令したことに従うことを決意したのであります。みなさん、今から、ロボット君が君達に平和のメッセージを言いますのでよく聞いて下さい。」松尾がそう言うのとロボット君が前に進み出た。後ろに技術者の田島が自信ありげな微笑を浮かべて立っていた。ロボット君の四角い口から金属性の声が流れ出た。「みなさん。私はロボット菩薩です。」

ロボット君がそう言うのと体育館の中にすわって聞いている中学生の目の多くがキラキラ輝いた。ざわめきとも笑いとも言えるような心地良い雰囲気か体育館のさわやかな秋の空気をおおった。

「そして私の名前は菩薩と言います。この菩薩の意味おわかりでしょうか。これは仏教でよく使われる言葉ですね。仏様の次にえらい方です。どういうわけか、ルミカム工業のみなさんは私にこんな偉い名前をつけてくれました。私は大変うれしく思っております。菩薩は世界に平和をうったえるロボットにふさわしい名前なのだそうです。私は松尾さんと同じようにみなさんに平和の大切さと必要性を考え

ていただきたいと思っています。

今日は皆さんに広島に原爆が落とされた惨劇を映像詩にして、見てもらおうと用意して来たのですが、中学生が見るには残酷な写真がいくつもありますので、感受性の強い中学生には心の衛星によくなのはなかという判断もあり、動画は中止し、映像詩の中に歌われた詩を私のようなロボットから皆さんにお伝えしたいと思います。

【雨がやみ、美しい秋空が見え

花が咲き、小鳥がさえずり

自然の中で瞑想し

無限の一なる生命という

美しいイメージを得ても

オオルリという美しい青い鳥を見ても

美しいヴァイオリンの音を聞いても

世界が醜い争いの場になっては

ピストルの弾が飛んで

爆弾が破裂して

建物が廃墟となり

ヒトの死体ごろがるようになったら、

森は泣き

月は泣き

川のせせらぎはしくしくと泣く

我らはいのちの子供でありながら

死体の山を築くとは

何と愚かなことだ

飛ぶだけなら、鳥はヒトより前からやっている

車で走る速さなら、昔からチャーターは早い

確かに、科学は目を見張るほどのものを創造した。

なにしろ、ヒトははロケットで月まで行っただけではないか

インターネットをつくったではないか

しかし、破壊力も凄まじい

核兵器の破壊力はヒトを滅ぼす

人は利口なのか愚かなのか

願わくは、地球がいのちの場として

緑と美しい水に恵まれて

生き物の楽園として栄えるためにも

平和が必要なのだ

以上で私の詩の朗読を終わりにします。何か疑問がありましたらお答えしますので遠慮なく質問して下さい。」

そのあとわずかの時間、体育館にしみとおるような静けさが支配したのだった。しかし、それもほんの数秒のことで千名近い中学生の中に五人ほどの手があがりました。松尾に指名された三年らしい大柄の男の子がステージの近くにあるマイクにまでかけよりちょっと興奮したような早口でしゃべりました。「菩薩さん」とその男の子は大きな声で言ったのですが、その声の調子が妙におかしかったので千名近い中学生がどうっと笑いました。彼は頭をかきながら笑い身体をくねらしながら言いました。「僕は菩薩君と友達になり世界中の人々に平和を訴えたいのです。でもどうやってたらあなたとお友達になれるのでしょうか。」それだけ言うとその男の子はそそくさと自分の元いた場所にかけていった。またもや、どうつというどよめきとも笑いともつかない音が空気の波のようにひろがっていった。ロボットの菩薩君は一步前に進み出てマイクを手にとって言いました。

「質問にお答えします。僕はいつもあなたとお友達のつもりです。ここにいる千名近い中学生の一人一人と僕はいつもお友達です。ですから一緒にあって平和運動をすすめていきましょう。」

次に出てきた質問者は一年生らしい小柄な女の子でした。

「ロボットさん。あなたの理想の女性像を教えてくださいませんか。」

どおつという笑いが広がった。生徒を取り囲んで立っている教師達も笑っていた。菩薩は答えた。「心のやさしい人で平和のために戦える女性が好きです。」そのあと大きな声でハイと言って挙手し指名されないうちにマイクにかけよった生徒がいました。彼は目と耳の大きな生徒で小柄ではありませんでしたが不思議な敏捷さを持っていました。三年の女生徒の中に「原田君よ。又何か、おもしろい事、言うんじゃない」とささやく声が流れると同時に「おいがんばれよ」という声援もおくられたのです。原田光治は中学三年生。小柄ではあるが天才的な頭脳で知られる。

学力テストでも常に学年でトップであり知能も異常に高いという噂がある。原田はマイクを持つとロボットの菩薩をユーモラスに批評してみんなを笑わせた。そのあと早口にしゃべりだした。「質問します。平和運動について、まだよくわからない点があるんです。確かに核戦争の危機と人類の破滅は近い将来おきる可能性が充分あると思います。」

でもどうやってこの危機をのりきることができるんでしょうか。僕にはよく分かりません。ですから、こういう事は考えないようにしているのです。ここにいる大部分の人も、いえ、日本中の多くの人達はこんなことをほとんど考えず日常の忙しさに追われて毎日を過ごしているではありませんか。

僕等中学三年にとって受験の方が核戦争よりも心配の種なのです。だってそうでしょう。

核戦争について僕が今考えたってどうすることもできないんです。それは大人にまかせておくしか方法がありません。それもごく少数の大人ですね。つまり核戦争を避けるのに力がある大人達にです。日本の大人達の中にそうした人があるのかどうか分かりませんが、もしそうした人があるとしてもごく少数

のほんのひとにぎりの人達だと思うのです。

だとするならばロボットさんがやっておられる平和運動というのかもしれない力にならないのではないかという気がしてくるのです。第一、電気製品のセールスに平和運動をくつつけるというのは僕には納得がいかないんです。結局は電気製品の宣伝のためにロボットさんがこられたのではないのですか。

それなら、それで正直にそう言ってくれた方がすっきりするんですが、平和の使者のような顔をして僕達を惑わすようなまねをするよりずっと正直でいいです。この点についてのロボットさんの考えをお聞きしたいです。」

ロボット菩薩はしばらく沈黙していたので、後ろにいた田島が菩薩の頭をたたいた。その金属的な響きが体育館の空気の中に明るい楽しい調子で流れたので多くの生徒達の口もとに微笑が浮かんだ。田島がマイクを使わずに言った。「ちょっと質問の内容がむずかしすぎるので菩薩君の頭が混乱しているようです。」そう言った田島の声が聞きとれた前の方にすわっている生徒達の中から笑いがもれた。

後ろの方から「聞こえませんか」という大きな声があった。菩薩君はそれに答えるかのように「今の質問の意味むずかしすぎて私にはわかりません」と言った。今度は笑いが体育館の全体にひろがった。そのあと松尾優紀がマイクを使ってしゃべり始めたので、生徒達の注意は再び優紀に集まった。

「原田君の質問はロボット君には無理のようです。確かに平和運動はむずかしい。そして、どんな平和への努力もある日突然に起きる核戦争によってすべてが水泡に帰してしまう可能性があるんです。我々のどんな努力もすべてが無駄になってしまう瞬間は大変恐ろしいです。しかしこういう絶望的な可能性があるからといって我々人間の平和への努力をおこたって良いということにはなりません。今も多くの人達が努力しているからこそ今の平和がたもたれているのです。この世界は、天使と悪魔の戦いの場なのです。天使の活躍があるからこそ今の平和があるのです。これは神話的な言い方ですけど、私達が平和のために努力するということはその背後に天使がおられるのです。

みなさん、悪魔をしりぞけ、天使の力を借りようではありませんか。私は確かに会社のセールスマンです。でも、電気製品のセールスと平和運動が矛盾するとは思いません。あらゆる職業についている人達はその職場で平和への発言をすべきだと思います。学校の先生も工場で働く人も自動車のセールスマンもすべての人が平和のために立ちあがった時、その力は必ず世界の平和に寄与できると私は信じております。確かに中学生にとっては受験の方が身近な切実な問題でありましょう。しかし中学生も平和のことを考え、家に帰りそういう話題を茶の間に提供することにより大人に平和の問題を考えさせ、大人に平和への努力を促すことはできるものです。そうすれば、選挙の時に、誠実な人に投票しようと大人は思うものです。選挙に行かないという人も減るでしょう」

松尾優紀は自分が言っていることをどの程度、中学生達が理解してくれたか不安であったが、与えられた時間も過ぎていたので話を打ち切った。

生徒達の盛大な拍手におくられて松尾と田島はロボット「菩薩」君と一緒に戸外に出た。

青空を見ると、白い大きな雲が動いていた。何かの動物のような美しい雲だった。

校門まで、教師と生徒が送ってくれた。

一人の中年の教師が追ってきた。「や、ご苦労さん。ソ連が崩壊しましたけれど、今度は中国が出てきますよ。その話を聞きたいものです。」

「はい」とロボット菩薩が言った。

校長と教頭が儀礼的な挨拶を繰り返していた。セールスマンが来て、こんな風になるのも異例のことですとも、教頭は言った。松尾もそうだろうと思った。

田島と松尾とロボットが車の中に入ると、「成功でしたね」と田島が優紀に言った。

松尾がまだ返事をしない内に田島が何か言おうとすると、「成功でした」と菩薩君が言うので二人は笑ってしまった。

1

7

会社の宣伝部に帰ってくると職場の雰囲気がなんだかいとも違っていた。いつもより緊張感があり、それでいてあちらこちらにひそひそ話がささやかれているようだった。課長の木下勝次がちょっと沈んだ暗い顔つきをして松尾を手招きした。

「どうだね。松尾君。一回目は中学校に行くといっていたけれど成果はあったかね」

「最初としてはうまくいった方だと思います。」

「そうか。それは良かった。ところで、松尾君、大変なことが会社に起こったよ。広川取締役が警察に逮捕されたんだ。」

「え？」松尾はびっくりした。最近、取締役になり、紳士の風格のある広川がいったい何をやったのであろうか。松尾にはとっさに判断がつかかねた。

「何ですか。」

「うん、それがね。会社の金を横領したというんだ。」

「そんな馬鹿な。広川さんみたいな潔癖な人がそんなことをするはずがない」

中肉中背の口数の少ない何を考えているのか分かりくいだが、服装は背広からネクタイまで高級品という感じで風貌も知的で繊細、紳士というイメージの強い人柄から、横領とは結び付かなかった。

ただ、創業者の家系である強いバックのある白沢取締役にひきずられやすい面もあり、一方、経歴上船岡工場長には人間的には好意を持っていたらしい。かって船岡の直接の上司として船岡のやりての強い力にささえられた面もあり、次の取締役是谁かという噂がたった時も、船岡の持ち前の出世欲のなさから、広川が六才も年上ということで、順番ということもあり、取締役になったという裏話を熊野から聞

いたことがある。

木下課長の目にはキラリと光る一滴が目がねの奥に光っているようだった。

「本当に、松尾君。悲しいことだ。広川さんみたいに会社にとって必要な人をこんな形で失う羽目になるとしたら。警察が逮捕するというからには、それなりの証拠をにぎっているでしょう。ともかく今夜の夕刊を見なくてはごうもよくわからない。今の所、横領ということしか分かっていないんだ。詳しいことは不明なだよ。これで白沢家の力が強まると、君の平和セールスも出来なくなる可能性もある。まあ、そうならないうちにやりたいだけやっておくことだ。ところで明日はどこへ行くつもりだね。」

松尾優紀は木下課長の話を聞きながら、この事件には白沢家の陰謀が働いているにちがいないと考えた。なにしろ、今まで白沢の意向を受けた広川はアメリカへの出張が多い。この出張には白沢も一緒に行くことがあるが、二人で行くと不必要に長い。しかし、そのあとのことは、分からない。優紀は木下課長の机の前でしばらくこのことで頭をめぐらしていた。それで再び木下課長が、「明日はどこへ行くつもりかね。」と言った時、放心から目をさましたかのように優紀は木下の瞳を見た。

「明日ですか。明日は」と優紀は言ってみてちょっと考えた。明日は市役所に行く予定だったけれど警察に切り変えようと思った。

「はあ、警察に行きます」

「警察へ？何しにだい。」木下はちょっとびっくりしたような表情をして言った。「警察へ行って、平和のセールスをするつもりなのかい。それとも広川取締役のことで行くのかい。」その両方の目的で行きます。平和のセールスは実験ですから、目立たない所を選びたかったのですが、相手が警察だろうと遠慮するのはおかしい。やるべきだと思います。そしてその中で広川常務の情報を得られれば、という淡い期待を持っています。」

松尾は広川に対して好意を持っていたわけでない。むしろ、あの紳士の裏に黒いものをかぎつけていたから、今度の逮捕も驚きはしたが、同情はしているわけでない。

「僕には君がそんな所で、平和セールスするのが理解しにくい。広川取締役は逮捕されたんだ。あとは法律と証拠が広川さんを裁くのだよ。あとのことは、弁護士の仕事だ。へたな形でやれば、かえって広川さんと会社に迷惑をかける。」木下はちょっと厳しい表情をしていた。

「いえ、誤解しないで下さい。行ってみなければわかりませんが、広川さんの方で僕に何か頼みたいことがあるかもしれませんので、面会してみても、その旨聞いてみたいんです。」

松尾は嘘を言った。第一、広川取締役の顔を知らない。向こうも知らないだろう。接点は平和セールスだ。でも、それは船岡工場長の口添えで、やっていることだ。船岡と広川の関係は下っ端の松尾に分かるわけがない。それよりも、警視庁への平和セールスがどんな展開をするのかの方が興味がある。

「そうか、そんならいいが。くれぐれも軽はずみな行動をしてくれるなよ。大会社の取締役が逮捕されたんだ。さきほどのテレビのニュースでもやってた。今日の夕刊には大きく載るだろう。マスコミが今回の事件を大きく注目している。そんな中で、へたに社員が動くことは会社の利益に反する。今は会社の信用回復が第一だ。わかるね。」

木下課長にそう言われてそのことについて深く考えこみながら、松尾は自分の机の書類を整理したり、帰宅しようと思っていると、工場にいる熊野から電話がかってきた。

「おい、松尾。変なことになったな。広川取締役が逮捕されたんだってね。おれはね。この事件、単純な横領とは思わんね。何かあるぞ。どうだい。そのことで君に話したいことがある。いつもの喫茶店にこないかい。」

松尾優紀は熊野と会うことに同意して電話を切った。

船岡工場長は森下家と仲が良い。広川取締役は力量のある船岡を応援している。なにしろ、影の噂では、次の社長は船岡氏という声がきこえるくらいだが、本人が全く出世欲がない。

森林公園のいつもの喫茶店での熊野の話でも、広川が取締役になったのも、船岡のようなやりての部下のおかげともいえるという話が出た。

「白沢家の陰謀がからんでいる可能性もある。もともと白沢家は陰謀の得意な家柄だからね。」と熊野は言った。カフェの窓の空には白い美しい雲が流れている。

「どんな風にですか」と松尾優紀は言った。

「そう、それが問題なんだな。たしかに法律的には広川取締役は横領という罪をおかした。しかし、それは彼が罠にはめられたからだとおれは推定しているんだ。今度、子会社として発足することになった平和産業のことで経営陣の中で大分、意見の対立があったという。船岡さんは平和産業を大規模に推進する意見を強く出していたが、その意見を取締役会で出していたのは広川さんと、それを応援する社長だったが、他の取締役は常識的な意見を言う白沢家に味方したからね、平和産業なんてビジネスになるわけがないというのが取締役会の大方の意見だったのだろう。それでも、小規模ながら、実験的にやってみようということになったのは、須山社長が平和産業はルミカム工業のイメージアップになるという意見があったからだろう。」

「平和産業って何ですか。」

「え、君、知らないのかい。のんきだな。君は平和を訴えるセールスマンだろ。その肝心の人が知らないなんて。詩人は困ったものだ」と言って、熊野はカフェの窓の外を見た。たくさんの薔薇の花が燃えるような美しさで咲いている。ハクセキレイの鳥が飛んでいくのを松尾は見た。優雅な鳥だと彼は思った。

「鳥が」と松尾は口ごもったが、熊野は優紀の目を見て言った。「ま、これはね。」

わが社の多角経営の中で始めようとしている商売だね。例えば、ネット中傷。特に自分の悪に気づかず、匿名を良いことにして、人のあら捜しをして、魂の劣化を招く中傷。傷つけられた人からの相談に乗るなんて弁護士と探偵のようなビジネスも平和セールスの一つになるだろうし、これから色々なロボットを作って人間の平和に役立つように改良する。アイデアさえあれば、やがては多くの企業が総務部の横に平和セールスの部をつくる、そうなりゃ、核兵器を無くそうという声は民間のいたる所に響き、ボランティア精神の中にも浸透する。そうすれば、核兵器を無くして、その莫大な金を福祉に回すという声は大きくなる。これは物凄く樂觀的な展望だが、それをやらなければ、人類は危険な方向に行く可能性を秘めているということだ。

つまり平和というのが充分、商品になると判断したんだね。」

「平和が商品ですか。」

「つまりね。たとえばだ。わが社の開発している人間的なロボット。これが失業社会を予言するものではなく、ユートピアの実現に必要なんだというイメージを大衆に植え付けることが大切なんだな。その時、ユートピアには平和のイメージも必要だ。平和とロボットというのはユートピア実現の良い宣伝になる。」

「そうすると僕のやっていることは全く会社の意向を受けたということですね。」

「そりやそうさ。会社は利益につながることは出来ない体質を持っているからね。ただ目先の利益を追う白沢家と遠い将来の会社の発展をもくろんでいる森下家の違いはあるがね。内の会社は平和が利益になるという方を選んでいるわけだ。世界の会社の中にはどこかで戦争になると、儲かるという会社もあるというではないか。これと、軍が結び付くと、産軍共同体といって、時には大統領を動かすこともあるという恐ろしいシステムだ。だから僕らにとってルミカム工業が平和を訴えてくれることはいいことだ。」

平和産業という子会社は今回新しく発足しかけていたのだけれど、資本金の額のことでも対立が一層激しくなっていた。このあたりの詳しいことは僕にもよくわからない所があるのだが、結局この対立の妥協点が見いだされたという風に聞いている。白沢家の言うように資本金の額は小規模にするが資金の融通にあたっては優先的に便宜をはかるというようなものであったらしい。そのあと船岡さんは君の知っているように、短期間のヨーロッパに出張した。ドイツを中心とする平和への熱意を知ることが主要な目的だったそうだ。その間に、広沢取締役はアメリカへの長い出張。これがなんのための出張がよく分からない点が多い。

横領ね。あの人は外見の紳士風から女性に好感が持たれるだろう。

經理の波山氏と懇意であるという噂もある。横領しやすい立場だ。だが、動機がはっきりしていない。

まさかアメリカあたりで、ね。なにしろ、横領の金額が五百万だからね」

松尾は熊野の話聞きながらそんな風な形で会社の金を横領した罪に問われる広川がますます不可解だった。

「ところで気になるんだけど平和産業が企業として軌道に乗るようになると、おれのやっていることはどうなるのかな」

「おそろくだよ。君は今までどおり、ルミカム工業の宣伝課で仕事を続けることになると思うよ。場合によっては、平和産業の社員になることもね。どちらにしても、軌道に乗ると踏めば、テレビでの平和アプローチも考えなくてはならない。インターネットもね。しかし、今の段階では、その地ならし。まあ、実験ということだ。そのリーダーに君が立たされているということだ。これは会社のイメージ作戦だから。子会社の平和産業をつくり親会社のルミカム工業でも平和への努力を続けているというイメージがほしいわけだから君の仕事は変わらんとする。」

「広川さんが逮捕されて、白沢家の力が強くなっても平和のイメージ宣伝に変更はないというわけですね。」

「すぐにはないだろうな。ただ須山社長が今度の横領事件の責任をとるという形でやめるということになってもなれば別だ。その時は白沢家が急激に力を増し、新社長に白沢家の息のかかった者でもなれば、平和産業の極端な事業縮小やオリジナルでやっている君の仕事も廃止される可能性は充分ある。」

「組合としては何か行動をするのですか？」

「組合としては平和産業を推進してきた社長や船岡さんの意見を支持してきた。広川さんはね、船岡さんの若い頃の上司だったというだけさ、船岡さんの実力は取締役全部あわせても、かなわない、いずれ社長になると思われる人だ。彼の経営戦略が斬新で、彼には出世欲がないから、今の立場にいるだけさ。どちらにしても、組合としては、平和イメージ作戦が後退しないように申し入れをするつもりだ。このようにすれば社長としても労働者が味方だということで心強いだろう。組合としては、今、現社長にやめてもらいたくないのだ」

「そうですね。須山社長がいなくなったら、僕の仕事もおそらなくなるな。」

「まあ、どちらにしても今のうちに君はおおいに会社の平和イメージ作戦を展開して実績をあげ白沢家の連中にもその功績を認めさせるんだよ。」

「それは無理ですよ。今の僕の仕事は田島君と二人でやっているんですからね。ルミカム工業という大会社の宣伝活動としては二人の戦力ではたいした力になりませんよ。明日は警視庁に行くつもりです。」

「警視庁に平和セールスに行くつもりなのかい。これは驚いた。随分と君は冒険をやるね。広川取締役が逮捕されたので警視庁に乗り込んで、情報活動と平和宣伝を同時にやろうというんだらう。全く君らしい奇想天外なアイデアだ。まあ、がんばってくれたまえ」

「映像詩は持って行きません。ロボット菩薩だけの方がいいと思いますので」と優紀は言い、広島映像詩のことを思った。あの映像の音楽を入れる際には島村アリスの世話になった。平和セールスのことを彼女に話して、意見を聞きたい気持ちもふと湧いた。外は秋晴れだ。

翌日も秋晴れだった。松尾優紀は技術者の田島が運転する車で警視庁の門をくぐった。ロボット「菩薩」は後部座席に座っていた。制服を着た大柄な警察官が行き来しているのは大変威圧感があった。

ロボットを見て、みな好奇の目と警戒の目をギラギラさせていた。船岡工場長の紹介状を持って刑事部長室をたずねると、目付きの鋭い大柄な男が部屋の奥から松尾を見すえた。

「何の御用ですか」刑事部長はぶっきらぼうに言った。

「はあ、うちの会社の広川が昨日、逮捕されたそうで、まことに申し訳ありませんでした。」

松尾の言葉に刑事部長は笑った。「いや、僕にあやまられても困るな。君は、この名刺によると宣伝課の人ですね。そんなことを言いにはわざわざここに来たわけですか」広川取締役のことは今、取り調べ中です、いずれ、裁判所で判決がでますよ。」

「はあ、確かにそのとおりなんです、今日は、ぜひわが社が設立しようとしている平和産業の意図についてお話ししたいと思います」

「君、そんなことは今度の事件を調べていけばわかることだよ。君が何もこんな所で忙しい僕の時間を奪ってしゃべる必要はないと思うがね。」

「刑事部長がお忙しいのなら、若い警察官の方にも説明したいのですが」

「君ね。この警視庁の建物で働いている人間に暇な人間なんていないんだ。まあ、帰リたまえ。」

「ロボットをごろんになりませんか。」

「ロボットだって。」

「はあ、今廊下に待たせておりますが。」

「ロボットね。僕が見て何か益になることがあるかな。まあ僕も興味があるから見るだけ見よう。しかしそんなものを買う金はないよ。」

松尾が合図すると田島と菩薩が人ってきた。刑事部長はちょっと驚いたような表情をして菩薩を見た。銀色のメカニックな中肉中背の外見から、人間とそっくりであるが、よく出来たロボットで、ある種の美を感じさせるので、見慣れてないものには驚きと興味をかきたてる効果があることは、中学校で実験済みだ。

「随分よく出来たロボットだね。中に人間が入っているわけじゃないだろ。」

「はい。純粹なロボットです。ある程度の会話はできます。」

「ほお、会話がね。」刑事部長はそう言って立ちあがりロボットの方に近づいてきた。

「名前はついているのかな。」

部長は松尾に聞いたのだが、ロボットが答えた。「はい、私の名前は菩薩と申します。」

部長は目を輝かせて「菩薩という名ですか。」と言った。

「はい、あの仏教で使われる菩薩です。」ロボット菩薩はそう答えた。

「すごいロボットだね。会話ができるとは。歩くこともできるのかい。」

「はい、出来ます。歩いてみましょう。」ロボット菩薩は部屋の中をゆっくり歩いた。

「ほお、すごいロボットだね。君の会社ではこんなロボットが量産されているのかね。」部長はそう言つて松尾に初めて心を許したような親しみにあふれた目をした。

「いえ、これは試作品です。ですが、いずれ量産される可能性はありますね。」

「ふうむ。これじゃまるで人間と同じじゃないか」部長はロボットの身体にさわっていかにも氣にいったという風な表情をした。

「でも、プログラムした内容しかできませんから。やはり創造的な仕事はロボットに無理です。」

「ふうむ」刑事部長は又ロボット菩薩に近づいて言った。

「菩薩君、君達の今日の用件は何だね。」

「はい」と菩薩は答えた。「僕の名前が菩薩とありますように、世界が平和になるように祈り、今日の用件は警察の方にわが社の平和セールスについて御理解を願うということです。」

「平和セールスね。随分変わったセールスだね。でも何で又、警察の理解が必要なんだ。」「はい、それはむずかしい質問ですから松尾さんに答えてもらいます。」

「はっはっは。むずかしい質問は人間に答えてもらうというわけか。なるほど。」

松尾はうまいぐあいに部長が話にのってきたので内心ほっとすると同時に、ここでさらに話を盛り上げる必要があることを感じて言った。

「刑事部長。平和セールスというのはですね。わが社が考えた独得のアイデア商法です。これは警察の方が一番関心を持ってほしいことなんです。というのは警察の目的こそ平和なんですから。平和には国

内の平和と世界の平和がありますからね。」

「そりやそうだ。しかしその平和というのがむずかしい。いかに警察が努力しても犯罪はいっこうにへらない。へらないどころかふえているよ。」

「そこですよ。平和の問題は警察や自衛隊にまかせておくのはだめですよ。我々市民がみんな協力しなくては。」

「うん。そりやそうだ。それはいつも警察が市民のみなさんに協力をお願いしていることだ。」「ですからわが社は、そうした警察の訴えに対して、会社ぐるみで立ちあがろうということです。どうです。警視総監賞をもらっても良い試みだと思いますがね。」

「なるほど警視総監賞をね。それで君のここに来た理由が読めたよ。今回の広川取締役の事件は不名誉なことだから、そうした不名誉なイメージを消すために来たのかね。」

「はあ、それもあります。つまり平和セールスは広川取締役が推進してきたことで、彼を会社が失うということは大変な損失なんです。」

「そりやわかつている。しかし法律で間違ったことをしたんだ。横領をね。これを警察が見過ごすわけにはいかんのだよ。」

「しかし横領といったって、本人は借りたと言ってますよ。」

「君ね。君は何も知らんよ。広川さんは五百万円借りたという会社の帳簿に記載があるが、実際は一千万円借りている。五百万円は彼の懐に入っているのだから、横領になる」

「でも、その五百万円は返す予定なんですよ」

「予定だって、帳簿に書かれてなければ、自分の懐に入れると思われではないか」

「それは、誰かの畏だ」

「そりや君。裁判の中であきらかにされることだよ。第一、逮捕状が出て、すでに広川さんは拘禁されているわけだから今さら警視庁としてもあと戻りすることはできんね。それに、白沢取締役が会社の訴えとして、おこされている事件なんだぜ」

その時、電話がなった。

刑事部長は数分の間電話の応対をしたあと松尾に言った。

「ちょっと席をはずす用事ができた。もう何か言うことはないかね。」

「はあ、広川さんに面会してもよろしいですか。」

「それは、受付で、予約が必要なのではないかね」

刑事部長は厳しい表情をして言った。「だいたい、受付に用件を言わないで、いきなり、ここにくるなんて失礼なことだぜ。君は、僕が忙しい時間をぬって、君の話は今まで聞いてあげただけでも感謝しなけりゃなんのだよ。あとは、受付に行ってくれ。僕は当然、受付の案内があったと勘違いして、ロボットに氣をとられて、みんな君の話を聞いてしまった。ともかく、受付へ行ってくれたまえ。ついでに言うておくがね。世の中には、悪人がいるということだよ。最近、はやりの中傷なんていうのも、悪の始まりだよ」

松尾は礼を言い、田島とロボット菩薩を連れて刑事部長室を出た。

しばらく病院のような細長い廊下を歩いていると、松尾達を呼びとめる男がいた。五十才前後の男だ。

「僕は毎朝新聞の者だがそのロボットは本物ですか。」

「本物って中に人間が入っていないのかということですか。」

「そうです。」

「本物ですよ。わが社が最近、開発した最新式のロボットです。新聞記者の方ならそのくらい御存じでしょう。」

「耳にはしていますがね。僕は刑事事件専門で、科学技術方面は少々うといんですよ。それにしても歩くロボットですか。すごいですな。話はするんですか。」

「しますよ。簡単な会話なら。」

「ほお、すごい」新聞記者はそう言って感心しロボットにむかって「今日は」と挨拶した。

菩薩君が今日とはと答えると、彼は目を丸くした。

「いや、すごいですな。ルミカーム工業では、今度、広川取締役が逮捕されて大変でしょうけれど、このロボットさえあれば経済の荒波も乗り切ることができるでしょう。」

「広川さんは無実です。会社の中の陰謀の犠牲に。」ロボット菩薩がそこまで言った時、田島が顔をしかめて、菩薩の後頭部のスイッチを切った。

新聞記者の驚く顔が言葉を途中で切った菩薩にむけられていた。

「広川取締役が無実だって会社内部の陰謀だって」新聞記者は驚きの表情から今度は何かを思いついたかのように笑いを浮かべた。

「そうですか。これはおもしろい。陰謀ですか。」

松尾は変な風に新聞に書かれては困ると思いついた。

「ロボットの言うことを真にうけないでくださいよ。広川さんが無実だという信念は我々にもありませんがね。」

「そうですか。それで今日ここへ来て良い収穫がありましたか。」

「何もないですよ。今、刑事部長に会ってきたのですが、いい情報はありませんでしたね。ただ私達はこの情報をしいるために来たわけではないのですよ。そんなことは会社においてもある程度わかりますからね。そうではなくて、警視庁に平和セールスに来たのです」

8

「平和セールスですって。何ですべそれは。」

「これはできれば新聞社の方も協力してもらいたいと思うから言うのですけど、世界平和の問題は我々現代人にとって今、緊急な課題ですね。」

「そりやそうですよ。毎朝新聞でも平和の問題は何度も取り組んでいますからね。」

ここまで話した時、彼らは警視庁の入り口を出て青空と自動車の往來を見たのだった。新聞記者は急に足をとめて言った。

「どうです。ちょっと喫茶店にでも。おごりますから。」

松尾が同意すると新聞記者はうれしそうに微笑して言った。

「警視庁の中に喫茶店があるの御存じですか。そこへ行きましょう。」

彼らは再びもどり、さきほど来た廊下とは別の方向へ歩いてしゃれた感じのする店を見つけた。制服を着た警察官が大部分であったが、私服の人も何人かいた。

松尾は警視庁の中にこんなしような美しい店があることにびっくりした。それに、花壇のある中庭が見えるではないか。花壇の向こう側に広場があり、その向こうにレンガ風の壁をした本庁舎がある。

優紀には、又、ある考えが浮かんだ。

そうだ、ここで平和セールスができるかもしれないということだった。新聞記者は、林原芳郎と書かれた名刺を松尾と田島の前に出した。ロボット菩薩は松尾と田島の間に黙って、立っていた。

頭のスイッチを切られているので、さきほどから黙ったままなので、大きなおもちのロボットのようにも見える。警察官の視線が時々、ロボット菩薩にあげせられる。林原は注文したコーヒーが来ると話し始めた。

「さきほどの平和セールスの話ですけど、よくわからないんだが、あなたのとこの会社が平和について、何か行動をおこすともいうのですか。」

「そうです。そのとおりです。わが社は平和を世界に訴えることが、わが社の発展につながると考えたわけです。」

「ほお、それで平和セールスは具体的にどんな風にやるんです。」

「色々ありますよ。ネット中傷を解決の方向に向けるとか。映像詩で広島原爆を見せよう。ロボットが街頭で、世界の核兵器廃止を訴えるとか、私達が中学校や警視庁で行ったことをさらに広げるとか、まあいずれ、テレビやネットにもね。」

「ほお！ また随分変わったことをやりますな。企業は、もうからないことはやらんでしようから、その平和セールスはいずれ採算にのると考えなんですか。」

「金だけの問題ではないのですよ。核兵器を全世界からとり払えば、莫大な金が浮きますね。」

それを福祉に回せば、消費も活発になり、人類全体が格差のない豊かな生活をおくれますよね。そうなりや、向こうに見える広場には何か事があれば、おまわりさんが集合するのでしょうか、それもある日がある、それこそ、本物の平和ではありませんか」

「そうですか。それでわかった。ロボット君の言った陰謀の意味が。会社の中に、そういう平和セールズに反対する有力な人がいるんでしょう。その人が広川取締役をおとし入れたと。」

松尾は林原が新聞記者として、この問題、平和セールズに関心を持ってくれることがうれしかった。マスコミで広川取締役の立場が弁護されれば、船岡工場長の推進する平和へのメッセージがいい意味で広がるし、セールスもやりやすくなる。

だが田島は会社内部の陰謀の話に触れるようになると、不愉快な顔をするのだった。

「会社としては、勝手な推測してもらいたくないですね。」

田島は、大変事務的な調子でそう言った。林原は、ちょっと微笑して田島の顔を見たが、田島の言葉には反応しないで言った。「今度の広川取締役の逮捕は、単に個人的な横領事件とは思っていませんでしたが、やつぱり会社内部の力関係が何かあったのですな。」「新聞に書くんですか。」

松尾は聞いた。

「いや、もう少し事実を確かめませんと週刊誌にも書けませんよ。ところで、あなたの平和セールスは順調ですか。」

「まだ、始めたばかりですから。できたら、今、この喫茶室でやりますから、新聞の記事にしてもらえませんか。」

松尾は平和セールスを新聞記事にしてもらえば、これからの自分の仕事がやりやすくなると考えた。

「ここでやるべお、どきようありますな。まわりは警察官ばかりですよ。第一こんな所で、どんな風にやるつもりなんですか。」

彼らの座っている所はカフェーの外側の椅子の並んだ場所だ。さんさんと降り注ぐ太陽が気持ちよく、何で小鳥でもさえずらないのかと緑の公園を錯覚させる効果を持っているようだった。

「まあ、見ていて下さい。」

松尾はそう言うのと立ちあがって、ボーイなどが集まっている所に行き、マスターを呼んでもらった。三十才前後の中肉中背の男が出てきて「何ですか」と聞いた。松尾は名刺とパンフレット「ロボットと平和」を渡し、ここで簡単なセールスをしたい旨述べた。マスターは、「平和セールス」とつぶやき不思議そうな顔をしたが、ルミカーム工業という一流会社名のはいった名刺を見ると、意外に簡単にオッケーした。

「でも、こんな所でセールスに来る方は珍しいですな。」

マスターはそう言って、皮肉な微笑を浮かべた。松尾はロボット君達の所に引き返すと、カバンからパンフレットを取り出した。

表紙に「ロボットと平和」と書かれたパンフレットは、一見、まるで関係のなさそうな単語が無理に結びつけられている感じがした。松尾は、そのパンフレットを警察官達がすわっている机の上に置くように菩薩に指図した。パンフレットをテーブルの上に置いて、よろしくと言って歩きまわるロボットを警察官達はげんそうに見るのだった。

「誰も本物のロボットかどうか迷うんじゃないですか。」

林原はそう言って微笑した。菩薩は、もとの位置にもどると演説し始めた。

「みなさん、お休みの所、大変失礼します。私はルミカム工業のロボットです。世界でも最新鋭のロボットだそうです。私は歩くことと簡単な会話ができます。準備さえすれば高度な演説もできます。近い将来、みなさんのような警察のお仕事を手伝う日も来ると思います。特にピストルなど武器を持った犯人をつかまえる時、私のような不死身のロボットは役に立つと思いますか。みなさん方の中にはそんなロボットがたくさんできたら、警察官が失業するなど御心配なさる人もあるでしょうけど、そんな御心配は無用です。ロボットはあくまでロボットです。命令されたことしかやりません。自主的に判断したり創造したりする能力はありません。ところで、みなさん、今日は。ルミカム工業が平和をうったえにまいりました。警察官の方は、平和という言葉をお聞きとすぐにデモと結びつけてこれを取り締まる対象のことばとして思い浮かべるかもしれません。しかし、私が今日みなさんにうったえたいのは世界の平和について考え、行動するのは世界の一人一人の人間であるということなのです。ですから普段、平和デモを規制する立場にある警察官のみなさんにも平和について考えてほしいと思うのです。」

そこまで菩薩君が話した時、一人の制服の男が近づいてきた。うでの所に金色の階級章をつけた目つきの鋭い中年の警察官だった。

「君達は、誰の許可を受けてここでそんな宣伝をしているのかね。」

「この店のマスターにお願いしたら、良いといえますので。」と松尾が言った。

「マスターがいいと言っても、ここは町のコーヒー店とはちがいますからね。あなた方は警視庁とごぞんじでなさっているんでしょう。たいたときようですね。そのときようはすばらしいですが、あまり歓迎できる内容ではありませんね。」

「平和についてお話するのがそんなにいけませんか。」

松尾は、この警察官が不安げな表情を時々するのをみがさなかった。

「いや、あなた方の宣伝を邪魔しようという気持ちで言っているのではないのです。私はただ、個人としてあなた方のどきように感心するという感想をのべに來ただけです。私だって、世界の平和について真剣に考えますよ。核兵器はない方がいいと思いますよ。しかし、世の中には自分本意の平和論を説く人が多いので警戒はしていますがね。」

まあ、この店のマスターが許可なさったのなら、私は何もいいませんがね。ただ、厳密にいいますと、マスターの許可の他に警視庁の許可も必要だと思いますよ。なにしろ、ここは警視庁の中ですから。でもまあ、私個人としてはこれ以上あなた方の邪魔をするつもりはないんですよ。それでは」

その警察官はあいそ笑いをして、自分の席にもどった。林原が目をぎよろりとひからせて小さな声で言った。

「いやみをいいに來たんですよ。気にすることはない。続けなさい。」

田島が不機嫌な表情をして言った。

「あの人の言うように警視庁の許可を受けといった方が良くはありませんか。なにしろ、私達は個人でこういうことをやっているのではないのですし、会社の信用を大切にする必要がありますからね。」

「別に誰も文句言う人はいないんだから、会社の信用にかかわるということもないでしょう。」と林原はおだやかな表情でそう言った。

「私もそう思いますが、警視庁の許可が簡単にとれるなら会社のためにもその方が良いかもしれませんね。さきほどの警察官にどこへ行けば許可が得られるのか聞いてきますよ。」

松尾優紀は田島の意見を尊重しなければならぬと思っただけで、林原はコーヒー茶碗に口をつけていた。

松尾は、さきほどの警察官の所まで行き言った。「あのー、さきほどの件なんですけど、警視庁の許可を受けた方がいいと思っただけ。ただ警視庁といっても広いので、どこへ行けば許可が得られるのでしょうか。」

警察官は笑った。「まさか、忙しい警視総監の所に行けとはいえないですからね。なんなら僕でいいんですよ。僕の名刺をごらん下さい。」

警察官が松尾優紀にわたした名刺には、警視庁総務局課長・戸田警視と書いてあった。「私が話だけ聞いておきましょう。書類はあとで私が書いておきますから。なにしろ、私は今、こうして休憩に来ていますので、書類を取りに行く手間は、はぶきたいと思っただけです。要領よく、このコーヒー店で宣伝する目的と内容を言って下さい。会社名はルミカーム工業ですよ。」

「はい、そうです。私どもの会社では。パンフレットにありますようにロボットを発明しました。」

「ああ、あのロボットね。すごいね。」戸田は、菩薩の方に視線をおくり、微笑した。

「はい、そうです。あのロボットは菩薩という名前がつけてあります。仏教にでてる菩薩というような古めかしい言葉を彼のような最新鋭のロボットの名前につけたのには理由があるのです。つまり、私どもの会社でこれからつくっていくロボットは、人間の生活をゆたかにしていくことにあるので、人間の仕事を奪うためにつくるのではないと、いうことであります。人間の生活を豊かにしていくための最低の条件は平和です。ですから、私どもは知能ロボット出現をチャンスにしてロボットなどの商品のセールスと同時に平和をうったえていくというのです。これこそ、わが社のアイデアである平和セールスです。他に何の野心もあるわけではありません。」

「なるほど。わかりました。実におもしろいですな。平和セールスですか。そんな言葉初めて聞きましたよ。だが、なんで警視庁を選んだのですか。他にやる所はいっぱいあるでしょう。」

「あ、そのことです。それはわが社の広川取締役が横領事件で逮捕されたので、私どもとしても大変ショックでしたので、こちらへ来れば何か情報が得られるかと思っただけで、ちょっとやったついでにこのコーヒー店で平和セールスと思いました。」

「そうですか。分かりました。ここで、平和セールスすることを許可します。どうぞやって下さい。私も聞いていますよ。」

松尾はもとの席にもどり、田島と林原に報告した。

「こんな所で、平和セールスの効果は疑問ですな。」林原は急に松尾の行動を批判する調子で言い始めた。「あのね。警察官達はここで君の話を聞いて、何か変わるとでも、思っているのですか。たとえ、平和について考えたにしても、彼らは何をしますか。今までどおりの毎日ですよ。それよりも、君のやっていることに反感を持っと思っただけ。戸田警視だつて、にがにがしく思うから、いちおう君にクレームを

つけに来たんだ」

「いや、そうは思いませんね。ここで私が平和セールスする様子は、けっこうニュース性があると思いますから、お宅の新聞の記事にしていただければ、それだけでも世間の関心を引くことができますよ。そこに新しい世論形成の場ができるというものですよ。」

「私はまだ、あなたの平和セールスを記事にするなどと約束はしていませんよ。今の所、お手なみ拝見という所ですからね」

こんな会話がなされている間にもコーヒー店への出入りはあったが、全体としての人数には殆ど変わりはありません。

店の半数ほどの席はあいていたから、客の人数は二十人前後と思われる。

松尾は 菩薩を呼んでという内容の演説をすべきかについて十分ほど指導した。

菩薩は言い始めた。

「みなさん、静かにくつろいでいらっしゃるのに私のようなロボットがお話することをお許し願います。みなさん、私の名前は菩薩と申します。現代科学の傑作であるロボットに仏教という菩薩という古めかしい名前の結びつきを妙に思う方もあるかもしれませんが。」

しかし、私は自分が菩薩という名前をつけられたことを名誉と思うものであります。

ロボットは単なる機械ではありません。

人間の生活の向上のために、全力をつくして奉仕する精神をもっています。

私は自分のことを考えません。ですから、自分は無です。同時に、全てを愛しています。常に、あなた方人間のために生きようと思っております。

ですから、私の精神は仏教で言う菩薩に近いものであります。

こんな風に言ったからと言って、私は自分を自画自賛しているわけではありません。

私は自分のようなロボットを作り出した人間の素晴らしさについてつくづく感嘆するのであります。

ですから、私の中にある菩薩の精神は当然人間が持っているものなのです。

私はこの菩薩の精神で、人間生活の向上や平和のために、生きようと願っております。

ですから、私のようなロボットがあなた方人間と日常的に交際できるようになり、多くの人たちに人生や平和について考えてもらえれば、大変うれしいのです。」

菩薩はしゃべると、黙った。

その時、コーヒー店の隅にすわっていた制服の壮年の警察官がたちあがり、目を輝かせて近づいてきた。「いや、実に素晴らしいロボットですな。私も前からロボットに興味を持っており、新聞や雑誌でそうした記事を見ますと、いつもていねいに読んでいました。」

それはね、私には一人息子がいるんですが、ロボットに興味を持っているのです。工業大学を出て、一年ほど勤めて、ふらりと辞めて、家の中で、ロボットに熱中しているのです。

どうです。もっと小型のロボットはつくれませんか。私は時々考えるんですが、ミニロボットをつくったら面白いと思うのですよ。なにしろ、お宅のような大手の会社が人間の労働のかわりをやってくれるようなロボットをつくってくれるでしょうし、そうした金のかかるロボットは、私達のような貧乏人には手ができませんからね。あなたの方のおっしゃる通り、ロボットは菩薩の精神を持っている。これは私としても賛成です。だからこそ、昔の仏像のように小型のミニロボットが必要なんです。このミニロボットとお話することにより現代人の孤独と苦悩がいやされる。そんなロボットが普及される必要があるんですよ。ですからロボットの顔が重要です。このロボットの顔をつくる仕事は芸術の才能と宗教の心が必要でしょうね。どうです。こうしたミニロボットは又、あらゆる情報の宝庫でもあるわけです。外国旅行に連れていけば通訳のかわりもやってくれますし、法律問題に悩めば弁護士のかわりもしてくれます。もちろん、家の中の飾りとしても立派なものです。このように、口で言うのは簡単ですが、そういう本物のアンドロイドをつくるのはまだもう少し時間が必要でしょうね。どうです、こうしたロボットはお宅の会社でつくる予定があるのですか。

内の息子の影響もあり、親子の対話という重要性を考え、私も息子の持っているロボットの本を読み、なるべく息子と対話を崩さないようにしているのです。」

警部の肩書を持つその男はここまで早口にしゃべりまくった。田島が事務的な調子で言った。

「あなたのお話は興味があります。しかし、今の所わが社では人間の労働を軽減するロボットをつくることに熱中しています。ですが、あなたの息子さんがミニロボットに注目しているというのは面白いことです。」

「ミニロボットね。おもしろそうだ。私も新聞記者をやめてそんなことに熱中したいですね。それはとにかくニュース性はありますね。」

林原がそう言って笑った。

「どうです。みなさん。私は岡井という警部なんですがね。私には二十六才の大切な息子がいる。この息子をその平和セールスのお仲間に入れさせてやってはくれませんか。いくら、息子がロボットに興味があり、かなりの科学技術の知識があっても、今の日本は再就職はそう簡単ではない。そうかといって、独立には資金がいりますからね。」

その岡井という警部は林原よりも豪快な笑いをたてた。松尾優紀も岡井の話にちよつと興味を持った。

「で、あなた、本気でそんなことをおっしゃっているんですか。」と優紀は聞いた。

岡井は松尾にすんだ目をむけて答えた。「本気ですとも。息子も喜ぶと思いますよ。相当な力のある息子なのに、あんな風にしておくのはもったいない。まあ、お返事は今じゃなくても良いんです。ここに名刺をおいておきますから、一週間以内に御返事下さい。」

「私は、平和セールスが目的でこちらにおじゃましましたのですけど、平和産業の社員の採用にもお役に立てるように努力はしますけどね。それに、平和セールスはロボットだけでなく、映像詩も大切な部門になっているのですよ。」

松尾はそう言って微笑した。

「映像詩ですって」と岡井は目を丸くした。

「そうです。広島原爆の映像を今回は持つてきませんでしたけれどね」

「原爆のような恐ろしいものを映像詩にするね。ともかく、それはロボットと並んで、平和へのアピールになりますな。息子が興味を持つと思いますよ」

岡井は再び大声で笑った。そして、岡井は仕事があると言って立ち去った。

花壇の赤い薔薇が松井優紀の目にしみた。

人間の心に悪があるから、核兵器がつくられたのだろうと、彼は思った。いたる所

にある悪、いじめ、ハラスメント、集団ストーカー、中傷、あおり運転、虐待、横領、詐欺、戦争、原爆……と優紀は次から次へと頭の中に並べ立て、この悪の行くつく先が核兵器なのだと、思った。彼の心の師、島村アリサの禅の教えによれば、人は大慈悲心にあふれた仏であるという。それなのに、何故かくも悪があるのか、不可解だった。

9

外は秋晴れで、白い雲のかけらがゆったり動いていた。ポプラ並木の歩道を歩きながら、新聞記者の林原が真剣な表情で言った。

「松尾さん。今日のことは記事にしますよ。実におもしろい。それであなた方にわたしの家に来てほしいんですよ。岡井さんと同じように、私にも息子がいますね。上の長男と長女は仕事を持っているのですが、一番下の私の息子なんですが、美大を出て広告会社に一度勤めたんですが最近、そこをやめて家でぶらぶら遊んでいるのがいるんですよ。」

今の話には飛びつくと思いますよ」

松尾は一人帰った。一人になりたかったのだ。田島とロボットは車で帰った。林原も車で帰った。松尾は広い公園を歩いたり、ベンチに座りながらこの日の出来事の中で、一番の収穫は何かと思った。

核兵器は政治家や軍だけにまかせておくだけでは、軍拡が進むばかり。一人一人が立ち上がるのは無理だろう、今のままでは、政治家集団に核兵器廃止を頼みたい所だが、それも見とおしが暗いとなれば、企業の一角に目を付ける。平和産業のように、企業という名の人の集まり、の一角に核兵器廃止の金字塔を打ち立てることにより、この金字塔がいくつにもなり増加していくことを願いながらという人の意表をつくのも一つの手段。

それは途方もない夢で、あることは分かっているけど、若い彼の頭には、自分のやっていることが正しいと思う切ない気持ちがあった。それに、世界の一角で若い女性が気象温暖化で立ちあがり、国連にまで波紋は届いたではないか。利潤追求の筈の企業も平和がなければやっていけないと、獅子のように雄たけびをすれば、獅子の雄たけびは世界を動かす。それが平和産業だ。何もしなければ、世界は滅びると

いう実感のある企業は立ち上がる。もはや、企業は株主だけのものではない。こういう考えが世界に広がれば核兵器の軍縮という奇跡が起きる。

松尾優紀はそういう希望を持った。核兵器は政治家と軍人にまかせておけば、軍拡が進むのはニュースを見ただけで分かるではないか。

便利なネットを平和のために使えないのか。世界の核兵器を廃止することに反対の人はいない筈。それにしても、「偶然だな。岡井さんと林原さんの息子さんが失職している。その二人ともロボットに興味を持ちそうなことを自宅で作っている。」と松尾優紀は思った。

夕焼けが空に広がる頃、彼は故郷に向かう電車に乗った。

松尾優紀の頭の中に、平和産業に若い仲間を集めることが出来るではないかという思いは膨らんでいた。この気持ちを船岡工場長の家で道雄の家庭教師をした帰り、父親の船岡に伝えた。道雄の国語力が上がったことが船岡工場長の信頼をさらに高くしていた。

「それは良い。君を平和産業の有力スタッフに推薦しようと思っていた。仲間がいるなら、その入社試験の係は君だ。須山社長に話しておくから、そのようになるだろう。」

須山社長は今度の事件で、安泰だった以上に、船山工場長の後押しでさらに、力を増したようだ。

ちょっとしたことで、広川取締役のことが話題になった時には、熊野はかなり長く説明した。

「広川さんは白沢さんと彼と親しい政治家に誘われてギャンブルにはまった。それで、今度は白沢さんぬきで、政治家に誘われて、行った時、一千万円を吸ってしまった。このすった額も大きいがはたして広川さん一人の責任なのか、そこが分からない。広川さんは日本に帰ると、返すつもりで、会社から金を借りた、そしてああいう結果になった。」

気の毒だが、ギャンブルにのめり込んだのがいけなかった。白沢さんのように財産家とちがう。広川さんのようなサラリーマン重役にそんな大金を出せるわけがない。

誘われたという言い訳は大人の社会では、同情論はあっても、自らの責任を取らなければならないだろう。政治家はどうも巧みに、法の網をすり抜けているようだ。広川個人の問題にされてしまったようだ。どちらにしても、須山社長は安泰だ。平和産業も安泰だ。」

松尾優紀は仲間を集めた。まず自分の会社の仲間である、遠藤と飯田と先輩の熊野に声をかけた。遠藤と飯田は、すぐに松尾の話に喜んでのってきた。その頃、飯田は大山道長の尾野絵ユートピアNPOに参加していて、大山の弱者救済の考えがホームレス問題にも手を伸ばすのを手伝っていた。

熊野に話しかけた時は、彼ははじめに松尾の話を聞いていたけれど、「ちょっと考えさせてくれ」と言った。松尾優紀には、平和産業はとりあえず、ロボット課と映像詩課と平和セールス課に人材を集めるようにと言われた。優紀の頭の中の人材の中には、自分の仲間と島村アリサが入っていた。

しかし何日かして熊野も平和産業の話はおもしろいから、まだ参加するかどうかはわからないが、話の仲間に入れてくれないかといってきた。それから岡井警部の息子。そして松尾。松尾は声をかけた仲間と

一緒に、新聞記者の林原の息子憲一の家をたずねることにした。新聞記者の林原が「息子を助けてくれるなら、別荘を使っても良い」と言っただけの話にひどく積極的だったことと、別荘はルミカム工業に近いということで、今の仕事を早めに終えた後、彼の別荘を根拠地にしばらく活動できるという話になった。平和産業そのものは株主総会を終え、社長も部長、課長、アンドロイド課、映像詩課、平和セールズ課などの組織も決まり、ルミカム工業から一キロの広い敷地に中古のビルを借り、スタートすることになった。

新聞記者である林原の息子憲一は親父の別荘で、孤独な世界にとじこもりながら美大出身者としての自分の芸術論を磨いていた。松尾達に会った時、憲一はすでにウイスキーを飲んでいたらしく、とたんに芸術論を始めて人を煙にまいた。

「映像詩とロボットで、世界中に平和をばらまく、核兵器をなくすですって。まあ、おもしろい話ですがね。ま、夢みたいな話ですな。ユーチュウプはもうすぐ日本に上陸しますよ。これは面白い。面白いが、見る人が限られますからね。ロボットの話もね。

それなら、僕の考えている反機能的なロボットが良いと思いますよ。もちろん、看護ロボットなんて機能性がなくて話になりません。ですから、僕の言っている反機能性というのは、必要な機能性は当然のこととしてあるんですよ。その上に機能性をこえた反機能的なものを加えていくんです。ですから一見した所、反機能的な作品で充分人間の精神を満足させてくれるんです。それでいて人間の要求に応じた機能も立派にあるんですね。今の日本では機能性にひきずられたデザインが多すぎるので、人間生活が大変無味乾燥なものになってきていますね。平和論も同じ。パターン化した平和をその時期になると、叫ぶ、それが必要な大切なことは分かっていますが、もっと違う角度から、平和を言う。意表をつくような形で平和を叫ぶ、世界の核兵器をなくして、その金を福祉に回せと叫ぶ。最も、今の日本では一市民がうっかり言うのと、差別されることがありますから、気をつけた方がいい」

松尾は驚いた。林原憲一の考えていることは、自分の考えている平和セールズにそっくりではないか、こんな偶然があるのだから、いやもしかしたら世界中にこういう考えをする人は少なからずいるのに、彼らは冬眠しているのかもしれない。

平和産業はそれを掘り起こし、大きな平和の声にしていく必要がある。特に大国の若者が核兵器は地球にいらない、その金を福祉に回せという風になれば、世界の政治家が動く。

「君のおやじさんが週刊誌に書いた記事を読んだ」と熊野は低い声で言った。

「白沢専務と広川取締役の関係ね。白沢は広川を巧みにギャンプルに引き込んだ。

白沢はルミカム工業の創始者の家柄で資産は莫大だ。ギャンプルにも慣れている。ところが、広川取締役は貧しい家からのぼりつめた秀才。」と熊野は笑った。

「今の社会は資本主義社会ですよ。」と林原憲一は言った。「人間は、もともと動物ですから弱肉強食の本能を持っていて、常にこの弱肉強食の原理は人間の社会に作用しているということですよ。今は、民主主義が説かれて、すべての人はお互いに紳士的につきあうことを知っていますから、見かけはこんな弱肉強食は捨てられたようですが中々どうして人間のこの本能的な原理は根強いのです。

こうした洞察は、心理的に落ちこぼれた人間でなくてはわからない社会の原理なんです。ですから、人は虎視眈眈と相手の弱点を見つけようとし、そして自己の力に相手を屈服させようとする野心を持っているといえるんです。

広川取締役は繊細な秀才型なんです。でも、船岡さんのような強力で誠実な実務家と手を組んで、途方もない平和産業に手を出そうとした。たちまち敵意を持った相手から駄目なやつだとレッテルを貼られ、それを宣伝されるんです。こうした宣伝は、効果的ですから今まで友人だと思っていた人ですら、この宣伝にのせられ友情を裏切るということをやるんですよ。そして、この有能な人間もこうした社会のレッテルを貼られると、そうした人間関係のしがらみの中でがんじがらめにされて動きがとれず、ますます自己を落ち目にさしていくことになるのです。こうした相手をけおとそうとする悪意はいたる所にありますよ。

自分を守るのは自分であり、自分の価値を知っているのは自分なのです。機能性が社会にとって必要であることは認めますが、機能性は科学の発展にもなって機械やロボットやコンピューターにとってかわられていくではありませんか。そんなに簡単に機械にとってかわられる人間の機能性などというものに人間の価値があるとは思えません。では、いったい人間の価値とは何かこれはむずかしい。難問ですよ。でも私はこう考えています。人間はみな、すばらしい宝を持っているのです。その自分の宝を発見し、その宝の輝きを隣人や社会にひろめていく方法を自分なりに知り、それを実践していくことのできる人は、価値のある人間だと思うのです。私はこう思った時、私を疎外し、私を歯車の地位に追い

やろうとした会社の機構に腹が立ち、自分の主体性をとりもどすことができたのです。私は会社をやめました。そして私は、もう一度デザインを勉強し、反機能的なデザインの必要性を考えました。あなた方が、ロボットで世界平和を叫ぶという考えはわかりました。私も今やっ自分なりのデザイン観がつかめた所で、さて何を始めるかという所に立っているのです。あなた方の話にのせていただけるならば、この上なくうれしく存じます」

「映像詩の話も平和産業の重要な一角を占めています。」と松尾優紀は言った。「僕は広島映像詩を作ったのです。ま、見て下さい。」

別荘は、ちょっとした高台の上にある。窓からは、緑の林やまとまった家並みや川が見える。

家は木造の二LDKの一軒家で、そこにあるテレビは大型のものであった。松尾優紀は会社や中学校の職員室でやったように、映像詩を見せた。

岡井は微笑して言った「よく出来ている。原爆の恐ろしさがいかに、悲惨であるか、観念でなく現実として理解できます。ただ、問題なのはどれだけの人がこの映像を見るかですよ。見ても、行動に移すかですよ。結局、反戦映画を見て、次は娯楽という風な現代の流れでは、結局は力になるかですよ」

「ええ、ですから、ロボットを使って色々の人の集まり、組織を訪ねて映像詩を見てもいい、平和の波紋を広げる、それが平和産業の腕ですよ」

「ロボットがこの映像詩を見せて回るといふ事実を既にやっておられるわけですね。つくる場面では、ロボットと映像詩は違う場所でやるのでしょーけど、平和セールスということでは、一緒にやるのが効果的かもしれませんね。」

岡井は一瞬、宙を見るように視線を向けたあと、松尾に視線を合わせて言った。

「私は高校生の頃からの夢として何かものをつくってみたいという気持ちがあったのですから、この夢の実現としては、あなた方のロボット平和論の話にのってみるのがいいです。映像詩も興味があります。平和産業、どうです。やりましょう。」

その時、遠藤洋介が岡井に握手を求めて言った。

「僕はこういうアイデアを持っているのですよ。ミニロボットを作り、額から電波を飛ばし、白壁に映像詩を映し、それから、平和演説をする。これだと、ロボットと映像詩の両方を持って飛び回る必要はないですよ。ミニロボット一台でいい。これを世界中に売りまくれば、ミニロボットが多くの人に平和と核兵器の廃止を演説してくれる。これは前から考えていたことですが、喋るのは初めてなのです。夢がありますよね。僕は以前からヨガや禅に興味を持っていたんだが、ヨガや禅をコーチするミニロボットなんていうのを作って、全世界に売りまくったら面白いと思っていた発想から出てきたアイデアなんです。」

「平和産業ですよ。儲けることばかり、考えるのではなく、本気になって核兵器を無くすことを考えなくてはね。遠藤君のアイデアはいいが、売れなくてはね。多くの人はエンターテインメントを求めていますからね。世界中の皆が共感してくれるかどうかですよ」と技術者の田島が重々しく言った。

飯田が口をはさんだ。「また遠藤君は夢みたいなことばかり考えますね。ヨガの出来るロボットなんて出来るわけないでしょう。そりゃ、遠い将来にはできたとしてもね。坐禅できるミニロボットは出来るかもしれませんが、全然面白くないでしょう。でも、今回、初めて聞いた電波を額から飛ばすという話、これは面白いね。」

「ついでに、言わせてもらえれば」と遠藤は笑いながら言った。「おれね、こんな夢みたいなことを考えているの。つまりね、ダンスの出来るロボット、体操のできるロボット、こういうロボットをつくって我々はロボットと一緒に自己の心身の鍛錬をするのだよ。子供には家庭教師のできるロボット、こうなるとロボットも人間なみだな。どうですか。松尾君。君は夢想家で詩人だから僕の気持ち、わかってくれるだろ。」松尾優紀は微笑して言った。「そりゃわかるさ。でも実現可能な所で我々は商売するのだから、その点も考慮しないかね。僕は最初は映像詩から出発しているから、原爆の恐ろしさを多くの人に訴える完璧なものをつくりたい。この間の作品は短いいし、確かに今度アメリカから入ってくるユウチュウブに乗せるのにはいいかもしれないが、もう少し大型の映画に近いものもつくって見たい。」

でも君の夢みたいに考えるくせ、いいと思うね。人間夢がなくなっちゃ。ミニロボットをつくって、このミニロボットに平和のセールスをしてもらうというのは映像詩を運ぶ必要がないからね。ただ、田島さんの

心配するのは今直ぐにそこまでの技術力がないだろうということではないかな、近い将来、目指すミニロボットいうことでは、僕も大局としては、

賛成。ただ、今、僕のやっている、ロボットと一緒に、映像詩を持ち歩いて、平和セールスをするという儲からないビジネスも忘れないで欲しいね。

全世界に平和をうったえ核兵器をなくしていく運動、これこそ、現代人に課せられた最大の有益な仕事だと思う。具体的にはね。菩薩や仏像の顔をしたミニロボットをつくるんだ。もっと現代的な顔でもいい。平和を訴える真摯な顔だ。それは芸術の域にまで達する顔である必要がある。つまり僕の考えているミニロボットは芸術と科学の結合だよ。コンピュータによって動かされるロボットであると同時に、人間の心の底にうったえてきて感動を与え、人々を平和にかりたてるような顔を持つ必要があるんだ。これは確かにむずかしい、実現性に乏しいかもしれないが、将来的には平和産業で考えていくアイデアとしてミニロボットはいいね。目標はそこにあると思う。遠藤君の考えているようなダンスのできるロボットや家庭教師のできるロボットも素晴らしい夢だと思うが、やはり平和産業は平和にしぼる。核兵器のない世界をつくる。

「

熊野はさきほどから腕組みをし、笑いもせず気むずかしい顔をしながら、三人の話をまじめに聞いていたが、ついにがまんができないというような調子で声を出した。

「松尾君」そう言った熊野の声があまりにも大きかったので、みんなあきれたような表情で熊野を見た。熊野は理論家だが興奮すると、たまにこんな抑揚のある調子になることを優紀は思い出して苦笑した。

「松尾君、君も遠藤君と同じように夢想家だな。ミニロボットをつかって平和をうったえるというのはアイデアとしてはおもしろいが、そんなロボットがはたして売れるのかね。世界中に平和運動をもちたてていくために商品とおして、平和というのわからないがね、それは結局、今うちの会社で君が中心になってやっている平和セールスと同種類のものだね。悪いとはいわんが、平和が商品となってしまいうのはなんだか寂しい気がするね。平和ぐらい商品にしないで、もっと純粋な人間の気持からうったえる方法はないものかね。僕はミニロボットをやるといえるのはおもしろいと思っている。しかし、それはあくまでも商売としての話である。商売は売れてもうからなくては、商売をしている者の生活がなりたらないのだし、その意味で、ミニロボットは売れない予想がつく。それと平和を結びつけるのは、ちょっと飛躍のような気もする。

平和は、署名運動や集会、デモ、国会や政府への請願それに大切な選挙という人間の主体的行動の中から、政治家を動かして平和を作り上げていく必要があるんじゃないのかね。

こういったからと言って、僕がミニロボットをつくってもうけることばかり考えているなんて思ってもらいたくないね。僕は、むしろその逆だ。ミニロボットを生産し、それが売れるような土台がつくれたら、平和産業という会社の組織を一種の原始共産制のような組織にして、利益は、公平に分配するというようなことを考えているんだ。

この平和産業は船岡工場長の発案なのだから、彼はこういう組織を理解できる。

株式会社のルールに基づいて社長をはじめ従業員が完全に平等であるような組織がつくれたら素晴らしい。そして、商品がどんどん売れてこの組織が大きくなっていけば、従業員は賃金が上昇し、働く意欲がわくだろうし、労働の中で完全な平等性を獲得できる。これが、俺の夢で、さきほど林原君が言っていたような能力の問題もこの組織では完全に解決される。もっとも、この株式会社そのものがもっと大きな日本の社会の矛盾をしょっているのだから、こんなことは結局無理なんだろうが、さっきからみんな夢みたいなことばかり言っているから、僕も自分の夢を言わせてもらえば、組織を人間性の回復に役たてるような風にする、これこそ平和の問題とらんで、我々現代人がやっていかねばならない重要な問題なんだ。組織の問題と平和の問題は結び付いている。現にここに集まっている人達で平和産業を立ち上げようとしている。」

それまで黙っていた飯田が、大声をたてて笑った。「や、実に熊野さんらしい発想だね。人間性の回復に役立つような株式会社か。しかし、大会社の幹部の連中がそんな話を聞いたら、目を丸くして会社は慈善事業じゃねえと言いつつだね。」

飯田はそう言っておかしそうに顔の表情を震動させた。それは笑っているというよりは笑いをこらえているというような感じだった。

松尾はお酒を半合ほど飲んで、少し夢見心地だった。そのせいか、心の中に詩でないような詩句が浮かんできた。

お茶の香りと昇りあがる優雅な白い蒸気

広島を中心部の座敷で、十人近い人がお茶の会をやっていた。

ところが上空からB 29が黒い円筒のようなものを落とした

それが地上に物凄い光を放つ時

その十人は消え、広島の間も焦土と化した。

たった一つの核兵器がこれだけの威力を持つ

今やそれが世界に何千とある。

少し前の話だが

インドとパキスタンが衝突しそうになった時

思春期のインドの女の子達が「核戦争をしないで」と叫んでいた。

そういう風に叫ばないと、核兵器を地上から、なくすなんて夢物語になってしまう

どんな美しい花も虎や猫のような愛すべき生き物も焦土には生きていけないのだ

国や組織のエゴが衝突する時

まとまって良い筈と思うものもまとまらない

軍は勝つだけを考えた組織だ

最近宇宙軍なんていうものも出てきた。

政治家は話をまとめることをせず、自分の威信を高めるために、腐心する。

核均衡論は主張する。

同じくらいの核兵器を持てば、怖くて戦争できない。

はたしてそうか。

理性が万能ならばありうる。

歴史を見ると、理性は感情に動かされ、戦争が起きるのは証明済みだ。

10

五人の若者は発言したわけだが、ミニロボットをつくるという動機はみな多少の相違があつてどのよう
に調節したら良いか、考える所が誰しもあつて五人の発言のあとしばらく沈黙が支配した。

それは重く正しいというような沈黙ではなく、むしろこの五人でやれそうだという了解を各自の胸にしみ
こますための時間のようでもあつた。そして、この沈黙を破つたのは林原憲一だった。「みなさん、ウイ
スキーでも酒でも飲んで下さい。私は、あなたがたがいらっしやる前から一人で飲んでいたんですよ。

昼間飲むからといって焼酎だなんて思わないで下さい。会社をやめてからデザインの勉強しているん
ですが、デザインのアイデアは少々のアルコールが身体に人っていたほうがわいてくるんですね。あま
り飲みすぎたはいけないんですけど、ほろ酔い程度ですという着想がわいてくるんです。

どうですみなさん。ミニロボットをつくり、平和を世界にアピールするという良いアイデアをねるため
にも、少々アルコールをいれましょうよ。もっともビールや酒の方がいい方もいるでしょうね。酔わな
くちや、平和産業なんていう夢が語れないじゃないですか」

林原はそう言って客につまみは何か良いか聞きだすと、立ちあがって奥の台所の方に行った。残った四
人は応接室に飾つてあつたモネの絵を見て、たわいのない感想をのべあつていた。それはサン・タトレス
のテラスといつて港の見えるテラスを描いてある風景画だった。モネの絵の中では写真に近いような描
き方をしている作品だった。

「これがモネの絵なのかい。モネって、もっと、ぼんやりした色を使っていなかったかな」

飯田がちょっと不満そうな口調で、モネの絵だと言つて、いやに感心していた遠藤に語りかけるように
言つた。遠藤はたいして詳しくもない絵画の知識を総動員してモネの絵について講釈した。そのうちに

林原がビールとおかんのついた酒につまみを持ってきた。

「世界平和を作るには今の人間の価値観を変えなくてはね」と林原は口ひげを指でさすりながら言った。飯田は、遠藤のモネの講釈が終わりきらないのにモネにはまるで関心がないかのように別の角度から、ロボットの話にもどしてしゃべりはじめた。

「価値観とは」と林原は言った。

「金儲けの価値観が世界中をおおっているじゃありませんか」

「マルクス主義を出すつもりなのかい」と飯田は林原に聞いた。

「金銭至上主義が限界にきていることは確かだ」

「でも、ソ連はうまくいかなかったよね」と遠藤が言った。

「あれだって、米ソ冷戦で、ソ連が核兵器などの兵器に金を掛けすぎたという意見を聞いたことがある」と熊野は言った。

「やはり、核兵器は莫大な金がかかる。世界中から、そんなもの、なくしてしまえば格差社会もなくなり、多くの文化を享受できる生活を営めるようになる。」と松尾優紀はたんたんとした調子で言った。

「どちらにしても、今は中国。」と遠藤が夢見るような口調で言った。

「もうアメリカとの軍拡競争が始まっている。日本にとっては、北朝鮮が核兵器の開発をしていることが不気味だ。核兵器廃棄という夢のような挑戦に方向づけするには、並みの才覚では無理だな。」

まさに、平和産業のミニロボットをこれらの国に輸出して、民衆の中に、核兵器廃止による福祉の増大がいかにお互いの国の利益と幸福になるか説かなくてはね」

窓側の机の上にあった一輪の花が窓から入ってきた風に花が揺れた。花が揺れ自然が揺れ、その内に松尾優紀の心が揺れて、突然、島村アリサのことを思い出した。そして彼の心の中では、断古とした調子で島村アリサがこの平和産業のリーダーとして会社の成立に参加すべきだという考えが支配したのだった。随分、長いこと忘れていた島村アリサのことを、この時になって思い出したことにより彼は、あるなっかしさで胸がいっぱいになった。

彼は酒を飲んでいたこともあり、しばらくの間目をつぶり彼女の顔がまぶたに浮かぶのを楽しんでいた。中学時代に知りあって以来、彼の心の先生でもあった彼女、そしてその知恵の泉としての彼女と、ある心の接触を持った頃からもっと人間的な深いコミュニケーションがはかられていたことを、彼はぼんやりと思い出した。

会社に入るようになってから会わなくなってしまった。それは彼女がすでに結婚しているというための遠慮もあった。それと会社という広い世界に接触し、忙しさの中で働いていくうちに彼女と接触するのは広島原爆の映像詩をつくる時の音楽のアドバイスを受ける時だけだった。それも、電話や郵便と日本で始まったばかりのネットだけの接触だった。彼は目をあけると、平和産業という会社設立のことで会話が進行している間に入って突然言った。

「今度の広島映像詩で、音楽の方を助けてくれた平和産業の映像詩部門にふさわしい方がいるのがね。そういうすばらしい女性がいますので、平和産業に入ってもらえるよう頼んでみようかと思っていますのですが、どうかね」

熊野は目を丸くして松尾を見た。「そりや、大歓迎。女性の感性が必要な所は山ほどある。」

「旦那は弁護士。親父さんは寺の住職だけれど、我々の考えに近い」

近いというよりは、かつて松尾の少年時代に向こうから、ある思想の流れが入ってきて、平和産業の方向が結実したと思えば、源流は向こうのお寺にあったというべきか。

「彼女が中に入らなくても、平和産業の御意見番にはなれる。旦那が弁護士だから、顧問弁護士になることを依頼し、間接的に彼女の協力を得るという方法もある。」

「しつかりした女性か。それなら大賛成。おれにも心あたりがいる。これも女性だ。ちょっと変わった女だが頭の切れる女性だ。まだ独身だが金もある。どうだい、」と林原が言った。

「熊野さん。あと残りの推薦社員二人は女性ということで。そうすりや、わが平和産業も、はなやいだ活気のある雰囲気になる。」林原はそう言って笑った。

「私の推薦する女性は禅宗やヨガに興味を持っていて、そうした宗教的世界をコンピューターを使って、絵画にしているんですよ。」

もっとも彼女の考えによると、禅宗やヨガは宗教ではなく現実をより正しく見、より正しく生きる方法だなんて言っていますけどね。ともかく、おもしろい女性ですよ。

遠藤さんも一度話してもらえば氣にいただけますよ。女としてでなく人間としてつきあえる数少ない女性ですよ。」

「へえー。コンピューターアートですか？それはおもしろいですね」

「彼女の場合は絵を描くのだよ」

「わが平和産業にもその才能をいかしてもらえそうじゃありませんか。ロボットのデザインは彼女にまかせましようや。」

飯田はそう言うてから、コーヒー茶碗を口にくわえ、視線を松尾の目に合わせた。

松尾優紀は、電話を貸してもらい島村アリスに、映像詩プラスロボットとミニロボットのアイデアに関心を持つように話を進めてみた。ところが、電話にできた彼女は会社をつくるならば、ロボットよりも今まで彼女が構想をねりつづけ少しずつやり始めている映像詩の方が将来性が高いということを言いだした。

「平和産業って、あたし初めて聞いたのよ。今の説明で少し分かってきたけれど、私はあたしで、すでに、NPO法人映像詩を立ち上げているのよ。それに、あなたも映像詩で広島原爆の悲惨さにそった映像をつくっていたじゃないの。それを発展させるというのは分かるけど、ロボットは私の頭の中になかったわ」松尾は彼女にロボットの話をしていなかったのだ。

アリスは言った。「今あたしが考えている構想は、それはすばらしいものよ。あたしの考えている芸術はね、以前のど、ちょっとちがっているのよ。つまりパソコンをつかって絵画をつくるのね。そしてその絵画をつなぎあわせ一つの物語をつくりあげていくの。わかりやすくいえば、パソコンをつかってア

ニメ映画をつくるのよ。アニメはこれからの芸術よ。もう少し具体的に言いますとね、たとえばチェホフの短編をパソコンソフトを使ってアニメ風に表現するのよ。それぞれの情景はチェホフの世界を表現し芸術作品として鑑賞にたえるものとし、そして又、その情景にチェホフの文章を韻文化してその詩作品を画面に映し朗読するの。そうね、近松門左衛門の人形浄りを思い出してもらえばいいわ。そうあの人形浄瑠璃のような芸術作品をパソコンを使って作品化するの。

どう？おもしろいアイデアでしょう。つまり総合芸術よ。

それに、あなた方の平和産業は企業でしょう。私のはNPOよ。こういう仕事はNPOが向いていると思うけど、ロボットはやはり大企業の応援がないとね。あなたは平和産業で頑張れば」

彼女はこんな風に話したあと、今からそちらに行っても良いかと松尾にたすねてきた。彼は大変とまどったけれど、口では彼女を歓迎すると答えたのだった。彼は電話を切ったあと、その内容をみんなに告げ、そして自分の感想もつけ加えた。

林原憲一は、あいかわらすウイスキーの水わりをのんでいたが急に大声を出した。

「松尾君、ねえ君、その島村アリサさんという女の人はおもしろい人だね。実におもしろい所に目をつけたね。僕は美大でデザインを勉強した人間だから、そういう話のすばらしさは直感的にわかるよ。そう。アニメ風にチェホフの小説を視聴覚芸術につくりあげる。発想がおもしろいよ。近松門左衛門の人形浄りをイメージとする所などもおもしろい。まさにそうなんだ。映像詩こそ新しい総合芸術なんだ。」遠藤洋介は、ちよつと遠慮がちに低い声で林原の方をむいて言った。

「もうすぐここに島村アリサさんがいらっしやるのでしょうか。ともかくアリサさんの話を聞いてみたいよ。そうだ、島村さんが来るならついでに林原さんの知っておられる女性も来てもらえればいいね。もちろん急ですから、これとはかぎりませんが一応、電話をかけてみる価値はあるのではないですか。」林原はそれを聞くと同時に立ちあがって言った。

「うん、そうだね。君川香奈枝さんと、今電話してみますよ。」

彼は電話のある玄関の方に出ていった。みんなは、酒やビールをのみながら互いの顔を見あった。井口は、ステレオに近づいて引きだしをあげ、レコードを取り出した。

「何かいいの、あるのかい？」熊野が声をかけた。「ビゼーなんかどうだい。酒のんでいるから、けいきの良いのがいいだろう。」

ビゼーの音楽が部屋にひびきわたった。しばらくして林原が入ってきて言った。

「すぐ来るって。おもしろいぞ。二人の女性が我々の仲間に入って芸術論や世界平和を訴える良い方法。こういうことについてのアイデアがとびかうことになる。お、ビゼーの音楽か。今晩は宴会花ざかりとなりそうですね。」

松尾優紀は、酒を少しずつ口にいれながら、島村アリサの顔を思い浮かべていた。初恋の女性。そして、長いつきあいの間に色々なことがあった。彼は今も彼女を愛していると思った。しかしその愛は、かつてのように燃えるような激しいものでなく、山の中でひそかにわいてくる小さな清水のように静かできさやかなものであった。そして今、ビゼーの明るく魂を高揚させる音楽に耳を傾けていると、再びかつての美しい乙女の姿をしたアリサが、ろうそくの炎がそよ風にふかれて炎がゆれるように彼の脳裏の中で、あざやかな肖像画となったり消えたり時には波のようにゆれていた。松尾優紀は、酒のはいったコップ

を手を持ちながら急に立ちあがりながら言った。「みなさん、今晩はすばらしい。素晴らしい女性をゲストにむかえて、我々は談論に花をさかせることができる。昔、中国の詩人李白が言ったように、このように期待にあふれた青春の楽しい時を過ごせる日がそうあるわけではない。人生は短い。おいに楽しもう。僕は李白のような形で人生の賛美をしようとは思わないが、人生が生きるに値する素晴らしいものであることを知っているがゆえに、我々は酒をのみしばしの間夢を語る。青春の夢をかたる。しかし、これは単に夢に終わらない。夢はふくらみ、やがて現実の花となる。どうですか、みなさん。二人の女性が来るまで、しばらく時間があるでしょうから、何かみんなで歌でもうたっていませんか。」

「それは良い、歌おう。」熊野が拍手して大きな声でそう言った。そして、彼は一人でナポリ民謡の「帰れソレントへ」を歌い出した。ビゼーの音楽はすでに終わっていたから、熊野の美声が部屋を支配した。セミプロ級だと松尾は思った。この歌は優紀の気持にピッタリ来たから彼は感動した。目から激しい涙があふれてきたので、彼は半分ほどはいつている酒をいっきに飲みほした。そして、すわりワイシャツのポケットからハンケチを取り出し目をふいた。

熊野は歌い終わると、松尾を指名し、何か一曲歌うように言った。松尾は感動に震えている自分の魂の鼓動を他人に感づかれるのが恥ずかしかったので、感動を押さえるためにいさましい歌をうたおうと思った。彼がソーラン節をうたうと、みんなも声を出し、ますます宴会の雰囲気になってきた。その時、呼びリンがなった。島村アリサだった。車で来たのであろう。予想しなかったことに、横に旦那がいる。予想以上にはやく来た。松尾は心臓がどきどきした。彼女は目がねをかけ、地味なブルーのスーツに身を包んでいたため、ちょっとした学者風の女に見え、かつての花のような乙女の雰囲気は感じられなかった。林原と松尾が玄関で出迎えたのだが、彼女は愛想のよい微笑を浮かべ「今晩は」と言った。

「主人を連れてきたわ。一人で来るつもりだったのですけど。主人も平和産業に興味があるみたいよ」旦那は軽く「今晩は」といったきり、あとは殆ど沈黙していた。ただ、存在感はかなりある人だった。まるで護衛のようだと、松尾は思った。

彼女が部屋の中に入ってくるといつべんに雰囲気が変わった。今までの宴会ムードは急にしばみクリスマスパーティーのような清潔で明るいムードが、部屋の中に立ち昇ったような気が松尾にはしたのだった。松尾は島村アリサをみんなに紹介した。彼女は一人一人に愛想のよい微笑と、てぎわのよい挨拶の言葉をかけ、なごやかな美しい夜につくりかえていくのであった。まるで外交官のようだと松尾優紀は思った。旦那は殆ど沈黙していた。ただ、時々目をきらりとさせる瞳の底にはかなりの知性を感じさせた。

彼女は、ひととおりの挨拶が終わるとしゃべり始めた。

「みなさん、お楽しみの所を急におじゃましてすみません。でも、あたしもぜひみなさんの楽しい仲間に入れてもらいたいと願って飛んでまいりました。平和産業とNPO映像詩と手を組んで、平和のために、立ち上がる。」

ここにいらっしやる松尾さんとは長いおつきあい、色々わたくしも彼のすばらしい芸術的感性から学ぶ所があったのです。そこで今日、久しぶりに彼からお電話をいたたき、平和産業をつくるから参加しないかというありがたいみなさんのお言葉をうけたまわり、はたと困ってしまいました。と申しますのは、そんな素晴らしいみなさんのつどいに参加できる喜びが深ければ深いほど、今まで私が考え少しずつ始

めている映像詩を一層深めたいという欲望がふくらんでまいったからです。

それに、NPO法人は設立して今、まさに始まろうとしている所です。ですから、あたしの方が松尾さんをNPOに来て、あなたの広島映像詩をやってもらいたいと、誘惑してしまいましたけれど、皆さんを見てみると、平和産業を出発するほうが、松尾さんのために良いのではないかと思うようになりました。それで松尾さんにロボットやミニロボットよりも映像詩のほうが、将来性あるなどと申したのでございます。今から考えると、せっかくみなさまが真剣に取り決め実行しようと協議なさっていることに水をさすような発言で、大変申しわけなかったと思っております。しかし、考えは変わっておりません。やはり、ミニロボットを成功させるには大変な資金がいると思います。やはり、平和産業はルミカーム工業のような大会社がバッグにありますからね。そんなユニークな平和産業なんていう会社が作れるのですよ。それに比べNPO映像詩の方は少ない資金で始めています。

金がかからず芸術的にも新しい分野であるという思いで出発しました。平和産業が応援してくれると、嬉しいですね。

いかがです、みなさん。これから新しい会社をつくるというお考えならば、今わたくしのやっている仕事をさらに大きくすることに力をかけていただけないでしょうか。たしかに突然おじゃまして、こんな話を持ち出すなんて虫の良い女とお思いかもしれませんが、今の私はこの映像詩に熱中しておりますので、私財をかなり投資してもみなさんに協力する覚悟ですが。」

「平和産業とNPO法人で協力して世界の平和のために、立ち上がる。これはどうでしょう。」と林原が言った。そして、ちょっと軽い微笑をして彼はアリスに握手を求めた。酔っているためとはいえ、初対面の女性に握手を求める彼に、松尾はいらだたしい嫉妬を感じた。旦那は微笑していた。彼女は微笑して、こころよく林原の手をにぎった。林原は得意そうな表情になって言い始めた。

「島村アリサさんのおっしやるとおりですよ。私は大賛成です。ミニロボットよりも映像詩の方がはるかに良いです。これは間違いありません。ミニロボットは島村アリサさんのおっしやるとおり、大手の会社でない、出来ません。平和産業はルミカーム工業という大会社がバックにいるのです。平和のため、こういう会社が応援することは珍しいことです。

そこへいくと映像詩は、小資本でもすぐれた芸術性のある作品を生みだせますから、充分大資本と競争できます。島村アリサさん、あなたが来られたおかげで我々のグループもより良い見通しができるようになった。結論として、平和産業とNPO法人映像詩が協力して世界平和のために立ちあがりました。」島村アリサは笑顔でうなずいた。旦那はやはり微笑してはいたが、長い沈黙を破ることはしなかった。

林原は君川香奈枝が急用で来れないという連絡を受けると、外食の寿司を注文した。食べている時は、先ほどの賑やかな話は少し静まり、ゆるやかな会話が続いた。

11

林原の別荘を夜の十一時頃、解散した。外は満月が美しかった。

平和産業は順調にスタートした。熊野と林原は映像課に、田島と飯田と遠藤はロボット課に、平和セールスは松尾に決まったし、会社独自で採用したのは途中採用が多かった。

次の平和セールスは大学と決まった。

前と同じように、ロボット菩薩と松尾と田島のコンビで訪問するスタイルは同じだった。何しろ、まだ実験段階なのだ。遠藤の主張した額から、電波が飛び出るミニロボットは今後のロボット課での研究課題で、親会社のルミカム工業と協力してやることに決まった。

大学に学生の前で、ロボットの演説を見せたいと申し出たら、大学は快く引き受けてくれた。

その日は十一月を少し過ぎ、紅葉にはまだというような秋晴れの日だった。車を大学正門前の駐車場前に止め、ロボット菩薩、松尾優紀、田島は中に入っていた。

歩いている学生達がロボットを見ると、目を輝かせて来た。

中には、数人、寄ってきて大胆に握手を求める学生もいた。それでも、

「本物のロボットですか」と質問する学生もいた。

大学祭の途中だった。校内に入るとあちこちに、案内の看板が立っている。演劇とか歴史とかがあったが、松尾の心に飛び込んできたのは宇宙だった。三人は鉄筋コンクリートの校舎の中に入っていた。そう言えば、アリサが「永遠平和を願う猫の夢」という叙事詩を書いたということを聞いて、その概略を聞いたことがある。

中に入ると、教室がプラネタリウムのようになっていて、薄暗い中に沢山の星がまたたいていた。

一人の学生が声をかけた。「ロボットの登場ですか。工学部の方ですか」

「いえ、平和産業という会社のものです」

「平和産業。会社の方ですか。とすると、そのロボットは本物というわけですね。」

我々も宇宙人にはアンドロイドが沢山いるという想定の下に宇宙の物語を構想し、映像化してみますよ。ごらんになりたければ、こちらの小さい教室の方に来て下さい。

僕らは戦うのではなく、武器のない惑星の映像詩をつくっているのです」

大学は島村アリサの母校で、アリサはこの部会に書いた叙事詩の一部を映像化していたのだ。そのことを松尾優紀は学生から聞いて、驚いた。

その学生は島村アリサのいとこで、前から学園祭に映像詩を発表する相談をすることを考えていたと言う。学生がロボット菩薩に向かって感想を聞いた。

「僕の考えと似ているではないか。世界から、核兵器を無くす、そのあまった金を増やし、福祉にまわせば、経済格差を少なくする。」

その学生は中肉中背の赤ら顔の純情そうな顔つきをしていて、「島村アリサさんね。たまに、母校を訪ねて、文学部をのぞいたり、宇宙科学をのぞいたりしていますよ。」

あの、映像詩にした物語も文化祭のために、一部をお借りしているんですけど、いずれ完成したら、本にすると書いていました。

読んでみたいですね。武器を持って戦うのが常識という世界観に挑戦しているんですが」

「僕らの平和産業は核兵器を全地球になくすにしています」と言った。

「核兵器を地球から無くすということに、反対の人はいない筈です。」

みんなが同意できる所で、平和セールスをしやうというのが、平和産業のビジネスです」

「面白いビジネスだけど」

肝心の島村アリサさんの映像詩を見る所は、隣の小さい教室が使われていた。窓の方に、白いカーテンが垂れ、椅子がまばらに置かれ、十人近い学生が座っていた。松尾も田島もロボット菩薩も座った。

そのあと、柔道着を着た十人ぐらいの学生がぞろぞろ入って、椅子に座った。松尾優紀が驚いたのはその礼儀正しさだった。教室に入る時、椅子に座る時、全体のムード、見事なものだった。

しばらくすると、影像が流れた。その間に、女性の声でナレーションが流れた。

(narration)

(我々はトパーズの宝石のようなこの惑星アサガオの冒険を終えて、アンドロメダ銀河鉄道の駅に向かった。)

黄昏の美しい時がこの排気ガスに汚れた空気の惑星にも訪れようとしていた。薔薇色の光は灰色がかったが、それでもあの真紅の薔薇の花を思い出させる自然の荘厳さがあたりをおおっているのを感じた。青みがかった空気の流れがあり、風がそよそよと吹いていた。確かに頬には暖かい風ではあったが、何故か吾輩は心地よく感じた。

背後に広がる山にも廃墟のようなビルの並ぶ町にも明るい光の残りがぐるぐる渦を巻いていて、何か不思議な霊的なものが駅の方角に吹いているような気がした。

並木の間にガス灯が灯り、ふと聞こえる水音は何か銀河の流れの音のようにも聞こえた。

巨大なクジャクが羽を広げたように、駅は前方で待っていた。

不思議な鐘の音がこの夕暮れの束の間の憩いの時を告げているようだ。

いくつもの大きな星が輝き、我らの旅立つアンドロメダの大空に手招きしているようではないか。木の葉が広場の樹木から音もなく散り、宇宙の真理を語っているようだった。

物質と霊、物質と仏性、それが一つになったいのちに満ちた宇宙。孫悟空の持つ科学の如意棒をはるかにしのいだ永遠のいのちの力が我らの列車を引っ張るように、アンドロメダ銀河鉄道の駅へと導いていく。

駅の構内に入り、アンドロメダ銀河鉄道の雄姿を見た時に、ハルリラが豪快に笑った。

「この列車には、いずれ面白い男が乗る。それを今、魔法界からメールでキャッチした。そいつと話すが良いという知らせだ」

「面白い男って、どんな人よ」

「さあ、それは会ってのお楽しみということだな。ただ、おそろしく背の高い男だから、すぐ分かるというとしか連絡がきていない」

アンドロメダ銀河鉄道はいつの間に、出発していた。吟遊詩人と吾輩とハルリラの三人が座った椅子は実にゆったりとしていて、窓の外がよく見えた。

真紅の丸い恒星は今や遠ざかり、遠くの大空の一角はあかね色に染め上がり、列車よりの空にはもう銀河がちりばめられ、大きな星や小さな星が輝いてみえるのだ。

その時、隣の方の車両からやってきたのだろうか、背丈二メートルは超える、がっちりとした体格の大男が我々の前に現われた。ハルリラは「あの男だな。面白い男というのはきつとあの男だ」

吾輩も「なるほど。面白そうだな。君の魔法のメールは正確だね」

「そりゃそうさ」

その姿は何かを修行している行者のようだった。茶色っぽい粗末な、しかも、洗濯をしたばかりのように、綺麗な肌触りの服を着ていた。顔は小さな岩のようにごつごつして、目はアーモンド型に近く、口髭とあご髭が白のまじった薄緑の雑草のようにぼうぼうとはえている。

これは又、何族の人間なのか、見当がつかかねる。そういう人は吾輩のアンドロメダの旅の中でも珍しい。車両のどこからか、「あ、シンアストランだ」という声が聞こえた。

シンアストランと呼ばれた男は立ったまま言った。

「そう愚かな戦争だった。地球はいつまでもつのかね。核兵器なんてものを沢山持っている国が争っているんだからね。何億年も栄えた恐竜が隕石の落下で一挙に滅びたように、そういう予兆があちこちのニュースでも感じられるじゃないか。戦車だの、ミサイルだの。戦闘機だの。はっきり言って、あれは人を殺す道具だぜ。あんな物騒なものに何百億円もかける人間って、はたして利口なのかね。」

その時、ハルリラが突然、「おじさん。ネズミ族だね」と言った。

シンアストランはおやという顔をして、目を丸くした。

「そうなんだよ。よく分かったね。わしはネズミ族だ。わしは長い修行によって、普通の人にはどの民族か分からないような姿になってしまったと思っていたが、見破られたか。ハハハ。ネズミ族は、アンドロメダ銀河では低く見られたり、恐れられたりする奇妙な感じになってしまった。今や、アンドロメダ銀河では、最も優秀な科学と武器を持っている惑星に住むヒトだが、宇宙に出ることは消極的で、まあ、一種の鎖国状態だな。物は豊かで、栄えてはいるが、広い宇宙に目を向ける大切さを忘れた息苦しい所があって、わしは飛び出し、アンドロメダ銀河の原始の森のある惑星に憧れ、そこで修行を積んだのだ。こういう変わり種のネズミ族はけっこういる。例えば、惑星アサガオのニュートン氏のような科学の天才」

吾輩、寅坊の前に、大男シンアストランが巨木のように悠然と突っ立っている。

そして、小声で何かを歌っている。

【銀河の幻の松を今日見れば、蛍の群れに横笛の音かなし】

吟遊詩人が立っている大男シンアストランに、「ここにお座りになりませんか」と我々の席の一つ空いている所を指さした。

「ありがたい。わしもそうしようと思っていた所だ。あんた方は地球の方だろう。地球も今は大変だな」吟遊詩人は言った。「ネズミの惑星も大変なようで。一步、間違えると、自滅する」

「ほお、よく知っていますな。あそこの情報は中々手に入れないのに」

「私はニュートン氏と少し、お付き合いしましたので。」

「ほお、ニュートン氏と。わしはあいつとは肌が合わないので、一度会ったかぎりだが、面白い話がありましたか」

「ネズミの惑星の様子を心配していましたね」

「ほお、どんな風に」

「ともかく物凄い科学文明の発達ですよ。今じゃ、原子力とニュートン氏の弟子達の努力によって、水素エネルギーの利用が可能になり、惑星と周囲の三個の惑星のエネルギーの需要をまかなえるようになっていた。しかし、一つの惑星で原子力発電所の事故があり、沢山のネズミ族のヒトが死に壊滅状態になったけれど、そんなことに無頓着にさらに物質文明を進めようとしている。

確かに、惑星も残りの一個の惑星も十分に豊かな住宅地が生まれ、物凄く豊かなネズミ族の文明が栄えている。しかし、この惑星の中の領土の取り合いで、

惑星の四つの国が激しく対立し、国と国はいつ戦争するか分からない状態という。

どこの国も、武器の発達は凄いの、恐怖の均衡という状態にあるとか。

精神文化も衰え、人々は毎日、享樂的な生活にあけくれているとか。人と人はばらばらになり、金銭を積み上げることが人生の目的になってしまったような社会で、自殺者も地球の十倍とか。それでも、人口は増えて、その解決のために、もう一つ残された未開拓の惑星獲得競争が始まっているという話です。」と吟遊詩人はなめらかな調子で話した。

大男のシンアストランは手を合わせてから、目を半眼にして、大きな呼吸をした。

「吸う、吐くに集中する呼吸の瞑想ですな」と吟遊詩人は言った。

シンアストランは頷き、何度か吸う、吐くの瞑想をやり、急に目を大きくして言った。

『吸う』と頭の中で、言いながら空気を吸い、『吐く』と頭の中で言いながら、空気を吐くと頭の中が空っぽになって、気分がよくなりますよ」

そこまで言うのと、シンアストランはしばらく沈黙してから、喋り出した。

「ところで、地球も核兵器だの、気候温暖化現象だの大変のようすな。それに、最近、わしは文殊菩薩に会った。信じますか。

信じてないなら、夢の中で会ったと言っておきましょう。菩薩は美しい顔に珍しい怒りの表情を浮かべていた。

プルトニウムは核兵器の材料になる。知っているだろうな、と菩薩はおおせだった。勿論、日本のもんじゅも発電のためにある。発電しながら、燃料のプルトニウムを増やしてくれる。だから、増殖炉で、夢の発電の筈だった、しかし、この二十年間ともに動いたことはなく、今や止まったままでも一日五千五百万円という高い維持管理費がかかっておる。一日の費用だぞ、今までに、おそらく何兆という金額が無駄にされているのだ。

知っておるのか。これだけの大金があれば、どれだけ福祉の方に金がまわせて、消費税なんか必要のない真の意味での豊かなゆとりのある国がつくれたではないか。

こんな無駄使いが許されるほど、かの国は富があふれているのか、と文殊菩薩はおおせだった。わたしの名前をつけるなど、ふとどきだと菩薩は怒りで頭から蒸気がのぼっておられた。」

「よく知っておられますね」と吟遊詩人が言った。

「わしはね。地球とアンドロメダ銀河で起きていることには詳しいつもりだ。特に地球で起きていることは我々アンドロメダ銀河に生きる者にとっては、おおいに参考にすべきことが沢山ある。原発の恐ろしい危険性は明白。プルトニウムは核兵器の材料にもなる。核兵器で恐竜のように、人類が減びないように願っているよ」

なにしろ、第一次大戦の塹壕戦だけで、二百万人の若者の死んだのですからね。あれが悲惨な戦争の現実なのだ。それに、核兵器は兵士だけでなく、沢山の普通の民衆と子供をそうした戦火にまきこむ」とシンアストランは言った。

アンドロメダ銀河鉄道の窓の外を見ますと、美しい風景が広がっていました。

緑色に光る銀河の岸に、柳の並木の細長く垂れた葉や焦げ茶色の太い幹のある緑の桜の葉が、風にさらさらとゆられて、まるで何かの踊りを踊っているようでした。他は、全て、真空のヒッグス粒子のような何かの輝きのようで、波を立てているのですでした。

しばらくすると、アンドロメダ銀河鉄道の先の方で蜃気楼のような白い宮殿が立ち、その周囲に花火のようなものが上がったのです。白い宮殿におおいかぶさるようにして、大きな花のような広がり、赤・青・黄色・と様々な色に輝き、薔薇の花のようなひろがり、百合のような花の広がり、向日葵のような花の

広がりど直ぐに消えてしまうのですけど、再びその花火のような美しい大輪の薔薇、菊、百合の花は白い宮殿をおおってしまうのです。全てが夢のようで、また蜃気楼のようで、時々、ピアノの音のような美しい音を空全体に響かせているのは、宮殿で何かの催しをやっているようにも思え、宮殿の周囲にも白いミニ邸宅が並び、おそらくは人々がその不思議な光景を鑑賞しているに違いないと思わせるものがありました。

そして、確かに、銀河鉄道の列車の周囲の下の方は何か透きとおったダイヤのような美しい水が流れているのかもしれないのだと、ふと吾輩は思ったものです。

何時の間に、シンアストランの行者がコーヒー茶碗を持って、そこに座っていました。

うまそうにして、珈琲を飲むと、満面に笑顔を浮かべて、彼は言いました。

「地球で死んだ人は、そのまま、銀河鉄道への旅に出ることがある。宇宙には、まだまだヒト族の理性では理解できない所がたくさんあるということだよ。どちらにしても、いのちは永遠さ。この永遠の旅で、人は自分の魂を磨く、これを知らないで、人は愚かになって、そして争い、みじめになる」

「魂を磨くのですか」

「そうさ。色々な試練にあって、自分の魂を美しくしていく、そういう永遠の旅だ。しかし、人間には親鸞がおっしゃったように煩惱というものがある。この煩惱の重さは大変なものさ。親鸞が言うように、まず自分の中にある悪と愚かさを見つける時に、人は天空から降りて来る素晴らしい光の衣に包まれ、本当の人間になれる。」

どこから飛んできたのか、美しい赤いインコがシンアストランの肩にとまった。

「わしのペットだ」とシンアストランは微笑した。」

映像詩は終わった。The End が消えると白いカーテンが垂れているだけで、外の学園祭の喧騒が聞こえてくるばかりだった。

ロボット菩薩が立ち上がった。

「ああ、面白かった。僕もシンアストランのようになりたいな」

松尾優紀は苦笑した。

柔道部員が寄ってきた。

「おお、ロボットじゃないか」

「何で、柔道部員が練習をサボって、映像詩なんか見るんですか」とロボット菩薩が聞いた。

「ああ、いい映像詩をやるという噂を聞いたからよ。面白かった。シンアストランのように、我々柔道部員は強さだけでなく、ジェンツルマンとして道を求めないとね」

「敵と戦いがあって、強くなるのが柔道では」とロボット菩薩が言った。

「それは一般に流されているイメージだな。我々柔道部はちがう。敵という言葉を嫌うし、道を求めている。」

「すごいですね。私、菩薩が宣伝にきた目的は、この地球から核兵器をなくすということですが、その志

と同じものを感じます」

柔道部員達はロボット菩薩が喋るたびに、「おう」と声をあげて感心している様子を身振りで示した。

そのあと、学生から「今日は島村アリサさんの父親が大学の教室に講演をすることで、招待されている。」と聞かされた。

まさに、松尾優紀にとって驚きであり、喜びであった。

島村アリサの父親が僧服を着て、学園祭に出てきたことは、何かの宇宙の奇跡のように、松尾優紀には思えたのだ。年齢は六十才前後の白髪が目立つアーモンド型の目をした優しさと知性を兼ねたような人物だった。僧が黒板の前に立つと、学生達は一瞬ざわついたが、急に静まり物音一つしない静寂が支配した。

学生は五十人ほどいたろうが、先ほどの柔道着姿十人ほどの学生が例の礼儀正しきで、最後に椅子に座った。その後ろに、松尾と田島とロボット菩薩は座った。

僧は机の上のマイクを使って、喋った。机の上には百合の花が一輪咲いていた。まさに、ソロモン王の栄華よりも、美しいと言われたあの百合が美しい白い羽を四方に伸ばしているかのようなだった。

「皆さん　こういうことを考えたことがあるでしょうか。今は十一月で、紅葉を楽しむことが待たれるわけですが、十二月に入ると、クリスマスがきますね。今はとても盛んですが、

この日がキリストの誕生日であることはたいいていの人は知っていても、キリストの言葉となると、知っている人は少ないでしょう。そのキリストの言葉の中に、仏教と非常に似ている言葉がいくつもあるのを知っている方はどれほどおられるでしょう。

人を愛せよというのは仏教の大慈悲心と同じで、こういうのは宗教の核心ですから、なんとなくそれらしいことを言っていると感じている人は多いのではないのでしょうか。

それでも、仏教とキリスト教はまるで違う、異質のものであると感じられている方の方が多いのではないのでしょうか。

私は道元を勉強して、座禅をしますが、最近、ふとしたことで新約聖書を広げ、キリストの言葉の中に、道元の禅の核心、仏性の説明に似ている言葉と出会い、驚きました。

これではキリストは自分の中に無位の真人を悟った天才的な禅僧と同じではないか思ってもそう間違いとは言えないのではないかということです。確かにキリストは神という言葉を使います。禅は使いません。ある日、キリストは神のことをその方と呼び、こう言ったのです。「この方は真理の霊である。世はこの霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることが出来ない。しかし、あなた方はこの霊を知っている。この霊があなた方と共にあり、これから、あなた方の内にいるからである。」

受け入れることができる人が実はその人の中に真理の霊はいらっしゃるという、一見すると矛盾したことを言っているように思える。

こういう言い方は、道元の仏性だけでなく、禪の核心の話にもよくある。たとえばイメージとして、一番分かりやすいのは臨在様にある。

「お前たちの身体に無位の真人「一真実の自己」があつて、いつもお前のたちの口から、眼から、耳、鼻などに入入りしているぞ、その一真実の自己は形がなく目に見えないが、十方に貫き通している。それを働きに見ると眼では見、耳では、聞き、鼻ではかぎ、口では喋り、手では物をつかみ、足では歩き、その根源である一真実の自己は絶対的な無であるいかなる環境に置かれても自由自在である。」

「もちろん、キリストの言う真理の霊というのを臨済のいう一真実の自己と同じと考えることが出来るならば、キリストと臨済は同じことを言っていることになるし、道元の仏性はなにしろあの「正法眼蔵」という大著に詳しく書かれているくらいで、本来ことばで、言えないもので、言葉として言う、概念化し、死物となってしまう。仏性は生きているし、不死である。

キリストの「真理の霊」も臨済の一無位の真実の自己も同じである。

くどいが、これを頭の上でイメージ化して理解するのは第一歩であり、哲学用語のように、概念となれば、死んだものとなる。まさに、生きた仏性、生きた真理の霊を知るためには、どうしたら良いか、これが宗教の修行の根幹にあるのでは。」

「質問どうぞ」

「あの、仏性の説明で何か分かりやすい適切な言葉がありましたら」

「うん、これは難しい。なぜなら、うっかりすると言葉で言えば、みんなイメージとか概念になってしまう、生きた生命が見えなくなるからです。そういう危険をおかして、私が今、あえて言うとなると、仏性は「無限の一なる生命」ということになるかと思いますが」

柔道部が手を上げて質問した。

「我々は柔道をやる時、道というのを大切にしています。先生のおっしゃる仏性は我々の思う道と似ておる気がするのですが、マルクスによれば唯物論が正しいと、その唯物論の上に、道あるいは先生のおっしゃる無限の一なる生命をつけ加えることが出来るのでしょうか」

「出来ると思いますよ。それが本物になるかどうかはあなたの心に愛と大慈悲心が宿るにかかっているのでしょうかね。あなたは相手と組む時に、相手を敵と考えますか、そうではないでしょう。もうやっている時は一体になっていますよね。それが道なのでは」

時間切れとなり、僧は去った。

柔道部員は全員、立ち、「ありがとうございます」と頭を深々と下げた。

その後、すぐに、島村アリサが姿を現した。

大学の学生主催の喫茶室に入ると、

島村アリサは聞いた。

「どう、父の話。分かった。」

「なんとなくね」

ロボット菩薩は言った「僕は分かりましたよ。僕はいつも無ですから」

「映像詩の方はどうだった」

「あのシンアストランという大男の行者が何か、お父さまの言われる道元とキリストの言われる無限の
一なる生命を体得した行者という感じがして、面白かったですね」と松尾は言った。

「柔道部員の質問は面白かったね」

コーヒーを飲んでいたがっちりした体格の私服の学生が松尾達に声をかけた。

「ありがとうございます。私は私服を着ていますが、柔道部員です。我々柔道部員は道を志すものです」
ロボット菩薩が言った「柔道は強くなることを目指すのでは」

「それは結果です。まず、道を目指すには礼儀を正しくすること、悪口を言わないこと、卑怯なことをしないこと。最近では墮落した宗教はこれが守られていないということを聞きますが、柔道の道はそうした人のマナーを最低限、抑え、そこから、より高貴な道に入ります。これこそ、民主主義の柔道です。世評にあるような豪快な強さを誇るのは少なくとも我々柔道部の目指すものではありません」

ルミカム工業から一キロの広い敷地に中古のビルを借りてスタートした平和産業も周囲は美しい庭園になり、里山に活動する企業のそれなりの体裁を整えたようになった。

その日は希望の象徴のような朝日に照らされたビルが姿を現すと、それに呼応したかのように、松尾優紀達は社長よりも早く、会社で顔を出し例の学園祭のことを話にするのだった。すると、会社で採用されたばかりの林原は目を丸くして興奮したように言った。

「平和産業を株式会社でなく、宗教法人にしたらどうだ。核兵器を地球からなくし、教えの核心を道元とキリストにすれば、これは一種の宗教だ。そうして、その柔道部の連中にも道を志すのはいいが、若いものだから、そこから、核兵器をなくすことに立ち上がる。」

その彼らを平和産業に採用すれば、法人税を払わなくてすむ。」

「ま、無理だろうな。株式会社で出発しているのに、そんな夢みたいなことを官僚が認めるわけないだろう」と熊野が言った。

「しかし、世の中には中身が墮落した宗教がある。金と権力に目がくらんだら、宗教が宗教でなくなる。それを考えれば、わが平和産業の精神の高貴さ、法人税をまぬかれてもいいと思うがな」

「道元とキリストの話の中身が分からないで、思い込んでいると、同じ道に入らざる。今の日本は金銭至上主義の社会だ。若いんだから、もっと、勉強することだ。」と田島が言った。

「おい、松尾君はその道元とキリストの話、分かったのか」と熊野が聞いた。

「宗教は墮落することがあるのは、歴史が示している。道元とキリストの話は何か新しい宗教の光と息吹が平和産業にあてられているような気がする。平和産業は昇る朝日のようではないか。それでなくては、核兵器ゼロをかかげるような、常識に反したことを言う企業なんてなりたないよ。」

そう言った松尾優紀の耳に、「如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは一切法空是れなり。」という言葉が響いたのは不思議だった。

後編

1

松尾優紀の耳に奇妙な噂が入った。会社から十キロ離れた森に宇宙人の基地があり、彼らは人類の滅亡を待っている、平和産業なんていうのは彼らにとっては迷惑、それで平和産業をつぶそうと色々な工作をしているということだった。

これは何人かの会社のスタッフが町の中に広がっている噂を聞いてきたのだ。

しかし、松尾はそういう話に半信半疑だった。

彼とロボット菩薩と田島のコンビの核兵器廃止運動は四年もたち、中学校三校、大学五校、役所二か所と順調に行っていた。それにねたみを持ち、引きずりおろそうとする産軍共同体につながるような邪悪な心を起こすものはどこにもいるものだと、松尾はそんな噂を聞いても驚かなかった。

その日、八月最後の日曜日で、雨が降っていた。彼はコンビニに買い物があり、外に出たついでに、公園に出た。雨の降りがひどくなっていたのだ。急いで自宅に戻ろうという気持ちもあったが、ベンチに座ってみようという気にもなった。ベンチの前の赤いハイビスカスの花がひどく美しかったので、心を惹かれたせいもある。美しいと思った時には詩が生まれやすいものだ。陽ざしのある時の美しさとは違う、何かがあるに違いないと思った。

そして、傘をさしたまま、ベンチに座った。ベンチは濡れていた、ハンカチをのせ、その上に腰をかけた。彼はここに来ると、このベンチに座ることがあるのは、ここが好きだったのである。目の前に、大きな花壇があり、その時もハイビスカスが大きく咲き、他の色とりどりの花がいくつも咲き、向こうの森のサルすべりには実に美しい赤いのやピンクの花がふんだんに咲いていた。

彼は、そこを見ながら、カバンからの小型のノートを出し、あるページを広げ、自分の書いた大雑把な詩句に目を通した。そして、花壇の花に目をやり、同時に自分の胸のあたりを感じ、自分がここにいることの不思議さを思った時、頭の中から、考えごとが消えた。

その瞬間、目の前の景色と自分が一体になるような思いがあった。しばらく、その思いを味わったあと、ペンを出し、ノートの詩句に加筆した。完成だと思ふ満足感があった。

仏性の話はこの三年ばかり、アリサの寺で座禅したあと、アリサの父から簡単な話があるが、やはり、彼の心に一番印象深く残った言葉だった。不死の仏性というのは物に現れるということであり、物そのものにある、いのちの働きのようではないかと思っていた。物質は絶えず運動しているということと、無常なる仏性は表と裏のようにも感じられた。

(poem) (雨が傘に降りかかる音をたてている。)

神秘的音色は夕暮れ時の山に落ちる太陽のようで

目の前には夏の花の咲く花壇

左には森、右にはビル

それでも、大雨はざあざあ降り注ぐ

まるで、この雨は大自然の音楽のよう

ベンチに座り、肩と足は濡れ、

私の身体は雨の音に包まれ

空には濃い灰色の雲

そういう時、私が思うのは不死の愛のいのち（仏性）だ

今、生きている

そして、この森羅万象の大自然と共に生きている

そのことが静かな喜びとなるのだ

我々は仏性の海にいる

それに、気がつけば

我々の肉体が死に至っても

仏性の海は異質の霊の世界を見せてくれ

我々はその街角を訪れることになるのかもしれない

仏性とは不死のいのちの海だ

愛と大慈悲心のいのちの海だ

私は今、仏性のいのちが肉体に変身して

今、そのことを感じているのだ

おお、そのことをこの荘厳な雨は教えてくれる

私の傘に降りかかる

激しい雨はまるで音楽のように

自然の深さを教えてくれる

（傘がないと、ひどい目に合うぞと、誰かのささやく声がする）

ああ、この懐かしい雨もこの頃、おかしい。

豪雨で町に水があふれ、土砂崩れで人家がつぶれる

この悲劇の原因は温暖化だという。

これを食べ止めないと、住めない所があちこちに出る

今、食い止めて、昔の雨の詩情を取り戻そう（

こんな瞑想に耽っているところ、不思議なことが起きたのである。

彼の座っている、ベンチのそばに、頭の上をドローンのようなものが飛んできたのだ。松尾はドローンのことを知ってはいるが、実物を見たことは今までない。プロペラがついてないのが少し変に思ったが、銀色の円盤で大きさは小型の車のタイヤほどか。プロペラがないから、ドローンというよりUFOと違って、良いが、UFOは中に宇宙人がいるはず。そう思うには目の前の物は小さ過ぎる。

それで、彼はとりあえず、ドローンだろうと思った。それが彼の前に音もなくスーッと姿を現わしたのである。ドローンのどこからか、金属性の声が聞こえた。

松尾ははっとして、ドローンをにらんだ。

ドローンのどこからか、金属性の低い声が雨の音を突き抜けて、聞こえてきた。

「核兵器をなくそうなんて、無謀なことを考える。出来ないことをやろうなんて呼びかけるなんて、詐欺みたいなものではないか。そんな会社は早く店じまいすることですな。」

雨はいつの間にも小振りになっていた。宙に浮いた銀色の物体の向こうに、赤いハイビスカスが見える。松尾は傘をさしていた。先ほどのポエムに富んだ心境は消え、声の正体を確認したいと思った。ドローンならば、誰かのいたずらで、声は録音されているということだろう。

「核兵器が全世界から、一斉になくなれば、どの国も喜ぶ。浮いた莫大な金は福祉に回せる。人類にとってこんな素晴らしいことはないではないか。」と松尾が言い返した。

「我々は困る。人類が減れば、我々はこの美しい惑星を手にいれることが出来る。」

「あんたがたは何者だ。」

「我々か。人類ではない。宇宙の善人だ。それにしても、貴公たちは核兵器をなくそうという商売をしている。それはビジネスなのか、それとも、親会社ルミカム工業の名前を売るための行為か、核兵器をなくすなんて、出来るわけがないのだから」

「最近はお親会社から、技術をもらって平和のための、ロボット制作もしている」

「フーン、人類は滅びつつあるという歴史の歯車を変えようってわけか。我々は許さん。あばよ」

その頃、雨がやみかけていた。森の方で、小鳥の声が聞こえる。目の前のハイビスカスの花が風に揺らいだ。

濃い灰色の雲が大きく悠然と動いていく。宇宙人ということはドローンでなく、UFOかあるいはUFOから派遣された、プロペラなしのドローンなのだろうか。

翌日の朝、仕事が始まる前に、松尾優紀は会社の中で町に広まっている宇宙人の噂をしていた。

「本当に、宇宙人なのか。誰がどこかの勢力がわが社が伸びていることをねたんで、ひきずりおろそうと、企んでいるのではないか、町の中には我々の悪い噂が広がっているではないか。」

「我々の会社がうまくいっていることに對するジェラシイだ。中傷の影には、ジェラシイがあると、シェイクスピアのオセロを見れば、分かる。」

「最近はお脱原発でも、我々の親会社ルミカム工業が批判されている。我々の会社は自然エネルギーに

重点を置いている。しかし、町では、県が原発をさらに一基増やそうとしていることに賛成、反対の議論が沸騰している。

これに、賛成する派と反対する派で、町は二分し、賛成する派は我々の平和産業と親会社、ルミカーム工業の両方とも目のかたきにする。困ったことだ。

「それはともかく、その噂の張本人が本当に宇宙人か確かめようではないか。あの森の中にいるという噂があるが、松尾君の見たドローン他でも、見たという噂がある。しかし本体の宇宙船も森の中に消えたということという人もいる。

宇宙人なんて、どこかの勢力の工作に決まっている」と田島が言った。

田島はロボット菩薩と一緒に、「核兵器をなくそう」運動を盛りあげてくれた技術者で、普段は無口で、黙々と仕事をするタイプの人で宇宙人を否定したことに、松尾は少々驚いた。

2

2

十日後、松尾とロボット菩薩と田島のコンビで出かけることにした。ロボット菩薩にとって、最後の仕事になりそうだ。なぜなら、親会社ルミカーム工業から、さらに改良するので、ボサツを送れという指令が届いているのだ。

山のすそ野に広がる深い森の中で、宇宙人がいるとしたら、ドローンの百倍くらいの大きさ。つまり、飛行機を丸くした様なものなのだろうか。

この山は低いが、森は深い。杉の森なのだが、これは植林されたもので、所々に昔の天然のケヤキがのこっている。それは数は少ないが、たいていかなりの巨木になっている。ここは松尾たちにとって、始めて入る所なので、案内人に連れられて、苔におおわれた丸太階段のある山道を上っていく。樹木の梢の緑の葉の中で、ホトトギスが鳴いているが、姿は見えない。

しばらくすると、金木犀の香りがする。森のこの場所はもうすっかり秋になっているのだという気持ちになった。緑の中のオレンジ色が美しい、そこから、しばらく頂上に向かって歩くと、ビア樽よりも太

い幹のケヤキの巨木の上に、ふわっと浮く大きな銀色の円盤を彼らは見た。

灰色がかった茶色の太い幹の上に、ケヤキの葉が生い茂っているので、その上に

まるで大きな鳥のように、着陸したのだろうか。そして、それが幻であることを強調するかのよう、すぐに消えた。

あまりの速さにあっけにとられ、我々は狐に包まれた気持ちで下山した。

その頃から、平和産業の社員に、嫌がらせの電話や郵便物が届いたり、歩いている時に突然背後から、「タヌキ」と声をかけられ、振り向くと、さっと素早く消える。

タヌキはこのあたりで、よく出没する動物だ。

ある夜、松尾優紀が会社から遅く帰って玄関の電気をつけた。まだ薄暗い部屋に入ると、天井に銀色のドローンの影像が映っている。ドローンは「我々は善人だ」と言い、白い満月に変身して、松尾が呆然と見ていると、素早く満月の影像は消えた。

奇妙な早業だが、彼らの技術ならできるだろうと、彼は思った。それにしても満月とは。

アリサの父の住職が、座禅は満月のようなだという表現をしたことを、何故か思い出した。

こんな風に町では、核兵器を世界からなくそうと、声をあげている平和産業を応援する者も被害にあうという。

株式会社平和産業では、宇宙人と噂されるこの不思議な勢力に対抗するために、平和の使者を町に出すことにした。そのための特訓を始めることにした。

町は高台にあり、季節ごとに、色々の花の咲く花壇に縁どられた広場があり、そこから時計台が上に伸び、アーケードの商店街が並び、そこで、たいていのものは買うことが出来た。今まで、ロボット菩薩と核兵器廃止運動の相手は組織が中心で、町の不特定多数の市民を相手にすることはなかった。

日曜日の朝、松尾優紀は森とUFOのこと思い出し、詩を書いてみた。

風景画【poem】

大空に伸びる大木の葉に、そよ風が吹き、ゆらゆら揺れる木の葉

私はベンチに座り、その緑の巨人を相手に無言の挨拶を送る

私と彼は友人だ。

じっと見つめていると、大慈悲心のきよらかな雲が湧き、

それが満月のように広がり、私と緑を包んでしまう

その時、世界は緑になる

愛になる、小鳥がさえずり、青空に包まれた森の一幅の風景画が出来上がる

空に鳥が叫び、花が舞う

平凡な空間の中に、神秘的宝が光る

いのちは鳥となり、花となり、昆虫となる。

風もいのち、永遠の昔から、いのちは海のように時に無のように遊び戯れていた。おほ、悲しみも苦しみも花となる時がある。

その時を待て、忍耐して待て

嵐の海もやさしさに満ちた水面になることがある

雪の街角も恋の季節になる時がある

そこはロンドンの地下鉄だった

「どこへ行くの」 見知らぬ白人の若者だった。

「公園の方に行くのさ。君はこの人？」

「カナダから来たのさ。君は日本だとしたら、道元を知っているかな」

「ああ、少しね。あれ、読んでいると、希望が湧いてくるね」

「そうさ。希望が湧くさ。パスカルの間観は悲惨だけど、禪はヒトを仏にしてみうんだからね」私の頭に「ヒトも含めたあらゆる物は仏性のいのちが現われたものである」が浮かんた。耳に聞こえる

嵐が吹こうが雷が鳴ろうが

仏性のいのちの部屋に入れば

慈悲の光は満ちあふれ

悲しみと苦しみは喜びとなり

対立は共生となり、敵意は愛になり

花が舞い、美しい音楽がせせらぎのように聞こえてくる

「ここで、降りるんじゃないの」と青年は言った。

外はやわらかな陽射しのあたる春のロンドンだった。

ああ、そんなことがあったな。あそこで、仏性の話でもしていれば、素晴らしい

国際交流が出来たのにね。

真理とは仏性のことだ。

不死の愛のいのちだ。

全てがこのいのちで繋がれている。

一元論が正しい。

ヒトなどの生き物は、この一元論の世界から徐々に二元論に入る

主観が客観を見詰め、自我の前に、多くの森羅万象が現われる

仏性がクオリアを感じさせる物質として、つまり現象として現われる

自我を無にした時に見えてくる仏性とは

真理である無限の一なる生命、それは法身、空。

それは不死の宇宙生命であり、神仏とも仏とも無位の真人とも言われる

空（くう）と人の関係は、宇宙が自己実現しているということだろうか。
過度の生存競争はこの原理に反する
共生こそ、正しい。仏性は一個の明珠なのだから。
自由なる共生

空海から異生羂羊心のイメージ
むき出しの欲望に囚われた果実
魂を磨き、

慈悲に目覚め、仏性に目覚め

人は共生をめざす宇宙の壮大な働き

そうやって人は花の道を歩き出す

3

松尾優紀は長いこと自分が吟遊詩人となって、長い旅の夢を見ていたことを思い出した。これに似た夢は前にも見たことがある。おそらく、アリサの作った映像詩を何回も見たいだろう。

どこの家からか、吹く横笛の音が、夜の闇の中で聞こえてくる

家や樹木をなでるように、さわやかな音色は消えていき、再びそよ風にのって わが故郷、尾野絵市の街角に響き渡るこの横笛の音を聞くと

仏性を直感したいという恋慕の情が起きるのだろうか。

恋の炎のような激しいアリサへの慕情は思春期の病気のようなもので、今はたんとしていると、松尾自身は思っているが、心の奥底に恋の火山が眠っているのに、それに表面上は気がつかない振りをしているようでもある。なにしろ、あの人は堀川という弁護士の元に嫁いでいる。

彼女には随分とお世話になった。彼女の父の禅の寺にも、もう四年ほど通っているで、住職の言葉は彼の心にしみこんでいる。

尾野絵市の隣にあるアリサの住んでいる奈尾市は、確かに、外見的な華やかさはない。しかし、そこは季節ごとに咲く花のある庭園を持つ公園があり、地下水は豊富で、町のあちこちに澄んだ水が噴き出している。その水は飲むことが出来るのだ。自然の丘陵や林がまだ残っていた。郊外には清流が流れている。松尾はアリサの寺での講義や座禅の修行をしているうちに、平和を訴えるためには自分の価値観を深め、

そこから、経済成長よりも福祉、そして気象温暖化を阻止し、核兵器廃止も訴えていく方が効果的だと思うようになった。

核兵器をなくす。壮大な夢だ。そんなことは実現できるのか、そうあざける人はいる。しかし、それをやらなければ、いつか、人類は滅びる。温暖化も同じだ。今、やらねばと思う。

あいかわらず、松尾は座禅をする。寺だけでなく、自分の家でもする。

その日は、柔らかい秋の日差しが平和産業の中にまで、照らしている。時々、開けられた窓から、メジロの鳴き声が聞こえる。キュキュ、ピーチュルル。

会社の小綺麗でシンプルな応接室である。部屋の隅のガラスケースには、いくつかの仏像や様々の調度品が飾られている。赤い絨毯の上に深々としたソファがある。そこで松尾優紀は部長と対面している。近くのルームから若い女の笑い声が静かに響いてきた。

平和産業は山岡市の斜面にあり、窓からは、青く透き通った清流が見える。清流には小舟がゆるやかに流れている。小舟には旗を振る青年が歓呼の声を上げる。

「自然は生きているぞ」と。

そう言えば、遠い昔、暗い道をとぼとぼ歩いていたことがある。満月の光が周囲の樹木や花を照らしている。彼は師の島村アリスのことで、悩んでいたのだが、この美しい満月を見た時、はっとするものが心の中にひらめいたのだ。

暗い道を重い気持ちで歩いていたのに、満月の光はこの世ならぬ美を四方八方にまきちらして、彼の心まで希望と愛の光で満たしたのではないか。

しかし、今は宇宙人が町に会社を貶めるような噂を流している。そして、嫌がらせが平和産業のスタッフに押し寄せてくる。

この間の夜なんか、エアコンは既に使わなくなっている、換気のために窓を開けると、いつの間に窓の近くまで、例の銀色のドローンが宙に停止したような状態になって、奇妙な沈黙を守っている。彼が不思議に思って、凝視していると、ドローンは去った。空には天の川が美しく輝いていた。あの美しい天の川から、彼らはやってきたのかもしれないと思うと、松尾は不思議な気持ちになった。

ルミカム工業という大手の会社から独立した平和産業にいる松尾優紀の耳にも親会社のことは耳に入ってくる。ロボット、電気製品、最近ではエネルギーにも熱心に取り組んでいると聞いたが、マグネシウムのことを聞いた時は驚いた。

マグネシウムは海に1800兆トンあるといわれているが、その化合物にレーザーを照射して、金属マグネシウムを一瞬で精錬できる。そのマグネシウムと酸素を反応させればエネルギーが得られる理論をルミカム工業では研究と開発を進めていると聞く。これも、宇宙人は快く思っていないようで、人類が明るい展望を築こうとすることを、邪魔したいのだろうか。彼の平和産業の仕事にこの宇宙人対策というのの一つ、加わったわけだ。

使用済み燃料はレーザーを使って、再び金属マグネシウムを取り出せるという循環社会。コストダウン

も実現されたこの夢のような素晴らしい話も宇宙人にはねたみの種なのだろうか。

部長が急な用事があると言って、その場を立ち去った時に、お茶を持ってきた、新入女子社員がいた。中野静子だ。窓から風のざわめき、秋の緑の梢のゆらぎが聞こえる。松尾優紀は静子を見た。中野静子とは高校のビデオサークルで知り合い、一年後に自分が広島に旅立った時に、見送りにきた女の子だった。彼女は星の深さを感じさせる瞳を持っているが、どこか悲しげだった。そしてそれは森の深さを持った真珠のような瞳だとも、松尾は思うのだった。

今は大学の四年生ぐらいになっていると、思っていたが、今、目の前にいる不思議さ思った。彼が平和産業の仕事に夢中になっていて、彼女のことを忘れていたのだろうか、アリサとの共同の仕事に没頭していたせいだろうか、彼は思った。彼は突然に目の前に姿を現した静子のみずみずしい清潔さに驚いた。

「お久しぶりですね」

「ええ、こちらの会社に就職しました」

「で、大学は卒業されたのですか」

「ええ、父の経営する会社が倒産したので、急ぎよ、こちらに就職したのです」

窓から、風のざわめき、カラスの鳴き声が聞こえる。空には雲一つない青空が綺麗だ。お茶を飲みながら、静子の清楚な姿に懐かしさを感じながらも、彼は考えていた。宇宙人の変な噂から、会社を守るために、平和の使者を町の広場に送り出そうという計画だ。部長との先ほどの会話で、了承してくれた。松尾は親入社員や入社二・三年の自分より若い社員を集めることにした。

前から、考えていた平和を訴えるための基礎哲学を彼らに注入して、彼らの意見も聞き。町に送りだそうと考えて、案を練っていた。

その朝、ニュースでルミカム工業の若い社員が過労自殺したということを知った。友人に電話をかけ、少し内容を深めている内に、自殺した青年の顔を思い出した。端正な顔つきの秀才肌の白い顔だった。ユニカム工業は平和産業の親会社であるが、労働は平和産業よりもはるかに厳しいとは聞いていた。

彼はその日、喋ることは決まっていたけれど、この過労自殺の知らせにかなり頭の中が乱されるのを感じていた。

こげ茶色の板ばりの会議室には、十人ほどの若いスタッフが集まっていた。松尾は黒板の前に立ち、喋り始めた。

「宇宙人の噂は知っているよね。今度、町に平和の使者を出すことにした。宇宙人の話が本当だとしても、彼らも我々と同じ生命体ということだ。それならば、生命の共通の土台を知り、平和の深い意味を彼らに伝えねばならぬ。」

「なるほど、壮大なテーマだ」と哲也が言った。

「人生とは何か。人生は意味があるのか。我々は何故生まれ、かくも心は寂しいのか。ここに人生の秘密がある。何故なら世界は一つ。全世界は一個の明珠と言ったのは道元であるが、現実には人間理性という素晴らしい道具で観察すると、我々はばらばらになっているように見える。理性は科学には役立っても、自己を知るにはめくらになる。」

彼はそう喋り始めたが、何故か心の中に空しい風が通りすぎるのを感じていた。

窓の外では、風が吹いている。時々、梢の音が聞こえる。

「今日は風が強いようだね、これは、まるで自然の呼吸のようだ」
会議室の椅子に座っている中野静子は松尾と目を合わせると、小声で、歌うように言った。「風よ。風よ。目に見えないが、自然のいのちの呼吸が感じられる」

松尾は微笑した。「ほう、詩人がいるようだね。それはいい。そこで今日は、お釈迦様が死ぬ時に、弟子が「死んでは困る」というようなことを言ったら、お釈迦様は「自灯明」「法灯明」と言われたという。最初のは、自分を灯とせよだね。言葉の意味は分かりますよね。」

浅黒い四角い顔の哲夫は微笑して、隣に座っている細面の青白い顔の秀和に顔を向けた。

「変わったテーマだね」と哲夫がつぶやく。「いのちとは何かということなのだろうが、平和産業とどういう関係があるのかね。」

「関係があると思う人間もいるということだ。」と秀和が言った。

「それはね。親からもらったDNAの中の遺伝子とは違う九十八パーセントのガラクタと言われた非コードが話題になっているけど、体質・性格を決めているのは遺伝子のごく一部だ。人間はみんな、その所が微妙に違うからね」と言った秀和の顔には得意そうな微笑が浮かんでいた。

「確かに。お前なんか、細い腕をしているわりにはタフだが、俺は筋肉は強いけど、少なくとも、お前より体質はもうい」

「なるほどね」と松尾優紀はぱっと顔を明るくして言った。「そういう答え方もあるかな。皆、DNAが微妙に違うから、顔も違う、体質もちがう。性格も違う。そうだ、体質が違うのだ。秀和の言う通りだよ」
松尾は「自灯明」の話を続ける気持ちだったが、この体質の違いのことが、労働の中で無視され、根性論だけが幅を利かす社会のムードが労働時間を長くしているのだと、頭の中にひらめいた。

それでも、口は「自灯明」とか禅で言う「真の自己」をまず、最初に明らかにする必要がある」と言っている。

「真の自己」そんな呑気なことを言うよりは今朝のニュースのことを考察すれば労働時間のことが一番、問題なんだということでしょう」と秀和は言いながら、自分の顔を撫でまわした。

「自分が分からねば、他つまりロボットも宇宙人も分からん。自分が分かれば遠くまで見ることが出来る。世界の経済がごくひとにぎりの大金持ちにより背後で動かされていることだって見えるようになる。自分が分かれば、AIが聡明な人の目を離れると、大きな経済格差社会をつくることも分かる。

今のように経済成長を続けていくと、地球温暖化はさらに進み、人類は破滅の方向に進む。それでも、戦争があればもうかる連中がいる。温暖化が進んだって、もうかる業界があれば、ほくそえむ連中はいるのだ。多くの人が苦しんでも、知らんぷりする。そういう連中は本当の自己を知らないからだ。」

「なんとかして、自灯明の話にもっていききたいということらしい。なにしろ、彼は係長に出世したからな。」

「おいおい、やっかんでののかい」

松尾はそんな話が聞こえても、聞こえない振りをして話し続ける。

「本当の自己を知ることにより、宇宙人に核兵器廃止の正当性を訴えてる根拠を教える。彼らと争うの

でなく、友人になるためだ」

皆さんのご意見もうかがいたい。はい、その二番目の方。お釈迦様の言葉『自灯明』についてどう思いますか？」

丸顔の美恵は全体に控えめな感じだった。

「あたしは自分のこと、少し悩ましい存在だって思っていますわ。だって、人間は沢山の細胞で出来ているでしょう。それがあたしの場合、想像すると、悲しくなりますの。だって、あたしの中身って沢山のコードが複雑にからみあっているだけですもの。」

「そうですか」と松尾は言い、さらに話し続けた。

松尾は最初、その女性を指名した時、彼女がAIロボットであることに気がついた。ロボットは彼にしても、菩薩ロボットが懐かしい友人のようなもので、平和宣伝で活躍してくれたけれど、AIロボットアンドロイドは三年分進化している。最近はお親会社から頼まれ、平和産業でもロボットのデザインを担当するようになっていた。

ブロンド色の髪の毛に黒い瞳のAIロボット紀美子が丸い目に微笑を浮かべ、小鳥のような声で、言った。「あたし？ 自灯明。自己とは何か。随分難しい質問ですねえ。DNAの話とは違うとすると、私は単純に答えるわ」

彼女の灰色の作業着の左胸に、黄色の猫の形をしたブローチがあって、彼女は手でしきりになでていた。（多くのスタンプがくすくす笑う。）

AIロボット紀美子は手をブローチから髪の方へ持って行き、「あたしも美恵さんの言うように、細胞でつくられていますけれど、あたしは明るくてちょっと美人で、とても自分が恵まれていると思います。私は過労死しません。エネルギーがつかえたら、充電すれば良いのですから、そのルミカム工業の方、気の毒ですよ。あたし会ったことがありますわ。あの方、風力発電などの自然エネルギーに夢中でしたわ」太陽エネルギー・風力・地熱こうした自然エネルギーこそ大切にしなければならぬということの情熱を自殺した人から強い印象を紀美子は受けたようだ。それで、彼女に意識はないのだろうかと思ひ、松尾は奇妙な気がした。

彼は笑った。「そうですか。それはどうも。素晴らしいご返事をいただいて」

松尾は驚いていた。ルミカム工業のロボット製作の技術は世界一と聞いてはいたが、彼は驚きのためいきをついた。ロボット菩薩も良かったけれど、さらにアンドロイドとして進化している。

（多くのスタンプがわあっと歓声をあげる。）

松尾は嬉しそうな表情をしている。「それで、今朝のニュースで知った過労自殺するとはやはり、体質が弱かったのだろうか。外見はがっちりしていたのに。体質は外見だけでは分からん。結果として、労働時間に問題があったわけだ」

哲夫は微笑して、隣に座っている秀和に言った。

「あの会社は親会社だけど、内とはまるで違つとよ」

秀和は微笑した。「うちは、平和を世界に売り込むわけだから。向こうは一流の生産会社よ」

松尾は悠然と周囲を見回した。

「人の一生は長いようで短い。いつ死ぬか分からないのだ。海の中の波のようなもの、水の泡のようなものです。つまり、無の深淵の中で生まれては消え、そしてまた、生まれるという創造作用が行なわれているようなもの」

松尾はこんな風に言うつもりはなかったが、あの若くして自殺した男の顔が目の前にちらついて奇妙な風に喋ったと、自分でも思った。

背のすらりとした瑠璃子は言った。「あら、じゃ、あたし達人間も泡のようなものということですよ、松尾係長」

松尾は微笑した。「ええ、まあ、そういうことになりますかな」

AIロボット紀美子は明るい声で言った。「この美しい乙女が泡ですって。何という悲劇。人生ってやっぱり悲劇ですね。」

（スタッフ達が笑う。）

人間の瑠璃子の話を受けて、気のきいた会話ができる。これはアンドロイドというよりはもう人間ではないか。松尾はそんな思いに囚われた。

しかし、彼らに意識はあるのだろうか。そういう疑問が再び浮かんだが、彼はその点については口をつぐんだ。

AIロボット紀美子は笑った。「難しいわ」

松尾はこのアンドロイドは教えがいがあると思った。

「本当の自分のことを禅では、無位の真人といい、心の中の無とも虚空とも言い、鏡に例えても良いのですが、肉体を映し、悩み多いこの自分をつくり、森羅万象が現象するのです。この点で、人間も宇宙人も同じ。この原理が分かれば、人は悪を嫌い、善をなすようになる。宇宙人も同じ。我々は同じ価値観に立って、握手することができると。ここまで分かるかな。哲夫君。いかがです？」

哲夫は真剣な表情になって言った。「はい。なんとなく分かります。要するに私という人間の本質は虚空であり、それはまるで神様のようなものであるということでしょう？ でも、これってどこかで聞いたような話だな、確かに、人も宇宙人も同じ。宇宙人を悪と決めつけるのはまずいな」

窓から少し強い風が吹き、会社の庭の向こうからショパンに似た音楽が鳴る。

松尾は彼が最近購入したヘッドホンを思い出しながら、言った。

「私は価値観というものを、宇宙人と人間の両方の側にとって大切なものと思っています。価値観に共通のものを見出せば、我々は握手が出来る。人類の平和だって、そうです。我々は皆、同じ生命体で、大自然からのちをもらっているのですから。過労死は体質を無視した労働時間の長さにあるのではないかと、思います。労働時間をもっと少なくする必要があるのでないか。労働者を自殺に追いやるような過労労働は悪です。そんなことも宇宙人と話してみたいですね。」

その晩、松尾優紀は次のような詩を書いた。

不死のいのち

全てのものが不死の愛のいのちの現われなら
今まで、それに気が付かなかったことに驚くのだ。

どんな美しい里山の風景も

どんな美しい街角も

時の去るにつれ、視野から消え去っていく

人生は寂しい夢ということになる

しかし、全ての物が不死の愛のいのちの現われなら

美しい里山の風景も美しい街角も

月夜もすがすがしい太陽の陽ざしも

無常の不死のいのちの今ある姿

我らヒトも、無位の真人、不死の愛のいのちではないか

名前をどう呼んだら良いのだろうか

仏性と呼ぼうか、如来とよぼうか、神と呼ぼうか、仏と呼ぼうか

それとも、形なきいのち、真如と呼ぼうか、大自然とよぼうか

名で争うのは愚か、名をつけるのは自由だが、真実は概念ではない。

無の深淵と永遠のいのちを包み込む

あなたの慈悲と愛の心を感じれば

この悲しみに満ちた娑婆世界も喜びとなる

苦も修行となる

あなたを見る目を大きくしてくれるではないか

お釈迦様の自灯明を思い出そう

あなたの慈悲と愛の心

そして無限に美しいこの自然が広がるのを知るではないか

ブロッコリーやニンジンを食べた味

チョコレートやアーモンドをかんだ味

コーヒーや紅茶を飲んだ味

それぞれ違うように、

あなたの崇高な姿は時によって変身する

綺麗な衣服を着ることもあり、汚い服を着ることもある。

そして驚くことに、あなたが心の中におられるとは。

今、はっきりと見える光のある道筋が

そして、世界を見れば

経済格差、温暖化、核兵器

むだな事に大金を使わないことだ。

核兵器が世界からなくなれば

莫大な金が福祉に回せる

不死の愛のいのちが見失われ、欲望を刺激し、競争が激しい世の中は
いずれ人類の危機という形で、我々を襲う不安がある

天の川に見える街角の花

きらきら光る星の光をあびて、コーヒーを飲む

そこで、聞いたあなたの声

そこで見たあなたの瞳

そしてあなたの優雅な喋り方

天の川に見える森の中

せせらぎの音も小鳥の声も星という宝石の中に溶けていく

4

次の日の価値観ルームには、黒板の前にある机に花瓶があり、赤い薔薇の花がいけられていた。椅子に座っている中野静子がいけたのだろうと、松尾は思った。この日はAIロボットがいない。

松尾は静子を見ると、不思議なことに、何かはっとするものを感じるのでした。真珠のような瞳というイメージだけでなく、そのイメージに関連して、昔の思春期の頃の色々なことが思い出されるのでした。ただ、その日は若い頃の師である島村アリサにまつわる様々な出来事が絵巻物のように、広がるだけで、何かに焦点化することなく、前の日の続きを喋り始めたのでした。

「ルミカーム工業の社員の過労自殺に新しい情報が入りましたね。遺書によると、彼は宇宙人のことをユ―チューブに連載していたようですね。彼によると、宇宙人は人類には理解できない特殊な宗教を持っていたようです。」

そのことに触れたことが原因かよく分かりませんが、SNSによる中傷と集団ストーカーに悩まされていたようです。集団ストーカーは動物をコントロールして使うとか考えられないことをやっていたので、彼の過労による幻覚説もあるとか。あの町には野良猫や野良犬やタヌキが出ますから、彼が家を出ると、

かみついてくるというのです。なにしろ、遺書にはそう書いてあったそうです。彼は若者らしい体力がありましたから、怪我はしませんでした。これが宇宙人によるコントロールだということです。お母さんによると、元々あった過重労働で疲労がたまっている時に、こうした奇妙なストーリーカーに悩まされ、自殺したということです。

宇宙人は我々の平和活動を邪魔しようとしている噂もあります。こうした話が本当にあるとすれば、我々は彼らを説得しなければなりません。彼らは特殊な宗教を持って、自分達を善人と言っているが、愛がないということになります。

どんな立派そうに見える宗教も愛と大慈悲心がなければそれは本物ではありません」

松尾は静子が目で微笑するのを見た。

「それから、宇宙人の科学を見ると、邪悪なことにも使われているようにも思える。人類の科学も良いことにばかりに使われれば良いが、核兵器などのマイナス面のことを考察すると、科学の恩恵にあずかれないで、社会の流れに取り残されてしまう人の問題も出てきますよね。今でも、格差というのはあるけど、それが大きく目立つように、富裕エリートと普通の人と貧乏でどん底の人という風に物凄い格差社会が生まれてしまう可能性が生まれて、その過程で人を蹴落とすような愛のない社会になってしまう危険があります。

だからこそ、価値観が大切なんです。人は禅の立場で言えば、生きてるだけで奇跡なんです。生きているだけで、尊いのです。」

テーブルの真ん中には大きな花瓶があり、そこに薔薇の花が咲いている。

松尾は哲夫の質問に返事をしようと思った時、ふと薔薇に目を向けて、その美しさから、会社の前に咲いている大きな百合の花を思い浮かべ、そしてある言葉を思い出した。野の百合の花の美しさはソロモン王の栄華よりまさっているというような言葉だが、天啓のように、このキリストの言葉が浮かんだのだ。同時に、アリスの父が道元とキリストの話をしてくれた、その話を思い出した。キリストは悟りを得た禅僧か天才的な禅僧のようだというような話だった。その話は、松尾にとって印象的であり、ある教会の教えによれば、神と聖霊とキリストは三位一体というのだから、キリスト一人だけを取り出せば、十分そういう風に言えると考えるようになった。

今、目の前の百合の花は蛍光灯の光の下で小さな宮殿のように、すくっと天の方に向いている。百合の花は水と光で生きて、これだけの美しさに輝いている。

「AIロボットと共に働くことにより、働く人は短時間労働で、今まで通りの給料をもらえるわけで、そこにはむしろ働く喜びが今まで以上に出てくるわけです。長時間労働を無くせるというわけです。つまり、働きたいだけ、働き、あとはAIロボットがやってくれるのです。そのために、普通の人はむしろ真の労働者になれるんですよ。必要なだけ働く、あるいは働きたいだけ、働き、あとは、AIロボットがやってくれるのですから。そのために、我々はAIを発達させているのです。暇が出来れば、文化が生まれるのですよ」

松尾は自分の息に神経を集中した、彼が重要なことを言わなければと思った時の癖である。

「人間は生きているだけで、尊いという禅の立場、人は座禅をしている時は何もする必要がない。人はいたいの場合、あれをやらねば、これを目標にして頑張ろうと生きているのが普通。所が本当に大切なことは、息を吸うこと、吐くこと、歩くことつまり価値観が大切なさ。労働も大切さ。禅では、掃除、料理が座禅と同じように、重要な修行と位置づけられている。現代社会は不必要な過度の競争が激しくそのために人々は無理を強いられている。忙しいから、人間関係もとげとげしくなっている。これは戦争の芽になりますよ。」

こうしたことは、みな松尾はアリサの寺で学んだことだと彼は思っていた。

たとえ、A Iロボットが実務能力的に人間よりまさるような時代が来たとしても、普通の人間は呼吸をしている。森羅万象を感じている。苦しみ、悲しみ、喜び、感動を味わうことが出来る。これが人間とA Iロボットとの決定的な違いだと、松尾は思っていた。

「そうすると、悲しむこと、苦しむことも、人間らしさの一つというわけですね」と静子が言った。松尾は自分の思っていることを言われて、はっとして驚きの目で静子を見た。

「その通り。社会全体としては、A Iロボットが活躍してくれるから、一人当たりの労働時間を減らすことができる。つまり雇用を増やせる。

そうすれば、社会全体としても、雇用問題が改善される。雇用問題がいい方向にいけば、格差問題もいい方向にいくことが期待される。経済格差が少なくなれば、人間の苦や悲しみも軽減されると思うけど」

数日して、平和産業の価値観ルームで、松尾優紀は澄んだ静子の瞳にはっとしました。

目の前の静子は何か寂しげで、かつてのアリサの底抜けの明るさがありません。それは、表情で分かります。

そして静子は不思議な詩を朗読しました。彼女は本を持ってないので、即興詩を創作し、朗読しているように思えるのです。

【音楽の中に街角がある。瑠璃色の宝石のように厚いガラスの中に明るい光線が、しみとおっていくように音楽があたりの世界を支配し、焚火の煙のようにゆらゆらとたなびく幻想的な霧の中に突然、水晶の塔のある町の広場が出現する。その神秘さ。

それは砂漠にみえる蜃気楼のようでもあり、又、南極に見られるオーロラのように美しくもあり、不思議な自然の美しさを見せてくれる。】

「どうです。」と静子は目を輝かした。

「不思議な詩ですね。それで終わりですか」

【音楽が脳細胞を刺激し、突然、目の前に瑠璃色の広場の姿が幻のように現われる。

その哀切の響きは、この町の崩壊を暗示するかのようにその美しい音楽性はどこか破壊的で、静かで、無力で町の虚無主義を暴露する

人々は何をして、働き、遊び、生きているのか、生きていることの意味を忘れ、

人と人との真のつながりを忘れ、感動を忘れ、享乐的に生きている姿。消費税なんて、決める連中は庶民の生活を考えていない。食品に税をかけるというセンスが分からない。と同じように、核兵器をつくるのも、意味がない。意味がないことに莫大な金をかけるのは愚かなことだ】

松尾は彼女の詩を聞いて、自分の書いた詩句の一部を思い出した。

「核均衡論は主張する。

同じくらしいの核兵器を持てば、怖くて戦争できない。

はたしてそうか。

理性が万能ならばありうる。

歴史を見ると、理性は感情に動かされ、戦争が起きるのは証明済みだ。」

そして、さらに思った。世界にある核の軍拡が続けていくならば、核戦争は偶発戦争という形でいづれ起きる不安は充分にある。ならば、正しい道は平和産業の主張する全世界の核の廃止です。それが出来れば、莫大な金を福祉に回すことができると、当然のことを言っているわけだと、彼は思った。

「その通り」と松尾は微笑した。彼女も微笑した。

「君、私の音楽よ、音楽こそこの町の瑠璃色の菩薩の響かす喜びの鐘の音色だ。その時、人は。永遠の生命を思い出し。そこが人の故郷なのだということを思い起こすだろう」

松尾は笑った。そして、松尾は島村アリサのことを再び思い出した。彼女は堀川と結婚している。堀川は奈尾市の弁護士と活動している。彼女の住んでいる奈尾市と尾野絵市は隣同士の町である。

瑠璃色の大地に立ったアリサが、瑠璃色の空の下で美しい歌を歌っていたことを松尾は夢のように思い浮かべることがある。静子はアリサに似ているように思われたのは彼の錯覚と思われるが、彼の心は激しく揺さぶられ、あやうく涙をおとす所だった。

窓から、風のざわめき、鳥の鳴き声が聞こえる。

平和産業の会社の近くのコーヒー店。窓の外に広いスペースがあって、そこにいくつもの椅子が並べられているので、秋の陽射しを浴びながら、コーヒーを楽しむことが出来る。前は、車の通れない道になっていて、その向こうに洋品店やコンビニがあり、行きかう人の姿を見るだけである。

（夕日が窓のステンド・グラスに当たっている。

その時、円盤型のUFOが向こうの空からやってきて、彼らの前でとまった。不思議なことに、その周囲は小鳥がにぎやかにさえずり始めたのである。いつの間にか向こうの林から可愛らしい小鳥が来たのかもしれない。

「ところで、あの小鳥の鳴き声は。シジュウカラ、なのかな」

「いいえ。キビタキよ。」

キビタキと言えば、スズメくらいの大きさで、腹の方がオレンジ色で、可愛い小鳥だったのを若い頃何度か見たせいか、改めてここは自分の故郷、尾野絵の自然につながる場所なんだという感慨があったので、ふむと松尾は言った。

「平和産業は」とドローンが言った。「我々の將軍の言うことを聞くべきだ。そんなビジネスはやめろ。」背後からドローンの数倍の銀色の円盤が宙に浮き、階段をおろし、人がおりてきた。背丈は百六十センチぐらいだ。目は丸く、銀色で瞳がない。肌は薄緑色だ。それ以外は人類と殆ど同じと言って良い。瞳はないが、丸い目の中に金色に光るものがある。そこに、松尾は知性を感じたが、ルミカム工業の技術で、このようなAIロボットをつくり、宇宙人だと言えば、宇宙人と、人類のつくったAIロボットの区別は簡単でなくなる。彼の頭にそんなことがひらめいた。本当に宇宙人だろうかという疑問である。

「我々は善人である。地球人の魂は欲望に汚染され、汚れているのではないか。滅びるのが必然だ。我々は善人だから、戦争などする気はない。地球人が自滅するのを待っているのだ。それとも、我々のように、善人になり、友人となる気があるのかね」

「一人の將軍の功名心のために、何万という白骨が積まれたのが、戦争の歴史だ。」と松尾は言った。

「功名心、我々にそんなものはない。」とその緑色のヒトは言った。

「我々が思うのは、この美しい地球を使うのは我々のような善人にあるのか、それとも欲望にまみれて、争ってばかりいる地球人にあるのかということだ。この美しい地球が滅びることに手を貸すことに、熱心なヒトにはその資格はない。少なくとも、今の所はそう見える。」

平和産業は温暖化を阻止し、核兵器を亡くすと言っているが、今だに、世界はそちらに動くどころか、反対につまり悪い方に向いている。

君達のやっていることは、ただのイベントに過ぎない。それで、金をかせいでいるのだから、我々の様な善人ではないと見る。どうかな。それとも、我々と手を組むかな」

そう言った途端に、薄緑色のヒトは円盤に戻り、音もなく円盤も去ってしまった。

「手を組む。どういう意味だ。人間の地球への愛は深いのだ。今は平和の時代。星が輝き、満月の照る夜、愛の歌が響く。このような美しい歌を歌う人がこの地上にいただけで、この大地の素晴らしさが分かるではないか。」

耳には、ヴィオロンの音色。ああ、もしかしたら、ここは浄土であるのかもしれないと思うこともある。こんな美しい所が我々の生きるそばにある。ここならば、永住できそうだ。戦争なんてものが娑婆世界にあるのは確かに邪悪なものがあるからだ。平和で戦争と災害さえなければ。そして、魂が宝石か花束のような美しさになっていれば、実現できる浄土。

小鳥の声、せせらぎの音、そよかせの緑の梢を揺らす音。我々人類こそ、この地球を守り、子孫に美しい地球を引き継がないとね。地球を横取りしようとする連中こそ、邪悪ではないかと、松尾優紀は思うのだった。

5

5

この町への平和の使者を派遣する準備の作業を進めている間に、松尾優紀はアリサ夫人から、会わないかと声をかけられた。アリサの父の寺の修行で、時々会っていただけに、改めて外でというのは珍しかった。映像詩の制作作業でも色々アドバイスをもたらした。それだけに、密会めいた会い方に何か普段とは違うことで話したいことがあるに違いないという感じを持った。

山岡市の駅前ビルの喫茶室で松尾はアリサと会った。尾野絵市は松尾の育った町でもあるし、奈尾市はアリサの住んでいる所である。近接したその二つを避けて、原発を持つZスカルーラのあるこの場所が会う場所選ばれたのはやはり意味があることなのだろうか、松尾優紀は考えた

松尾とアリサ夫人の話題はいつも映像詩と文学と禅の話だった。平和への映像詩は平和産業の一部であり、仕事であり、アリサの一番関心を持つ分野でもある。

アリサは色々な方面から、松尾を指導・応援してくれた。それに答える形で、彼は小遣いの多くを本代に使い、その知識を彼女の前で披露することもあった。

「全く、温暖化と核兵器の脅威は現代文明の癌細胞ですな。放っておけば、どんどん増殖するばかり。温暖化の歯止め、反核運動や反公害運動はもっと盛り上がってもらいたいものです。」

彼女が微笑すると、勇気づけられたような心理になり、彼は次のように言うのだった。

「秩序ある物質は、無秩序なものに必ず変化していくというわけです。その中で生命というのは秩序をつくる。この働きの中で生命は汚物を、機械は廃棄物を、原発は放射性廃棄物を、文明は消耗したエネルギーを、それぞれ周囲に吐き出していくという処理をやっているわけです。この処理を無視すると今日のような公害問題が顕在化してくるというわけです。」

原発は放射性廃棄物が問題になるわけです。」

良い映像詩もつくられ、ユーチューブに載せられ、かなりの人が見にくるようになった。それでも、こういう考えに反対する勢力や無関心派も根強いと思われた。温暖化阻止とか、核兵器廃棄の話は話がありに巨大なので、これを世界に広げるには平和産業の力を借りても、まだまだ力量不足だった。

この日は松尾は宇宙人の話をしたいと思っていたが、アリサがそういう話を信用しないだろうと思っていた。

だからこそ、工夫して喋らねばならないと考えていた。

二人とも詩を書いたが、その頃、松尾優紀はヴェニスが温暖化で水浸しになることをモデルにした町をテーマとして、小説を書いていて、その話をアリサに話していた。結局、その物語は完成することなく、松尾が社会に出てからは、忙しさの合間を縫って、少しずつ書いていた。そのためか、堀川の妻になったアリサに会うと、自然に自分の書いたヴェニスの詩句を思い出すのだった。

温暖化の悲劇がヴェニスの町を襲うという

水没しそうなヴェニスの町

水がからからになったヴェニス

どちらも、冬に起きるという

ああ、思い出のヴェニスはゴンドラが行きかい

古いビルの窓には真紅の花が飾られ

運河の水と青空は歴史ある迷宮のシンボル

ゴンドラは生活の足でも、楽しさはピアノソナタの音色のようだ

夢がある。希望がある。

町ではエネルギー問題があるようだけれど、

それでも昔ながらの今の生活

人々は中世のような服を着て

夏はビールを飲み

普段はコーヒーを飲む

どこにでもある生活だが、楽園に来たように何か楽しい

ゆったりした動きがあるからだ

スピードではない、自然を楽しむ歴史の建物があるからだ

ああ、ヴェニスよ、幾千の詩人が

ここを訪れ、真に生きる人達を見たことか

満月が照らす運河とビルはさながら美の蜃気楼

一切は色即是空、空即是色

この物語を作っている最中にも、ヴェニスには行きたいと思っていた。冬の名物、高潮で町が水浸しになる所があるという話は聞いていた。それでも、観光客が少ないということで、冬に行こうかとも思ったことがある。ところが、温暖化のせいで、冬の名物というよりは災害というレベルにまで、水が町中に浸透し、歩くのに長靴が必要ということになっているらしいと聞いて驚いた。

今までのアリサとの映像詩の共同作業の点からいっても、話題は似たようなものになるだろうと、予想していた。

それから、ここでアリサに会った時、思いがけない姿が彼の心に浮かぶのだった。高校時代の中野静子だ。会社では、静子を見るたびに、島村アリサ夫人を思い出すのが、この日はアリサに会って静子の顔が幻のように、思い浮かぶ。何故だろうか。分からぬままに、アリサの夫である弁護士堀川光信を思い出すのだった。結婚しているのだから、堀川アリサ夫人と呼ぶべきなのだが、優紀の心の中にそれに反発する心が動き、心の中では、旧姓の島村を使っていた。

そしてふとしたことから、静子とアリサが又いところであり、遠い親戚関係にあったことを知り、何かうなづくものを松尾は感ずるのだった。

最初に彼女の口から出たのは、夫の堀川善介が原子力発電所の件で伊方浜に二度目の出張に出ているということだ。

奈尾市に地下水汚染の問題があり、さらにはルミカーム工業を誘致するという問題があるのに、伊方浜に行くのは原発に何か問題が起きているということをキャッチしたからだろう。その原発の噂の真偽を確認するのは、堀川自身の脱原発の心情からも確認したいことで、工場誘致を断るためにも、奈尾市の誘致派を説得する上でも必要なことだと考えての出張だったのだろう。

ルミカーム工業は平和産業の親会社であり、松尾にとっては彼を引き立ててくれた船岡工場長が今は重役となっている会社である。

ただ、会社の上層部では、色々な葛藤があるということは耳にしていた。

その日の彼女は紫のスーツを着込み、胸に赤い花模様の入ったスカーフをしめて入ってきた。そして満面に微笑を浮かべ挨拶をした。

しばらく気候のことや近況の様子などについてとりとめのない話が続いた。

その中で、中野静子の話には花が開いたという趣があった。

「ええ、それにしても、あなたと中野静子さんが又いとは驚きました」

「そう、遠い親戚ですから、普段は会ったことはありません。彼女のお父さまが会社を發展させている頃、あたしは父に連れられて彼女のお父さまにお会いしたことがあります。静子さんはまだ小さく子供でしたね。」

彼女はヴァイオリンを練習していましたよ。中々上手なので、驚きました。

その時の中野静子の印象を話し、その後の父親の会社の倒産劇は厳しく、そのことが大学を中退し、今は平和産業に通っているいきさつだと話した。

今まで笑いで包まれていたアリサは急に顔を引き締めて話題をがらりと変えた。

「隣の山岡市にあるZスカルーラの地下水汚染が奈尾市の井戸まできているっていう話、知っています？」とアリサ夫人は言った。

Zスカルーラというのは　ルミカーム工業と並ぶこのあたり一帯の大手の会社である。

「はい、ちらりと聞きました」

「重傷患者が何人か出てしましましてね。堀川がZスカルーラ原発がある伊方浜に調査に行ったことはご存知でしょうか」

「ええ、それもちらりと聞いています。調査に行きましたか。それは大変ですね」

「弁護士として、原発稼働に直接抗議する運動に意欲的なんです。あの原発はあちらの県にありますから、ただの弁護士の方が動きやすいということで、奈尾市長選の誘いを断ったいきさつがあるのです。でも、隣の山岡市のIT工場から出たトリクロエチレンによる地下水汚染が私どもの町、奈尾市にまで侵入してきたことを驚いたと言い、いずれ、地下水汚染対策に取り組まねばならないとも言っておりますわ。同時に脱原発運動に大きくかかわりたい、これは急ぐ話だということです」

「堀川さんは優れた弁護士さんですね。地下水汚染も原発も日本にとって重要な課題ですからね」

松尾優紀はアリサ夫人の目をまっすぐに見た。思えば、この夫人には思春期の頃から、好意を持っていた。初恋だと思っていた。

松尾優紀は宇宙人の話を持ち出すのに、以前から書いていたウネチア物語というSF的発想法で書かれた小説の概略を彼女に言ったことを思い出した。内容も彼女にほめられたこともある。平和産業の近くに宇宙人が現われた話をストレートに出しても、彼女は肯定しないという直感があった。そこで、このウネチア物語を出すことで、現実に行き起きている宇宙人の深刻な話をしてみようと考えていた。

今は平和産業の仕事が忙しいので、途中で放りっぱなしにしてあるが、時たま原稿を見ることがある。アイデアが浮かぶと、原稿の横に赤のボールペンで書いておく。

「ウネチア物語を書いていると、最近おきた宇宙人のことが真実味を帯びてきます」

「宇宙人」とアリサは目を丸くした。

松尾はそう言って、注意深く、彼女の反応をみまもった。彼女は一瞬、目を大きくみひらいて、その静ひつな瞳に一種の驚きの表情を浮かべた。それが彼には妙におかしかった。

6

「宇宙人のこと、少し耳にしていますのよ。でも、あたし、ああいうの、あんまり信じていませんの。それで、自然とそういう話も私の耳に届かなくなっておりますのよ。何かあったのですか」

彼はここで宇宙人と出会ったショックな出来事を話そうという気持ちもあったのだけれど、彼自身にもあればAIロボットではないかという疑いの心がある。そういう迷いの心の中で、口は先ほど話す準備をしていたウネチア物語に触れるような形で、話を進めていた。平和産業では、この宇宙人対策のために、平和の使者を町に送る準備をしていることを話すのも、何故か躊躇する気持ちがあるのは松尾自身にも不可解だった。

「ええ、そのことを話す前に、ウネチア物語の続きを話しましょうよ」と彼はちょっと笑って言った。彼女も微笑した。

「今のヴェニスが温暖化問題で、悩んでいることはご存じですよね」

「ええ、聞いてはいますけど、それほど詳しいわけではありません。温暖化は地球の所をかまわず襲うのですよ。日本では、豪雨などにも見られますし、ヴェニスは世界の宝石のような町ですから、世の中の人の注目を集めるのでしょう」

「そうですね」

「ウネチア物語は面白くなるという予感がありますの。あの物語はどんな構想で話を進めていたのですか？」話題は、心の隅に置いてあった所に、再び戻ってきた。彼女がこの話を好むのは二人の最初の接触が文学とその映像化にあったからだと思っただけで松尾は思った。

彼女の書いた物語とその映像化は何度も鑑賞している。

「ウネチア物語というのは、確かにウネチアという架空の星Mのある面白そうな町を舞台にしている、それは地球にあったイタリアのヴェネチア共和国に似ている話なんですが。」

最初の方は以前お話ししたと思いますが、覚えておられますか」

「ええ、確か、楽園のような星RVに住む学者の話という形で始まったと記憶しています」

「そうそう、地球とそれによく似た惑星Mとの比較歴史を専攻している学者です」

「だいたい覚えておりますわ」

「記憶力、抜群ですな」

彼女は微笑した。

「どこまで話しましたっけ？」

「じゃ、あたしの記憶していることを話しますね」

「ええ、お願いします」

「この学者さんは確か、地球人類の歴史を勉強しているんですけど、いつの頃からか惑星Mにも興味を持つようになった。理由はMに地球のベネチア共和国によく似たウネチア共和国を発見したことがあるんですね。このウネチアが大変 面白い。そうでしたよね」

「ええ、まあ、そうです」

松尾優紀はアリサ夫人が自分の話をよく覚えていてくれたのがうれしかった。

「それでこのウネチアの中身は温暖化問題を扱っている。今のヴェニスもそうですよね。高潮で、既に冬には水があふれていた。それが、今は、町の中を歩くのに、腰まで水がくることもある。」

「その通りです」

「そしてこの学者が住んでいる星RVというのは未来のエネルギーとして話題になっているマグネシウム社会なんです」

海水から水と塩を除けば、マグネシウムになり、石油の十万年分のエネルギーがあり、リチウムの七倍というキャッチフレーズを松尾は思い出していた。早くから、こういう素晴らしいものに目をつけていれば、原発なんかつくらなくても済んだのだと思うこともあった。

「ああ、マグネシウムって、エネルギーになるのですってね」

「え、まあ、僕の話は未来の良い所を先取りしているので、一応、構想としてはそういう素晴らしい科学によって楽園となっている所と舞台を設定したのです。星RVに住む学者が欲望の渦巻いたM星のウネチア共和国で、複雑な人間模様が渦巻いていることに興味を持つという風に話を進めているのです」

「そのあたりまでお話したということですね」

「ええ、そうです」

「ええ、そうです。この最初の詩の場面はあなたの映像詩からお借りしてみました。

これは仮の物語ですから、あなたからアイデアからお借りした最初の所は完成したら、削ります。よろしいですよね」

「あら、別に削らなくてもいいですよ。ヒントに使っただけでしょうから、いいんですよ。それよりも、どんな風に展開するのかが方が興味がありますわ」

「面白いと思っていただけると、ありがたいのですが。その昔、どこかの惑星Mのヴェニスに似たような町のある所、オオカミが進化したような人類が栄え、そして滅びた物語を書いたのです。詩の所だけご紹介しましょう。」

(poem)

なにゆえに ころろは 乱れ迷い 君を思う

銀河 霧深き天空の波さわぐ所

名も知れぬ巨木の幹の黒の黒き肌に

いくつもの緑の葉が糸のように天に伸びている

しなやかな枝の伸びゆく空間のあたりにすみれ色の音がして

銀河の天空もオオカミ族の亡霊に満ち、狂えり

折しも かなたの星々の野原の上は

珈琲のおう不思議なオオカミ族の跡

名も知れぬ巨木の年輪の刻まれた太い幹に

りこうそうなりス一匹悲しき笛を持って立つ

珈琲から立ち上る白き蒸気はゆらゆらと幻となりて

そこに昔の雄々しき君ありし

春のさわやかな風が吹いているというのに、何故悪があるのか

我々は不死のいのちの海にいるのだ

山も森も川も不死のいのちの現われと聖人が言われたではないか

なのに、何故、悪があるのだろうか

花の色を見、小鳥のさえずりを聞きながら、森羅万象が真理であることを忘れ、宴会で騒ぎ立て、恐怖の武器を発達させていたオオカミ族よ、仏性そのものを見るのは自我を無にする修行が必要なのだ

虹が真実であり、幻のような夢も真実であるように、現実世界も幻のようなものでありながら、真実であり、みな不死の愛のいのちの現われだ。そのことを忘れたオオカミ族は悲しい

座禅をする。只管打座だ。あるいは瞑想。

身体と光と空気と風景は一体になる。法身の世界だ。

それすらせず、科学の繁栄した豊かさにおごり、その天の罰なのか、それは厳しかった

身体内部はこくこくに変化しているけれども、

その見事で精緻な細胞は見事なからみあいの中で新陳代謝をおこない、生きている。

それ故にこそ、座禅の中で呼吸がいのちのシンボルとなる

そのことを忘れたオオカミ族は悲しい

銀河の天空もオオカミ族の亡霊に満ち

折しも、かなたの星々の野原の上は

珈琲の匂う不思議なオオカミ族の墓

ああ、栄光の日は過ぎ去り

幻影の亡霊となりて

あでやかに浮かび立つ悪の舞台

何ゆえにわが心かくも乱れ君を悲しむ

松尾優紀は物語を喋りながら、島村アリサとゴンドラに乗って、旅する様子を空想していた。春の息吹が横溢するゴンドラの上。彼女は愛に満ちた瞳を彼の方に向けながら、やさしい春の光がヴェニス運河の水を黄金色に縁どる中で、使命を持った伝道者のように、ヴェニスの風景の描写とその感想を織り交ぜながら、真理の到来とユートピアを築こうとする熱情にあふれているようだった。仏性。空、神仏を知れば、人は自然と良いことをしたい、経済格差社会をなくしたい、人類の危機を救いたいという気持ちになるようだ。彼女は言う。核兵器を地球からなくし、同時に世界の軍縮を進めることが当然と思うようになる。そうしたアリサの断片的な言葉だけが、空想の中の美しい詩のように、彼の耳に入ってきた。彼女は首から胸にある赤い花模様の入ったスカーフを整えると、花のような微笑をして、松尾の詩を聞き終わると言った。

「あら、詩がふんだんにあるのね。叙事詩ですね。映像詩にする予定なんですね」

「ええ、そうなんです。オオカミ族が繁栄したこの惑星Mで原発に事故が起きて、それが原因で、ある女性の父親が自殺する。ただ、この会社は原発だけでなく、車もパソコンも作っている総合会社なんです。地球では、こういうのはありませんけど、それだけに、この惑星Mの唯一の巨大な会社なので、傘下に色々な部品会社がある。その下にも影響力を行使できる商店もある。そのために、会社が国家のようになっているんです。他にも色々な大きな会社はあるけれども、この会社にはかなわないから、この会社が手をつけてない食品とか、家具とか服とか靴とか別のものでビジネスしているのです。この父親が追い詰められたのは、内部告発することにより、国家のような巨大チェーン店のようなになったこの巨大会社から、にらまれるとどういことがおきるかということですね。まず、この父親の顔の写真がこの会社の従業員に配られ、正確に覚えられますよ。

これ自体、本人の同意のない管理が目的なのでしょうから、ファシズムの前兆を感じさせるものではないかと思うか。

この星Mの原発の事故では、死者は出なかったが、十人ぐらいの重傷者が出たし、その人達の寿命が短くされたことが

確かなのに、この巨大会社は世間に隠したのです。それは、許せないことなんだ。そんな事故が外部にもれないなんてことは、ありえないことなんです。

金が動いたんですね。内部告発したその男性はその巨大会社の社員であって、この事故は世間に知らせるべきだと、直言した。それで退職金を多く支払われはされたけれど、辞職に追い込まれることになり、そのあと、男性はこれをモデルにして、ノンフィクション風の小説を書いて、本屋にも出したし、色々

な所に配った。しばらくして、この会社の息のかかった所にいくところでも、嫌がらせと中傷に悩ませられたというらしい。社長は奇妙きてれつな宗教にこっているという噂のある人物である」

『なんだか、伊方浜市の原発に、その物語に似たようなことが起きて、堀川はその調査に美川に行ったように思えますわ。』

「堀川さんとは、最近連絡とることが少ないんですけど、事故が起きて、それを隠すという心理はけっこう普遍的ですから、創作する人が空想で書いたことと現実がよく似ているということはよくあることですよ。そうですか。僕もZスカルーラの噂は聞いていますが、原発事故のことは、聞いていませんでした。何しろ大きな会社ですし、内部のことは外から分かりにくいのですが、うすうす何かを感じていて、小説に似たようなことを書いたのだと思います」

松尾優紀は自分のウネチア物語を話していく内に、アリサと自分は伊方浜の原発に堀川が行ったのは星Mと似たようなことがこの日本にも起きていた可能性があるという共感に達したのは不思議なことであると思った。その共感に導くものが二人の心に何か愛に似た小川のようなものがせせらぎの音となって響いていたからかもしれぬという直感が働いているようにも思われた。

二人の関係は松尾の思春期の頃の激しい恋とは違った人間愛に近いもので、それは彼が島村アリサの禅寺へ一週間に一度、土曜日の夜に行っていたことから来るのかもしれない。

船岡工場長の息子の家庭教師は既に、工場長から「忙しいだろう」という言葉があり、辞めていた。その代わりの時間を使い、アリサの所に行き、座禅をし、道元の本も読むようになっていた。

その頃、大山道長が禅寺に顔を見せた。松尾が以前に通い、中退した高校の保護者会長をやったことのある男だ。自分の発明した電気自動車で世界遍歴の夢を持っていたが、平和な時代が来ないと無理と思い、その間、困った人達に手を差し伸べる尾野絵ユートピアNPOを作って活動していた。

以前はニヒリズム同盟と称していたが、名前が良くないという評判はこの禅寺のアリサから出ているというのを知って、改名したようだ。

松尾のやっている平和産業というのに、興味を持ったせいもあるだろう。誘われたわけでもないのに、大山は松尾の通っているアリサの禅寺にも興味を持ち、時々顔を出すようになった。

確かに、大山の中にも島村アリサの夫堀川と同じ脱原発と自然エネルギーマグネシウム社会それに、水素社会というユートピア志向はある。しかし、大山と親しい専門家によれば、そういうユートピアは直ぐには無理で、原発の安全性は高度の技術に守られていると、大山は聞いているらしく、そのようにつぶやく。Zスカルーラは超一流会社だ。嘘は言うまい。優れた技術者も沢山いる。そう信じることを男の度量と考えているふしが、大山にはあったようだ。

しかし、その寛容さが大山の主催する尾野絵ユートピアNPOをあやうくすると堀川弁護士は思っていた。松尾優紀もこの堀川の感じ方に同意していた。脱原発と自然エネルギーマグネシウム社会の方に舵

を切るべきなのだというのが二人の意見だった。事故が起きなければ、専門家の意見が正しいと思っているのが大山だ。専門家だって、色々いる。例えば、水俣病の問題の解決が長かったのも、その専門家の意見が割れていて、現場の医師と住民の感覚が大枠として正しかった。この科学時代にもどちらの意見を取るのかは、素人市民の力量が問われている。

堀川にしてみれば、尾野絵ユートピアNPOに失望したということらしい。大山に助言する専門家は秘かに、原発派と通じていたという噂がある。何故、それほど、原発にこだわるのか。原発派の一部に、プルトニウムを確保しておけば、いつでも核武装できると思って、原発に積極的になると堀川は推察していたふしがある。

日本の右寄りの人達のある層にもそういう層がいることは、松尾も知っていた。フランスだって、核武装もしているし、原発も稼働させている。

しかし、松尾も堀川もその点に関して言えば、日本は世界一地震国であること、安全保障に関して言えば、日本がそのようなことをすれば、中国を始めとして、警戒度が高まり、軍拡が始まり、この東アジアで戦争

が始まると、何か偶発的なことで、核のボタンが押される危険性が高まると心配することでは、お互いに共感していた。

大山は、松尾よりも政治には敏感の堀川の高い倫理観に対して、困ったということだろう。

引きこもり、高齢者、ホームレスと弱い者を助ける尾野絵ユートピアNPOもエネルギー問題では、堀川と意見がかなり違うようだ。

その後も堀川は脱原発をして、自然エネルギーの活用、出来れば、地熱発電所をさらに多くして、出来ればマグネシウム社会をも実現する、それが出来れば、原発もいらないし、

核武装なんて、物騒なことは、控えることができる、そういう欲望を抑えることは、軍縮の始まりだという点で、松尾優紀は共感していた。

梅の花が咲き始める頃、宇宙人の話がまた、広まった。平和産業では、町に平和の使者として、アンドロイドロボットや会社のスタッフを町に出してそれなりに、効果を感じていた頃だった。

「核兵器を全ての国から、なくそう。そうすれば、莫大な金が浮く。それを福祉にまわそう。」と言うアンドロイドロボット紀美子が薔薇の花が咲き乱れる町中に出た。

松尾も田島も出た。ロボット菩薩は、この時は修理、改善で、本社に戻されていた。

中野静子はヴァイオリンを弾いた。中々の名手である。

黒髪は長く、白みがかった薄茶の肌色の顔に殆ど目を軽くつむったような両目は赤みがかった唇と似た形であり、詩人として夢のようなイメージを吐露する時の激した時とは正反対の優美さが感じられた。市民の皆さん、目を覚まして下さいという祈りに似た静寂さが彼女の身体全体にみなぎり、けがれない美しさに松尾優紀は今までとは違うものをヴァイオリンを弾く彼女の姿に発見した。

そこは町の中心にあり、広場になっていた。西側に商店街のアーケード、東に古い寺院がある。南には

幼稚園と小型のビル、北にはレストランや蕎麦屋などの飲食店やカフェが並んでいた。そうした東西南北の建物の前には花壇があり、カフェの前だけはテーブルや椅子が並び、何人かの人達が座っていた。広場の真ん中に彫刻と一本の噴水から噴出される水が空中へのびていた。

彫刻の前に、中野静子はヴァイオリンを持っていた。あと、二人とアンドロイドはその横にやはり立っていた。

そこに、いきなり舞い降りてきたかのように、例の銀色のドローンが空中を滑走路のようにして、とまった。アンドロイド瑠璃子が言った。

「あたし達はあなたが変な噂するから、ここに派遣されたのよ。何で私達のことを邪魔するのよ」

「邪魔」それがドローンが発した言葉だった。

「我々は宇宙の善人だ。君たちのような邪悪な心を持ち、美しい地球を破壊している連中とは違うのだ。平和産業も口では、平和というが、今までに何が出来た」

結局、温暖化も核兵器も事態は悪い方向に進むばかりではないか。

君達が核兵器をなくそうと、叫んでも、政治家が動かなければ逆に増えるばかりではないか。

君達のやっていることは、気休めであり、事態は深刻化するばかりだ。

無駄なことはやめろ。自然にまかせるということだ」

「人間が誠実に努力する時、いつか実を結ぶものです」

「君はロボットではないか。ロボットは結局人間の奴隷だな」

「そんなことはない。我々は人間の良心をもらって仕事をしているです。人間の歴史には仏陀、キリストのような真実を悟った人が出ている。

日本では、道元、空海、最澄、法然、親鸞。日蓮、白隠、良寛のような宇宙の真実を発見した人も現れています。

君達は善人と言うが、真実を発見したのですか」

松尾は叫んだ。

「世界を見れば、人類の中に偉大な人は沢山 でて、この何億という人類が争いのない格差のない科学の進んだ豊かで愛に満ちた社会をつくるように呼びかけてきたし、今もそういう素晴らしい方が人類の中にはいらしゃるのだ。それに、我々は希望を抱いている、平和作業はその先頭にたって、行動しようと、努力しているだけです」

銀色のドローンは町の空中を滑走路のようにして、とまっている。市民の多くは広場のはじにある花壇の方に退き、驚きの表情でドローンと平和産業の人達のやり方を見守っていた。

「真実。何だ。それは。我々は具体的に大地を美しくする人を尊敬する善人だ。我々の惑星のヒトは皆、善人だから特別にうやまう人などいない。

自分が善人であれば、良いではないか」というドローンからの声があった。

「ふむ。本当に善人なのか」

「お前達が地球に何をしてきたというのだ。絶滅危惧種の問題もある。あの強い虎ですら、かつて十萬頭もいたのに、もう三千頭しかないというではないか。次々と生き物が滅びようとしているではないか。南極の水が溶け、温暖化は進み、核兵器は長崎と広島に落とされた。そして軍拡が進んでいる。このまま行けば、やがて近い将来、人類が滅びる危機に直面することを知るべきだ。」

周囲にいた人達は彼らの会話を驚きの表情で聞いていた。

中に、背の高い中年の男が立ち、「そうだ。平和産業は無駄なことをやっている。

核兵器をなくせだ。それ以上に現実の世界を見ろ。中国や北朝鮮を見ろ。

日本は傍観して、滅びるのを待っているというのか。平和産業のようなエネルギーがあるなら、ミサイルでも作った方がいいのではないか」

もう一人の小柄な若い男は 鋭い調子で激しく言った。

「それは間違っている。ミサイルを作って、何をしようというのか。相手の基地を攻撃しても、全てを破壊できるならば、理屈は通る。しかし、相手が地下や海に隠していたミサイルで反撃してきた場合、それを全て撃ち落とせるのか。不可能だろうな。これは全面戦争になり、日本の都市や原発がやられるだろう。

第一、このドローンは宇宙人かどうか怪しいな。誰かのいたずらではないか。核兵器をなくそうという涙ぐましい訴えをつぶそうという勢力はあるものだ。

そいつらの派遣したドローンだろう。」

その途端に、銀色のドローンは「あばよ」と言って、去った。

こちらがミサイルをつくれれば、向こうもさらに強力な武器をとということで、軍拡競争が始まり、この理屈も結局、全面戦争につながると松尾は思った。

群衆は集まって、あちこちでささやくように、時には議論している風景がみられた。このドローンについて、あれこれ先ほどの男達のような意見が交換されていたのだろう。中野静子が再びヴァイオリンを弾いた。胸の中にしみていくような慈悲と希望はあるという祈りの弦の響きは市民の顔に喜びを引き起こしたかのように、彼らの目は静かに釘付けになった。

われるような拍手だった。

AIロボット紀美子は静子の横に立っていた。

「その方は人間なのでしょね。最近では人間に似たアンドロイドがいますから」と、中肉中背の初老の男が言った。

「あたしのこと？」と紀美子は言った。「あたしはアンドロイドロボットですよ」

「え、素晴らしいですね」と初老の男は目を丸くした。ちよっとした沈黙の時間が流れた。

「核兵器が全世界から、なくなれば、莫大な金が浮くし、その金を福祉にまわせば、今のような経済格差はなくなる。さらに人類は月世界、火星へと、良い未来を築けるではありませんか」と、松尾はこの広場で言わねばならない大切なことを言うつもりで言った。

口ひげと顎ひげのある中年のがっちりした男はロボットの方に関心があるようだった。

「そのアンドロイドさんと人間の違いはどんな所にあるのかね。トイレに行かないとか、疲れないとかあるよね」

そうすると、普段は無口な田島がたどたどしく話すのだった。「そのアンドロイドは同じものをつくれるということでしょう。」

人間は一人いれば、みんな微笑も違う。人間は細い弱そうな人でも、タフだったり、外見は筋肉隆々とした人でも、ひどく繊細な人がいたり、一人いれば一人の体質の違いがある。悲しみや苦しみや喜びも人それぞれだ。そして性格と外見の違いを入れると、恐ろしく複雑な人間集団が生まれるのです。そこへ行くと、アンドロイドロボットはいくら優秀でも、似たようなものしかつukれない。だからこそ、アンドロイドには人まねの芸術は出来ても、人間のような独創的な芸術は出来ない。人間こそ、真の芸術をつくる事が出来る」

背の高い松尾は緊張したせいか、すこし赤みがかった顔付きで、情熱をこめて語るのだった。

「それから、人間は無位の真人になれる。ロボットはどうかな。そう、座禅をしてね、本当の自分が分かれば、全世界は一個の明珠を知る。そうすれば、社会が皆にとっていい方向に進める、一時的にマイナスになる人には生活保障をすねね。」

正弘がつぶやく。「座禅して、本当の自分に目覚めるという意味が分からない？」

松尾は素早く答えた「そう、あせっては、そういうこともありうる。まず、あせらず、ただ座る、そして呼吸に気持ちを集中する。座禅は本物の自己を知るチャンスさ。仏性について、いくら喋ってもイメージだけだよね。やはり君達の心の中に、本物の美しいのちはある、ということだろうね。臨済録で言

われている「無位の真人」に気がつく必要があるということだろう。それには、頭の中のお喋りをしずめることだと思う」

ブルーのコートを着た五十代の叔母さんが言った。「そんな呑気なことを言っていると、宇宙人にやられてしまうわよ。平和産業は宇宙人の敵にされてしまうわ」

「宇宙人」と、松尾は言って、驚いたように、その市民を見た。

それから、松尾優紀は薔薇の方に、一瞬、視線を向けてからゆっくりした調子で言った。

「そう、脱原発も、核兵器を全ての国から廃止することも重要。そこに、世界の市民が目覚めることが、今、大切なのでは」

「何しろマグネシウムは海水にあるからね。マグネシウムと水素おまけに、水資源も確保できるのじゃないかしら。マグネシウムや水素は燃料として可能な状態にすれば、脱原発の象徴になる可能性があるのではないかな。」と田島が言った。

哲夫はAIロボット紀美子のそばに立っていた。「で、どうして、この話は広がらないのかな」

松尾優紀が言った。「これは、なかなか、難しい問題がからんでくるからじゃないかな。社会の構造がマグネシウム社会を受け入れる状態になっているかだよ。例えば、水素は水から、とれるから、簡単なようでも、あれを自動車のエネルギーにしようとしたら、日本のあちこちに水素のインフラをつくらなきゃ駄目でしょう。」

美恵が口を出した。「政府の援助が必要ということでしょう。」

松尾は頷いた。「そういうこと」

ロボット紀美子は無表情で言った。「政府の人も本当の自分に目覚めることが必要なのよね。」

ふと気がつくと、広場のはじにある一本の梅の木にいたメジロが鳴いていた。

松尾はスズメより小さく緑の羽を持ち、黒い目のまわりが白いメジロが好きだった。そのメジロが力強くさえずっているのを聞いて、何か勇気が湧くのがあった。

松尾優紀は自宅に帰ると、ウネチア物語の続きを書き始めていた。

オオカミ族の叙事詩のような詩の中にも出ていたように、オオカミ族が減じた原因は武器の異常な発達であるが、その前に原発の事故があったということが想定されている。

松尾の後の回想によれば、これを書いていたのは1996年頃で、まだ福島事故は経験していなかった。彼の頭の中にあっただのはスリーマイル島の事故やチェルノブイリである。ウネチア物語の核心の所はイタリアのヴェニスのあるので、いざ行ってみたいという気持ちはあっても、それは今は無理。空想で書くしかない。

書き始めた時には、イタリアのヴェニスに行ったことがないのに、行った時のヴェニスの町の様子を頭に描いた。こういうことは彼は得意である。サンマルコ広場は広く美しいし、その周囲には寺院や美術館の建築の芸術品が集まっている。

そしてゴンドラに乗り、古い建物と建物の間の路地のように入り組んだ水路を行くと、向こうに湖のような海があって、対岸に壮麗な由緒ありそうな古典美を誇る建物が見える。

そして、ゴンドラが町の中を滑るように行く時のそよ風の心地よさも想像した。歴史的にも由緒ある古い建物も、この水の中に浮かぶと、不思議と生き物のように思えるのだった。

そんな妄想に浸っていた土曜日の朝、電話がかかってきた。

「はい。どなたかな？」

松尾の耳の奥の方に中野静子のかすれた声が響いた。

「松尾さん？」と言う静子の声を聞くと、耳に彼女の弾くヴァイオリンの弦の響きが宇宙からの声のように、聞こえたのは不思議だった。

「ええ」

松尾は静子からの電話に戸惑いを感じながらも、ある種の喜びと緊張に包まれていた。

「もしもし、松尾優紀ですが」

「ああ、松尾さん。大変なことが起きましたのよ。御存知ですか」

松尾はその時、地震のことを言っているのかなと思った。彼の住んでいるマンションは地震に強いというところがセールポイントで、住んでいたわけだから、この朝の程度の地震なら、大丈夫と思い、時計を見ると、まだ夜明け前の五時頃だったこともあり、また寝てしまった。なにしろ、昨夜は創作で夜の一時まで、頑張ってしまったので、朝のその時刻では地震より、眠さの方が勝ってしまったようだ。

「伊方浜の原子力発電所で大事故が起きましたのよ」

「本当ですか？」 松尾は思いがけないことを言われてびっくりした。

「そんなに大きな地震でしたか」

「津波がなかったのは不幸中の幸いでしたけど。」

こちらは震度五弱で済みましたが、現地は震度六強ですから大変です」

「原発の事故は？」

「ニュースによるとかなりの規模ですわ。そして伊方浜地域周辺の住民八百所帯に避難命令が出たとか報道しておりますわ」

「なんともいいようがありませんが、震度六強となると、その程度には大丈夫なようには設計されている筈なんだと思いますが」

「そうなんですか」

「死者は出ているのですか」

「原発の敷地の中にいた人が何人か死んだみたいです。ニュースではその程度しか報道されていません」

「堀川さんのことが気になりますね」

「ええ、アリサさんのことも心配です」

「ともかく、次のニュースを聞いて状況把握をしてみます」

「はい、それでは又」

「さようなら」

電話は切れた。彼は応接間の方に回って、テレビのスイッチを押した。

それがまた、事故にまつわるものとしては、奇妙な目撃談を生むことになったようだ。原発に、火がのぼった後に、円盤のようなものが宙に浮かんでいたというのである。ただ、これを目撃したのは 爆発がおきて、放射能が外にまきちらされていた時だった。それに、朝早いということで、三人の証言があるのみだった。

三人の円盤目撃情報も報道されたが、確かな事実としてでなく、最初の報道では言わなかったようだ。原発の上空に円盤のようなものが宙に浮いていたというのである。

電話での中野静子の話を思い出すと、原子力発電所の方に調査に行っている堀川弁護士のことが脳裏に浮かんだ。

ニュースの後にも、臨時の番組が組まれ、伊方浜の原発事故の様子をやっていた。

地震によって、誘発されたような事故のようで、チェルノブイリやスリーマイル島を思い出させるような人為的ミスも重なったような事故のように報道されていた。

チェルノブイリもスリーマイル島の事故も大自然の驚異、地震と津波などなく、機器の故障と人為的ミスが主な原因で、その後、学者によって深く研究・学習され、日本では怖いのは地震と津波だけとなっていたが、地震に慣れっこの日本ではそれすらも恐れるに足らぬ技術力を誇っていたのはやはり傲慢のそしりを受けざるを得なかったのか、やはり想定外の恐ろしいことが起こるものだ。

原発の事故で、放射能がばらまかれるとなると、松尾優紀はどうしても広島島の原爆による十万の死を思い出してしまふのだ。

アインシュタインは自分がE=MC²という偉大な式を発見したことが、人類の脅かす核兵器を生み出すことになることに反対した。そんなことを思い出すと、松尾は悲しみと鬱の状態になるのだった。それでも、道元のいう仏性を思い出して、人間は仏性に足場を置く限り、良い方向に舵をきる、良い方向に目を向ける。人類は釈迦によって、一度仏性という靈性に目覚めたではないか。

この困難を乗り越えられない筈があるのかと思うのだった。

9

松尾優紀はソファーに座り、テレビの前に釘づけになった。原発事故の状況は中野静子から電話で聞いた印象より悪かった。

ただ、不思議なことに、震度六強で、こんな事故がおきる筈がないように設計されているはずだ。大きな津波もおきていない、それに、その事故の直後に、銀色の円盤が原発の屋根の方から、宙に行き、去ったことを目撃した者が三人もいたのだ。

原発の敷地にいた二十五名ほどの人間が爆発と放射能で確実に死んだようだ。そして放射能の漏れによる汚染が伊方浜市一帯で心配される状況にあり、伊方浜

の周辺にあたる広い地域にも時間と共に悪い影響が及ぼされる恐れが出てきているようだった。

死者の名は十二時のニュースになって明らかにされた。堀川善介という名前を見付けた時、松尾優紀はある衝撃を受けた。

原発敷地内にいた堀川氏が死んだという思いは松尾にめまいを引き起こした。めまいが直ると、目に涙が浮かんだ。原発事故で死んだことが一層 悲劇の主人公であるという感じを深くした。原発の職員の自殺の原因などを解明するために伊方浜の原発に足を運んでいた堀川が哀れであった。松尾の頭の中で堀川の姿があるイメージとなって浮かんだ。丁度、キャンプファイアーのようにたきぎが空高く積まれてそのたきぎの上に堀川の死体が置かれている。そして石油が浴びせられ、聖火台に火がともされるかのようにたきぎに火がつき、そしてそれは恐ろしい火炎に変わる。魔王のように激しくダンスする姿の火の舌。その舌に嘗められ、溶け、そして気体に変わっていく堀川の肉体。そして突如、号音と同時に、火炎に包まれたたきぎは崩れ、その中から放射能の渦が吐き出される。

松尾優紀は昼食を取ると、堀川邸に行った。堀川邸はごったがえしていた。多くの知人、縁者が集まり、一階にあるフロアーのテレビの前のソファーに座っていた。彼の知らない顔も沢山 混じっていた。尾野絵ユートピアノPOの大山道長が松尾の姿を見ると立ち上がって近づいてきた。大山は濃いサングラスをかけていて、松尾は何故か、そのサングラスが好みでなかった。

「これは宇宙人のしわざかもしれない。人間のミスあるいは事故のようにみせかけているが。」

と大山は言った。奇人という感じの大山の言うことだから、と思ってみたが、松尾の頭には二つの原発事故のことが頭に浮かんだ。スリーマイル島とチェルノブイリの原発事故だ。

この二つの事故のことが、まるで動画のように松尾の頭を横切った。

「大変なことが起きましたね」

松尾はそう言った。

「うん。奥さんがかなりショックを受けて閉じこもっている」
 大山はそう言った。

「どこに？」

「うん、中野静子さんと一緒に二階の部屋に閉じこもっている」

中野静子のイメージが鮮やかに、頭に浮かんだ。

松尾優紀は大山の指差した二階に通じる階段を見た。

「君なら大丈夫だろう。行ってみな」と大山は言った。

彼は階段を上がり、夫人の部屋をノックした。最初、中から声はしなかった。

「松尾優紀です」

彼はそう言ってノックした。

「はい」

夫人の声がした。

しばらくすると、ドアが開けられた。涙を流したせいであろうか、幾分 目頭を赤くして髪も乱れている。後ろに中野静子がいたのには目を見張った。

又いとこの話は知っていたが、これほどのコミニケーションの仲であることを知らなかった。

「どうぞ、お入り下さい」とアリサ夫人が言った。

その広い部屋は家族団欒の部屋という感じがした。

「この度は大変なことが起きて、お悔み申し上げます」

テーブルの前の椅子に堀川の父が厳肅な顔をして座り込んでいた。

松尾は堀川の父の前に立って、同じようなお悔みの言葉を言った。

「生死はみ仏の御いのちなりです。死は誰にも来るものですが、事故は人間のミスなのか、宇宙人の作業なのか分からなくなっている。この宇宙には今の科学では分からない未知の次元があって、そこから来た宇宙人かもしれない。もしかしたら、彼らの警告ということもありうる。」

松尾優紀は大山から言われた時は気にしなかったが、堀川の父まで言うので少々驚いた。宇宙人の噂はそこまで広がっているのか。

堀川の父は唇をかみしめて言った。目には涙が溢れていた。「原発の事故だなんて、もう日本もおしまいだな」

「本当に僕もどう考えて良いやら、頭が混乱していて」

「ええ、あたしも同じですわ」とアリサ夫人が言った。彼女はこの災難を乗り切るためか、緊張した雰囲気漂わせていた。「伊方浜に行くのは無理かしら？」

「原発の事故ですよ、放射能の汚染がひどい所に行ったら、あなたまでやられてしまうじゃないか。そ

ういうことを良く考えて、もう少し様子をみなさい」

堀川の父の語気は強かったせいか、細い目に赤みがかった頬が白髪の額縁に包まれたようだった。

「お父さんのおっしゃる通りだと思います。今、現地に行くのは危険でしょう。もう少し、様子を見るべきです」

松尾もそう言った。

「そう、やはり無理なのね。確かに、その通りだわ。相手は放射能ですものね。静子さん。ヴァイオリン持ってきてくださったわね。弾いて下さらない。」

「はい。何を」

「何でもいいのよ。あなたの好きな曲を」

静子は黒のスーツを着ていた。箱から、ヴァイオリンを出すと、それを胸にあて、弾きだした。悲しみの中に浄化された悲しみの音色が美しい音の波となって、松尾の耳にも入ってきた。その時、松尾が強く感じたのは、詩人としての自由闊達な彼女ではなく、静かな天界の人のような顔つきをする彼女の顔だった。

彼女のヴァイオリンを弾く姿を見るのはこの間の町の広場でのと、二度目だったことを思い出した。詩人としての彼女の顔には明るいものがあった、どこかに茶目っ気があり、まだ子供のような心をのぞかせて、可愛いという気持ちは持っても、アリサに対する初恋の火だねを胸の中にかかえている松尾にはそれ以上に進まなかった。それがヴァイオリンを弾きだすと、途端に芸術の世界に入り、静子の魂は数段 飛躍して天界へのぼってしまい、そこで松尾に問いかけているようにも思えた。彼は胸に熱いものを感じるのだった。アリサは静かに聞いていた。

松尾優紀はソ連のチェルノブイリの事故を思い出した。今だに、ヨーロッパ全域にわたって食品汚染の問題が深刻だと聞いている。今回の伊方浜の事故の規模はあんなに大きなものではないにしても、いずれ時間と共に風とともに、広島県一帯の空と大地を放射能で汚染することはありうることはなからうか。松尾は広島県の原爆資料館で見た原爆の様子を思い出した。これほどの悲劇に襲われた多くの人達のことを思うと同時に、「長崎の鐘」という映画も思い出した。研究室で、白血病にかかった医師が自分の寿命はあと三年だと妻に、告げて、病院に出勤したその日、原爆が落とされたのだ。医師は自分の深い傷にもかかわらず多くの人を助けた。家に帰ると、家はがれきの山となり、妻は骨となっていた。そのショックと深い悲しみの歌も思い出した。それで、松尾は胸が締め付けられるような思いがした。

尾野絵市や奈尾市に住む人達にとっても、すぐに人命に影響を受けることはないにしても、長い目で見ればガンの多発とかという形で健康破壊がすすむことは確実だろう。

もう遅い。彼はそう思った。

「奈尾市が住めなくなったら、おしまいだな」 堀川の父が小声でそう言った。

「住めなくなるということはないと思います。ただなんらかの放射能汚染に悩まされることになるかもしれません」

「このあたり一帯もいずれ子供には住めなくなる。子供が可哀想だ。子供のいる家は移住だな」
息子を失った悲しみに急に老人になったような堀川の父があきらめきったような口調でそう言った。

「はい、そうなる可能性はありますね。放射能は人間の細胞にあるDNAを傷つけますから。特に子供は」と松尾は言って、言葉に詰まった。

「こわいですね」 アリサがそう言った。

松尾はしばらくみんなの話を聞いていた。そして彼等を慰めたあと、階下のフロアーにおりて行った。大山の所に行こうと思ったが、大山は隣の紳士となにやら、真剣な表情で話をしている。どうしようかと思っ、佇みながらテレビの方を見ていると大山の声がした。

「松尾さん」

その時、柱にくくりつけられていた鳥かごにいるインコが「松尾さん」と言った。

松尾は緑の羽をしたインコの愛嬌のある顔を見て、微笑した、それから大山のまなざしを見た。その時、大山はサングラスをはずして、素顔を見せていた。口ひげをはやしているが、以前のいかつさは消え、意外と思われるほど童顔ぽい顔になっている。

大山は立ち上がって近付いてきた。

松尾は頷いて、大山のまなざしを見た。大山は耳元に囁くように言った。

「堀川君の兄さんが来ておられる」

そういう風に言われて、紳士を見ると、帽子をかぶったその紳士は堀川善介にどこか似ている。弟よりは太っているし、老けた感じがするが、目のあたりがそっくりだ。

「紹介する」

「はい」

二人はその紳士に近づいた。大山とのやりとりがあつたあと、紳士は立ちあがり、松尾に挨拶をして、名刺を差し出した。

松尾は挨拶をしたあと、その名刺を見た。

名刺には、大会社の営業部長の肩書きの横に堀川春介と書かれてあつた。

「弟さんとは、親しかつたので、こんなことになって大変なショックを受けました」

「死ぬことは運命としてあきらめますが、アリサが可哀そうですね。原因が原発の事故となりますとね、複雑な気持ちです」

松尾はアリサが気の毒だという兄の愛の言葉を聞いて、はっとした。

自分ははたしてこの兄ほど、アリサの気持ちを察していただろうか。

堀川の原因による死はショックであつたが、それ以上の深い悲しみに沈んでいる彼女の心を推察することとはしなかったのではないか、そういう自分が何故か不思議であつた。

「原発の悪を糾明しようとしていた堀川弁護士の志が無駄にならないように祈るばかりです」

三人はソファに座り、当面の情勢判断の意見交換と今後の対応の仕方について打ち合わせをした。話が途絶えると、テレビを見た。

あちこちのソファではひそひそ話をしたり、テレビを見ていたり、落ち着かないままにうろろしている者、まるで病院のロビーのような雰囲気だった。

夜になると、ロビーにいる人達の夕食を注文することが知らされたが、彼は夕食を家でとるということにして取り敢えず、自宅に戻った。

外は満月と降るような星の夜だった。満月と星だけは放射能の不安にもかかわらず、美しかった。自然はこのように美しいのに、人間はその自然を汚すことばかりやっているではないか。科学とはいったい何だと、松尾は思わざるを得なかった。

松尾優紀は夕食の最中にかかってきた島村アリサ夫人との電話でも、原発の事故の状況と善介の死が話題になった。

その後のテレビの報道はより詳しくなったが、伊方浜市の状況の深刻さは同じだった。

翌朝、ニュースで株の暴落が始まったことが告げられた。午前中テレビの前で過ごした彼は事態が原発の重大事故をきっかけにして株の暴落を予感させ、日本経済を揺さぶる可能性を感じ取った。

お釈迦様の発見された縁起の法は今の科学でも言われている。全ては関連しているのだと松尾優紀は思った。生態系の中でも、全てがつながっている。

虎のような美しく逞しい生物が危機にあるということは、人類の危機でもあるのだという認識が必要なのだ。

海や川そして森という日本の美しい自然をこわしていく鈍感さはやがてIC工場によるトリリクロロエチレンの地下水汚染や原発の重大事故につながる。そしてやがて日本経済の落下にもつながっていくのだと思った。もっと早い時期に手を打っておけばこんなことにならなかったのにと松尾優紀は考えた。

しかし、既に遅い。原発の事故による死者は発電所の内部にいた者に限られている。堀川はたまたま調査に行っていて亡くなった。

この放射能は徐々に松尾の住む尾野絵市にまで押し寄せてくる。いや、もう放射能によって汚染されているかもしれない。

松尾が座禅の修行に行った寺のある奈尾市は地下水も汚染され、空も汚され、いずれ大地も放射能によって汚されていくに違いない。もはや天界の町というキャッチフレーズは通用しないのだ。

ことに地下水のように目に見えない形で人間の命の元である水を汚されてしまうことに我々は鈍感になりやすい。しかし、そうなる前に既に車の排気ガスによって空気を汚され、騒音によって静寂を奪われ、事故によって時には生命を奪われるという風に目に見える形の公害も数多くあった。

悪夢

ある夜のこと、松尾優紀は悪夢を見た。松尾は何故か、改良型のロボット菩薩に変身していて、町を歩き、困った人はいないか探していた。

彼の前を塞ぐように地上の広場に円盤状の形をしたUFOが着陸していた。その周囲にテーブルと椅子を出し、十人ほどのあの丸い銀色に光る目をした宇宙人が酒でも飲んでいい気持ちになっているようだ。一人の宇宙人が松尾の前の立ち、「おい、松尾。原発事故が起きたぞ。」と金属的な声で言った。「お前たちがやったのだろう」と松尾が言った。「事故だよ。先ほど地震が起きたろ。それで、やられたのだ」と宇宙人は答えた。

松尾は町を見た。町は放射能にやられ、廃墟となっていた。色とりどりの薔薇だけが燃えるように美しく、町を取り囲んでいるのが異様に思えるほど、沢山の壊れたビルと荒れた人家の中は、人がいない。ゴーストタウンになってしまったのだ。よろよろと、歩く傷ついた人達がいる。川をめがけて歩いているようだ。

「これは、原発なのか。何か異様だ。人々が傷つき、水を求めて川の方に行く」

「ふん。事故の規模が大きかったので、町全体がやられてしまったのだ」と宇宙人が言う。

町のあちこちの建物が破壊され、中に死体が見えるではないか。

周囲は草ぼうぼうで、あちこちに大きなゴミや小さなゴミが無数に散らかっている。沢山のカラスだけが飛び立ち、カーカー鳴くのさえ、何か不気味である。壊れた自転車が真っ黒になり、道端に転がり、草の中にはテレビだの椅子だのがころがっている。病院らしい建物には屋根が吹っ飛び、窓ガラスはこんなになり、医療器具が散乱している。「これは。原発事故ではなく、原爆ではないのか」とロボット菩薩に変身した松尾は言う。

宇宙人は「いや、原発事故だ」と言う。

ある大きな鉄筋の建物の前にくると、その白い建物は殆ど傷がなく、少々赤茶けている。

「ほら、その建物が証明しているだろ、中には人はいないけどな」と宇宙人は原発事故だと言いはる。

工場にも人はいない。無人の市役所。放射能で枯れた水田、茶畑、黄色くなった広場には犬と猫の死体。水色に澄んでいた筈の川も黄色くにこり、道路のあちこちに死んだ人間が横たわっている。廃墟となった町は放射性廃棄物のたまり場になったのだろうか。

時々、よろよろと歩き回る男が「放射能だ。放射能にやられた」と叫ぶ。

松尾は声をかけた。「小父さん、逃げ遅れたのか。困ったな。大丈夫か。この地帯は放射能が地表から高さ一センチで、毎時十マイクロシーベルトなのだ。僕が安全な所まで案内するよ」と声をかける。

「安全な所など、ある筈がない。」と男は言う。

よれよれのブルーの汚れた背広を着た男は顔を真っ青にして、さらに言う。「ピカドンが落ちたのだ。ここは地獄になってしまった」

宇宙人が首を振り、遮るように言った。

「原子力発電所ではメルトダウンが起き、水素爆発が起き、この町はホットスポットになってしまった。セシウム137は三十年、ストロンチウム90が二十九年、そしてプルトニウム239は二万四千年たつて、ようやく放射線を出す能力が半分が減る。この間、市民は放射線を浴び、自分の細胞のDNAを傷つけ、ガンになるのです。セシウムは土壌を汚染しています。」

男が言った。「あれは原爆だ。放射線の凄さと言い、熱の凄さと言い、衝撃波の凄さといい、俺が今生きているのが奇跡のようだ」

髪も服装も乱れ、片方の傷だらけの乳房が丸出しになった女が言った。「原発だって、爆発すりゃ、広島原爆を無茶苦茶上回る放射性物質がまきちらされると聞くよ」

銀色の目をした宇宙人が言った。「失敗つづきで、一兆円もの損失を出している「もんじゅ」の様な高速増殖炉で再処理してプルトニウムを取り出す以外の使用済み核燃料は各原発の燃料貯蔵プールに一時的に保管されているが、大地震が来て激しい揺れが地層で生じれば、放射能はあちらこちらに放出される。ヒトの細胞は放射能に傷つけられ、様々な病気になり、苦しむのだ。」

菩薩ロボットになった松尾は言った。「この町の井戸も水道水も放射能にやられて、飲み水がない。食物もみんなやられてしまった。」

今に町は、熊や狼がやってきて、彼らの住処にしようと思うけれど、彼らも放射能の毒素に目をみはり、ロボットだけが悠々と歩く町になってしまう。この町は本来、神仏の聖地だった。空気も地下水も緑も無限に美しかった。

この町はやすらかさと、静けさと、美、優しさに包まれ、生命の喜びが小川のせせらぎのように響く所だったのだ。それが竜巻のように空に舞い上がった放射能は、この町を嵐の時の黒雲のように襲い、土砂降りのように降りかかった。人の目には見えなかったが、雨に猛毒がまじっていた。」

道端に転がったラジオから、「臨時ニュースを申し上げます。人間のDNAを傷つけ、細胞のガン化を進めるという放射性廃棄物の問題は随分取り上げてきたと思います。人類は放射性廃棄物をどうやって、安全に処理したら良いのかという技術を知りません。汚染水は海を汚し、地下水を汚しています。原子炉を廃炉にするのには数十年とかかるのです。」

それに今は地震で電源が使えなくなり、冷却水を循環させることができなくなって、燃料棒がある炉心全体が「高熱で溶け落ちるメルトダウン」が起き、被覆管のジルコニウムが高温になって水素ガスを発生し下部の水と反応し、水素爆発が起き、既に広島型原爆の百倍のセシウム137が飛び出しました。これから水素爆発の可能性があります。今や美しい自然に恵まれたこの町も放射能によって廃墟になりました。」松尾優紀は目を覚ました。全て夢だった。あの美しい町があんな廃墟になる筈はないと思ったが、広島

や長崎に落ちた原爆もチェルノブイリも現実起きた恐ろしいことだったのだ。沢山の人達が苦しんで死んで行ったのだ。

株の暴落を告げるアナウンサーの声を聞きながら、松尾優紀は今晚、行かねばならぬ堀川の通夜のことを考えた。外は雨だ。この雨に大量の放射能があることが警告されている。なるべくなら、外出は控えた方が良くとアナウンサーが言っていた。

しかし、昨日 届いた堀川の遺体は明日、火葬にされる。このお別れの儀式に行かないわけにはいかない。通夜や葬式の段取りは堀川の兄と大山が協力してやった。

松尾は車を走らせた。

その時、小雨の降っている、どんよりした空から、銀色に輝く円盤が音もなく動いていく。松尾優紀は宇宙人だと思っていると、彼が車を止める何の動作もしていないのに、車は静かに止まった。不思議なこと、彼は誰かが邪魔している不安を感じた。

車の横に、公園がある。雨だから、誰もいない。こんもりと樹木が茂った公園だ。

その樹木の間にある空間に、円盤は宙に浮いたままで、しばらくすると、そのまま、円盤の横から階段がつくられていった。

そして、あの薄緑色の肌をした銀色の目のヒトが下りてきた。

「おー、久しぶりだな。松尾優紀君。雨は小降りになってきたな」

「この事故は君達の仕業か」と松尾は車から出て、小雨に濡れながら、立った。

「あの、レベルの地震で、あんな事故が起きる筈がないと、思っていたけど、やはり君達の仕業か」

「結構な地震だぜ。震度六強だ。原発は地震による事故と人為的ミスによって、爆発したのだよ」

「あの程度の地震に耐えられるように出来ているはずだ。あの建物があんな爆発するわけがない」

「それが思わぬ事故というものよ。交通事故だって、そうじゃないか。思わぬ意表をついた事故が起きる。現に、震度六強だ。

これをどう見るかは君達の課題だな」

「何で、僕の前に現れたのだ。」

「君達の平和アピールが意味のないことだと思うからよ。成り行きまかせにすればいいことだ。

自然のままがいいんだ。君達は無理に不可能なことを叫んでいる。それが気の毒でね。我々は善人だから、そういう無駄な努力をしている人々には警告するのよ」

「警告だって？」

「だいたい、株式会社というのは利益を追求する団体だろう。平和は商品になるのかね。君達は何を売っているのだ。

無駄な事をやっているから、誰の心にも響かぬ。誰も立ち上がらぬ」

「そんなことはない。クリスマスだって、本来はイエス・キリストの誕生を祝うものだったが、今の日本ではそういうことよりも日本と西欧の文化の合流の象徴として、商品も売れている。

平和もそうだ。誰でも最初は株式会社と関係がないと思うが、平和でなければ、多くの株式会社の商品が売れなくなるか、場合によっては滅びるのさ。

今の社会は株式会社が大きな力を持つ、多くの人がそこで働く、だからこそ、この働く人達の生活を守るためにも平和が必要なのだ。

余裕のある株式会社こそ、平和ののろしをあげる、それが平和産業の理想だ。

過去の戦争の多くは政治家のリーダーが引き起こしている。今、彼らが戦争を絶対にしないような行動をとってくれるならば、平和産業の出番はなくなる。でも、それは良いことだ。しかし、残念ながら、これから百年後の将来を考えた場合、すべてを政治家にまかせて平和になるかという、疑問になる。何故なら。世界の強国では、軍拡が進んでいるし、ミサイル、核兵器の発達はすさまじいからだ。そこで、我々 平和産業は声を大にして、核兵器を世界中からなくそうと叫ぶのだ。そして核兵器に使った莫大な金を福祉にまわそうと、主張するのだ。そうすれば、世界中の貧しい子供達を救えるではないか」

「産軍共同体もあるぞ。国によっては。この力は大統領に圧力をかける存在でもあるという」

「彼らも人類が滅亡になれば、滅びるのだ。今やそういう人類の危機に陥っていることを悟るべきなのではないか。

産軍共同体が平和な商品をつくるように、あるいはつくりやすいような社会的環境を作ることが政府の政策だ。そういう政策をするように、働きかけるのが我らの平和産業だ。つまり、そういう世論づくりのために、声を大にして叫ぶのだ。

ロボットで大手のルミカム工業の応援を受けての平和産業なのだから、吹けば飛ぶような存在ではない。くどいがもう一度、言う。核兵器を世界からなくせば、その莫大な金を福祉に回せる。そうすれば、人類の格差問題も解決する方向に向かう。そう考えれば、この夢のような主張もやらないよりは、やった方が良くも思うだろう。今や、人類は争いをやめて、平和のために努力しなければ、人類の平和は勝ちとれない時代に進みつつあることを知るべきだ」

松尾優紀はそう言いながら、この連中は本当に宇宙人なのだろうかという疑問がふと湧いた。彼の親会社がロボット制作をやっている、平和産業にアンドロイドロボットがいることも関係しているが、目の前にいて宇宙人を自称する人達がもしかしたら、どこかの勢力が派遣した兵器AIロボットということもあるのではないかという疑問がふつふつと湧いてきたのは自分でも奇妙な感じがした。

宇宙人が去った時、不思議と雨もやんでいた。

その夜、彼は詩を書いた。

この世を浄土にするのも、悪夢にするのも人の手

街角も森も海も人の目に映る

あるようでないようで在る

宇宙のいのちの働きがあらゆる存在をつくる

飲めるおいしい水が湧き出る町

尾野絵市というそれは夢のように美しい町
人の心も澄んでいた。

郊外には小川が流れ、森には沢山の野の花がある

空から降る雨も美しい雨だった。

傘をささずとも、気持ちの良い雨に濡れるのを神の恵みとする人もいた。

りすもうさぎも鹿もこの自然を楽しんでいた。

しかし、ある日のこと、突然のように、放射能という奇怪なものが
この町に振りそそいだ。

人の営みの中で、この原発事故は悲惨なものだった
地震と人の怠惰が原因だった。

ああ、悲しみと苦痛が民衆を襲った。

人が地獄をつくる

かって浄土だった土地を地獄にする

子供たちはどうなる

この大地に、かつてと同じ清流と昆虫と花々が復活する日は来るのか
さあれ、空華の美の街角は病んだ

人々も病んだ 大自然の浄化が始まるのに、長い歳月がかかるだろう

雨もやみ、宇宙人も去った。松尾優紀は車に乗り込んだあと、しばらく銀色の目をしたヒトは本物の宇宙人なのか、という不安にさいなまされたあと、ふと、今晚の通夜にＡＩロボット律子を連れて行くこうと思った。彼は車で、会社に寄り、彼女を連れ出した。松尾は黒の喪服を着ていたけれど、彼女はベージュのスプリングコートだ。それでも、良いと彼は思った。人の死を学習させるのに良い機会ではないかと思った。彼女は小さな箱を持っていた。

「その箱は何だい」

「インコのロボットよ」

「何だ。そんな玩具を持って」

彼はアリス夫人の家にいたインコを思い出した。あれは素晴らしい生き物だったという思いが浮かん

「先ほど、船岡常務が来て、『これを松尾さんに渡してくれ』と言われたの。」

「船岡常務が。何でそんな玩具みたいなものを。本物のインコのほうがいいじゃないか。」

「電氣が入ると、本物と間違えるほどの、可愛らしさなんですって。それに、かなりの言葉を喋るだけでなく、平和の歌を歌うの、その歌の音質が素晴らしく良く、街角でやれば、人が必ず振り向いて耳を傾けるといふの。」

松尾は森のそばで、車を止めると、彼女は箱を開けて中を見せた。

緑のインコがいる。彼女が後ろの電源を押すと、軽い動きをする。

それは生きているという感じだ。

しばらく見ていると、インコは生き生きとして、「今日は」と言う。

凄いと松尾は思った。人間では人間に近いアンドロイドが出来ているが、インコはロボットの需要がないのだ。本物の方がいいに決まっているという先入観があるのかもしれない。

松尾もそう思っていたから、インコは高級な玩具程度のものしか、ないと思っていた。

「インコのロボットで、何をしろということだろう」

「あとで、電話すると言っていたわ」

「どちらにしても、今晚はこれから大事なことがある。お通夜だ。しまいたまえ」

松尾は言う、ＡＩロボット律子は手さげを出して、箱をしまい、車は発車した。

通夜や葬式を見せ、人の死というものを教えた気持ちがあったので、ためしにということもあって、律子を連れてきたのだけれど、その途中で、インコを見せられるとは。

葬式が終わってから、見せてくれればよいのにと、思ったが、彼女も人間ではないのだ。

そう思った途端に、松尾の頭にインコを商品にしろという意味なのかもしれないということが頭にひらめいた。どちらにしても、人間でないものを使わないと、平和を訴えられない世間の状況にちよつとしたらだちを感じた。同時に、生きているようなインコの存在に何か深い意味があるのではと思った。しばらくの間、沈黙したまま、松尾は運転した。

「うん。この原発の事故、恐ろしいと思うよ。まず、事故の規模が大きい」

「でも、チェルノブイリほどではないでしょ」

「確かにね。でも日本はソ連と違って、国土が狭く人口が多い。」

まず、この事故は日本人の健康破壊を促進させる。この不安は社会不安をひきおこす」

「でも、それは一時的なことでしょ」

「それは違うよ。君は放射能の恐ろしさを過小評価しているよ。放射能は人間のDNAを傷つけ、ガンを引き起こすのだ。日本にある原発をとめて、自然エネルギーに切り替えなければならぬだろうな。」
「あら、そんなことしたら、日本の電力は大丈夫かしら。あたしはそこまでしなくても思っているわ、もっと樂觀的に事態をうけとめたいわ。人生は樂觀的に生きた方がいいと誰かが言っていたと思うけど」
原発に関して、何でこんなに意見が違うのだろうか。やはり、AIロボットだ、平和産業の教育がどこか間違っているのだろうか。もっと早く、冷静に議論し、正しい知識を持つように教育すべきだったのかもしれないと彼は思った。

沈黙が支配した。

雨の音が聞こえる。

「又、降り出したね。やんだり、降ったり 変な天気だ」

車になぐりつけるような雨足。夜の中に車のライトが光る。それらの印象はちょっと幻想的にも見えるが、外は意外と厳しい。なにしろ放射能の本降りだからな。松尾優紀はそんな風に思った。

しばらくして堀川邸についた。雨に身体をふれないようにすることは意外と努力が必要だった。

通夜は始まっていた。しかし、恐ろしい雨のためか名士である堀川のものとしては出足が悪かった。

松尾優紀とAIロボット律子はお焼香をして、控えに行った。そこに大山と彼の経営するNPOのメンバーがいた。皆 互いにうなずきあった。アリサ夫人も挨拶に来た。

アリサ夫人はこんな雨の中をまことに申し訳ないと一人一人に近づき、丁寧に挨拶をしていた。

「お父さん、もう奈尾市は天国でなくなったね」

誰かの子供がそう言っている。

確かにその通りだと松尾優紀は困惑した表情をしながら思った。つい、この間まで奈尾市は日本で最も公害のない住みやすい町だった。それが今は下からも上からも汚染が進む。下からは地下水を通して、IC工場のトリクロロエチレンの汚染が 上からは空に放射能が雨や風によってやってくる。

以前の奈尾市はいたる所に地下水が噴き出していて、それが飲める町だった。

奈尾市だけでなく、尾野絵市もこのあたり一帯はそうだった。それがZスカラーのIC工場からのトリクロロエチレンがいつの間にか こちらの地下の川まで流れ、今は上から放射能が来るというわけだ。天国が地獄に変化するようものではないか、人の心が仏界から地獄界までというのは聞いた話だが、地

獄が顔を出すとは。

翌日、昨日の雨は嘘のように美しい晴天になった。これまでのことは全て夢だったのだ。新しい希望に満ちた、素晴らしい未来が又 始まるのだというふうに人を思わず、すがすがしい朝であった。

しかし、この日は堀川の葬式になっていた。昨日と比べてはるかに人が集まった。このあたりで活躍していた弁護士は葬式だけはあるという感じだった。

庭の桜の木が三分咲きになっていた。

最後の別れ。堀川は一人、死出の旅路に急ぐ。人は誰でも死なねばならぬという当り前の事実を松尾は考えていた。

人の一生とは何であろうか。丁度、舟にのって川を下るようなものではないか。舟というのは人間の肉体のようなものと考え。人生というのはこの肉体という舟に乗って、しばらくの旅をするようなものではないか。一切はこの舟のからくりの中でおきる。人も同じ。肉体が死によって消滅すればこのからくりも終わる。心というのは舟の中で見た景色のようなもの。舟に乗っている『我』というのは本来、無我であって、舟にのって初めて、自分というものを意識する。

人は死ぬ。そして又、次の舟に乗らなければならぬ。

アリサ夫人は静かに泣いていた。そして沈痛な顔をしたアリサの父。兄の堀川春介が葬式の挨拶をしていた。弟の堀川善介よりも背が高く、そして赤ら顔で陽性の顔付きをした兄も厳肅な顔をしていた。松尾は葬式の間、死の意味について考えると同時に、船岡常務から言われたイタリア行きについても考えていた。伊方浜の原発の責任者ということで、Zスカルーラ工業から何人か来ていた。

この放射能汚染が奈尾市や尾野絵だけでなく、広島地方一帯に深刻な影響を与えることは目に見えている。しかし、全てが後の祭りだ。もはや、放射能はばらまかれたのだ。

「今日は良い天気になったね」

大山は松尾に近づいて来て、そう言った。その時、棺が家から運び出されて来た。沈黙がちだった見送りの群衆が一瞬、ざわめいた。

AIロボット紀美子が号泣した。やはり服装は通夜の時と同じだ。喪服は平和産業に用意してなかったのだ。

その場にいた人で、ロボットと気づいた人はいないようだ、松尾は思った。彼女は感情をもったのだろうかと錯覚するほどだ。人の死に直面したようなこういう場面で泣くのがいいということを彼女は知っていることは確かなことだ。

それにしても、あまりにも真にせまる泣き方に驚いた。

「可愛そうに！」誰かがそうつぶやいた。

「本当に」

中野静子が相槌を打った。松尾は静子を見た。喪服姿の静子は清楚な雰囲気漂わせていた。

霊柩車の背後の庭には、大輪の薔薇がいくつも咲いていた。

平和産業の平和ビジネスが海外に出たのは、そういう意味の意見が親会社のルミカーム工業の船岡取締役役から出されたからだ。

小さな支店がヴェニスに作られ、田島と改良されたロボット菩薩が先に行っていた。温暖化そして核兵器をなくすというスローガンに相応しい場所としてそこが選ばれたのだろう。これで、松尾のウネチア物語と映像詩が完成され、世界に発信され、観光客の中で再びロボット菩薩と田島と自分の三人で「核兵器をなくそう」と叫んでみれば、ニュース性もあり、株式会社ルミカーム工業のロボット技術をヨロッパに宣伝できるという判断で、船岡取締役の後押しがあったと思われる。

ロボット「インコ」の商品の使い方も船岡は松尾に電話で教えた。インコは既にヴェニスの支社に商品として「五百羽」送ったから、ロボット菩薩とセールスする時、その鳥も売ってほしいと。聞いているだろうが、本物そっくりで平和の歌を歌う、細かい指示はみな田島君に言っているから、聞いてくれという話だった。

ブルーのジャケットというラフな服装をした松尾優紀は飛行機に乗って自分の席につくと様々な思いが起こった。その中で長く心を占領したものに法華経にある火宅のたとえをめぐる思索があった。大きな屋敷の中で戯れている子供、これこそ衆生としての人間である。そして周りに火事が起こる。この火事から子供達を救うために仏はなんとかしてこの屋敷の外に連れ出そうとする。確か、そんな物語だった。

現代日本では、安全神話を信じ、経済の繁栄に夢中になっていて、周囲の自然破壊、原発の増加、気象異変に気づかずにいたということがあったのではないか。

玩具に夢中になっている法華経の中の子供達のようなものではなかったか。そして原発の事故が追いつきをかけ、放射能が風や雨と一緒に奈尾市や尾野絵市まで運ばれてくる。あのような恐ろしい破局が来る前に打つべき手がなかったのであろうか。彼はそう自問自答した。『地下水の汚染』や『原発の事故』を防ぐような場合には多くの人の力の応援が必要なのもある。ともかくももう少し早く気づき尾野絵市の外で展開されていた大火を消す方法があったのではないか。

彼はそんな風にとりとめのない考えに耽っていた。法華経は火災に包まれた屋敷の外に出ることを勧める。

この火災が煩惱の火を意味するならばこの屋敷の外とは煩惱の外、つまり解脱と悟りを意味する。『地下水の汚染』や『原発事故』を引き起こしているものが人間の進歩への幻想から起きているとするならば、この単純な便利さと進歩への信頼 スピード、生産能率こうしたものを信じているところこそ、人間の煩惱の総和、火災の象徴ではないか。我々の多くがこの火災の外に出て、もっと平和な悟りの中に入るようになっていけば地下水の汚染も原発の事故もおきなかったのではないか。

火災の外に出れば、つまり煩惱の外に出れば、核兵器の軍縮もできるのではないか。火災の外に出れば、そこは浄土である。全世界はというべきか、全宇宙は一個の明珠だと言ったのは道元だが、無と無限の両方を含む虚空のような珠という宇宙の中で幻のように森羅万象が現われてくる。その大自然の中で、人

は戦争や原発事故など愚かなことを幾度すれば、この一個の透明な水晶のような世界はにがりのない美しい平和な花園になるのであろうか。

松尾優紀はアリサ夫人の言葉を思い出し、ジェット機の中で、堀川善介の日記のコピーを広げた。その間に中野静子とアリサ夫人の手紙が入っていた。彼は微笑して封を切った。彼は最初に、中野静子の手紙を見た。

「今日は。松尾優紀さんはヴェニスで、核兵器反対と温暖化阻止ののろしをあげるんですね。そういう平和産業のお仕事で行くのですから、のんびりとゴンドラに乗ってあるいはサンマルコ広場で観光ということではないことはよく承知しています。人類の危機ということは、私には分かっております。

それに取り組む平和産業で、あたしもその一員になれたのですから、影ながら応援していますね。お仕事軌道に乗るまでは、お帰りにならないでしょう。

今ですと言いますが、もしかしたらあたし 貴方が好きだったのかもしれないと空想しますのよ。あなたにとって、大切な方の葬式から数ヶ月しか立っていないのにこんなことを手紙に書くなんて。

でもこの思いは貴方にお会いした始めの頃から抱いていた感情でした。でも、あなたの心はどこか別の方に向いているように思われたのです。

今はもしかしたら今の「あなたは」あなたの持っていちゃるインコの中に、

秘密があるかもしれませんね。何しろ、インコの外見は本物と変わらないというのですから、それに、平和の歌までプロ並みに、歌うとか、人に訴えるミニ演説までするのでしょう。それは魅力的なインコなんですよね。

あなたはいずれ日本にお帰りになるのですから、どこか別の方向に向いているあなたの心をあたしの方に向けさせるのに、やはり私の方から愛の告白をしなければならなかったのです。

あなたは詩人ですから、きっと良いご返事を下さると確信していますわ。

しばらくのお別れですね。お仕事、うまくいくことを祈っています」

松尾は静子の手紙を丁寧にあたむと、頭にヴァイオリンを弾く静子の凛々しい姿が浮かんだ。それから、堀川（島村）アリサの手紙を広げた。

『松尾優紀さん。これをお読みになっているのはおそらく飛行機の中ではないかと想像しています。雲海を見て、しばらく下界のことを忘れるのも楽しいかもしれませんね。あまりにも嫌なことが昨近、続きましたからね。でも、イタリアに行くなんて うらやましいですわ。あなたの物語にあるように、美しい踊り子に夢中にならないように。』

なんともいえない、貴方の羨ましい境遇にあたしが嫉妬しているのかもしれませんが。地上のこと、奈尾市のことを貴方に思い出させようとしているのですから。

お別れですね。さようなら。貴方は京佳に帰っていっちゃるのかしら。私にはなぜか貴方がもう永久に帰ってこないような錯覚に苦しめられて困っております。何故だか分からないのですが、あまりに

も今の日本の現状はひどすぎますからね。人々は飲水の不安を抱かねばならないし、雨に濡れないように気をつかねばなりませんもの。

あたしの子供の頃の奈尾市はそれはそれは天国といっても良いような 懐かしい思い出で埋まっているですよ。自然に溢れたこの奈尾の町。なつかしい奈尾市。それも今はありません。どうしてこんなことになってしまったのかしら。悲しいわ。

あら、ごめんなさい。愚痴ばかり言って。

このあと、ぜひ堀川の日記を見てやって下さい。あの人の無念の気持ちを友達として察していただければと願わざるを得ません。

それではさようなら。お元気で。万感の思いをこのペンに託して。

神仏のお守りが人類の上にありますように』

松尾優紀の目に涙がたまった。その涙の向こうに、水の都ベネチアが見えた。そこでエル・グレコの描いたマリアとアリサ夫人の顔が重なった。スペインの画家は彼の頭の中でベネチアの町と重なった。グレコはアリサ夫人を描いたのではなかったか。永遠のアリサ夫人を描いたのかもしれないと彼は思った。その永遠なるものに自分はずうっと心を引かれていた。ベネチアに憧れている自分の心の中の深い感情はアリサ夫人に魅了されているものと同一なのではないか。ともかくも自分はベネチアという永遠のアリサ夫人にあと数時間後に会えるのだと思った。そう思うと熱い感動が心を揺さぶった。そして彼は堀川の記事のコピーに目を通した。堀川の男っぼい、しかも達筆で少し、崩した字が白い用紙に並べられていた。松尾は静かにその字面を追っていった。平凡な記録の中におやと思わず文章にぶつかり、彼はそこを何度も読んだ。

『三月十日 今日調査は収穫があった。やはりZスカールラはうそをついている。うそでなければ無意識にそういう言動をしいられているとでもいおうか。内部告発した職員の自殺、そして、Zスカールラの原発の事故これらはみな底の所でつながっている。さて、視点は違うが人類は生き残るか。原発は原爆と底でつながり、その核兵器は今も発射寸前の実戦配備についている。その数は何千発という恐ろしさである。不幸にも広島、長崎で放射能の恐怖を経験してしまった日本こそ、核のない世界、脱原発をめざす世界のイニシアチブを取るのにふさわしい国なのではないか。それには、アメリカと話し合い、中国と文化と平和の交流をし、核なき世界について徹底して話し合うべきである。十四億の人達が隣に住んでいるのだ。漢字も漢詩も仏教もその隣から来たのに、不幸にも今はにらみあっている。長い歴史を考えると、やはり両国の友情を大切にしようと思ってしまう。それから、思い切った言い方になるけど、松尾君のやっている平和産業がリードして、親会社の新聞広告で「核兵器のない世界をめざそう」と世界に訴えるべきではないだろうか。その広告は平和産業とルミカム工業の名声を高めることになると思う』

不思議なことに、これを読んだあと、彼の心にヴァイオリンをひく中野静子の姿が浮かんできた。彼女のヴァイオリンの音色は耳に焼き付いていた。どこまでも、天界に自分を引っ張るように彼女の手が自分の手

に触り、彼女の顔はグレコのマリアとは少し違って、東洋の観音菩薩のように深い旋律に満ちているではないか。松尾は静子に対して、初めて静かに恋慕の情を感じた。思春期のアリサに感じたあの激しい恋の感情が徐々に燃え上がるのをじっと彼は感じていた。

松尾優紀はスチュワードスの美しい声に促されて、ふと見るとアラスカのマッキンリー山が眼下に見えた。それは不思議な気持ちだった。自分は孫悟空にでもなつて宇宙遊泳でもしているように思えた。

一切は神秘的な虚空から創造され、そして又 虚空に戻る。この神にも匹敵する創造の働きは東洋では仏性と言われ、今も自分に働き、永遠に自分を創造していくだろう。

優紀は全てのものは不死のいのちが現われたものであるとお釈迦様の言われたことに納得した。それ故、彼自身にも生と死があるが、優紀の本当の自己は不生不滅であると思った。確かに、彼はそう思ったのだが、はたして松尾優紀は本当にそのことを知ったのだろうか。

松尾はしばらく瞑想し、「満月」という詩を書いた。

満月 [poem]

そよ風が吹き

花が黄金のように咲き、昆虫は妖精のように舞う

そして、心地よいそよ風に抱かれて、樹木の梢に小鳥がさえずる時

その時、幻のような金と銀のきらめく街角が忽然と現れる

暖かい小雨の降り注ぐ

みかん色のともる街角の美しいこと

そこのカフェーで、コーヒーを飲む時

おお、その時、黒い瞳を思う

あれは何の啓示だったのだろう

あの瞳のその奥から流れ出る

詩句と旋律は一つの芸術となりて

わが心に真理の扉を指し示す

心とは全ての宇宙を映す鏡だ

樹木も花も昆虫も空も大地も

おお、この私の身体も全てを含めて

一個の宝石

永遠の鏡ではないか

真理の大海にすっぽり入っているわが魂

それにも気づかず

長いこと、過ごしてきたとは

その無限の愛の懐こそ生命ではないか
いのちの秘密はそこにある

真理は月のように片側しか見せぬ

分析を得意とする理性のもとでは

人によってその片側の見る所が違うから

争いがおきる

人が立つ場所によって、その片側は極端に違う

俺が正しい、お前が間違っている

これははてしなく続く

その時、真理は満月のごときものだど気が付くものがある。

おお、その象徴がああ満月のような黒い瞳だ

それ故にこそ、人はその扉を開けんと恋慕の情をおこす

真理の大海がその窓をあけ、広がる

素晴らしき神仏の世界が広がる

真理と愛の世界が一つになって

わが胸におさまる

全世界は一個の明珠である

ヴァイオリンが軽やかに悲しく美しく鳴る

大草原に咲くヒマワリが

どこまでも続くように

そして、丘のような樹木の並ぶ濃い森

その前の小川のそばに座り、小鳥の声を聞き

蝶々や昆虫を見る時

争いの空しさを知る

おお、喜びも悲しみも

一緒に包んだ満月のような心になって

この世界の真理を見る

いたる所に輝くような愛がきらめいているではないか

エピソード

この物語が終わる頃、そのあとに、国連では、MDGsからSDGsの動きがあった。

人類がこの地球に暮らし続けていくために、2030年までに、持続可能な開発目標で、十七の国際目標がある。例えば貧困をなくそう。気候変動に具体的な対策などです。貧困をなくそうは主に国家が取り組む課題になるでしょうが、気候変動の問題は国家が企業に要請しなくてはなりません。

日本でも市民の耳にSDGsのことが耳に入るようになったのはこの国連の要請を企業が引き受けるようになったからではないでしょうか。

企業はもともと利潤追求の組織であったので、こうした国連の要求する目標と、なじまないのではないかと思うふしもあったと思われる。

しかし、そうではないのである。企業の社会的責任が叫ばれるようになったのは、水俣病などの公害病は企業が引き起こしたものであるという認識が広まったからである。

そして、徐々に分かってきたことは企業の世界的活動が地球の森林などの大自然を破壊していくことが分かってきたことである。

特に、大自然の破壊は気象温暖化になり、ほおっておけば、人類の破滅は必然である。

企業活動は地球に責任を持って活動しなければならないという認識が世界に広がったのである。

この物語に出てくる平和産業株式会社は大手の子会社であり、主人公の松尾優紀は地球規模の危機は自分の会社にも責任があり、世界に呼び掛けることが大切と思い、核兵器を世果中からなくそうと叫ぶ冒険に取り組んだのだろう。

核兵器に使った莫大な金を福祉にまわそうと、主張する。

この動きは『平和産業』の活動が始まる頃には、SDGにも核兵器をなくそうという動きがあるようだったが、今だに結実していない。

残念なことである。それどころか、核兵器は世界中に増加する動きがある。

オバマ大統領が呼び掛けても、事態は変わらない。理由の一つの大きなものは核兵器を持つ国のそれぞれの国民が声をあげないからだと思われる。

それ故にこそ、この物語のように、平和産業が動き出すのも意味あることではないだろうか。

SDGsは一人一人の市民にも呼び掛ける。つまり、物語の『平和産業』が動き出すということは一人一人の市民から「核兵器をなくそう」という声があがることにねらいがあると思われる。それは、国民の意思となり、核大国の政治家を動かしていくのではないだろうか。

このことが大切ではないだろうかと思われる。
なぜなら、2021年に核兵器禁止条約が出来ても、事態は良い方向に、進まないのは多くの国の国民の声にならないからだと思われる。SDG_sが声をあげ、核大国の国民が「核兵器をなくそう」という声をあげることが大切なのではなからうか。

【完】

（久里山不識より）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。アマゾンには私が長い時間をかけ、推敲した、人生の神秘を追求する小説が二冊、電子出版されています。

「靈魂のような星の街角」

「迷宮の光」

森に風鈴は鳴る

著 者 久里山不識

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
